

魔法少女リリカルなのは
は～僕は私を知らない
～

はんぶんふ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

拘置所にいたはずのジェイル・スカリエツティは、何者かに連れ去られ気が付いた時には体が縮んでいた！

ついでに、記憶も無くなっていった！

そんな彼を偶然見つけ、保護者となるティアナ・ランスター。

この物語は、過去に償いきれない過ちをを犯した子供の物語である。

目次

はじめ	1
ティーノ・ランスター	13
友達	26
ヒエラルキー	41
魔法	53
魔法戦	71
目標	91
二度目の敗北	103
温泉	121
その日	133
生まれた日	145
温泉2	152

基礎トレ	161
チーム戦	176
チーム戦2	187
オルランド	200
オルランド2	215
アンジェリカ	226
友情	238
霞む視界	260
終わりへの架け橋	279
終わらせてたまるか	301
愛のカタチ	331
歯車	352
壁	367

再戦	388
道	400
知っている	413
過去の地獄	430
苦しみ	447
欠片	462
欠片2	475
世界の欠片	491
クイント	522
あなたは誰	541
偽の聖王	552
ユニゾン・イン	574
祝福の風	599

綺麗な青	627
ごめんなさい	640
毎日	657
インターミドル3回戦	670
アリシア	679
かっこいい僕	695
アリシア2	711

はじまり

私の名前はジェイル・スカリエツテイ、狂気のマッドサイエンティスト、次元世界の破壊者、科学の先達、様々な呼び名を持つがやはり私にはこの呼び名が一番だ。

ドクター——……

初めてそう呼んでくれた人の名前を今はもう忘れてしまったが、それでもその名は今でも私の心を楔留める。

「間違いを犯すことに怯え……。薄い絆に縋って震え……。そんな人生など、無意味だと思わんかね……。？」

かつて、私を追い詰めた者に向かって言った言葉。

それは、もしかすれば自分に向かっての言葉だったのではないだろうか。

こんな所に閉じ込められて、物思いにふける毎日を送っていれば、雑念が生まれてきてもしかたがないか……。

そうだと、私は無限の欲望……。アンリミテッド・デザインアーだ。

ただ、自分の信じた道を自分のしたいように進めばそれでいい。

他の誰でもない、脳みそだけの化け物に刷り込まれたモノでもない。

私の意志で、そう決めたのだから……。

ここは第九無人世界グリューエン軌道拘置所

数多の世界に災いをもたらそうとした――

次元犯罪者の行き着く先――。

新暦79年ミッドチルダ

人工的なビル郡に、青々とした樹木が整然と並び、絵画の世界を思わせるようなレンガの道。

その脇の歩道に面したお洒落なカフェテリアには、二人の人物がつかの間の急速に、心身を癒していた。

「もうあれから、四年もたったんだねえ〜」

そう言いながら目の前に用意された、ジャンボチョコレートパフェに、スプーンを突き刺した女性、スバル・ナカジマはスプーンですくったアイスクリームを小さな口に入れた。

「四年もたったのに、アンタは特に変わらないわね」

はあく、と大きなため息をついたのは、そんなスバルに向かい合うように座るティア

ナ・ランスターであり、彼女はブラックコーヒーの香りを楽しみ、体の怠惰感を体の下へと下ろしていく。

「ヴィヴィオも今年で四年生だし、この間久しぶりにあつたらずいぶん大人びていたからビックリしたよ」

「最近の子供は、成長が早いと言うかなんというか……」

ティアナは自分が小学四年生だった時のことを考え、時代の移り変わりの速さに辟易とする。

そんなことを考えても肩がこるだけだと気持ち切り替えたティアナは、大切な友人であるスバルの家庭環境の様子についてたずねた。

「あの子達も元気にしてるの?」

「ノーヴェ達のこと? 皆、いい子にしてるよ♪ねえねえ、聞いてよティア! ウエンデイがこの前ね——……」

二人の女性は、語らいに花を咲かせる。

四年前、JS事件と呼ばれる大規模テロ事件、ジェイル・スカリエツィを首謀者に行われたそれは、当時ティアナやスバルが所属した機動六課の活躍により終わりを迎えた。

今、ジェイル・スカリエツィの元で機動六課と敵対していた少女達は自らの行いを

悔い、世界のためになろうと、スバル・ナカジマの家族となつて日々すごしている。

夕暮れ時、日が沈み始め黄金色が町を包み、子供たちに帰宅を促すアナウンストオルゴールの音が流れ出すと、スバルは思い切ったようにしていった。

「……そつちの事件は、どうなの？」

ええ——……、とティアナは飲み干し空となつたマグカップを置くと、辛そうに肩を回しながら答えた。

「よくないわね……。なんの手がかりも無く、捜査は膠着状態、上は血眼になつていて、私達としては、提供された情報が余りにも少なくて何をどうすればいいのか立ち行かなくなつてる。一つ大きな事件を解決したフエイトさんも、合流するみたい」

「そつか——……」

執務官として、近年活躍し若手のホープと名高いティアナですら、お手上げだといわんばかりの事件、第九無人世界グリーエン軌道拘置所襲撃事件。

犯人の手がかりは一切無し、管理局が誇るSSS級の犯罪者を閉じ込める鉄壁の拘置所、そこが破られ、現在そこに捕らわれていた一人の人物が行方不明となつている。

彼の名前はジェイル・スカリエツィ、JS事件の首謀者にして天才、彼の頭脳が悪しきことに利用されるとなれば、世界は再び恐怖のどんぞこへと落とされてしまう。

「それだけは、なんとしてでも防がないと……」

帰り道の最中ティアナは考えていた。

当初考えられていたスカリエツティが首謀した脱獄だという考え、これは今では主流ではない。

そもそも、第九無人世界グリユーエン軌道拘置所は外部からの接触が出来なく作られている。

スカリエツティがどういった手段でそれをなしたのか、今の我々では想像も出来ない。

次に、彼が娘と呼んでいたウーノ、トーレ、クアットロ、セツテを置きざりにしたことで、ジェイルを知る人物であるならば、彼女達を置いていくとは考えづらい。

次に、争ったような後が見受けられたこと、ジェイルの血痕も残されていたことから、彼は抵抗しようだった。

ならば、なぜ、どうして、なにが――

考えても考えても、答えは出てこない。

「あ、あ、もうッ！考えても今は仕方が無い、ようやく取れたたまの休み、今日はシャワーをゆつくり浴びて早く寝よ」

そう一人呟くと、ティアナ帰路を急いだ。

「?」

その時、眼前に一人の子供が現れた。

見た目は小学低学年、ボロボロの布を頭から全身を覆うように巻きつけている。

時間もさることながら、その風貌に違和感を覚えたティアナは、子供に声をかけるべく近寄る。

「君、こんな時間にどうしたの? お父さんとお母さんは?」

声をかけた瞬間、子供は目に見えて驚き、反転し逃走しようとした。

が――

「ふべツ!!」

服のサイズがあっていないのか、ズボンの裾を踏み盛大にすつころんだ。

「あらら……」

ティアナは、転んだまま立ち上がることが出来ない子供の両脇に手を入れると、自分と向き合うように立たせる。

「大丈夫? 怪我とかしてない?」

この出会いをティアナ・ランスターは忘れることがないだろう。

「……え」

肌蹴た布の先に見えたのは、夜すら霞むほどの紫色の髪、純真無垢な金色の瞳、幼い

ながらも整った顔立ち。

見てすぐに気づいた。

ずつと、追いかけていたから、その顔をみた瞬間にすぐにその名前が出てきた。

「ジェイル・スカリエツティ……」

J S事件から、もう四年もたった。

脱獄事件から半年が過ぎた。

まだ、なにも終わってなどいなかった。

ティアナ・ランスターはあれから、子供の人定をとり、親類その他過去のことを確かめようとした。

答えは、すべて不明——

ティアナ・ランスターが保護した子供は、すべてが謎に包まれていた。

昔の管理局のデータベースに人定確定方法だったなら、相手が身元の分かるものを保持していないもしくは、名前その他を言わないことでそれも可能だろう。

だが、今の管理局でそれはあり得ない。

今では、指紋一つ、網膜一つ、髪の毛一本、などですぐにわかることだ。

それが、一般の資機材では該当無しと出た。

そのため、ティアナ・ランスターはもつと詳しく、それこそ存在自体を秘匿された人物でさえ特定できる管理局本局まで、子供を保護という名目で護送していた。

——のは、いいのだが

「うぐつ……ひつ……えう……」

その子供は、護送車の中で永遠と泣いていた。

それこそ、こちらが不憫に思うほどに泣いていた。

「はあ~~~~~つ……」

そんな子供を見ながら、ティアナ・ランスターは盛大にため息を吐く。

そして、子供はひどく怯えたように肩を跳ね上げ、また泣き出す。

この子供は、本当にジェイル・スカリエツテイなのか、その自分の考えが揺さぶられてしまいうだと、ティアナはこめかみを揉む。

「ランスター執務官到着しました」

そうこうしているうちに、本局についたようだ。

ティアナはそう考えながら、子供に降りるように促す。

「ひう……」

だが、子供は怯えたまままでティアナのいうことを聞こうとしない。

どうしたものかと、ティアナが考えていると、護送に同行していた局員の女性の一人

が優しく子供に声をかけた。

「大丈夫、一緒にいこ？」

するとどうだ、先ほどまで艇子でも動こうとしなかった子供は、素直に手を引かれ護送車を降りるではないか。

ティアナは、自分を含めた他の局員がどうしようとも駄目だったことを、何の苦も無く無しえた局員の可能性を瞬時に計算する。

だが、どれも求める答えにはいきつかない。

そうして、少しばかり苛立つとそれを察知してか子供はまた一段と怯えるのだ。

「はあ~~~~」

自分は、そんなにも怖い存在なのか……。

何故だか、ティアナは悲しくなってしまった。

そうこうしながら、本局内を歩いていると、よく知った声色を耳にした。

「久しぶり、ティアナ」

「フェイトさん！」

声をかけて来たのは、恩師フェイト・テストロツサ・ハラオウン、機動六課入隊時に出会い、ティアナを執務官まで導いてくれた大恩ある存在である。

久しぶりに会うフェイトとティアナは、会話を少しだけすると、すぐに念話に切り替

えた。

『その子が例の?』

『はい……、フェイトさんから見てどう思いますか?』

『私も、この子は似ていると思う。でも、それ以上に勘がそうだと言ってる』

『はい、機動六課の局員なら皆そうだと確信すると思います』

『でも、そうでない可能性もある。まずは、調べてみないことには始まらない』

『はい』

そう念話で会話しながら、フェイトは子供に対し、慣れた様子で話しかけていた。

だが、その子供はティアアナ同様にフェイトに対して、ひどく怯えた様子であった。

「検査の結果、ほぼ間違いなくジェイル・スカリエツティである」

そう結果を読み上げたティアアナは廊下に並べられていた長椅子に深く座り込んだ。

「ただし、ジェイル・スカリエツティであつた頃の記憶はもとより、生活する上で必要な記憶以外は、すべてなくなっている」

これには、どうすることもできない。

このような検査結果が出てしまったなら、再び監獄にいれるなんてことも出来ない。

管理局の法は、今のジェイル・スカリエツティを無実な子供としかとらえることが出来ない。

「……どうしてこんなことに」

「今の段階では、答えが出せなくても仕方がないよティアナ……、それよりも……」

「はい、すでに上の方からスカリエッティの引き渡し要求が来ています」

「じゃあ、やつぱり……」

「はい、スカリエッティがスカリエッティであつた頃には叶わなかつた管理局の願い……、無限の欲望の再利用……、上の狙いは今の内に管理局に従順な天才にしてしまおうつてところですかね」

「それだけは、なんとしても阻止しなくちゃいけない……」

「はい……、スカリエッティを誰よりも知る私達だからこそ断言できる。そんなことをすれば、第2のJS事件を起こしてしまうことを……」

ティアナはそういうと、なにか決心したように瞳を輝かせた。

「なにか考えがあるの、ティアナ？」

そう問うフェイトにティアナは苦虫を噛みしめたような笑顔で頷いた。

「はい」

その日から、一か月――

綺麗に整えられた廊下、靴がきれいに並べられた玄関、扉を開けば太陽の優しい光と

温かい風が流れ込んでくる。

町の匂いに、今日も忙しくなると予感めいたものを感じながら、ティアナはまるで子犬のようにぼつんと立つ、同居人の頭を一撫でした。

「いい子で待つてるのよ、ティーン」

「うん！」

そこには、ティーンと呼ばれた元スカリエツティだった子供の姿があった。

「僕、いい子にしてるよ！」

そう言つて褒めて褒めてと笑顔になるティーンに、ティアナは小さく笑うとティーン
の両頬を両手包みこんだ。

「晩御飯までには、帰ってくるからね？」

「うん！」

「それじゃいつてきます！」

「いつてらっしゃい！」

ここから始まるのは、過去にとても滅ぼすことのできない罪を抱えた子供の鮮烈な物語である。

ティーノ・ランスター

元、ジエイル・スカリエツテイであった子供、ティーノ・ランスターは仕事に向かったティアナに対し、健気にも玄関の扉が閉まるまで手を振っていた。

そうして、外界と内界を隔絶する扉が閉じられると、小さな両手を胸の前にやり小さく握りこぶしを作った。

「よし、今日も頑張ろう！」

ティーノの仕事は家事全般である。

夕方の5時30分には帰宅するティアナのために、彼は家の中をきれいに掃除しなければならぬと考え、自らそうしていた。

P i P i P i P i P i P i ……

部屋の奥から電子音が聞こえてくる。

その音に気がついたティーノは小走りになりながらも、客間に向かった。

客間に用意されていたのは、魔法陣を中心に四方にポールが立つ機械だった。

それは世界間転送機であり、この世界と別の世界とを繋ぐ物であった。

ティーノは、電子音を鳴らし続けるその前に立つと、取り付けられている受話器を

手に取った。

すると、受話器の先から優しい声が聞こえてくる。

「いい子にしてる、ティーノ？今からそっちに行くわね」

声の主の名はリンディ・ハラオウン、管理外世界地球に住む美しい女性だ。

ティーノは、ティアナから彼女を紹介され、家事の全般を教えてもらっている。

そして、今からティアナの家に来るのは、リンディの家に住むティーノの友達だ。

「僕、いい子にしてるよー」

元気にそう返したティーノに対し、リンディはくすくすと笑う。

そして、数回会話をすると、ティーノは受話器を置いた。

すると、魔法陣が光り輝き、その中央には赤毛の狼が立っていた。

「アルフー！」

ティーノはそう名を呼ぶと、喜色満面になり赤毛の狼の首元に抱きついた。

アルフと呼ばれた狼は、抱きつくティーノの顔を優しく押すと、家の奥に顔を向けた。

それが何を意味しているのか悟ったティーノは、大きく頷くと元気よく声を出した。

「今日も掃除を頑張ろうー！」

ティーノ・ランスターはドジである。

それはまるで、自分の体はこんなに小さくないと脳が反発しているようであった。

「ほうあッ！」

言わんことではない——。

アルフが見つめる先のティーノは、掃除機に振り回され尻餅をついていた。

「うう~~~~~」

そして愚図り出す。

毎度のことではあるが、アルフは内心この子供が本当にジェル・スカリエツテイなのか疑問視していた。

狂気のマッドサイエンティスト、人類頂点の知識、様々な呼び名を持つジェルであるが、一つ言えることは、彼が天才であったということである。

それがどうだ。

ティーノは愚図で鈍間で、要領が悪い。

外見は確かに、似ているかもしれないが内面は想像していたものとは違いすぎる。

アルフは自身の主であるフェイトのことを考える。

プロジェクトFの線も否定され、人造魔導士であることも否定され、ほぼほぼティーノはジェルであると、フェイトは結論付けた。

そして、フェイト自信を苦しめたプロジェクトFの基幹部分を作り出した元凶であるジェルを、彼女は後見人となることでティーノがティアナの傍にいられるようにし

た。

主人であるフェイトの目的はわかっている。

ティーノがティーノであれたなら、彼を二度と悪の道に行かせないためだ。

そして、もしジェイル・スカリエツティとして目覚めてしまったらその時は……。

今はそうならないように、祈ろう。

儂くも健気に今を生きる子供に、世界の明るさを示そう。

もう二度と、あんな悲劇を起こさないために——。

「うう~~~~~」

未だに愚図り続けるティーノを見ながら、アルフはそう思う。

そして、ティーノの隣にまで歩みを進めると、頭をティーノの頬に軽く擦り付けた。

「……僕、頑張ってるもん」

そんな事はわかっているから、後もう少し頑張りなさい。

アルフは、ティーノの頬に伝う一滴の涙を舐めとると、掃除の続きを促した。

掃除を終え、ティアナが用意した昼食を食べたアルフとティーノは、お昼寝をしていた。

アルフのお腹を枕に、静かに寝息を立てるティーノに対し、まるで母親が赤子にするようにアルフはリズムよく尻尾でティーノのお腹を優しく叩く。

その時、アルフの頭の中に声がした。

『お疲れさま、アルフ。今大丈夫？』

『フェイト！こっちは、大丈夫だよ』

声の主はフェイトであった。

アルフはフェイトの使い魔であり、離れた場所においても念話をする事が出来る。

フェイトはいつものように、アルフにティーノの様子を確かめる。

『ティーノの様子は？』

それに対し、アルフは苦笑しながら答えた。

『今は、あたしの腹の上で呑気に寝てるよ』

『フフ……、そう、良かった』

ティーノのことを優しく笑うフェイトに対し、アルフは複雑な感情を持つていた。

ティーノは今でこそ違和感無く子供として見ることが出来るが、元はジェイル・スカリエツティである。

4年前、散々自分たちを苦しめ追いつめてきた犯罪者。

そして、フェイトにとっては自身の出自に深く関わる男である。

いくら優しいフェイトでも、穏やかな気持ちでいられる訳がない。

それでも、いつもの調子を崩すことなくいられ、あまつさえティーノの後見人に自ら

立候補したのだ。

随分と大人になったものだ。と、アルフは眩しくて嬉しそうに眼を細める。

すると、フェイトは真剣な声色に代わる。

『……ティーンに対する接触はあった？』

接触なんて抽象的に言っただけはいるが、相手が誰であるかは検討がついていたアルフは、平然と答える。

『今のところは無しだよ、フェイト。なあに、アタシがついてる。……ティーンは守るさ』

そう、アルフはわざわざ子守のためにきていた訳ではない。

アルフがティアナの家にいる理由——。

それは、ジェイルを拉致した者達、もしくはジェイルの再利用を考えている者達からティーンを守るボディーガードの意味があった。

ボディーガードとして、アルフは打って付けであり、これ以上の人物はそうそういないだろう。

だからこそ、ティアナも安心して外に出ることが出来る。

『——よろしくね、アルフ』

そう言ったフェイトに対し、アルフははにかみながら答える。

『はいよ、そつちも体に気を付けてね』

そうして、念話は閉じられる。

アルフは主人と会話することがよほど嬉しかったのか、ティーノを叩く尻尾を少々乱暴にしまつていた。

「う、うゝゝゝん……」

目覚めかけるティーノを見て、アルフは慌てて尻尾のリズムを整える。

危ない……危ない……。

そう思いながらも、口の端は自然と持ち上がった。

そして、本来ではありえない。

狼の口から、人の言葉を吐き出す。

「あんたが、子供のふりをしているだけだとしても構わない……。あたしは、一言あんたに言いたいことがあつたんだ」

そして、言葉を区切ると優しく語りかけた。

「ありがとう——。あんたのおかげで、私はフェイトに出会えた」

窓から見える景色が、夕焼け空を映し出した頃、ティーノは眠たそうに瞼を擦りながら起き上がった。

「おはよう、アルフ」

間延びした声は、まだ寝ぼけていて、だがそれが愛くるしさを漂わせる。

アルフはそんな、ティーノの頭を尻尾で叩いた。

寝過ぎだと――。

アルフの言いたいことを察したティーノは、小さな両手で頭を抱えると、目を覚ました。

「ごめんなさい……」

しっかりと謝ることが出来たティーノに対し、アルフは頭を擦り付けて良く出来ましたと褒めた。

それが嬉しくて、ティーノはくすぐったそうに笑う。

幸せな時間が過ぎていく、ティーノはこの時間が大好きでいつまでも続くと思っていた。

アイツが来るまでは――。

ピンポーン……

それは、突然の来客を知らせるチャイム、ティーノは体を大きく跳ねさせ、驚くと意識を玄関に向け、まるで扉の先を透視するかのようになり、凝視する。

ピンポーン……

再びのチャイム、ティーノはどうしたら良いのかと助けを求めるようにアルフの顔を見る。

するとそこには、凜々しい狼がしてはいけないような口をあめぐりと開けたアルフの姿があった。

しまった、今日あの子が来ることをティーノに伝えていなかった……。

アルフは、やってしまったと尻尾を垂らす。

そんなアルフの姿を見たティーノは、アルフに問いかける。

「誰が来たの……？」

すると、アルフは眉毛をハの字にし優しい瞳でティーノを見た。

その瞬間、ティーノは誰が来たのかを察し、慌てて飛び起き、リビングに置かれた観音開きの洋服ダンスの中に隠れる。

誰が来たのかを、確認するために少しだけ扉を開きながら。

アルフはそんなティーノの姿にため息を零すと、玄関に足を向けた。

そんなアルフにティーノは慌てて極小の音量で叫ぶように静止を呼びかける。

「ダメ、ダメだよアルフ！お、お願い！」

だが、アルフは止まらない。

その姿がリビングから消えると、ティーノの小さな心臓は、まるでロックバンドのド

ラムの、ように早打つ。

ティーノは、来た相手がアイツでは無いことを切に願いながら、心臓の音すらかき消そうと胸に手を押し当てる。

暗がりの中、リビングから差し込む茜色が瞳の中に飛び込んでくる。

ティーノによつて綺麗にされたリビングを見ながら、どうしてどうして、と頭の中で唱え続ける。

そして、審判の笛が鳴らされたかのようにガチャリと、ドアノブの音が聞こえる。

「こんばんは〜、今日はよろしくねアルフ！」

その声は、どこか耳に心地よい女性の声だった。

声の感じからして美人で優しい人だろうことは、男であれば誰でも容易に想像できる。それは、ティーノからしてみれば、絶望を運ぶ悪魔の声以外の何物でもなかった。

現に、あの人が来たと言うことは必然的にアイツもいるのだから——。

「アルフ、久しぶり〜！今日はお世話になります！あつ、そうそうティアナさんは、帰りが少し遅くなるって！」

あの声が聞こえた。

それだけで、ティーノはこれから待ち受けることを予想し震え、足は自然と内股になつていた。

「それよりも、ティーノはいますか？」

アルフお願い！僕はいないって言って！

ティーノは心の中で叫ぶ、だがそれは許されない。

「……うん、わかった！」

なにがわかったのか、頼むから帰ってくれ！

ティーノは心の中で祈る。

だが、幼い願いは蹂躪されるかの如く軽快な足音が近づいてきた。

「おっじやま、しま〜〜す〜！」

リビングの中に入って来たのは、まるで湖の妖精のように可憐な少女で、黄金の髪をふわりと靡かせ、宝石のように綺麗な緑と赤のオツドアイでリビングを見回す。

「ふわあく、相変わらず凄い綺麗に掃除されてるねえ〜！」

そう言ったアイツは、部屋を見回すようにくるりとその場で回転した。

そして、白魚のような指を小さな顎に添えると、考えるように、あえて聞こえるように言う。

「でも、掃除をした本人がいらないんじや、褒めようがないなあ」

ティーノからは、アイツの後頭部しか見えない。

僕がいけないのは、わかっただろ！お願いだから、このまま帰って！

ティーノは、呼吸を押し殺すように口を両手で覆う。

だが、それを許してくれる程に、アイツは優しくなかつた。

「でも、お姉ちゃんには、わかるんだよなあ……」

アイツはそう言うのと、まるでホラー映画のワンシーンのようにぐるりと体の向きを変えた。

そして、赤と緑の瞳と、金色の髪が、僅かな隙間から交差する。

「ひっ！」

僅かに漏れた声、それを聞いたアイツは、ニヤリと笑う。

「みい〜つけた〜」

慌てて扉をしめようとしたティーノに対し、アイツは扉の隙間に指を入れてこじ開ける。

男の子の力よりも女の子であるアイツの方が力があるのはどうということなのか。

鍛え方が違う——。

そうとしか言いようがない。

そして、自らを唯一守っていた盾は、その鍛えられた腕力によりこじ開けられた。

「ティ〜ノ〜、お姉ちゃんから隠れようなんて、何を考えているのかなあ？」

茜色を全身に浴び、金色の髪を靡かせ、小学校の制服に身を包み、スカートをふわり

とさせながら、ティーノが必死に見つからないようにしていた相手。

自称、ティーノ・ランスターの姉、高町ヴィヴィオがそこにはいた。

友達

レンガ造りの建物、近代的なつくりの建物が多いミッドチルダにおいて、あえてレトロなまるで寺院のような造形は、ここが聖王を祭る聖王協会が運営する学校だからだろう。

校門まで続く直線状に伸びた道、由緒正しいその学校において今鳴り響く鐘の音色は、下校のチャームであり、帰路につく年相応の少年少女にとってたまに祝福の鐘の音であった。

その音を全身に浴びながら、その煌びやかさに負けない程の元気を全身から出して、高町ヴィヴィオとその友人の、リオ・ウエズリーとコロナ・ティミルは歩いていた。

「今日の放課後はどうする？」

元気つこを体現したような少女、リオ・ウエズリーはチャームポイントの八重歯を見せながら、二人に問いかける。

「今日はノーヴェさんも、用事があるらしいし、どうしよう？」

コロナ・ティミルは、カバンを両手で抱えながら、お淑やかに悩む。

すると、頬をかきながらヴィヴィオが答えた。

「ゴメン！今日は、予定があるんだ」

すると、コロナは花が咲いたように笑う。

「くすつ、そういうえば今日は弟君の家に行くんだったよね？」

「コロナがそう言うのと、リオは腕を頭の後ろで組む。」

「ああ〜そういうえば、言つてたね！」

二人にそう言われたヴィヴィオは恥ずかしそうにする。

「ティアナさんと、約束もしちゃったし、私が面倒を見てあげないとね」

「まったく、お姉ちゃんは大変だねえ」

「もう、そんなじゃないよ、リオつてば」

女は三人集まれば姦しいと言うが、この三人の少女にあつては周囲に不快感を与える騒々しさはなく、その代わり華やかさがあった。

そして、ヴィヴィオはティーノとなにをしようかな、と後のことを考え笑つた。

「ヴィヴィオ〜！」

ホンワカとした大好きな声が聞こえる。

「あつ」

校門の先にいたのは、自身の母親である高町なのはであった。

ヴィヴィオはリオとコロナに別れの挨拶をすると、駆け出す。

その足取りはどこまでも軽やかだった。

私、高町なのはは、高町ヴィヴィオの母親をしています。

今は、ここミッドチルダで暮らしています。

そして、お仕事は時空管理局の本局で戦技教導官をしています。

私が魔法に出会ったのは、小学3年生の時です。それから様々な経験を経て、大切な友人をたくさん得て、悲しいことをたくさん経験して、そして母親になって……。

娘のヴィヴィオがあ頃の私よりも、年上になったことを思うと、少し複雑だけどそれでも毎日楽しく暮らしています。

そして、驚くべきことに私の親友の一人のフェイトちゃんも新しく後見人になると聞いて、その相手があのジェイル・スカリエッティって聞いて驚いて、そのジェイル・スカリエッティが子供になっていて元教え子のティアナが保護責任者をしていると聞いて、まさに晴天の霹靂でした。

私は、元ジェイル・スカリエッティ、現ティーノ・ランスターに対しては余り良い印象を持っていませんでした。

だってジェイル・スカリエッティは、次元犯罪者でヴィヴィオに深い悲しみを植え付けた相手だからです。

でも、実際に会ってみると拍子抜けするほどにティーノは良い子でした。

私は、ティアナとフェイトちゃんのを考えも知っているから……だから、少しづつではあるけれど、私は、過去に深い業を背負うティーノを認めて、認めてもらえるようにしよう、何度もティーノのいるティアナの家に足を運んでいます。

その中で、ヴィヴィオとティーノは偶然にも出会ってしまった、最初はとうしようと思っただけで、今となってはそれも杞憂でした。

ヴィヴィオは、ティーノの良いお姉ちゃんになって、ティーノもそれを受け入れている関係にすぐになりました。

……たぶん。

この前も、ティーノの様子を見に行くとヴィヴィオに伝えたら、すぐに私も連れて行ってと返事を返して来て、親としては嬉しい限りです。

そして、ティアナの家のチャイムを押してアルフが出迎えてくれた、ヴィヴィオはすぐに家の中に消えていきました。

私はその姿を嬉しく笑いながら、アルフに促されて家の中に招かれました。

ティーノは良い子にしてるかな？

そんな風に思っていたら、聞きなれた叫び声が聞こえてきました。

「ふえあああああああつー！」

ああ、神様——。

良いように思っていました。が、私はもしかしてヴィヴィオの育て方をどこかで間違えてしまったのでしょうか。

家の奥から、フリフリの服を着て涙目のティーノが全速力で走ってきてアルフに抱き着きつく姿を見て、言い知れぬ背徳感を感じながら、私は内心娘にサムズアップするのでした。

「ア、アルフ……」

そう言いながら、怯えた様子のティーノは、助けを求めるようにアルフのもふもふの体に顔を埋める。

アルフはそんなティーノの姿を見て、また困ったようにため息を吐く。

そんなティーノに、なのはは少し体を倒し視線を合わせるようにして優しく言う。

「よく似あつてるよティーノ、うん……、すごく可愛いね！」

「ぐすつ……」

「ありやりや……」

ティーノは、なのはの存在に気付くとアルフの体を盾にするように体を移動させてしまふ。

その姿を見たなのは、少し悲しそうな顔を見ると、バレバレの鳴き真似をする。「ぐす……、ティーン君の意地悪……私、悲しいな……」

すると、ティーンは泣き真似をするのはを心配して、恐る恐るなのは近づき、小さな手で、膝立ちをして両手の握り拳を両目に押し当ててうえくんうえくんなんて、今時幼稚園児でも、馬鹿にしそうな泣き真似をするのはの頭を優しく撫でる。

するとなのはは、まるで毘にかかった獲物を捕らえる肉食獣のように両手をバツと開くと、驚きびくつとしたティーンを抱き上げる。

「つつかまえ〜た〜♪」

抱き上げられたティーンは、騙されたと気が付き暴れようとするが、そうするとなのはがケガをしてしまうと考え、どうしようもなくなり、フリーズしてしまう。

そして、リビングに拉致されていく姿を見つめながら、アルフは今日一番のため息を吐くのだった。

太陽もその姿を消し、街には人口の小さな太陽のみが瞬き始める。

人が自然に打ち勝った象徴とも言うべき星々の煌き達は、人々の道しるべとなり今日も輝き続ける。

仕事を終え、帰路についていたティアナは、家の前にたどり着くと同時に進行方向の

道から見知った人物が手をぶんぶん振って歩いてくるのを見つけた。

「ティアー！」

「スバル、悪いわね。忙しい中無理言つて」

「気にしないで、今日はきつとティアーナにとつてもティアーノにとつても大切な日になると思うし、その場に居合わせてももらえるなら、仕事の疲れなんて吹っ飛ばよ！」

「まったく……、ありがとう」

「それよりも、その手に持つてるのが？」

「ええ、ずっとこのままって訳にも行かないし、なにより次に進まないと……」

「うん……」

二人はそんな会話をすると、少し暗くなつた雰囲気をも誤魔化すように、玄関の扉を開ける。

「まあ、今日はいくつろいでいきなさい。それなりの、もてなしは約束するわ」

「じゃあ、膝枕して、あくんとかしてくれるの!？」

「調子にのらない！」

くすつと、二人で笑いながら扉を全開にすると、家の中から騒がしい毎日が聞こえてきた。

「こらつ、ティアーノおとなしくしなさい！」

「二人ともいいよ、目線こっちに頂戴！」

ティアナの目に映ったのは、メイド服を着た二人の天使だった。

一人は満面の笑みを浮かべ、女神に愛されているかのように幸せそうなヴィヴィオ。

もう一人は、羞恥に顔を真っ赤にしながら、うるんだ瞳に両手でスカートを握りしめるティノ。

そして、そんな二人をプロの写真家が使うようなカメラで高速撮影しているのは、姿であった。

おもちゃにされているティノのそばには、着せ替え人形にでもされていたのだろう、女物の服が乱雑に積まれていた。

ティノとヴィヴィオの姿を見たスバルは、目にハートを浮かべながら、かわいい、と叫び抱きしめようと駆け出す。

だが、ティアナの姿を見つけたティノは、今までの涙がまるで偽物であるかのように笑顔になり、スバルの手をかわし、ティアナに抱き着いた。

「おかえりなさい！」

そんなティノに心の中が温かい何かに満たされていくティアナは、優しく微笑むと、ティノの頭を撫でる。

「ただいま」

家の中を食欲を刺激される匂いが満ちた。

それは、なのはとティアナが用意した晩御飯であり、一つの丸テーブルの食卓に用意されたそれを皆で囲んで食べていた。

「ティーノ、ほら、あくん」

「……」

ティアナの膝の上に座るティーノは、大嫌いなニンジンを食べるようにとティアナにあくんをされていた。

だが、ティーノはそれをプイッと顔をそらし、黙秘する。

「好き嫌いをしていると、強い男の子になれないよ？」

ティアナの隣に座るスバルが、困るティアナのフォローにあたる。

ティーノは、その言葉を聞き、食べたくないけど、食べないといけない、けど食べたくないと、顔をぶんぶんと左右にふった。

そんなティーノにヴィヴィオは不敵に笑うと、これ見よがしにニンジンを食べる。

「ニンジンも食べられないなんて、ぷくくすくす……」

「うう~~~~」

「こら、ヴィヴィオそんなこと言って、ピーマン食べてないよ」

ヴィヴィオはなのはのその言葉に、ちろつと舌を出して誤魔化する。

そんなヴィヴィオを見たティーノは、得意顔でピーマンを食べる。

そして、ヴィヴィオに視線を移すと、謎の勝った宣言をするように鼻でヴィヴィオを笑った。

すると、ヴィヴィオのこめかみに怒りマークが生まれ、ヴィヴィオはティーノの柔らかな両頬をつねって伸ばす。

「このーーーーー！」

「ういーーーーむーーーーー！」

そんな二人を、静かに床でご飯を食べていたアルフが尻尾で頭を叩く。

すると、二人はしょぼんとした。

なのは、閃いたと両手をぼんと叩く。

「それじゃあ、二人で食べさしっこしよっか♪」

二人はなのはに言われ、おずおずとニンジンとピーマンを箸でつまむと、交差させるようにしてお互いの口に運ぶ。

「あむ」

そして、二人同時に目をギョツとつむるとお互いの箸につままれた大嫌いな食べ物を食べる。

「うげえええ」

そして、心底美味しくないと言いたげに苦い顔を作る。
その様子を、なのはが嬉しそうにカメラに収めていた。

食事が終わり、皆でテレビを見ていると、ティアナがなのはとスバルとアルフに目配せし、それぞれが頷いた。

「ねえ、ティーノ」

「？」

ティアナがヴィヴィオの隣に座りテレビを見ているティーノを呼ぶと、ティーノはティアナの傍まですぐに来た。

そして、ティーノの隣にいたヴィヴィオは、不安そうな顔をするとなのはの手を握る。

「……外に出たい？」

そう聞かれたティーノは、一瞬驚いた顔をし、そして嬉しそうに瞳を輝かせるがそれはすぐに伏せられる。

「……出たくないよ」

「本当に？」

「……うん」

ティーノは察していたのだ、外に出たいと我儘を言えば、ティアナに迷惑がかかることを……。

理由なんてどうでもいい、ただティアナが困ることをティーノはしたくなかった。そこには、子供の無垢な愛が見える。

だから、ティアナもスバルもなのは、アルフもヴィヴィオも辛そうに顔を歪める。

「僕は、外に出たくないよ……。外に出なくても皆いるから、寂しくないよ」

そういったティーノの手をヴィヴィオは、ティーノの隣にまで歩みより自然と握っていた。

ティーノは驚くでもなく、嫌がるでもなく、すぐるようにその手を握り返す。

ヴィヴィオは知っていた。

ティーノが家の外に行きたがっているのを、しつこいくらいにヴィヴィオに外の様子を聞いてくるから——、ふとした瞬間に窓の外に視線を向けているから——。

ヴィヴィオに手を握って貰ったからか、ティーノは無理矢理に笑顔を作ることが出来た。

そして、誰にでもわかる嘘をついてしまう。

「だから——、だから、僕は大丈夫だよ」

すると、ティアナは悲しそうにするでもなく、嬉しそうにするでもなく——。

怒った顔をした。

「ティーノ、私は嘘をつく子は嫌いって言ったでしょ？」

そして、ティーノの頭を優しくゲンコツする。

すると、ティーノはティアナに叱られたと、嫌われたと、目に涙を浮かべていく。

「でも、でも……、僕が外に出たら、ティアナも困るって……」

「だれがそんなことを言ったの？」

「だって、だって……、外のみんなは僕の事が嫌いで、僕と一緒に外に出たら、ティアナやみんなが悲しむって……」

ティーノの瞳には、不安という涙が溜まり続け、決壊し溢れ出す。

だれもその涙を止めようとはしない。

不安は、この場で出し尽くしてしまえばいいと、皆が思っていた。

「外の人は、僕が嫌いだから外に出たら、怒られるって——」

どこまでも、大切な人達を思う少年の心を慈しむように、たまらずティアナはティーノを抱きしめていた。

そして、ティーノは泣き叫んだ。

外に出たいと、いろいろなところに行きたいと、もつと皆と喜びを共感したいと——

ティーンノの我儘らしい初めての我儘、皆がそれを優しく見守っていた。

ティーンノが泣き止むと、ティアナは一つの箱をティーンノに手渡す。

「これは？」

すると、ティアナは優しく笑う。

「これはね、ティーンノが外に出れるように、そして自分を大切な人達を守ってくれる。そんなティーンノの手助けをしてくれる。大切な友達よ」

ティーンノは、理解できていないかのように首をかしげると、箱の蓋を外した。

すると、箱の中には一つの金属製のカードが入っていた。

「クロスミラージユ？」

そこには、ティアナのデバイスであるクロスミラージユの待機モードと同じデバイスが入っていた。

ただ違う点は、クロスが描かれているクロスミラージユと違い、Σが描かれていた。

「その子の名前は、エテルナシグマ。ティーンノの、友達よ」

「友達……」

友達という単語に、初めての感覚を覚えるティーンノは、恐る恐るエテルナシグマを手にとると、不安げにエテルナシグマに語りかけた。

「これから、よろしくね」

すると、電子的ではあるが優しい声がかえってきた。

「よろしくお願いします。マイフレンド」

その声を聞いて、ティーノは花が咲いたように笑顔になるのだった。

ヒエラルキー

ティーノは、ティアナから受け渡された友人であるエテルナシグマを大切に両手で保持すると、ニヤケ顔で見つめ続けていた。

「えへへへ……」

その幸せそうな表情は、完全にダメな子の表情であった。

ティアナとスバルはそんなティーノの姿を見て、互いに顔を見合わせると、くすりと微笑みあう。

エテルナシグマとティーノを出会わせて良かった。

そう皆が思っていた。

一人を除いて――。

「ティーノ！ てい~~~~のお~~~~!!」

ヴィヴィオはエテルナシグマを見つめ続けるティーノに不満を露わにする。

ティーノがまるで、ヴィヴィオのことなど眼中に無いとでも言いたげだからだ。

面白くない……。

喜ばしいことだが、面白くない……。

自称、ティーノ・ランスターの姉、高町ヴィヴィオはティーノを見ながらぷくぷくと、頬を膨らませた。

そして、ニヤリと笑うと良いことを思いついたとティーノの肩を揺らす。

「？」

ティーノがそれで初めて自身の隣にヴィヴィオがいるのに気が付くと、頭に？を浮かべながら、コテンと首を傾げた。

「ふっふっふっ……、ティーノ、実はお姉ちゃんもデバイスを持つてるの」

そう言うと、ヴィヴィオは自らの相棒の名を呼ぶ。

「クリス！」

すると、ヴィヴィオの鞆の中からウサギのぬいぐるみが飛び出してきた。

「ふえあっ！」

そのうさぎは、自由自在にティーノの周囲を飛び回ると、ヴィヴィオの掌に着地し、お辞儀した。

「この子の名前はセイクリッドハート、愛称はクリス、私の大切な家族だよ」

すると、ティーノはさつきまで大泣きしていたとは思えないほどの満面の笑顔で、クリスの前にヴィヴィオと同じように掌の上にエテルナシグマを乗せ近よらせると、エテルナシグマの代わりにティーノがお辞儀をする。

「よろしくね！」

持ち上げられた顔を見たヴィヴィオは一瞬、顔を赤くしてしまふ。

それは、初めて見たティアナのみに向ける本当のティーノの笑顔だったからだ。

そして、その顔を見られたヴィヴィオはさらに赤くなると、姉としての矜持を守るために、もつともらしい言い訳を述べながら、ティーノにとびかかる。

「お姉ちゃんに、新しく出来た友達を一番に紹介しないなんて悪い子はどこの誰かなーッ！」

「……へっ？ふえあああああああつ！」

そして押し倒されたティーノは、ヴィヴィオにもみくちやにされる。

「なに、なに!?!やめて！服を脱がそうとしないで！ごめんなさい、僕が悪かったから！」
「ダクメ！」

「嫌ん待つて！カメラ、カメラ！」

なのはは、頬を桜色に染めながらカメラを探し出す。そして、クリスは可愛らしく両手を肩の上にあげると、やれやれ……と首を振り、エテルナシグマは、この中でのヒエラルキーを理解した。

夜も更けだし、テレビ番組も面白いのがなくなってきた時間帯、唐突にリビング内に電子音が鳴った。

「お風呂が沸きました♪」

ティーノはその音を聞くと、ぷはっ、と息を吐き出しこの地獄が終わる時が来たと安堵した。

だが、やはり今日はティーノに優しくくない。

「それじゃお風呂にしましょうか」

ティアナがそう言つて立ち上がる。

ティーノは信じられないと言いたげに、立ち上がるティアナを目で追う。

いつもなら、お風呂が沸く時間になったらヴィヴィオ達は帰るからだ。

だが、当の高町親子はカメラに撮影された画像を見ながらキヤイキヤイしている。

なにかが、おかしい……。

いつもと違う……。

ティーノの背中を一筋の冷たい汗が流れる。

すると、ティーノの両脇に手が入られると、急に視線が高くなった。

「ティア、ティーノは私がお風呂に入れてくるね♪」

「ごめん、お願いするわ」

「それじゃ、私も入る〜♪」

未だになにが起こっているのか、理解出来ていないティーノは声が聞こえた方向に顔

を向ける。

すると、スバルの足元にいたヴィヴィオは、ティーノに視線を合わせるように顔を持ち上げると、心底嬉しそうに笑う。

「お姉ちゃん、お風呂に入ろっか♪」

その表情を見たティーノの顔が恐怖に固まる。

そして、恐怖に固まった顔のまま、唯一の救い人であるアルフの姿を探したティーノは、その姿を見つけた。

アルフは、客間に足を運び、帰ろうとしていた。

「いつもありがとうね、アルフ。助かったわ」

ティアナにそう言われたアルフは頷き返すと客間に消えていった。

ティーノの表情が絶望に染まる。

だが、誰もそんなティーノなど気にも留めない。

「それじゃ、キレイキレイゴ~~~~！」

「ゴ~~~~っ！」

「あ、あわわわわわ」

唯一、エテルナシグマだけ、主人を不憫に思い点滅を繰り返した。

騒がしき担当達が、風呂場に消えたとリビングには妙な静けさが広がった。

リビングに残されたのははテーブルに移動すると、ティアナがコーヒーを入れてテーブルに置く。

ゆらゆら揺れる湯気を見ながらなのは、ニコリと微笑む。

「ありがとう、ティアナ」

「いえ、それはこちらのセリフです。なのはさん」

ティアナはそう言うと、おもむろに言葉を続けた。

「……これで、よかったのでしょうか？」

「うん？」

「ティーナは、ジェイル・スカリエツティです。いくら幼くなつたと言っても面影は色濃く残っています。一般人なら、なんとか誤魔化せると思いますが、管理局員……、J S 事件に関わっていた局員は、すぐに気が付くと思います。そして……、答えに辿り着く」

「うん……、そうかもしれないね」

「それでも私は、ティーナを外に連れ出そうとしています。これは必要なことだと、頭では理解出来ているんです。でも……、まだ私は迷っています。本当に、このタイミングで良かったのかと……」

「その答えを答えられる人は、たぶんいない……。私も、明確な答えなんて言えない。で

もね、ティアナ？その感情がどこから来ているのかは、私は知ってるよ？」

「本当ですか？」

「うん、それはね——」

夜は続いていく、この選択がどう転ぶのかは誰にもわからない。

それでも、選んだのだティアナは、ならばそれを支えるのが、元先生の役目であろう。なのは、ティアナに語り掛けながら、そう思うのだった。

「う〜ん……」

風呂場で散々スバルとヴィヴィオからおもちゃにされたティーノは、眠い目をこすりながら、スバルに抱かれていた。

スバルのパジャマの胸元を握りしめながら抱かれているティーノは、リスの着ぐるみのようなパジャマを着ていた。

用意したのは、もちろん高町親子である。

ただこのパジャマに関しては、温かいという理由でティーノも気に入っていた。

「ティーノはもうお寝むかな？」

スバルはそういうと、半分夢の世界に旅立とうしているティーノの前髪を、梳いて笑

う。

「ちよつと、ティーノ寝かしてくるわ」

ティアナはそう言うと、スバルからティーノを受け取ると寝室へと姿を消す。

「なのはママ、私も眠たいから寝てくるね」

「おやすみなさい、ヴィヴィオ」

「うん、おやすみなさい」

ヴィヴィオもなのはにそう告げると、ティアナの後を追った。

そんな二人を見送ったスバルはなのはに問う。

その目は、どこまでも真剣だった。

「なのはさん、一つティーノのことについて言っておきたいことがあります」

なのはも、体ごとスバルの方に向けると、挑発的に返す。

「なにかな？」

「ティーノの魔法の先生になるのは、私です！」

「スバル……、私の仕事内容は知っていますよ？……それは、譲れないな」

「ティーノには、ストライクアーツの素質があると思うんです。……だからこそ！」

なのは、そんな情熱的なスバルに対し、やれやれと首を振る。

「間違ってるよスバル。ティーノには、砲撃魔法があつてる。戦技教導官の私が言うん

だから、間違いないよ」

だが、スバルは引かない。

「私は、ティーノを見た瞬間びびつと来たんです。この子はと！」

「その気持ちは元先生としては、よくわかるよ。でもね、こればかりは譲れない」

スバルは密かに憧れていたのだ。

妹のノーヴェエが、ヴィヴィオ達の先生をしている姿に、子供に先生先生と慕われていく姿を——。

だが、なのはも今回ばかりは譲れない。

娘のヴィヴィオが砲撃とは違い、格闘に言ってしまったのだ。

いろいろ教えたいことがあった。

夢にまで見た、親子スターライトブレイカーとかしてみたかった。

だが、今となつてはそれも後の祭りである。

だからこそ、今度こそは——。

その時、空中にウインドウが開く。

「その話、私も入れてもらつてもいいかな？」

そこに映っていたのは、フェイトだった。

どこから聞きつけたのか、この戦いに乱入してきたのだ。

だが、二人は冷静だった。

「エリオがいるフェイトちゃんは黙っていて」

「エリオがいるフェイトさんは黙っていて下さい」

フェイトは一撃で消沈した。

「二人ともひどい……」

だが、玄関から次なる刺客が現れる。

「その話、ちよつと待った!」

そこには、少し酔った八神はやての姿があった。

その後ろには、融合機であり、ティーノの自称姉2のラインフォース・ツヴァイがいた。

「ティーノはどこですか?」

そんなリインを無視して、はやては告げる。

「ティーノは、広域型魔法があつてると思うんですよ。うん」

そんな急な来客であるはやてに対し、なのは鼻で笑って返す。

「ふつ、はやてちゃんらしくないね。見誤つてるよそれ……」

はやては、そんななのはに指を振りながらチツチツとわざとらしくした。

「わかつてへんのは、なのはちゃんの方や。ウチなら、近接戦から中距離戦、そして広域

戦と幅広く教えることが出来る環境が整ってるんやで？」

バチバチと火花を散らすバルとなのはとはやてに対し、フェイトはおずおずと片手をあげながら、進言する。

「……ティーンには、高速戦闘が似合ってると思うな？」

「「ちよつと、黙ってて！」」

「ひどい……」

どこまで行っても埒が明かない——。

はやてはニヤリと笑うとドンとテーブルの上に瓶を置いた。

そこには、魔王とラベリングされている。

「大人なら、大人らしい方法で、決着をつけようか？」

そう言ったはやてに、なのはは笑う。

「その話、乗ったの」

「私もそれで構いません」

「あの……、それだと、私……参加出来ない……」

止めるものは誰もいない。

ここに、大人の戦争は開幕した。

なぜかリインが突入してきてそれに驚いたティーンを寝かしつけるのに苦労してい

たティアナがリビングに戻ると、そこは阿鼻叫喚の地獄だった。

「ワタシの、私のヴィヴィオが、スターライトブレイカーしてくれないよ〜！」

「ノーヴェばかり、ヒック……、ずる〜い！私も、子供達から慕われた〜い！」

「わはははは！もつとや、もつと酒をもつてこんか〜い!!」

「ぐすつ……私なんて……」

なにをやっているんだこの人たちは……。

ティアナは、酒を口にしていないのに、二日酔いの時のような頭痛がして頭を押さえた。

そして、ある意味最強達にロックオンされる。

「え、え?」

三人の影がティアナに伸びる。

「いや〜〜〜〜つ!!」

やはり、子は親に似るものである。

ティアナも、とことん苦勞人であった。

魔法

夢を見ていました。

夢の中の僕は、どうしようもない思いを胸に抱いて、ただ人を救いたいと望んでいました。

それでも世界は、僕に絶望を叩きつけてきて……、それでも逃げたくなかったから、あがき続けて……。

そして僕は——。

僕の夢に飲まれて——。

何も無い暗闇へと——。

自ら進んで行きました——。

「う~~~~ん……ふわあっ」

ティーノ・ランスターは、半分寝ぼけた眼のまま、人の温もりを存分に吸いきった状態の心地よい布団から顔を出す。

朝の陽ざしがカーテンの隙間から漏れ出し、目覚めの時を知らせてきた。

今日もいつもと同じ夢を見てしまった。

ティーノの朝の目覚めはいつも最悪だった。

なぜだかいつも、自分は夢のなかで誰とも知らない人達から虐められていた。

どのようなにして、誰からなんてことは思い出せない。

それでも、この胸の痛みは、そう言った類の事をされていたのだということは、理解出来ていた。

だから、ティーノはその悲しみを包み込んでくれる存在を探す。

「ティアナ……？」

ただ、いつも傍にいてくれたティアナの姿が見えない。

その代わり、昨夜突如として現れたラインとヴィヴィオが両隣に寝ていた。

ティーノは、胸にモヤモヤとした何かを携えながら、器用にベッドから抜け出すと、ティアナの姿を探すために寝室を後にする。

廊下に出ると、そこはまるで迷宮の入り口であるかのように、ティーノには見えた。

普段見慣れたはずの壁や天井がやけに遠く、見つめる先のリビングに通じるはずの扉は、遙か先にあるように見えた。

怖い――。

まだ、夢の続きなのだろうか。

寢室のドアノブを背伸びをして握るティーンノの背には朝の光がある。

だが、そこには欲していた温もりがない。

その温もりは、暗闇の先にある。

ティーンノは、息を少しだけ荒げると、意を決し歩みを進めた。

怖い何もかもが怖い。

壁や天井の汚れが人の顔に見え、床の傷が苦しむ獣に見えた。

ごめんなさい——。

ごめんなさい——。

ティーンノは、伝わるはずのない謝罪を口にしながら、獣を踏みつぶし歩みを進める。

そこにあるんだ、温もりが、だからごめんなさい。

僕の我儘のせいで、ごめんなさい。

楽になろうとしてごめんなさい。

だが、歩みを止める訳にはいかなかった。

そして、やっとの思いでリビングの扉のドアノブに手を届かせると、力一杯にそれを

引いた。

そこには、背後の縋りついてくるような闇を薙ぎ倒す、力強い温もりが広がっていた。

「おはよう、ティーンノ」

探していた温もり……。

ティアナ・ランスタアの姿を見つけたティーノは、よたよたとした足取りでティアナの足元までいくと、しっかりと抱きしめたのだった。

ティアナの腰をしつかりと力強く抱きしめるティーノの姿を見て、朝の恒例行事だと言わんばかりに慣れた様子で、ティアナは持っていたお盆を近くのテーブルに置くと、ティーノを抱き上げる。

「今日も、怖い夢を見たの？」

抱き上げられたティーノはティアナの首元を抱きしめ直すとその問いかけに、黙って頷いた。

「……そう」

ティアナはそれだけを言うと、ティーノの頭を優しく撫で続ける。

「おはようティーノ、朝から甘えんぼさんだね♪」

ティアナと同じくエプロン姿で朝食の準備をしていたスバルは、ティーノの頭を人撫でした。

ティーノの中を温もりが満たしていく。

ここが、自分の居場所なんだと再確認するかのように温もりを体全体で確かめる。

夢がどれほど怖かったかなんて、そのころには忘れてしまっていた。

朝食の準備が終わると、寝室の方からバタバタと騒がしい足音が響いた。

そして、扉がバンつと音を立てると、パジャマ姿のヴィヴィオとリインの姿があつた。

「ティーノ、お姉ちゃんより早く起きるなんて、何を考へてるのかな？」

「ティーノ！ リインお姉さんが来たですよ！ さあ、遊ぶです！」

今日も今日とて騒がしい、ティアナはこの騒がしさがティーノのためになれば良いなと、そう思うのだった。

朝食が終わると、それぞれが帰宅の準備を始めていた。

玄関に向かうヴィヴィオとリインの背中の服が弱弱しく握られる。

二人が、振り返るとそこにはどこか寂しげな表情をしたティーノがいた。

「……」

ティーノはなにも答へない。

だが、その意思表示は明らかにわかりやすく、ヴィヴィオとリインは優しく笑うと、それぞれティーノを抱きしめた。

「今回は来るのが遅れてしまったですけど、また来るですよ！」

「もう、男の子がそんな顔をしちゃいけないでしょ、メッだよ？」

二人にそう言われたティーンは泣きそうな顔をしたまま、真つすぐに二人の目を見返す。

「寂しくなんてないよ、僕男の子だもん！」

そう宣言したティーンに対し、二人はバイバイと告げてランスター家を後にするのだった。

そして、皆がいなくなると家の中が昨日のことが嘘のように静かになる。

玄関を見つめたままのティーンに対し、ティアナは笑うとティーンに言った。

「ティーン、ここつちに来なさい」

「どうしたの？」

すると、ティアナは胸を張りながら答えた。

「今からお出かけするわよー」

ティアナとティーンが来たのは、時空管理局本局内に存在する無限書庫。

そこには、全次元世界の記憶が留められていると言われ、問いかけの答えすべてがあると言われている。

ただし、一つの世界のように膨大な空間に満遍なく存在する本というあの記憶を探し出せればであるが。

そんな整理整頓すらされずまさにどこになにがあるかわからない状態の無限書庫を、だいたいどこにあるか分かるまでにまとめ上げた人物。

無限書庫司書長にして、あのエース・オブ・エース高町なのは魔法の師匠である男、ユーノ・スクライアがいた。

「お久しぶりです。ユーノさん」

無重力空間である無限書庫内で、うまくバランスを保ちながら、ティアナは何かの本を探しているユーノに声をかけ頭を下げた。

「久しぶりティアナ」

ユーノはそう言って優しい瞳をティアナに向けると、その視線をずらす。

そこには、慣れない無重力空間でわたわたしながら、時折一回転し、必死にティアナの手を握ろうとしているティアノの姿があった。

「君がティーノ・ランスター君だね？ 話は、なのはやヴィヴィオから聞いているよ」

そういつて、ユーノが人差し指をくるりと一回転させると、わたわたしていたティーノの体を淡い緑色の光が多い、体のバランスを整え、ユーノの傍までティーノを移動させた。

その優しい光にびっくりしていたティーノの手をユーノは取り握手をすると、優しく目を細める。

「僕の名前はユーノ・スクライア、この無限書庫で司書長をしているよ」

その優しい応対にも、人見知りのティーノはビクビクしながら、どう対応していいのかわからずティアナを見つめる。

すると、ティアナは笑いかけ頷くのだった。

「ぼ、僕の名前は、ティーノ・ランスターです。よろしくお願いします」

「うん、よろしく」

すると、ティアナはティーノの頭を軽く撫でながら、諭すように言う。

「ユーノさんが、ティーノの魔法の先生になってくれるのよ」

「先生？」

「僕じゃ物足りないかもしれないけれど、頼まれた以上精一杯やらせてもらうよ」

ユーノはそういうと、ティーノの瞳を真つすぐに見つめる。

「ティーノ、君は魔法を使ってどうしたい？」

ティーノには、その意味が理解できなかった。

でも、理解できないからこそ、本心を言うことが出来た。

「僕は、男の子だから、女の子のティアナを守るようになりたい！」

その言葉に、顔を少し赤くしながらティアナは喜び。

ユーノは満足そうに笑顔になった。

「それじゃ、さっそくで悪いけど、始めようか」

三人が来たのは、本局内の訓練場であった。

普段は予約制で使用され、多くの人で賑わっているそこには、誰の姿もない。

それには、今回のティーノの魔法初体験が大きな理由を持っているからだ。

三人は、訓練場の中心まで移動する。

「それじゃ、まずはバリアジャケットの展開から教えるね」

ユーノはそう言うと、一瞬のうちに衣装を変えた。

ティーノはその早着替えに目をパチパチさせる。

「バリアジャケットと言うのは、フィールド魔法の一種で、自らの身を守ってくれる魔法だよ。ティーノの場合はエテルナシグマにすでに登録されているから、後は自分の全身に薄く魔力を張るイメージでやってみて」

やってみて、と言われてできるだけほど魔法の運用とは楽ではない。

そもそも、イメージが出来ないのだ。

そのイメージができるようになるまでに、本来であれば座学等を必要とするが、そこはあの高町なのはの師匠である。

まずは、やらせてみてから考える。

優男な割に、意外とスパルタであった。

だが、ユーノの姿をじつと見ていたティーノは、一回頷くと、ポケットの中からエテルナシグマを取り出す。

「それじゃ、セットアップと唱えてみて」

「はい！」

ティーノはそう言うと、エテルナシグマを眼前まで持ち上げる。

「頑張ろうねエテルナシグマ！」

「はい、マイフレンド」

そして、第一歩を踏み出すためにその呪文を唱えるのだ。

「セットアップ！」

そうティーノが唱えると、ティーノの足元に紅い光が生まれ、紅がティーノの全身を覆い隠す。

まるで、卵から孵化するように光が砕け散ると、そこにはバリアジャケットを纏ったティーノが立っていた。

その姿は、黒と赤の半袖に同じ色の長ズボン、そしてブーツを履き、白色のジャケットを羽織っている。

ティアナのバリアジャケットの男バージョンであった。

そして、エテルナシグマは、ティーノの両腕にガントレットとなり装着されていた。

ただ、一つ違う点があるとすれば、手首の外側が膨れ上がっており甲には銃口を思わせる穴が開いていた。

自分の姿に驚いていたティアーノは即座に満面の笑みになると、ティアアナに向け言った。

「僕、かつこいい!？」

そう言うティアーノの姿にティアアナは内心やつぱり男の子ね、なんて思いながら答えた。

「かつこいいわよ、ティアーノ」

褒めてもらったティアーノは、嬉しそうに笑う。

「服はティアアナとお揃いだね!」

「ふふ、そうね。エテルナシグマは、私とスバルで考えてデザインしたわ」

ユーノがふむと、頷く。

「なるほど、だからガンナツクルの形状をしているのか……。スバルのリボルバーナツクルをスリムにさせた形状に、ティアナのクロスミラージュを融合させたデザインというわけだね」

ユーノはそう言いながら、ティアーノになのはと同じ匂いを感じていた。

それは即ち、魔法の天才であると言うことであつた。

この元ジェイル・スカリエッツィの魔法の先生に、どんな運命かなることになった。この子の行く道、力の使い道を誤らせないようにするには、自分の指導が大いに関わってくる。

これは責任重大だ……。

ユーノはそう言いながら、はしやぐティーノに対し先生らしく振舞う。

「バリアジャケットの展開はうまくいったね。それじゃ、次のステップに行こうか」

そんな三人の姿を天井に用意されたサーチャーから除く人物達がいた。

その人物達の姿の中には、高町なのはを始め、フェイト・テスタロツサ・ハラオウン、八神はやてがおり、その外にも、時空管理局の重鎮達の姿があった。

「やはり危険なのではないか？」

重鎮の一人がそう口を動かす。

「ジェイル・スカリエッツィは、前時空管理局の生み出した闇そのものだ。その力、カリスマ性はここに居る皆が知るところだろう」

別の重鎮が口を開く。

「そんな者に、力の手解きなど正気の沙汰じゃない。前時空管理局もジェイル・スカリエッツィが天才であるが故に、力の行使の方法を教育から除外したと言うに……」

別の重鎮がため息を零す。

「その状態のジェイル・スカリエツィに、自慢の刃を砕かれたのはどこの誰だったかね。テストロッサ執務官」

そして重鎮達は、呪詛を出しだす。

「危険だよ。アレは……」

「再び、我らに牙を向けたらどうするのだね？」

「力の運用方法すら理解したアレに対し、我々は打つ手がなくなるのではないかね？」

「我々の想像を超えた化け物だと、知るべきだ」

「やはり、我々の管理下に置くべきじゃないかね？」

「利用方法はいくらでもある」

「あまねく次元世界のために、アレは必要……か」

「次元世界中の今ある問題を解決することが出来るモノだよ、アレは……」

「ふむ、ならば誰の手元に置くべきか……」

会議の内容が、犯罪者から物に代わり、その運用方法と今後の対策に変わろうとした時、凜とした声が会議場に響いた。

「いえ、今のままでこそ……、ティーン・ランスターは輝きます」

その声の主は、八神はやてであった。

その両隣に座る高町なのも、フェイト・テストロッサ・ハラオウンも眼光を鋭くし

ている。

「それはどういふことかな、八神二等陸佐？」

「皆さんもよう知るように、ティーン・ランスターには、ジェイル・スカリエツティの記憶が存在してない。目下の考えでは、記憶の完全な消去など不可能であることから封印されていると考えた方が妥当だと思います。さらに、ジェイル・スカリエツティを生み出してしまった最大の原因は、前時空管理局の闇がそう仕向けたからであり、人間学的にも幼少期の環境が人に与える影響は、その者の人生を決めるとレポートにも纏められています。……時空管理局に利する人物にするためにも、今の環境がベストであり、変えるのは得策ではありません」

はやてのその言葉に、会議場は静かな会議で瞬時に騒がしくなる。

誰もが欲しているのだ。

金の卵を生み出せる天才を——。

誰もが手を拱いているのだ。

教育が失敗し、ジェイル・スカリエツティが目覚めた時、その責任を取りたくないとして。

ならば口出しするなど、八神はやては席を立つ。

これで、今日の会議は終わりだと——。

会議場を後にしようとする八神はやてに、待ったと声がかかる。

「ならば……君達なら、アレを御することが出来るとでも？もし、ジェイル・スカリエツティが目覚めた時、その対処はどうするのだね」

その問いに、八神はやては不敵に笑う。

「そのための私達であり、そのための元機動六課です。安心して構いませんよ？スカリエツティに対しては、どこの部署よりも、誰よりも、私達が上に行く。私達以上の部隊なんてありません。もし仮に、ジェイル・スカリエツティが目覚め次元世界に牙を向くようなら、私達機動六課が全力で封殺することを、ここでお約束します」

そして会議室の扉は閉じられた。

本局の白い廊下を革靴が叩く音が響く。

それは足早で、会議室から離れた訓練場の前までくると、設置されているベンチに腰掛け全力で疲れを吐き出すように八神はやては項垂れた。

「お疲れさま、はやてちゃん」

高町なのははそう言うのと、自販機から苺オレの缶ジュースを買うと、はやてに手渡した。

「ありがとうな、なのはちゃん」

「ごめんね、はやて。一人で背負わせてしまって」

「気にせんでええよ、フェイトちゃん。これが、私の戦いやから……」

「うん……」

「でも、これで上の連中が考えてることが再確認出来たわ」

「……そうだね」

「ティーノは良い子だよ、本当に……」

「それは私も知ってるよなのはちゃん……、やからこれからが大切や……」

「うん……、ティーノを守る環境を作り、ティーノ自身が自分を守る力を入れる

よ」と……」

「そうや、ティーノのこれからを幸せなものにするためにも、私達大人が気張らなあかん」

「悲しみをこれ以上増やさないために……」

「子供の未来を守るために……」

「皆が笑顔でいられるように……」

「「頑張ろう」」

三人の大人は、そう言う手を持っていた缶ジュースを飲み干し、ごみ箱に入れると訓練場の扉を開くのだ。

その先には、元気よく力一杯にユーノにより用意された的を撃ち抜き、独特な体術で

次々と壊していくティーンノの姿があった。

その訓練が終わると、今度は回復魔法の訓練を始める。

その顔は真剣で嬉しそうで、初めて魔法と出会ったあの頃を自然と思い出させる。

この子は、きつと大丈夫——。

そんな希望が現実になるような気がして、三人は自然と笑顔になった。

足音が気が付いたのか、訓練を止めティーンノが顔をあげる。

すると、満面の笑みでこう言うのだ。

「僕、魔法が出来るよ！かっこいいでしょ!!」

褒めて褒めてと、言わんばかりのティーンノに三人は満面の笑顔になるところいうのだ。

「うん、すごく可愛いね!」

その言葉に、ティーンノの表情が絶望に染まる。

「……僕、かっこよくないの?」

弱弱しく言う、ティーンノにティアナは苦笑すると、ティーンノを抱き上げた。

「どうだろうね?」

そうティアナに言われたティーンノは、悲しみに半泣きになると、魔法の先生に最後の希望を見出す。

「僕、かっこよくないの？」

ユーノはそれを笑顔で誤魔化した。

とうとう、ティーノの緩すぎる涙腺が大洪水を起こしそうになったときに、なのは、とフェイトとはやては、いたずらが過ぎたと、慰めにかかるのだ。

そして、みんなで笑う。

これが子供と大人の時間で、大好きな時間で、守らなくてはならない時間で――。

だから、頑張ろうと――。

大人達はそう思った。

魔法戦

紅の閃光が宙を舞う、目測50メートル先の目標に向け吸い込まれるように突き進む。

狙うは必中、当は必然、届けば必殺。

一つ一つのか細い光が、一つ一つの的を撃ち砕いていく。

「エテルナシグマー！」

子供特融の声色が響けば、相棒が電子音で答える。

「ステインガレーイ」

それは初歩的な魔法であり、ミッドチルダ式の魔法を扱う管理局員であれば誰もが扱える射撃魔法である。

だがそれは撃つことが出来るだけであり、的に当て続けるとなれば話は変わってくる。

物を投げるだけなら赤子だって出来る。

だが、狙った箇所当てるとなれば話は変わってくる。

それは大人でも難しい。

それを、無理な体制から放ち当て、時折格闘戦を交えてなど正気の沙汰じゃない。

その正気の沙汰じゃないことをやれと言っている者もおかしければ、それをやれてしまおう者もおかしい。

ただ、やれと言われて出来てしまう者達の事を、過去から未来まで、変わることなく皆はこう言う。

天才と――。

「それじゃ、今日はここまでにしようか」

両手をパンと打ち鳴らしそう言ったのは、ティーノの魔法の先生をしているユーノであつた。

ユーノはそう言うと、ティーノに向け自身が得意としている補助魔法の一つヒールをティーノにかける。

ティーノはその淡い光が強張った筋肉を解し、疲労を取り除いていくのは気持ちいいのか時折艶めかしい声を発する。

ユーノがティーノに見出したのは、どんな状況下でも活躍することが出来、どんな相手であっても対処することが可能なオールラウンダーなスタイルであつた。

その何でも屋として、良い見本としてまた目指すべき形として、ユーノはクロノ・ハラオウンをあげた。

クロノ・ハラオウンとは、フェイトの義兄であり現在は、次元航行隊にてクラウディアの艦長をしている。

クロノは、ユーノがなのはと出会ったPT事件からの付き合いであり、時たま訓練場でストレス発散を兼ねて、訓練をしていた。

そのため、すぐにティーノにあつたスタイルを見抜くことが出来た。

「ユーノ先生、僕まだ出来るよ！」

瞳を輝かせそう言うティーノに対し、ユーノは苦笑しながら答えた。

「訓練に熱心なのは良いことだけど、何事もやりすぎは良くないよ。成長の障害になつてしまふからね」

「……はい」

しゅんとしたティーノに対し、ユーノはくすりと笑う。

その姿は、年の離れた弟に困っている兄のようだった。

そして二人は訓練場を退出していく。

管理局本局の廊下を歩きながら、ティーノはユーノの顔を見ながら問いかけた。

「ユーノ先生！」

それに対し、ユーノは優しく聞く。

「なんだい？」

「今日も無限書庫に行っている？」

ティーノは訓練が終わると、ユーノについて行き無限書庫内で暇を潰していた。

これは、ティーノの迎えが来るまでの時間つぶしの意味があった。

ほぼ毎日通っているのに、変わらず聞いてくるティーノの律義さにユーノは微笑みながら、毎度の如くOKと答えるのだ。

無限書庫内のユーノのデスクの隣には、ティーノが行儀よく椅子に座りながら、映像を見ていた。

それは、なのはやフェイトにはやて達が戦技披露を行っている映像だった。

その映像内では、なのはの必殺技であるスターライトブレイカーも映されており、フェイトの高速移動技術の一つであるソニックムーブ、はやての広域魔法のデアボリックエミッションも映されていた。

そのどれもが、ド派手で男心をくすぐるカッコよさがあった。

「ほあ~~~~」

ティーノは時折、驚いたように感心したように、変な声を出す。

ユーノは、そんなティーノに慣れた様子で、黙々とデスクワークを片付けていく。

デスクワークが粗方片付くと、ユーノは未だに真剣に映像を見ているティーノの肩を揺らした。

「なのは達は、カツコイイかい？」

ティーンはそう聞かれると、興奮しているのか頬を僅かに赤らめながら、元氣よく頷いた。

「うん！」

その時、ユーノとティーンの眼前にホログラムが映し出された。

そこに映っていたのは、クロノ・ハラオウンであった。

「クロノ師匠！」

そう叫ぶティーンに対し、クロノは一瞬目配せすると、まずはユーノと言葉を交わす。

「いきなりですまないなユーノ」

「今ちようどオフの時間帯だから問題ないよ。それで、今回の要件は？」

「ティーンのことだね……」

そこで、クロノはティーンに声をかける。

「ティーン、ちゃんとユーノ先生の指示通りに魔法の訓練をしているか？」

「はい師匠！ユーノ先生の言われた通りにやっています！」

ティーンがそう言うのと、ユーノは困ったように頬を掻いた。

「君と僕とで考案した訓練メニューの大半はもう終えてしまつてね。魔法に関しては、この年にしては、出来過ぎているくらいだね。後は、体術くらいかな」

ユーノはそう言葉を濁しながら、体術はどうも苦手だね、と零した。

「その件に関しては問題ない。適任者をこちらで選んだ。君は引き続き、魔法に関しての知識と力の方を頼む」

「わかったよ。それより……」

ユーノはチラリとティーノを見て、一瞬考えるように瞳を揺らす。

「ティーノ」

「はい、なんですかユーノ先生？」

「ごめん、先生はこれから、少しクロノ師匠とお話があるんだ。訓練場で魔法の訓練の続きをしてくるかな？」

ティーノはユーノにそう言われると、瞳を輝かせ頷くと、駆け足で訓練場に向かった。静かになった室内でクロノが口を開く。

「管理局上層部の方で、ティーノの進路について疑問視する声が再燃焼してきた」

ユーノはその言葉に眉を寄せる。

「上の連中は、まだそんなことを考えているんだね……」

「ああ、ティーノをティーノのまま、ジェイル・スカリエツィのレベルまで到達させるための教育方法とやらを、今議論しているよ」

「でもそれは、ティーノの意思じゃない……」

「恐らく、彼らの元にティーノを渡せば、二度と自分の意志で取捨選択をすることが出来なくなってしまうだろう」

「それは……、余りにも……酷すぎる」

「子供はいつだって、大人のエゴに振り回され、走らされる」

暗い雰囲気は二人を包み込むが、何故だか二人の口元は余裕を携えているように、笑っていた。

「でもその解決策はすでにあるんだろ、クロノ？」

「ああ、今の方針で自分の望む道に進んだティーノが、将来管理局に利する人物であると目に見えてわからせる」

訓練場では、空を鋭い音と小さく呼吸をする音がしていた。

「ふっ——はっ——」

その音を出していたのは、ティーノでありティーノは格闘術の訓練をしていた。

拳を振るたびに汗が飛び散り、蹴りを放つと風を生み出す。

その時、訓練場の扉が開く音がした。

だが、ティーノはそれに気が付かない。

「なんだいそれは、点でダメじゃないか」

ティーノはその声が出た方に声を向ける。

すると、扉の前にアルフがいた。

「アルフ！」

ティーノはそう名を呼ぶと、飛行魔法を使いアルフの元まで行くと、首元に抱き着いた。

そして、抱きしめたままアルフの頭を撫でる。

すると、耳元から声が出た。

「あんな格闘術じゃ話にならないよ」

ティーノはどこから声が出たのかわからず、そして初めて聞く声色に少し緊張しながら、辺りを見回す。

だが誰もいない。

自然と、アルフに抱き着く力が増していた。

「男の子だろ？甘えてばかりじゃ、進歩がないよ」

そして、等々ティーノは声の発信源を特定した。

「アルフ……？」

「なんだい？」

狼の口から、人の声が出た。

ティーノはずっとアルフが狼であると信じていた。

そして、狼は人語を話すことは出来ないとも考えていた。

そのため、思考が一瞬フリーズする。

「なんだい、アタシが話すのがそんなに、驚くことなのかい？」

ティーノは、その問いにぎこちなく首を縦に振った。

「そう言えば、この姿も見せたことがなかったね」

アルフはそう言うと、ティーノから距離をとった。

そして、アルフの足元に魔法陣が浮かび上がり茜色がアルフの全身を包み込む。

光が収まると、そこには一人の女性が立っていた。

一見では、年は16歳ほど、髪型はお尻のあたりまで伸びたロングヘアであり、目は勝気な性格を表しているように少し吊り上がっている。

身長も人型になったためか随分と高くなった。

ただし、元が狼なためか犬耳と尻尾は健在であった。

その姿を見たティーノは、信じられないと目を点にし口は半開きだった。

そんなティーノを見たアルフは、腰に手を当てると前かがみになる。

「なんだい、そのだらしない顔は、しゃんとしんないかい」

その言葉にハツとしたティーノは震える声で尋ねた。

「アルフ？」

ティーノの問いにアルフは何を言っているんだと頭に？を浮かべ、良く分からないがために、愛想笑いで答えた。

「ティーノには、アタシが誰に見えているんだい？」

すると、余りにも不安だったのかティーノは人型のアルフの首元に抱き着いた。

「なんだい、だから甘えてばかりじゃいけないって……」

「う……」

ティーノはつま先立ちになりながらも、精一杯にアルフの首を抱きしめる。

まるで、本当にアルフであるのか確かめるように――。

すると、アルフは困ったように頬を搔くと、ティーノを抱き上げいつも狼の姿をしていた時のように、頬をティーノ頭に擦り付ける。

そして、安心したティーノが抱き着く力を弱めると、再び訓練場の扉が開いた。

そこには、ユーノとクロノがいた。

ティーノはアルフに抱き上げられながら、ユーノとクロノの姿を視界に収める。

それに続くようにして、クロノは口を開いた。

「いいかティーノ、補助魔法に並列処理の効率向上などは、いつも通りユーノが、中距離遠距離の戦闘に関しては僕が、そして近接戦に関してはアルフが教育することになった。教えられる時間は僅かだが、その分全力で叩き込んでやる。わかったか？」

そして、クロノ等によるスパルタ訓練の日々が始まった。

スパルタ訓練から一か月、お風呂に仲良く入るティアナとティーノは湯船に肩まで体を入れくつろぐ。

「ティアナ」

「うん？」

「もうお風呂出て良い？」

「あと、100秒数えてからね」

ティーノが律儀に一秒目から数え出したのを見ながら、ティアナはふと思いついたようにティーノに言った。

「そういえばティーノ、言い忘れてたわ」

「3〜2〜……、なにを？」

「明日、私も本局に行くから一緒に行こうか？」

その言葉に、ティーノは身を乗り出す程に喜ぶ。

「本当!? やったーっ！」

「あ、ライン曹長も訓練場に顔を出すって言ってたわよ」

「わかった！」

ティーノはそう言うと、風呂から出て行く。

ティアナに訓練の成果を見て貰えるのが嬉しくて、仕方がなかったのだ。翌日、ティアナとティーノは仲良く手を繋いで本局の廊下を歩いていた。本局についてからティアナの口数がめっきり減ってしまった。

それが不思議だったティーノは、歩きながらティアナの表情を見上げる。その表情はいつもより硬い気がした。

そして、訓練場の前に到着する。

ティアナは、ティーノの手を放す。

「私はこれから、少し仕事を片付けてくるからそれまで訓練場で良い子にしてるのよ。たぶん、リイン曹長も中にいると思うから仲良くね」

「うんー」

そう言つて訓練場に入ろうとするティーノに対し、ティアナは歩み始めた足を止め、再びティーノの傍までよると、目線を合わせるようにしやがみ、ティーノを抱きしめた。

「どうしたの、ティアナ?」

「……なんでもない、頑張りなさい」

ティアナはそれだけ言うと、今度こそ歩みを進めた。

ティーノは良く分からないと、一度首を傾げると、今度こそ扉を開いた。すると、瞬時に感じたことのない寒気に襲われた。

理解できなかつた。

足が竦んでしまった。

ただそれが、一人の人物から放たれていると言うことは理解できた。

「ふむ……、来たか……」

その人物は訓練場の中心で腕を組んで立っていた。

桃色の髪をリボンで一括りにし、その顔はまるで物語に出てくる騎士のように凛々しい、ただ放たれていた空気は、どこまでも冷たい。

出したことのないような汗が背中を伝う。

心臓が早打ち、脳味噌がすぐにテイアナに伝えに行くべきだと告げていた。

だが、その騎士の瞳から逃れることが出来ない。

まるで縫い付けられているように、視線を外すことが出来なかつた。

「あ……う……」

あなたは誰ですか？

どうしてここにいますか？

聞きたいことが次から次へと溢れてくる。

それがまるで洪水のように口から出ようとした瞬間、ティーノは見つけてしまう。

その騎士の隣にバインドで身動きを封じられたラインがいることに――。

リインとティーノの視線が交差する。

ティーノは信じられないといった瞳でリインを見た。

リインは、そんなティーノを見ると叫ぶ。

「きやくやく、悪い騎士さんに捕まってしまったですよ。ひどい事されるですよ」

その叫びを聞いた騎士は、まるで示し合わせていたように顎を持ち上げたリインの首元に剣が収められた鞘を当てる。

「ほう……」

騎士は、まるでリインのことなどどうでも良いように、感嘆の声を上げる。

その視線の先には、怒りに染まったティーノがいた。

「ひどい事するな……」

ティーノがそう言うと、騎士は片眉を上げる。

「するさ、貴様が止めないのであればな……」

「ひどい事するな」

「今この場で、首を落としてやっても良いぞ？」

騎士のその言葉にリインは抗議の声を上げるが途中で口にバインドをされたことで黙らされる。

それを見た瞬間にティーノは行動していた。

「エテルナシグマツ！」

「始めますマイフレンド」

「セットアップ！」

バリアジャケツトを展開したティーノは、右手を相手に向け構え即座にステインガーレイを撃つ。

放たれたのは一発の魔法弾、だが騎士はそれを首を捻ることで回避した。

回避されたのを予測していたティーノは、左手を構えると今度はステインガーレイを高速連射する。

そして、飛行魔法を使い距離を詰めていく。

すると、騎士はぼそりと呟いた。

「レヴァンティン」

「了解」

剣が答えると騎士は炎に包まれた。

構わずにティーノはステインガーレイを放ち続け接近し、リインから距離を離すために蹴りを放った。

すると、炎の中から銀色に光る何かが振り下ろされた。

肉眼では追えない――。

そう感覚で理解したティーノは、バク宙でそれを躲し、リインを抱え上げると訓練場の端に移動しリインを置いた。

「ちよつと、待つててね。大丈夫、僕が守るから——」

瞳が潤んでいるリインに向け、ティーノはそう言う。炎の塊に向け突貫する。

すると、炎が振り払われ中からバリアジャケットを身に纏った騎士が姿を現した。

「はあああああああッ！」

速力の乗った右拳が騎士に振り下ろされる。

騎士はそれを、半身下げ躲すと鞘から剣を抜刀し斬りかかってくる。

回避は不可能、ならばと振り上げていた左拳で殴り弾く。

騎士の方が力が強い、弾いたはずの剣が再度振られようとしていた。

ティーノは崩れた体制のまま、飛行魔法で騎士の頭上に移動し、右腕の銃口を向ける。

「ブレイズキャノン」

エテルナシグマがそう叫ぶと、紅い砲撃が騎士に襲い掛かり炎を伴って爆ぜる。

爆炎が訓練場を包みこんだ隙に、ティーノは一端距離を取り、肺の中から空気を吐き

出した。

深呼吸も出来ない、短く呼吸することも出来ない。

そんな不思議な感覚だった。

苦しくて、痛くて、今すぐにへたり込んでしまいたい。

だが、自分の後ろには守らなければいけない人がいる。

ティーノはその思いだけで拳を構える。

爆炎が収まり、煙が晴れた。

だがそこに騎士はいなかった。

倒したのか？

そう思った瞬間、ティーノはなぜだか腕を頭上でクロスさせた。

世界が歪むほどの衝撃——。

両腕を通じて全身を流れ、それが大地を揺らしている。

そう思えるほどの衝撃がティーノを襲った。

一瞬、すべての空気が肺から押し出されそうになるもそれを我慢し、後ろにいるであ

ろう騎士に向け蹴りを放つ。

だが、それも空振りに終わっていた。

そして軸足だけで立っていたティーノに向け剣は横なぎに振られ、それをプロテク

ションで封じたティーノは大きく吹き飛ばされる。

壁に向け、頭から突っ込んでいくティーノはそれでも右手の銃口を騎士に向けてい

た。

そして、今自分が出る暇すことの出来ない一撃を放つ。

「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト」

エテルナシグマがそう発すると、騎士の全方位にまるで取り囲むかのように、魔力刃が鋭い刃を騎士に向けていた。

ティーノが叫ぶ。

「放てー！」

魔力刃の数は百を超えている。

それが全方位から同時に襲ってくるのだ、回避することは不可能である。

そして、この魔力刃には相手のバリアを抜く効果が付与されている。

まるで罪人を処刑するかのように次々と刃が突き刺さって爆ぜる。

だがそれでも、騎士は無傷でそこに立っていた。

騎士の全身は、淡く紫色に光っていた。

「パンツァーガイスト」

恐らく騎士のデバイスだろう声がティーノには聞こえた。

そう、デバイスの音声が聞こえる位置にまでティーノは肉薄していた。

ティーノは、ステインガーブレイドが防がれることを、予め予想出来ていたため、すでに騎士の懐に入り込んでいた。

騎士が動こうとするが、動くことは出来ない。

「なにッ!？」

なぜなら、吹き飛ばされる瞬間にティーノが設置したバインドに捕らわれているからだ。

初めて騎士の焦る声を聞いたと思うが、関係ない。

ここに全ての準備は整った。

ティーノはリインを守るために、自身の必倒魔法を使う。

その名は――。

「ブレイク」

紅く染まった拳が騎士の腹部に叩きこまれる。

「インパルス!」

そして、ティーノの必倒魔法は、騎士のバリアジャケットの上から内部を直接粉碎した。

ブレイクインパルスにより、騎士の体に浸透した魔力ダメージは、騎士の体を超え床を砕く。

その威力により煙が巻き上がる。

今度こそはと、ティーノは考えた。

当たれば必倒の魔法をぶつけたのだ。

自身の奥の手であり、切り札だった。

それをくらって無事であるとは思えない。

ティーノは、背を向けるとリインの傍に寄りバインドを外していく。

そして、口元のバインドを外すとリインが叫んだ。

「ティーノッ！」

「……中々に楽しめた。見事、と言っておこう」

そこには、所々バリアジャケットが破れた騎士が立っていた。

「褒美だ、よく見ておけ……」

そして、騎士は剣を上段に構える。

剣に炎を纏わせこう言った。

「紫電一閃」

振り下ろされる炎剣を見ながら、そこでティーノは意識を手放した。

目標

紫電一閃を受けたティーノは、叩きつけられるように倒れ伏せた。

その姿を見たティーノの対戦相手をしていたシグナムは、レヴァンティンを軽く振るう。

カートリッジが排莢されるのを確認すると、レヴァンティンを鞘に納め待機モードにし、バリアジャケットを解除した。

「荒削りではあるが、存外悪くは無いな」

シグナムがそう言うと、リインは捕らわれのお姫様の演技を終え、倒れているティーノの傍に寄る。

「あらら……、完全に気絶してますね」

リインは、目をくるくる回しているティーノの頬を楽し気につつく。

そんな様子を見ていたシグナムは、腕組むと言った。

「お前も随分と楽しそうであったな」

片目を睨り意地悪そうに言うとしリインは頬を膨らませる。

「それですよ！シグナム酷いです、リインの首を落とすなんて……」

「なに、冗談だ」

そして、そんな様子をサーチャーを使い別室で見っていたティアナ、ユーノ、はやて、そしてクロノは満足そうにしていた。

「魔力制限をBまでかけてた言うても、ティーノも中々善戦したやん。うん、さすがユーノ君やクロノ君、アルフが教育しただけはあるな♪」

「これで、聖王協会に対してもアピールすることが出来る」

「次はクロノの戦いだね」

「そうは言うがなユーノ……、騎士カリムに見せて聖王協会も将来有望者として期待している、言葉をもらうだけだ。そんなに難しいことじゃない」

「そうかい」

そして笑いあう中、ティアナは勢いよく立ち上がると、三人に向け頭を精一杯下げた。

「よろしくお願いしますー！」

すると、さらに三人は笑顔になった。

「可愛いリインの弟のためやし、お安い御用や♪」

「先生として当然のことをしているだけだよ」

「子供の将来を案じるのは大人として当然だろう。安心すると良い、君とティーノを離れ離れにさせるようなこととはしないさ」

ティアナはそんな三人をみながら、目尻に涙を貯めながら笑う。
「はい、ありがとうございます！」

「う、く……」

本局の医務室にティーノはいた。

純白の布団に包まれながら、時折苦しそうに声を上げ、額には脂汗が浮き上がり、それでも目を覚ますことを拒絶しているかのように、目覚めずにいた。

「シグナムやりすぎですよっ！」

「むっ……、ちゃんと加減はしたのだがな」

医務室のティーノの寝るベッドの隣には、ティーノの顔を覗き込むようにしてリインとシグナムがいた。

二人は医者にティーノを見せ、問題ないことを知るとティーノが目覚めるまで傍を離れずにいようと決めていた。

だが、そのティーノが予想を超えて中々目を覚まさず、そればかりか悪夢を見ているように苦しんでいた。

リインは、即座にシグナムをりつけるが、当のシグナムは、頭に？を浮かべるばかりであった。

すると、病室の自動扉が開きティアナとはやてが入つて来た。

「はやてちゃん、ティアナ！」

「お疲れ様です。主はやて、ティアナお前も」

「うん、二人ともお疲れさまや」

「ありがとうございます。リインさん、シグナムさん」

ティアナがそう言つて頭を下げると、シグナムはティアナの肩を優しく叩いた。

「なに、気にするな。私も久々に楽しい思いが出来た」

すると、リインが心配そうな顔ではやてを呼び、ティーノの様子を伝えた。

「随分と辛そうやね……」

はやては、そう言つて右手をティーノにかざす。

「癒しの風よ……」

優しく暖かな風が吹くと、ティーノの呼吸は落ち着いていた。

「うん、大丈夫やね」

はやてはそう言つと、ティーノの額を優しく撫でた。

その時、ティーノの瞼がゆつくりと持ち上がる。

「あ、あれ……う？」

ティーノが目覚めますと、リインはティーノに抱き着いた。

「ティーノ！」

「うわああッ！」

「心配したですよ！」

リインは、私怒つてます、と頬を膨らませた。

それに対し、ティーノは目を丸くする。

「リイン？」

「はいです！」

「大丈夫だったの……？」

「ティーノが守ってくれたおかげです♪」

リインがそう言うと、今度はティーノが力一杯リインを抱きしめた。

「ぐえっ……」

リインの口から乙女が出してはいけない声が出るが関係が無い。

そこにあることを確かめるように、力任せに抱きしめる。

「もうその辺りで許してやれ」

聞きなれない声が聞こえたティーノが顔を上げるとそこには、あの騎士がいた。

その瞬間、ティーノは言い知れぬ感情が溢れかえるのを理解し、気が付けばバリア

ジャケットを展開し、シグナムとリインの間に入り構えていた。

その突然の行動に皆が驚く中、シグナムはだけは凛々しい表情を変えずにティーノを見つめた。

「どうしてお前がここにいるッ!？」

普段ではありえない言葉遣いにティアナが驚く。

シグナムは考え込むように一瞬瞼を閉じる。

「……貴様の名は？」

「ティーノ……、ティーノ・ランスタード」

「そうか……、私の名は、シグナムと言う。ティーノ、お前は弱いな」

ティーノはその言葉にカツとなり顔が赤くなる。

「うるさいッ！次こそは負けない!!」

「戦いに二度目は無い——」

シグナムのその言葉に、ティーノは何かを叫ぼうとするが言葉が口から出てこず、悔しそうに唇を噛んだ。

俯くティーノの頭にシグナムがその大きな手を乗せると、慣れてないのか乱雑に一撫でた。

「だから強くなれティーノ・ランスタード、他者からも自分からも、すべての害悪から大切な者を守るようになるために、強く」

シグナムはそれだけを言うと、病室を後にした。

「ふふ、もうシグナムも不器用やな〜」

「ま、待ですよ！」

ラインもはやても、ティアナやティーノになにも言わずにシグナムについて行った。

それは、ティーノを気遣ったことだった。

「くっ……ぐっ……うう……」

ティーノは俯いたまま、涙を流していた。

ただ、今までのように泣き叫んだりしない。

悔しくて情けなくて恥ずかしくて、だから泣いているのだ。

その涙は、男として成長した証でもあった。

「ティーノ……」

だが、ティアナに抱きしめられた時に、その我慢も終わる。

ティーノはティアナの胸の中で静かに泣き叫んだ。

泣き止んだティーノの頭を撫でながら、ティアナは問いかける。

「ティーノ、もう魔法の戦う練習止める？」

ティアナは問うた。

もつと、別の道もある。

なにも痛くて怖い道に進む必要もない。

なにかあれば守ってあげるから、好きな事を勉強すればいいと――。

だが、ティーノは折れなかった。

「僕、もつと強くなる……」

「強くなつて、どうしたいの?」

ティーノはその問いかけに、ティアナの目を真つすぐに見つめ言った。

「最低でも大切な女の子を守るくらいには、絶対に強くなる!」

その言葉に胸がキュンとしたティアナは嬉しくてティーノを強く抱きしめた。

ただし、こうも思った。

将来、この子は女たらしになつてしまふのじゃないか、と――。

なるべき目標を見つけたその日から、ティーノはさらに訓練に磨きをかけていった。

そんなある日のこと、ティーノがいつも通り訓練を終えティアナが来るまで無限書庫で古代ベルカ式の魔法について勉強しながら時間を潰していると、そこにティアナではなく、なのはがやってきた。

「ティーノ」

ほんわかした声を出しながら、フワフワと無重力空間を泳いできたなのは、ティーノの目の前に行くと、人差し指を上に向けこう言った。

「ねえティーノ、皆で旅行行く？」

「いえ、訓練がありますので結構です」

「あれま……」

高町親子はここ最近、ヴィヴィオの学期末試験や、管理局での仕事でティーノに会うことが出来なかった。

そのため、ティーノの雰囲気や言葉遣いが大人びたものになっていることに驚いた。だが、そこは高町なのである。

諦めない、挫けない、やって見せる——。

「ねえ、ティーノ一緒に旅行に——」

「結構で——、がはっ……」

なのはは、ニコニコ笑いながら、ティーノの首に手刀を落とし気絶させていた。

そしてバインドでティーノを簀巻にすると、引き吊りながらフワフワと無限書庫を泳いでいく。

「ユーノ君、ティーノ借りてくね」

「うん、話はティアナから聞いてるから、わかってるよ。なのはは」

ユーノとその語少し話をする、最後にウインクしながらなのはは言った。

「今度は、二人で旅行に行こうね♪」

なのは、そう言うと、バイバライ、と泳いで行ってしまった。
取り残されたユーノは考える。

「二人で……、うくん……、ヴィヴィオがいるし三人の間違いかな？」

なのはアタックすれば、それは躲され、ユーノがアタックすればそれは天然バリ
アアで防がれる。

この二人、仲は良いが男女の関係になるにはもう少し、大人にならなければいけない
ようであつた。

良い匂いがする——。

この匂いは、とても大切な人の匂い、ティアナの匂いだ——。

ティーノはゆつくりと瞼を開く。

すると、そこは見知らぬ世界であつた。

風が花の香りを運び、空が透き通り、大地には緑が溢れている。

鳥がさえずり、兎が飛び跳ね、鹿が駆けていた。

人の手が入っていないのに、まるで人が作ったような美しさに言葉を失う。

「おはようティーノ」

ティアナはそう言うと、微笑みかけてきた。

ティーンはティアナに抱かれているようだった。

「災難だったねティーン、痛くない？」

近くにいたスバルがそう言うのと、ティーンの首を撫でた。

「……？」

「ここは無人数世界カルナージ、ここに住んでる私達の友達の家にしの間、お世話になるからね」

ティーンが周囲を見回すとかなり立派な家の庭先にすることが分かった。

一体全体何がどうなっているのか。

混乱している頭をどうにかしようとしていた時、どこか聞き覚えのある声があった。

「初めまして……、そして我が家へようこそティーン・ランスター君」

ティーンはその声の先に目を向けると、一瞬目の前をノイズが走り、見たこともない

女の子と声をかけてきた人が重なったような気がした。

だがそれは一瞬で、気持ち悪さもすぐに無くなる。

「私の名前は、ルーテシア・アルピーノ……よろしくね♪」

そう言ってウインクするルーテシアを見ながらティーンは理解した。

先ほどの気持ち悪さの原因を。

きつと、この女は——。

メンドクサイ——。

二度目の敗北

紫色の長い髪、どこか悪戯娘を思わせる瞳、ルーテシア・アルピーノとティーノ・ランスターは黙ったまま見つめあっていた。

そこに会話は無く、二人共ただ瞳を離すことが出来ずにいた。

すると、ルーテシアはなにかに折り合いをつけたかのように頷くと、手を差し出してきた。

「……」

その手を見つめていたティーノも普段人見知りしていたとは思えない様子で自然とその手を取った。

そして二人は歩き出す。

その二人に並んでティアナとスバルも歩き出す。

影が長く並んでいた。

モミモミと、本当にそんな音がしているのではないかと言う勢いで、ティーノの小さな手はルーテシアの手に遊ばれていた。

「……なんですか？」

ジト目で見上げれば、ルーテシアはなんてことないように笑う。

「ううん、別になんでもないよ。ただ、ティーノ君の手は温かいなって」

「別にそうでもないですよ……」

「ええ、温かいよ！」

ルーテシアはそう言うのと、ティーノの首筋を撫でた。

「ひゃいつ！」

「あ……、アハハハハハヒヒ……」

「わ、笑うな！」

ティーノが顔を赤くして怒ると、ルーテシアはごめんごめんと言いながら、頭を撫でてくる。

だがその顔は、自然な笑顔で邪気がなかった。

ティーノ達が玄関につき、家の中に入るとルーテシアを大きくしたような女性がい

た。

「初めましてティーノ君、私はメガーヌ・アルピーノ、ルーテシアの母親よ」

「はい、よろしく願います」

ティーノはそう言って頭を下げる。

「まあ、偉いわね」

メガーヌはそう言うと、ティーノの頭を撫でた。

その撫で方は、どこかティアナと似ていてティーノは自然と幸せな笑顔になってしま
う。

そしてその様子を皆に見られてしまい、赤くなるのだった。

「あつ、来た来た！」

その声が聞こえそちらに顔を向けると、そこにはなのは、フェイトに見知らぬ少年と少女がいた。

二人の顔をティーノが見つめると、二人が自己紹介してくる。

「エリオ・モンディアルです。よろしく」

「キャロ・ル・ルシエと飛竜のフレードです」

「キユクル」

ティーノは丁寧な二人にならない慌てて頭を下げた。

「ティーノ・ランスターです」

「うん、よろしくね」

挨拶が終わると、なのはとフェイトが近づいてくる。

「もう、お寝坊さんなんだから」

「な、なのは……」

なのはがティーノにそう言うと、ティーノはそつぽを向き頬を膨らませた。

あんな事をされたのだから、当たり前である。

だがなのはは、悪びれもせずにティーノの頬を引つ張る。

「あはは変な顔〜」

「ういゝむ〜!」

なのはのそんな様子を見て、エリオとキャロは驚く。

そして、ティーノはやはりこの人は、ヴィヴィオの母親で間違いないと、心に刻んだ。

すると、メガーヌが手をパンと打ち鳴らした。

「それじゃあ、子供達が帰ってくる前にお昼の用意を始めましょうか」

その言葉にそれぞれが手早く行動を起こしていく。

ティアナが動き出そうとしたとき、ティーノはティアナの服を掴む。

「僕は、少し訓練の続きをしてくるね?」

そう言われると、ティアナは困ったと眉をハの字にした。

そしてしやがみ込み目線を合わせる。

「あまり遠くに行っちゃだめよ?」

「はい」

「危ないこともしたらダメ」

「はい」

「お昼ご飯の前には戻ってくるよ」と

「わかってるよ」

そしてティーノは、一人庭先に出て行つた。

そんな様子を見ていたなのは、指をくるりと回すとホログラムが浮き上がり、そこには草原に立つティーノの姿があつた。

「これで安心だね」

そう言つて笑うなのはティアナは感謝する。

そして準備を進めている大人組も、準備をしながら興味深げにその様子を見ていた。バリアジャケット姿のティーノは風舞う草原で瞳を閉じながら呟いた。

「封時結界」

外界と内界の時間が歪み、時を変える。

景色が変わり色あせていた景色から色素が抜け落ちていく。
昼が夕方へそして黄昏時が訪れた。

「エテルナシグマ、お願い……」

「わかりましたマイフレンド」

イメージするのは、炎——。

どこまでも続く劫火の軌跡――。

邪魔する物は無く、止まる術を知らず、己の内と外から光を集める。

魔力の塊を右手の銃口にセット、イメージを形にするための術式を魔法陣として眼前に固定、必要枚数計八枚、直線状に固定。

ティーノのリンカーコアから抽出された魔力と外部の微かな残存魔力が混ざり合っ
ていく。

チリチリと大気を焦がし、バリアジャケットの上からでも焼かれてしまいそうな熱量。

魔力が固まりきったその先に出来上がっていたのは小さな太陽。

向ける相手は彼の騎士、自身が越えなければならぬ壁、接近戦では勝てない。

ならば、アウトレンジならばと、エテルナシグマと相談し、普段から見ている高町なのはの教導映像録を参考にし作り出した魔法。

奴を倒すには、これぐらいしなければならぬ。

だから、その魔法名を口ずさむ。

「ブレイズ・イレイザー」

「結界魔法なんて使えたんだ！」

なのはは、いきなりサーチャーが機能しなくなったのを見て瞬時にそれが結界魔法で

あると気づいた。

なのはは、すごいすごいとはしゃぐ。

その時、まるで獅子が咆哮しているような音と共に結界が内部から砕け散る。

なにごとかと皆が映像を見れば、紅い魔力弾が空間を歪めながら彼方へと放たれていった。

相当な熱量だったのだろう。

魔力弾の後には無くなった空気を空間が取り戻すために、景色を歪めていた。

何故そんな高威力な魔法を努力をし会得しているのかは、皆が知っている。

だからこそ、皆が哀憫の念を抱いた。

昼食の準備が整うと、川遊びをしていたヴィヴィオやコロナ、リオ、そしてアインハルト・ストラトスは付き添いのノーヴェに連れられて来た。

「皆々お昼の準備が出来たわよ〜」

その声に子供達は歓声を上げて席についていく。

席に座り終えたヴィヴィオがキョロキョロ誰かを探していると、隣に座るアインハルトが不思議そうに聞いた。

「あの、ヴィヴィオさん」

「はい！なんですか？」

「どなたか、探していらつしやるんですか？」

すると、コロナとリオがニヤニヤとした。

「ヴィヴィオは弟君を探しているんだよね〜」

「お姉ちゃんだもんね？」

そのからかいにヴィヴィオは頬を僅かに赤くさせた。

「もう、からかわないでよ〜」

アインハルトは、この旅行の行ききの船の中でティアナに抱かれていた子供のことだとすぐに目星を立てたが、高町家に呼ばれたときに、弟の姿がなかったことから一人不思議そうにしていた。

すると、ティアナが徐に立ち上がる。

そして席についていた皆が視線をそちらに向けると、一人の男の子が歩いてきた。

「あっ……」

その姿は、確かに幼い。

身長もヴィヴィオ達よりも低く、年齢もそうなのだろう。

だが、漂う雰囲気は違っていた。

その空気は、アインハルトの中に眠る。

古代ベルカの王——、覇王の良く知る空気であった。

「こらティーノ、遅いわよ」

ティアナにそう怒られたティーノは、先ほどまでの空気を嘘のように消し去りシユンとした。

「ごめんなさい……」

「もう……」

ティアナはそう言うのと、腰に当てていた手をティーノに差し出した。

その手を見たティーノは笑顔になり、小さな手でつかむ。

二人が席につくと、メガータが皆を代表して感謝の意を伝えた。

「今日の良き日に感謝を込めて……」

「「「「いただきますー！」」」」

皆が用意された料理の数々に舌鼓を打つなか、ティーノも例にもれず串刺しにされたバーベキュウの肉を食べている。

そして時折ソースで汚れた口回りをティアナに拭かれていた。

一本目の串を食べ終わろうとしたとき、ルーテシアが別の串を何気なく渡す。

「はい、どうぞで」

「ありがとう」

ティーノはなにも考えずにそれを口に入れた。

その瞬間、野菜特有の生臭さ、歯応えのない食感、口が受け付けないと叫ぶ程の衝動をティーノを襲った。

恐る恐る自身が口に入れた物を見ると、そこにはニンジンのみが刺さった串があった。

「あ………かつ………」

なにを食べさせられたのか、脂汗を滲ませながら顔を上げると、そこには聖母の如き微笑みを携えたルーテシアがいた。

「おいしいでしょ？裏庭の畑で今採ってきたの、産地直送よ？」

「——ッ！」

ティーノが何かを叫ぼうとした時、小さな口に人差し指が当てられる。

「強い男の子になるんでしょ？」

そう言われてしまえば、何も言い返すことは出来ない。

でも食べたくない。

ティーノの瞳に涙が溜まり出した時、手に持っていた串を強引に奪い取られた。

一瞬体をビクつとさせたティーノがそちらを向くと、そこにはスバルに似た赤毛の女の子が立っていた。

「無理して食うもんじゃねえよ、ほれ………」

その女の人は、そう言うともう片方の手に持っていた串をティーノに手渡した。それは、普通のバーベキュー串だった。

「あ、ありがとう」

ティーノが感謝を伝えると、その女の人は何とも言えない表情を作った。

「この人はね、ノーヴェ・ナカジマ、私の妹だよ」

スバルはノーヴェの後ろから顔を覗かせるとそう言った。

「ノーヴェ？」

そう名前を呼ばれた時、ノーヴェは一瞬感覚が鈍ったような気がした。

その瞳、その輪郭、その声、いくら幼くなろうとも、いくら雰囲気が変わろうとも、いくら別人になろうとも、ノーヴェ達、元ナンバーズからしてみれば生みの親であり、絶対的な人物。

でも、だからこそ――。

世界からなんと言われても、被害者と加害者と言う壁を作られても――。
言いたいことがあった。

ノーヴェは膝を付き、目線をティーノに合わせる。

そしてキョトンとしているティーノの瞳を見つめ笑った。

「あたしは、元気にやってるよ」

それだけを言いたかった、ティーノには無い。

ティーノの遙か奥に眠る人物にそう言った。

自己満足に付き合わせてしまった。

ノーヴェはそう思いながら、一瞬目を伏せると、再びティーノを見た。

「えっ……」

そして驚いた。

なぜなら、ティーノの瞳から静かにただ確かに、涙が流れていたからだ。

「あれ、僕……なんで……?」

止めようと拭つても、涙は一向に止まる気配を見せない。

「ティーノ……」

声がかかった方を向けばそこにはヴィヴィオがいた。

「よかったね」

ヴィヴィオに言われてティーノは気が付いた。

嬉しいのだと、今自分は感動しているのだと――。

「うん……うん!」

食事を終えた各々は、それぞれ時間を使っていた。

大人組は陸戦場に、子供組はルーテシア、リオ、コロナは図書室に、ヴィヴィオとアインハルトは散歩に、そしてティーノは大人組の訓練を見学していた。

ティーノが凝視していたのは、エリオの姿であった。

エリオのデバイスは槍であり、その動作はまるで稲妻のように早く、まともに目で追うことは出来ない。

それでも、必死にくらいつく。

何故か、それはエリオが仮想敵と置いている人物が、自分と同じだと感じたからだ。

聴覚も触覚も嗅覚も遮断し、すべてを視力に費やす。

それでも追えないモノは魔力を使い補う。

一つたりとも見逃さないように、集中して――。

ノーヴェになのは達の模擬戦を見学しないかと、ススメられたヴィヴィオ達子供組は、そんなティーノの姿を見つけた。

いくら声をかけても気づかないティーノに痺れを切らしたヴィヴィオは、走り出すとティーノの背中に抱き着いた。

「お姉ちゃんを無視するとは、良い度胸してるじゃないの〜〜」

「や、やめ……やめて……くすぐらないで」

ティーノの弱いところを熟知しているヴィヴィオは、ティーノの静止を無視し、くす

ぐり刑に処す。

「あつ、やあ……」

だが、ヴィヴィオに色々なところを触られているティーノから変な声が出てくる。

そんな声を出した事に驚いたティーノは両手で口を塞ぐが、その隙間から淫らな音が漏れ出す。

そんな光景を見ていた子供組は、顔を真っ赤にし、大人組は微笑まし気に見守るのだった。

「それじやいい写真も撮れたことだし、スターズは模擬戦を始めようか!」

「はい!」

「なのはさん、後でクロスミラージュにデータ送って下さいね!」

スバルとティアナがなのはと共に行く、フェイトがキャロとエリオを誘った。

だが、それにティーノは待ったをかけた。

「エリオさん、僕とお願ひします!」

ティーノの瞳が真剣なモノであること、そして夕ご飯前に見た魔法の腕、どれだけの物なのか試してみたかった。

そう考えたエリオはフェイトに目配せすると、フェイトは不安げに頷いた。

「わかった。僕で良ければ相手になるよ!」

突然模擬戦をしようとティーンが言い出したためであろう。

気が付けば、皆がティーンとエリオの模擬戦を見に集まっていた。

「準備は良いかいティーン?」

「はい、いつでも……」

お互いにバリアジャケツトを纏っている。

周囲にはなにかあった時に対処してくれると信頼のおけるフェイトさんなのはさん、スバルさんにティアナさんがいる。

ケガをしても、キャロにルーテシアがいる。

槍を扱うスピードタイプの騎士との闘い方を学んでくれれば、それでいいかな。

エリオは様々なことを考える。

仮にも騎士を名乗っている。

そして、自分は犯罪者を相手にすることもあるし、なによりJS事件で戦い抜いたと
言う思いがある。

手解きをするくらいで良いかな?

そう考えながら槍を構えた。

ティーンを見る。

両拳を握りしめ、だらりと下げている。

その自然な立ち姿は、どこかで見た覚えがあった。

どこだったか……？

その時、フエイトがゴングを鳴らした。

「はじめ！」

そしてそれは唐突に聞こえた。

「ブリッツアクション」

ティーノのデバイス、エテルナシグマから発せられた音声、それが聞こえたと同時に、そこにティーノの姿はなかった。

「!!」

エリオは瞬時に自身のデバイスであるストラダを体を回転させ威力を乗せながら縦薙ぎに振るう。

ストラダの切先、それが振り切られる前にティーノの拳とぶつかりあった。

ティーノは止まらない。

着地すると同時に、エリオの胴体に左拳を振り抜く。

エリオはそれを体を回転させ躲すと、ストラダを手の中で一回転させ叩きつけるように振るう。

ティーノはそれをバリアを張り防ぐと、ブリッツアクションを起動、さらにエリオの

死角に回り込み、拳を振り抜く。

それをバリアで防ごうとしたエリオだが直ぐに気が付いた。

己が盾が罅割れ砕け散るのを……。

「バリアブレイク」

砕け散ったバリアと共に、ストラダーも弾かれ握っていた両手と共に吹き上がる。

から空きの胴体に魔法陣を展開していたティーノは、左拳を突き付けた。

「ブレイズキャノン」

ブレイズキャノンをもろに受けたエリオは、陸戦場に用意されている仮想ビルに吹き

飛ばされ、盛大に砂埃を巻き上げた。

だが次の瞬間には、ティーノの眼前に銀色の何かが存在していた。

ティーノはそれを拳で逸らすと、蹴りを放つ。

それと並行してステインガーブレイドを頭上から四本放ち眼前に落としていく。

だが、死角と言う死角から次から次へと突きを放たれていく。

それを多種多様な魔法で退ける。

エリオがスナイパーライフルとするならば、ティーノはサブマシンガンといったところか。

ろか。

二人の戦いを見ている者達は、いつの間にか魅せられていた。

だが、それも唐突に終わる。

「ストラーダ！」

距離を置いたエリオが叫ぶ。

「ウンヴェツターフォルム」

ストラーダの形状が噴射口と石突から金色の突起物が出た形状に変わる。

なにか来る。

そう感じたティーノが構える。

「ソニックムーヴ」

ストラーダがそう言うと、同時にティーノの眼前からエリオは消えていた。

エテルナシグマのサーチからすら逃れるほどのスピード、だが自分に覆いかぶさる影から位置を割り出したティーノは即座に銃口を空に向けスティングレーを我武者羅に放ち続ける。

そこには、雷があった。

槍の先端からエリオの体を覆い尽くす程の電気が、ティーノに振り下ろされる。

「サンダーレイジ！」

それが直撃する瞬間にティーノは思った。

また、負けてしまったと……。

温泉

迫りくる炎――。

猛雷――。

振り下ろされた刃――。

流れる血潮――。

別け隔つ河川――。

紅い、どこまでも紅い川を挟んで、僕は私と会った。

「君と会うのも、これで何度目かね？」

私は僕に言った。

「数えてないからわからない」

僕は答えた。

「それもそうだね」

私はそう言って、僕から目を逸らした。

「どうしたの？」

僕がそう言うのと、私は不敵な笑みを作った。

「ありがとう」

僕は礼を言われる覚えがないので首を傾げた。

「嫌、何でもない忘れてくれて構わないよ」

その時、僕は意識が落ちていくのを感じた。

「もう時間だね。また、会おう」

その言葉を最後に僕は私と別れた。

「う〜ん……」

「お、目が覚めたか？」

「ノーヴェさん？」

ティーノはノーヴェに膝枕をされた状態で目を覚ました。

「ティーノも中々良い、腕をしてるじゃないか」

ノーヴェにそう言われ、悪い気はしなかったがティーノはカラ返事を返して起き上がる。

「皆は……っ？」

「ヴィヴィオとアインハルトは、ティーノとエリオの模擬戦に触発されてどこかに行っちゃったよ。他の連中は、ほらあそこだ」

ノーヴェが顎で指し示す先には、なのは達の訓練風景を見ているコロナ、リオ、ルーシアの姿があった。

その姿を見て、どこか安心したのか。

ティーノはぺたんと地面に座り込んだ。

「……負けちまったな」

「うん……」

「悔しいか？」

「悔しい……」

ティーノがそう言つて三角座りをすると、その頭をノーヴェはくしゃくしゃと乱暴に撫でた。

「頑張れ、男の子——」

ノーヴェに言われると、何故だか知らないが途轍もなく恥ずかしくなった。

負けてしまう姿、情けない姿を見られたくないと思つてしまった。

「うん、頑張る！」

だから、もっと頑張ろうと、そう思った。

大人組の訓練が終わり、皆でお風呂に入ることになった。

エリオは男の子と言うことで、メガーヌさんの晩御飯の手伝いをして女組の後に入ることになった。

「あ、あの！」

「どうしたんですか、アインハルトさん？」

脱衣所で皆がワイワイとする中、アインハルトは頬を赤に染めモジモジとしていた。

中々服を脱がないアインハルトと違い、ヴィヴィオはさっさと服を脱いでいく。

「テイ、ティーノ君も一緒に入るのですか？」

そう聞かれたヴィヴィオは頭に？を浮かべた。

「そうですよ？」

アインハルトは、今日この頃中々に驚かされることばかりであったため、慣れてきていると言っても、花も恥じらう乙女である。

いくら年下と言っても男子の前で裸体になるのは恥じらわれた。

「ティーノのことなら大丈夫ですよ？」

突然ヴィヴィオはそう言った。

「ティーノは男である前に弟ですから！」

その自信たっぷりの言葉は良く分からないが、汗をかいて肌に張り付いた服は早く脱いで体を洗いたい。

そう葛藤していると、どこからか悲鳴が聞こえてきた。

「ほらほら、どんどん脱いじやおうね」

「ふわつ、ルーテシア止めて！一人で脱げるから！」

「うわつ、筋肉ついてきてるね！男の子だね」

「くすぐったいから、お腹を触らないで！」

脱衣所の別の場所から、男の子の叫び声が聞こえてくる。

その声を聞いたアインハルトは、ヴィヴィオの言ってる意味を感覚で理解し、さっさと服を脱いだ。

アルピーノ家のお風呂は、どこその旅館よりも凄かった。

源泉かけ流しのお風呂に、健康や美容で割り振られた大小様々な湯船があった。

湯気の先に広がるそんな光景を見た子供達は、大はしやぎで走り出す。

幻想的なまでの風景。

まるで霧の様な湯気の先に見える露天風呂の数々に子供達は歓声を上げる。

「私、いっちょば〜ん！」

リオがそう言いながら、一番熱いとルーテシアに説明された湯船に向かいダイブした。

「もうリオつたら〜〜！」

その後コロナ達が続く。

広く数ある温泉の中でアインハルトは、比較的入りやすい温度の露天風呂に体を滑り込ませた。

湯船に肩までつかると、全身の強張った筋肉が解れていくのが分かる。

「ふう〜〜〜……」

そう声を漏らしてから、アインハルトが周囲を見回すと、大人組が来てないことに気が付いた。

そして入り口から何やらガヤガヤとした音が聞こえそちらに顔を向けると、そこには大人組の中心でティアナに抱かれたティーノがいた。

「……っー」

アインハルトだけでは無い、先に湯船に浸かっていた子供組は一瞬、頬が紅潮したのを自覚した。

そこにはバスタオルに体を包まれたティーノがいた。

タオルが纏われた事により、男なのかと疑問に思うほどの曲線美に、粉雪のように白く透き通った肌が覗き、紫色の髪が白い肌と合わせり墮天使の如き二律背反を体現している。

紅くなった頬は子供特有の丸みを帯び、大きな瞳は微かに潤み湖の乙女を思わせる。

悪魔染みたる種の美しさに、皆が声を無くした。

「いい加減に機嫌を直しなさい」

困ったように言うのはティーノを抱くティアナだった。

「ティーノはやっぱり、可愛いね〜」

そう言いながら、ティーノの頬をつつくスバルにティーノは僅かに身を振る。

その光景がよほど良かったのか、なのはカメラを構えていた。

そしてその姿を見たフエイトから、電光石火の如き速さでカメラを奪われ涙目になるのは。

そんな姿を見て、恥ずかしいやら情けないやら複雑な感情になるノーヴェ。

それぞれがそれぞれ、思うところはあがるがそれでも皆、温泉に浸かってしまえばそんな粗末なことは忘れてしまう。

「わあ、スバルまた大きくなつた!？」

なのはそう言うと、寛いでいたスバルの胸を指さした。

「えへへへ、そうですか?」

そして、スバルは照れたように頬を赤くし、その様子を見ていたキャロは己の胸を触り気落ちした。

「気持ちいいね」

肩まで温泉に浸かるティーンがそう言えば、ティアナは笑い相槌を打った。

すると、フェイトがティーン達の傍まで来ると、ティアナから離れようとしないうティーンをちよんちよんと叩いた。

「ほら、皆のところに行っておいで」

フェイトが指さす先にはヴィヴィオ達がいた。

ヴィヴィオがそれに気が付くと、ティーンに向け来い来いと手を振る。

「う〜〜〜……」

だが、ティーンは動こうとはしなかった。

なんて言っただって、そこにはヴィヴィオがいるのだ。

行けば何をされるか分かったものじゃない。

だが、さらなる天敵はすぐそこにいた。

「えい♪」

「はうあつ！」

大人組に交じっていたルーテシアに突然温泉の湯をかけられたのだ。

「うわっぷー！」

「ほらほら、皆と仲良くしない悪い子にはお姉さんが、お仕置きしちゃうぞ〜」

さらに湯を掬い出すルーテシアの姿を見たティーンは、脱衣所で強引にすっぽんぽん

にされたのを思い出し、慌てて逃げ出した。

もちろん、ヴィヴィオ達がいる湯船とは別のところに――。

「あつこら、逃げるな！」

そんな姿を見たヴィヴィオがティーノを追いかけだす。

ティーノは魔法を使って逃げようとはしない。

こういった場で魔法を使うことをティアナに注意されているからだ。

だから、自力での逃走となるわけだが、そこは普段から走り込みをやっているヴィヴィオである。

たやすくティーノを捕まえると、文字通り抱き上げアインハルト達がいる湯船に向け放り投げた。

「ひゃああああああゝゝゝ！」

叫び声を上げながら、湯船に落とされたティーノが慌てて顔を出す。

すると、右が紫で左が青の虹彩異色の瞳と目があった。

一度目をパチクリさせたアインハルトは、慌てて体を隠すように両手で抱きしめる。

その動作や恥じらうような態度、紛れもなくそれはティーノを一人の男として認識している証である。

ティーノはそれが堪らなく嬉しかった。

男と見て貰えるのが嬉しかった。

だから、ついつい言ってしまった。

「あの……綺麗な瞳だね！」

「!!!」

その純真無垢な笑顔でそう言われたアインハルトは溜まらず顔を桜色に染めてしまった。

無口になり下を向くアインハルト、それを不思議そうに見ていたティーンノの後ろには修羅がいた。

「ティーンノ……」

その声を聞いた瞬間、ティーンノの体は一瞬飛び跳ねる。

「なに、アインハルトさんを口説いてるかああああ！」

「や、止めて……そんな所、触らないで……」

ヴィヴィオはティーンノに飛び掛かると、ティーンノの体のあちこちを触り始めた。

また始まったと頬を赤らめる子供達に、スバルが声をかける。

「あれ、セクハラしてるように見えるでしょ？」

「「うんうん」」

子供達は勢いよく首を振る。

「実はアレね、マツサージをしてるんだよ?」

「へっ?」

確かに良く見てみれば、微かにヴィヴィオの手から魔力が出ており、触っている部分も体の状態を確かめるのに必要な個所であることはヴィヴィオと同じくストライク・アーツを習う子供達は理解した。

「でも、なんでそんなことを?」

コロナが疑問に思い口にする。

「うくん、それはね」

スバルが口にしようとすると、それを聞きつけた大人組も参加してきた。

「それ、私達も聞いて良い?」

ルーテシアがヴィヴィオ達を見ながら、そう言うのとヴィヴィオは抗議の声を上げようとした。

「まあ、良いじゃない。なんど聞いても嬉しいことなんだから」

だが、なのはにそう言われてしまえば黙るしかない。

そして気を見計らったスバルが語り出す。

「そう、あれは私達がティーノと出会ってから間もない頃——」

それは、一人の少女と少年の出会いの話——。

過去の傷と向かい合い、それでもその小さな背中に光を見た。
そんなお話——。

その日

透き通るような晴天――。

見渡す限りの喧騒――。

太陽が照らす先には、街の息吹――。

ミッドチルダ首都クラナガンのビル群の中をティアナとジェイルは歩いていった。

ティアナは、道路を走る車の音と、歩道を歩く人の音にかき消されそうな存在を片目で見る。

その存在は確かに、ティアナの二歩後ろをついてきていた。

正確には、縋っていた。

誰も知らない世界で、なにをすれば良いか分からなくて、それでも怖い目をした大人が自分になにもしてこない人なのだと、疑心暗鬼でありながらも、生へと執着していた。

子供の姿をとってはいるが、紛れもないジェイル・スカリエツティが自身の後方を歩いている。

ある種の恐怖が背中を撫でていくのを理解していたティアナは、いつでもなにか起きても良いように、デバイスであるクロスミラージュをポケットの中で握りしめていた。

何故、あのようなことを言ってしまったのだろうか……。

それは、突拍子もない事。

ジェイルの保護責任者になると言う申し出と届け出……。

四年前の自分から、気でも狂ったかと問いかけられているようだ。

それでも何故か放っては置けなかった。

心の中で誰かが叫んだのだ。

こうしろ、と――。

それにと、ティアナは思う。

やってしまつて、決めてしまったものは仕方がない。

多少窮屈な生活にはなるが、それも選んだ自分の未来だ。

だから、やれるだけやってみよう。

そう思い、ティアナはジェイルに振り返った。

「――ッ！」

突然ティアナが振り返ったことにより、ジェイルは驚き体を大きく跳ねあがらせた。

彼は、ずっとこんな調子であった。

ただ一つ言えることがある。

それは、怯えながらも彼が人の目を見つめているということだ。

一瞬、その動作が昔馴染みのアイツに見えて、だからだろうか。

私は、どこことなくコイツは無害な人間なのだ、そう思った。

「良い？」

ティアナがそう言いながら目線を合わせると、ジェイルはまるでガードでもするかのように両腕を顔の前で交差させた。

「はあ……、一応、これからアンタと私は同じ屋根の下で生活することになったのだけど、一つ言っておくわ。私は、子育ての経験なんて一切無いし、仕事で毎日が忙しくてアンタに構ってやってる暇なんて無い。それでも、アンタは私の庇護下において面倒を見ると言った以上はアンタの面倒を見なければならぬ。だから、その手の先輩に今からどうすれば良いのか、教えてもらいにいくことになるわ。くれぐれも、変な事はしないでね」

ジェイルは、瞳に涙をためながら、懸命に頷いた。

「はあ……」

この先が思いやられる——。

そう思いながらも、ティアナはその人物との待ち合わせ場所に向け歩き出す。

ジェイルの小さな手を握りながら——。

やって来たのは、デパート内にあるカフェ、店内の小さなテーブルにその人物はいた。「久しぶりティアナ、その子が例の?」

「はい、その通りですなのはさん」

ティアナの全身を収めていた視線を左手にずらしていき、視線を下げればそこには確かに子供の姿となったジェイル・スカリエツィがいた。

なのはの脳裏に四年前の出来事が昨日のように思い出される。

レリックの事、ゆりかごの事、ヴィヴィオの事……。

初めて肌に触れた狂気、打ち勝つために手にした想い、奪われないように我武者羅に戦った。

想い出の中の自分が、ジェイル・スカリエツィに抱いていたもの、それは純粋な恐怖——。

それが、鎌首を擡げて首筋を撫でたような感覚が全身を埋め尽くす。

その力が集約したかのような色合いの瞳で、なのははジェイルを見ていた。

視線が交差していたはずなのに、どこか臆気で、輪郭がぼやけて見える。

奥歯がガチリと音を立てたのを聞いて、なのはは正気に戻った。

すると、眼前には今にも泣き叫びそうなジェイルの姿があった。

その瞬間、ぼやけていた輪郭が定まり聖王のゆりかご内部で戦ったヴィヴィオの泣き

顔と重なった。

二度と見たくない表情がそこにはあった。

「あ……」

言葉がうまく出てこない、どうしたものかと並列思考を重ねていく脳は考えていく。だが、体が言うことを聞いてくれない。

内部がだめなら、外部から……、まるで示し合わせていたようにティアナが口を開いた。

「なのはさん？」

「え、つと……はは、ごめんねティアナ。君もごめんね？ささ、座って座ってー！」

ティアナとジェイルが座ると、なのははコーヒートオレンジジュースを頼んだ。

「本当に、この子は彼なの……？」

ティアナはなのはに事情を説明し、これからの事を話した。

それに対し、なのはは問いかける。

本当にジェイル・スカリエツィなのかと――。

「はい、未だに信じられませんが、それが本局で行った検査の結果です」

「……」

「なのはさん……？」

「その子の世話をすると言うのは並大抵な覚悟じゃ、出来ることじゃないよ？」

「はいわかっていきます。自分がどれだけ、愚かな選択をしたのかも、もつと良い手があったかもしれない。それでも、私は選びました。そうしないといけないう気がしたんです。

……見捨てられない」

ティアナの話を聞き終わったのは、一つ頷くと席をたつた。

「それじゃ、子育ての先輩として色々教えるよティアナ！」

そこからなのはとティアナは子供を世話するのに必要な物を買って漁り出した。

女の買い物は長い、ましてやそれが子供関連となるとさらに拍車がかかる。

気が付けばジエイルはぐったりしていた。

外を見れば、日も落ちかけており、夕焼け空となっていた。

その時、なのは達は異変に気が付いた。

「……見張りの局員がいなくなつた？」

「おかしいですね」

そう、ティアナ達はずっと管理局に監視されていた。

当然の処置であるから、それは見て見ぬ振りをしていた。

だが、突如としてその気配が無くなつたのだ。

なにかあったのは間違いない。

すると、なのはの前にホログラムが立ち上がりそこにヴィヴィオが写っていた。

「ヴィヴィオ?!」

「どうしたのなのはママ?」

いきなりの異変にヴィヴィオからの電話、さらにヴィヴィオの背景が今なのは達がいるデパートとあつては、なのはも驚かすにはいられない。

「今どこにいるの?」

「えっと、クラナガンの駅前のデパートだよ?学校で使う文房具を買いに来たの」

「わかった、すぐに行くから待っ——」

その時、突然の爆音ヴィヴィオとの通信も途絶える。

「ヴィヴィオ、ヴィヴィオッ!!」

何度も呼びかけるが通信が繋がることはなかった。

その時、一人の局員が走り寄って来た。

「今、広域指名手配されていた犯罪者が、護送中に逃亡し警邏隊並びに武装隊と戦闘中です!今すぐ、この場を離れてください!」

「なっ!!」

なにを言っているんだお前は!

そう叫びそうになった。

ここにどれだけの人がいると思っているのか、この周囲にどれだけの一般人がいると思っているのか。

なにより、行動が杜撰過ぎている。

遅すぎている。

このままでは、被害が出てしまう。

なのはとティアナは、バリアジャケットを纏うと局員に素早く指示を出す。

その間にも、パニックとなった客達が我先にと出口に向かい駆け出している。

そしてティアナは気が付いた。

ジェイルがいなくなっていると言うことに――。

ヴィヴィオは、デパートの床で目を覚ました。

なのはと通話をしていた時の突然の爆音、そして避難を知らせる館内放送、パニックになる客達の波に飲まれたヴィヴィオは気絶をしていたのだ。

「うっ……痛たたた……」

頭を打つたのだろう頭部が微かに切れ、血が流れていた。

「いったい……?」

その時、暖かな温度が頭部を包み込んだ。

「えっ……」

その方向を見ると、そこには小さな子供がいた。

「キミ……は……?」

そして目が合う。

その瞬間、ヴィヴィオは頭を鈍器で叩かれたような痛みがした。

理解してしまった。

分かってしまった。

今目の前にいるのが、誰なのかを——。

振るえる声をヴィヴィオが発する。

「どうして、ここにいるの——?」

恐怖が全身を支配していく。

だが、負けないと決めたのだ、決別したのだ。

過去とは——。

恐怖を内部で押し込め、ヴィヴィオは瞳を強く持ち、相手を見た。

その視線に気が付いたジェルは、頭部の治療を終えると、途端に涙目となり逃げよ

うとしだした。

その姿は、今さっきまでの自分と重なる。

なにがなにやら、わからない。

それでも、壊れてしまいそうなその姿を見たヴィヴィオは声をかけていた。

「ま、待って!!」

その瞬間、再度の爆音。

「キャッ!」

ヴィヴィオとジェイルは爆風に吹き飛ばされる。

同じ方向に飛ばされたヴィヴィオとジェイル。

ヴィヴィオはすぐにジェイルのそばにより、安否を確かめる。

ジェイルの意識がはつきりしているのを確認すると、ヴィヴィオはほっと息を吐き出した。

そして気が付く。

すぐ目の前で、爆炎の中で、誰かが戦っているのを――。

「逃げるよー!」

ヴィヴィオは、言うが早いか、ジェイルの手を取り駆け出そうとしていた。

だがその手は振り払われる。

「えっ……」

理解出来なかった。

自分がジェイル・スカリエッティの手を握っているのが、助けようとしているのが、理解できなかつた。

その手を振り払い、爆炎の中から伸びて来た魔力の塊に、まるで自分を守るようにジェイルが飛び出し手を広げているのが。

理解したくなかつた。

その暴力に撃ち抜かれ、血だらけになって吹き飛んでいく姿を——。

血まみれのジェイルがヴィヴィオの前に横たわる。

「あ、ああああああ……」

声にならない声が、口から漏れ出す。

壊れてしまう。

心が、壊れてしまう。

そう思った時、微かな声が聞こえた。

「だ、大丈夫だよ……？」

「えっ……」

その声の主は、ジェイルだった。

血まみれの姿で、それでも安心させようとも言うのか、笑いかけながら大丈夫だと

言ってくる。

自分は何をしているのか……。

確かに彼はジェイル・スカリエツティかもしれない。

それでも、見た目は私よりも年下だ。

年上の、お姉さんであるはずの私が守られていてどうする。

ヴィヴィオは、全身に魔力を張り巡らす。

そして、今度は逆に笑いかけてやった。

「大丈夫、お姉ちゃんが守ってあげるから！」

その時、爆風の中からなにかが飛び出してきた。

その姿はボロボロで、でもその人が悪い人だとすぐに理解できた。

だから、ジェイルを守るために全力でバリアを張ろうとする。

だが、目の前に突然ティアナが現れた。

そして現れたティアナの瞳には怒りが灯っていた。

「私の子に、何をしたああああッ!!」

そして打ち出される魔弾。

オレンジ色の魔力が敵を飲み込むのを見ると同時に、ヴィヴィオはジェイルを守るように覆いかぶさるようにして意識を手放した。

生まれた日

炎が世界を支配していた。

火の光が舞う世界で、空から水が降り注ぎ、体の熱を奪っていく。

このまま、すべて奪ってくれたなら――。

全部が全部、怖い――。

どうして、世界はこんなにも灰色なのか。

どうして、そんな目で僕を見るの……？

僕が何をしたの……？

教えて――。

誰か、教えてよ……。

こんな所には、いたくない。

だから、僕からすべてを奪って……。

ジェイルは静かに、瞳を開けた。

その瞳には、なにも映してなくて、虚ろで、そして死んでしまいそうな。

そんな絶望を秘めた瞳で世界を見つめようとしていた。

けれど、ジェイルはそこで色を見た。

炎の赤と、スプリングラーの透明な水、天使と悪魔のように互いを喰いあいながら世界を埋め尽くしていた地獄を背に、その人を見た。

夕日のような長い髪の毛は水で濡れ、服の所々は焼けている。

天使と悪魔、双方から守るようにその人は僕を抱きしめていた。

「目を……覚ました……！ やった、やった！ 良かった……よかったですよ……」

大きな瞳からは、涙が溢れ出していて、それが僕に降り注ぐ。

喜びが降り注ぐ――。

僕がまだ居てくれてよかったと、喜びが次から次へと僕に降り注ぐ。

僕はそれが欲しくて、もっと欲しくて手を伸ばした。

すると、喜びをくれた人はその手をとって自分の頬に当てて熱を共有してくれた。

その人の悲しみが、熱となって僕に伝わってくる。

痛い――。

とても、痛いよ――。

でも、その痛みがもっと欲しくて僕は手に力を入れた。

僕はここに居てもいいの――？

いいに決まってるじゃない――

僕の事が怖くないの——

そんな訳ないじゃない——

僕は、僕でいいの——？

アナタはアナタのまままで良い、他の誰でも無い、アナタに居てほしい——
もう、どこにも行かないで——

私を一人にしないでよお——

ああ、僕は理解した。

僕の居場所はここにあつた。

すぐ近くにあつたんだ——。

それが分かつただけでも十分だつた。

だから——

喜びと悲しみを、愛を教えてください。君を、なにがなんでも、どんな地獄からでも。

僕が守つて見せる——。

次に目を覚ました時、僕は白い部屋にいた。

鼻の奥がツーンとするような臭いで充満した部屋のベッドで僕は寝ていた。

すぐそばには、僕のお腹を枕にするようにして愛をくれた人が寝息を立てていた。

僕が上半身に力を入れて体を持ち上げると、口からくぐもつた音が漏れ出した。

それが聞こえてしまったのだらう。
愛しい人の眠りを妨げてしまった。

「う……………」

そうしてゆつくりと愛しい人の瞼が開いていく。

その瞳に僕が写ると、その人は僕を力一杯抱きしめて来た。

抱しめられる心地よさを味わいながらも、恥ずかしくなつた僕が身じろぎすると、愛しい人は謝りながら抱きしめるのを止めた。

そして大きな両手で僕の頬を包むと、満面の笑みでこう言った。

「あなたに初めてのプレゼント……、あなたの名前はティーノ……ティーノ・ランスター、間違つた道に進まずに、男の子として真つすぐ優しい子になつて欲しいって願いを込めてこの名前をあなた……ううん、ティーノにあげる。受け取つてくれる？」

ティーノ・ランスター、その響きが福音となつて僕に降り注ぐ。

体全身に染み渡つてくると、僕は……ティーノは、なにも返せてないのに、迷惑をかけてしまったのに、こんなに素晴らしい名前を貰えたことが嬉しくて、どうやって恩返しすれば良いのかわからなくて、涙が溢れ出すのを抑えられない。

一人泣き出す、僕を愛しい人は優しく抱きしめてくれた。

「私の名前は、ティアナ・ランスター。ティーノのお母さんになるの、なにも分からなく

て、不安な事ばかりだけど、それでも二人で乗り越えて、笑っていいこう、ね？」
こうして僕は、お母さんをこの世界で得た。

その頃には、世界が色褪せて見えた。

再び寝てしまった僕が目を覚ますと、そこにはティアナの姿は無かった。

その瞬間、僕はとてつもない不安を覚えた。

よたよたした足取りで、ベッドから降りると、僕はティアナを探すために白い部屋を出る。

部屋の先は、暗い世界に月明りが金色に光って道を照らしていた。

その道はすごく綺麗で、見るもの見るものすべてが綺麗で僕は、ティアナを探しながら道を進んで行く。

気が付いたら、僕は屋上にいた。

扉を開けた瞬間に風が僕の頬を撫でて、涼しい感触も嬉しくて、僕は外の世界に出た。

屋上から見る町の夜景は、凄くてまるで妖精の世界に迷い込んだみたいで、吸い込まれそうになりながらも、その光を見ていた。

その時、僕の後ろから声がかかった。

「いんなどころにいたんだね……」

僕はその声に、体が跳ねてしまった。

今まで心地よかった風が急に冷たく感じた。

震えが指先から全身に響き渡ってくる。

ティアナ以外の人は怖い――。

また、あの目で見られたくない――。

そう思いながら、ギユツと両手を握りしめているとその手が包まれた。

そこから、伝わってくる温かさはティアナと同じモノで、僕の震えは徐々に収まってい
いく。

そして熱が伝わってくる方を見れば、月のような金色の髪に緑と赤の瞳を持った女の子がいた。

その子は、僕と目が合うと一瞬硬く口を結んで、でも優しい瞳で僕を見ていた。

「私の名前は高町・ヴィヴィオ……あなたの名前は……？」

「僕の名前は、ティーノ・ランスター……」

「ティーノ……、良い名前だね」

花が咲いたように笑うヴィヴィオを見て、僕はティアナに貰った名前が褒められたことが嬉しくて、笑顔で頷いた。

「ティーノ、ありがとう……私を守ってくれて……」

ヴィヴィオはそう言って、包む手に力を入れて来た。

「でも、なんで守ってくれたの……？」

ヴィヴィオは不安そうな顔で僕にそう言ってきた。

僕も何故、あんなことをしたのかわからない。

でも——。

「……守らなくちゃいけない、そう思ったんだ」

僕がそう言うと、ヴィヴィオは急に泣きそうな顔になった。

そして、涙を静かに流しながら、僕にこう言った。

「ありがとうティーノ、凄く嬉しい……。だから、次は私がティーノを守る」

綺麗な、それこそ町の光より、夜空の月より、綺麗な笑顔でヴィヴィオは続けて言っ

てきた。

「私がティーノのお姉ちゃんになって、守ってあげるから」

その笑顔を見て、僕は頬が何故だか熱くなった。

今日は嬉しいことばかりが続いて、実は夢なんじゃないかと思う。

でも、だからこそ思った。

今日、僕は生まれたんだ——

温泉2

スバルの話が終わる頃、その場の空気は様々であった。

皆が、それぞれの表情を浮かべ、皆がそれぞれの感想を胸に抱いていた。

それでも、皆その瞳を物語の主人公であるティーノに注ぐ。

この小さな子供のどこに、それだけの勇気があったのだろうか、皆が思考し会話がなくなり、温泉内を静けさが支配しようとしていたが、そんな事は二人の世界に入っているヴィヴィオとティーノには関係が無いように……。

未だに、ティーノの淫らな息遣いとヴィヴィオのイキイキとした声だけが聞こえていた。

ヴィヴィオから解放されたティーノは肩で息をし、ヴィヴィオは物語の中でお姫様の様に語られたのを聞いていたのだろう照れ隠しなのか、いつもの倍以上にティーノをマッサージし、耳元まで顔を赤くしていた。

すると、一人考えていたルーテシアが、疑問に思ったのだろう。

辛そうにしているティーノに手を上げ尋ねた。

「そう言えば、どうしてティーノはティアナの事をお母さんって呼ばないの？」

その疑問は瞬時に、辺りに浸透していく。

それはまるでビル群を駆け抜ける風のように、心に入り込んできた。

そして皆が何故——？

と、疑問に思いティアナに視線を向けた。

視線の総攻撃を受けたティアナは、成す術無く被弾し、露骨に狼狽えた。

「いや……、それは……、なんて……、言いますか……」

今度はティアナの顔が赤くなる。

そこに何かを感じたなのは、ジト目でティアナを見ながら身を寄せた。

「えっ、なになに何かあるの？」

ずいずい体を寄せてくるのはに、ティアナはどうしたものかと視線をあちらこちらに泳がせる。

だが、いくら漂えど助け舟を出してくれる人物はいない。

そればかりか、親友であり、答えを知るスバルが波を巻き上げた。

「それはですねなのはさん♪」

その空気を瞬時に感じ取ったのはが、噂話をする近所のおば様のようにスバルの話を乗りかかった。

「ほうほうなんですかな、スバルさん♪」

「ちよ、スバルあんたねえ〜！」

ティアナの抗議の声を華麗に受け流したスバルは、少しだけ音量を上げてティーノを呼ぶ。

すると、肩で息をしていたティーノは、よたよたとした足取りでスバルの傍まで歩いてきた。

それを抱き上げ、膝の上に置くとティーノの髪の毛を優しく整えてやりながら問うた。

「ティーノはどうして、ティアナの事をお母さんって呼ばないの？」

そう質問されたティーノは、なにを当たり前のことを言っているんだと言わんばかりに答える。

「ティアナとずっと一緒に居たいからだよ」

その答えに皆が頭に？を浮かべ、ティアナは沈みかけていた。

「それはどういう事かな？」

フェイトがティーノに質問すると、ティーノは胸を張って答えた。

「だって親子だと、僕が大人になった時にどこかの女の子と結婚したらティアナと別れなくちゃいけないでしょ？だから、僕はティアナと結婚するの！そうすれば、ティアナとずっと一緒にいられるでしょ！」

元氣良く言ったティーノはさらに続ける。

「だから僕はティアナの事をお母さんって呼ばないことにしたんだ。ずっと一緒にいたいから！」

それは幼少期の男の子なら誰しもが、通ったことがある道だろう。

無償の愛を捧げてくれる親に対し、ずっと一緒にいたいがために結婚すると言った言葉を使うことを。

だが、ここにいるのは女子ばかりであり、男子であるエリオを育てた事があるフェイトもエリオが年齢に対し大人びていたこともあり、そんなことは言われたことがない。

そのため、知識としては知っていたが、実際に見て聞いたのは皆初めてである。

だからだろう——。

子供達は頬を桜色に染め、大人達は羨ましそうにティアナを見たのは——。

特に親であるのはとフェイトは特にである。

集中砲火を浴び続けていたティアナはどうとう轟沈した。

ティアナにとって気まずい空気が完成してしまっていた。

こんな事なら、スバルに昔語りなんてさせるんじゃないやなかった。

今更ながらに、ティアナは後悔していた。

だが、救いの手は差し伸べられた。

突然首から下が重くなる。

なんだと思うと、ティーノが満面の笑みでティアナに抱き着いていた。

「ずっと一緒にいようね！」

その純真な愛に、ティアナの顔も綻ぶ。

そして、ティーノを優しく抱きしめ返し、頭頂部に鼻を押し当て、甘い香りを楽しみながら答える。

「ええ、ずっと一緒よ……」

母とは呼んでももらえない。

だが、確かに見えない物で親子としての愛で二人は結ばれていた。

今度は温泉をほんわかした空気が包み込んだ。

その時、キャロが小さな悲鳴を上げた。

「キャッ！」

「どうしたのキャロ？」

「フェイトさん……こう、なにかにゆるつとしたものが、お尻を……」

キャロが小さなお尻を両手で隠すように湯船から飛び上がる。

すると、次から次へと、小さな悲鳴が湯船から上がり皆が飛びのいて行く。

「る、ルーちゃん温泉になにか飼ってたりする？」

キャロがそう言うと、ルーテシアは人差し指を顎に添え答えた。

「そんな面白いペットを飼っていたら真っ先に自慢するけど?——きゃ」
説明した瞬間に今度はルーテシアが餌食に合う。

そんな様子を不安そうな顔で見っていたヴィヴィオは、湯船から出ようと慌てて出ようと立ち上がりとした時、その膨らみかけてきたばかりの小さな胸が何かに触れられる。

「ひゃ!!」

ヴィヴィオは胸を隠そうとすると、バランスを崩し転びそうになった。

その時、ヴィヴィオの手が引つ張られ温かい何かにもたれ掛かる。

トクン——トクン——

と、心落ち着く音が鼓膜をくすぶる。

ヴィヴィオが顔を上げると、そこにはティーノの顔があった。

「大丈夫?」

ティーノの顔を見た瞬間に、ヴィヴィオの顔は噴火しそうな程に赤くなった。

血潮が急激に流れ出すのを感じる。

手足に何故だか力が入らない。

ティーノの瞳から視線を外すことが出来ない。

なにがなんだか分からなくなってきたヴィヴィオは瞳が潤みだす。

すると、ティーノは優しくヴィヴィオの頭を抱きしめ金色の髪を撫で始めた。

「大丈夫、大丈夫だよ……」

とにかくヴィヴィオは、自身の心臓の音が大変なことになっているのを知られたくなくて、恥ずかしくて、すぐにでもティーノから離れたかったが、体が言うことを聞いてくれず、さらに頭の中が混乱していく。

「は〜い、そこまで♪」

なのはの声が温泉に響くと、桜色のバインドが何者かを捕らえていた。

「えええええっ!」

そこに捕らえられていたのは、水色の髪の水着を着た女性だった。

「なんだセインだったの」

「そんなことだろうと、思った」

セクハラされ、湯船から避難していた者達は口々にそう言い出す。

「まったくダメじゃない、こんな事をしちゃ」

なのはそう言いながら、カメラを高速連射モードにしてヴィヴィオとティーノを撮影していた。

ニヤケ顔で、カメラを構えるのはを見てフェイトが肩を落としながらティアナと共

にセインに説教を始める。

すると、セインは涙目になりながら吠えた。

「私だって皆と遊びたかったんだよ〜!」

そう言つて吠えるセインに対し大人組だけでなく子供組までも大きく息を零した。

そして、ヴィヴィオに対して謝罪すればこの話は終わりとは決着をつけようとしていた所で、フェイトがティーノに抱きしめられているヴィヴィオに声をかける。

「ヴィヴィオ〜!」

「えっ、なに!?」

「ちよ、うわっ!!」

ヴィヴィオはその声を聞き、正氣に戻るとティーノを押し飛ばして何かを取り繕うようにワタワタした。

「あつ、セインだったんだね」

ヴィヴィオはそう言つて笑つて誤魔化し、ティーノは湯船に浮いていた。

その後、ティーノはセインと自己紹介をし温泉から上がる。

その先に待っていたのは、なのは達大人組による子供達の写真撮影兼着せ替えパーティーであり、ティーノはいつもの如くおもちやにされ、子供組の女子組と共に寢床についた。

ベッドに運び込まれたティノーが疲れ切った顔をしていたのは言うまでもない。

基礎トレ

上る太陽が、約45度上方の角度から前面を照らし、後方に大きく影が伸びる。

両側面には、縦長なビル群が檻の様に並び、檻を囲う様にさらにビル群が迷路を作り出していた。

太陽の真下、光から生み出された影の中の蜃気楼から生まれ出でたのは、炎の騎士。

あの時と変わらぬ、凍えるような空気を全身から発し、威圧の籠った視線を向けてくる。

朝焼けを薙ぎ払う剣を鞘から抜き放ち、正眼に構えた。

対するティーン・ランスターは、自身の周囲にステインガーブレードを八本生み出し空間に固定した。

「準備はいいですか、マイフレンド？」

エテルナシグマがそう問いかけてくる。

無論だ――。

全身の筋肉を眠りから呼び覚まし、リンカーコアから送られる魔力も全身に染み渡った。

「お願い、エテルナシグマ……」

ティーノがそう言うと、空中にホログラムが現れ、時を刻みだす。

その時が、ゼロから一になった瞬間、ティーノは右手と左手の銃口を騎士に向け魔弾を放った。

「だ、はあ……はあ……はあ……」

ティーノはコンクリートの地面に横たわりながら、大粒の汗を全身から流していた。

「今日……は……何分……いった……？」

息も絶え絶えに言うと、エテルナシグマは点滅しながら答える。

「30分です。前回よりも2分30秒伸びています」

「そっか……」

ティーノがしていたのは、仮想模擬戦である。

エテルナシグマがシグナムの幻影を作り出し、ティーノはそのシグナムと毎日模擬戦をしていた。

今のところ、全戦連敗記録を更新中であり、どれだけ長く戦い続けることが出来るかに重点を置かれていた。

「もう少しだったね」

「はい、惜しい点が何点ありました。後、一息です」

「ティーノは、寝そべるのを止め笑う足を入れ立ち上がる。

「うん、僕も見えて来たかもしれないんだ。……後少しで勝てる」

その時、空から声が降り注いできた。

「皆に内緒であんな事してたんだけ♪」

ティーノはその声を聞くと、イタズラがバレた様にそっぽを向いた。

「……別に内緒とかじゃないもん」

「ふふっ、そっか……」

ティーノに声をかけて来た人物、高町なのはは、微笑むとティーノの前に降り立つ。

ティーノは拗ねた様に唇を尖らせる。

「どうしてこんな所にいるんですか……?」

するとなのはも、イタズラがバレた子供のように誤魔化す様に笑う。

「私は空を飛ぶのが好きだから、こんなに天気が良いならって我慢できなかったの……」

そしたらティーノの姿が見えたから、何をしてるんだらうって上から見てたんだけ」

「そうですか……」

ティーノはそう言うと、考え込むように顎に手を置いた。

「?」

なのはが、その様子に頭をコテンと傾げる。

すると、ティーノはどこまでも真剣な瞳でなのはを見上げた。

「なのはさんは、戦技教導隊で仕事をしてるんですね？」

「そうだよ」

「なのはさんから見て、僕はもうでしたか……？」

ティーノの瞳が語っていた。

答えを提示するまで逃がさないと――。

なのはは、その瞳に身震いした。

魔法戦技の教導官の性か、ここまで一途に教えを請われてNOと言える訳がない。

なのはは、嬉しそうに笑うと答えた。

「ティーノは、シグナムさんに勝つたために対近接戦を主眼に置いて戦術を組み立てて、それに合わせて魔法のバリエーションを増やしてるでしょ？」

何を当たり前のことを――。

ティーノはそう思いながら答える。

「はい、その通りです。僕はあの騎士に勝つことを一つの目標としています」

「うん、それも良いことだけど、ティーノにはまだ基礎が足りてないかな？」

「基礎は十分だと思います。ユウノ先生、クロノ師匠、アルフに教え込まれましたから」

「でもそれは所詮急造でしょ？ 私が見た限りだと、まだまだだし粗が目立っていたよう

に思うな」

ティーノは思う。

今さらそんな事が必要なのかと――。

近・中・遠、全ての基礎を自分は終えていると思っっている。

だからこそ、それで足りない事を応用で補うために様々な魔法を身に着けて来た。

だから――

「僕には今更基礎なんて必要ありません。それよりも、あの魔法を教えてください」

「あの魔法？」

「アナタの最強の魔法技、スターライトブレイカーを、僕に教えてください」

ティーノがそう言うと、なのはは可笑しそうに笑った。

それがティーノの癪に障る。

「……なにか可笑しいんですか？」

「ごめんごめん……、あの魔法はティーノにはまだ早いよ。それよりも、基礎が大事！土台をしっかりとしないで、大きな魔力を必要とする魔法を使うと体を壊すことになるよ」

そうかもしれない、そうかもしれないが――

それでも――

「僕は強くなるんだ！だからッ!!」

すると、なのははティーノの両肩に手を置いてくるりと一回転させるといくつもの的を用意した。

「まあまあ、騙されたと思って私に教導されてみなさい！」

そう言われるが、ティーノはムスツと頬を膨らませるばかりだ。

まったく男の子だなあ……

なのはは、そんな事をしみじみ思うとティーノの耳元に口を近づけた。

「……今日、皆で模擬戦をするんだけど、そこで私に一撃入れることが出来れば教えて上げる♪」

その言葉に、ティーノはバツと振り返ると満面の笑みを浮かべるのがいた。

「分かりました。それで強くなるなら、教えてくれるなら……」

そしてティーノはなのはから数歩離れると頭を下げた。

「よろしくお願いします！」

その姿を見たなのはは、本当に嬉しそうに答えた。

「うん。私に任せなさい!!」

眠りから覚めていたティアナとスバルは、洗面所で顔を洗っていた。

「おはようございます」

用意されていたふかふかのタオルで顔を拭けば、歯ブラシを手に持ったエリオが洗面所にやって来た。

「おはようエリオ！」

「おはよう……」

スバルとティアナがそれぞれ挨拶すると、エリオは歯ブラシを濡らし歯磨き粉をチューブから絞り出す。

「そう言えば、お二人は陸戦場の話しを聞かれましたか？」

「知らないよ、何の話？」

「なんでも、なのはさんとティーノが朝練をもう始めてるそうですよ」

エリオのその話を聞き、ティアナとスバルは顔を見合わせ慌てて洗面所を後にした。

スバルとティアナが陸戦場に顔を出すと、そこにはバリアジャケットを身に纏ったなのはとティーノがいた。

なのはが桃色の魔弾、デイバインシューターを八発縦横無尽に操り、ティーノはそれを空中で躲し続け、時折ステインガレイで破壊していた。

その姿は、過去機動六課で訓練に明け暮れていたティアナの姿を彷彿とさせる。

「はあああああ!!」

ティーノが突然の加速、足を止めてデイバインシューターの操作に集中しているなの

はに詰め寄る。

拳に魔力を込め、重い一撃を叩き込もうとしてなのはプロテクションに防がれていない。

その姿は、過去機動六課でのスバルを見ているようであった。

ただそれも数発のデイベインシユーターにティーノが撃墜された所で終わりを見せる。

砂埃が盛大に巻き上がり収まると、砂埃の中から倒れ伏すティーノの姿が見えた。

「はい、今日はここまでね！」

「はあ……はあ……まだまだ、次……お願いします」

「やり過ぎはダメって言ったでしょ？今日はここまで！」

なのはにそう言われたティーノは、体力の限界だったのだろう立ち上がることにすら出せずにいた。

すると、二つの足音が聞こえてくる。

ティーノが仰向けになったままそちらに顔を向ければ、ティアナとスバルが反転した世界に姿を現した。

「家の子がお世話になりました、なのはさん」

ティアナがそう言うと、なのはは嬉しそうに笑った。

「お世話しました♪」

スバルとなのはが会話を始めると、ティーノは脇に手を入れられティアナに抱き上げられた。

「いっばい汗掻いたわね」

ティアナはそう言いながら、ティーノの額にへばり付いた前髪を整えていく。

「ティアナ、ティーノの汗流してあげて、それから朝ごはんまで休憩させてあげてね」

「はい、なのはさん」

「ティアナ、私はこれから予定通りエリオとなのはさんとで、朝練を始めるから」

「分かっているわよスバル」

そうして、各々が早朝の僅かな時間を有意義に使っていく。

朝食を食べ終えたティーノ達は、模擬戦までの時間を使い体を休めていた。

「どこも異常は無い？」

「うん♪」

皆がリビングで寛ぐ中、ティーノはティアナの膝の上でマッサージを受けていた。

だがヴィヴィオと違う点は、ティーノが恥ずかしがったり、くすぐったそうにしている点である。

寧ろ、ティアナの優しい手つきに、ティーノは瞳を細め気持ちよさそうにしていた。その様子を見ていたアインハルトが、ティアナの横に腰を落とすと、問いかける。

「ティアナさん」

「どうしたのアインハルト？」

「昨日、聞きそびれてしまったのですが、どうしてマッサージを？」

「ああ、それはね」

ティアナは語る。

ヴィヴィオを助けるために盾になったティーノは非殺傷設定にされていない魔力攻撃を直に受けてしまったこと。

小さな体にそれは毒以外の何物でもなく、体中をマッサージすることで、体内を流れる魔力素の流れを定期的にマッサージすることで促進させ後々に後遺症が出てこないようにするための処置であると。

アインハルトはその話を聞き、一人納得するとティアナの手を見つめる。

ティアナの手からは、絶妙な量の魔力が出ており、それがティーノの体を優しく撫でていた。

その魔力の調整力には目を見張るものがあり、簡単に出来ることでは無い。

そしてアインハルトは考える。

ヴィヴィオの絶妙な魔力調整力と、維持する力はこのマッサージをすることで培ったのではないかと。

アインハルトは一度頷くとティアナの耳元に口を寄せ何かを囁いた。それを聞いたティアナは、困ったように笑う。

そして鼻歌を歌い出しそうな程にご機嫌のティーノを抱き上げアインハルトの前に置いた。

「??？」

ティーノは突然のことに対応出来ない。

困ったように固まるティーノの瞳を見つめるアインハルトは、意を決して両手を伸ばす。

「ティーノさん、失礼します」

「?!??」

アインハルトは、両手に僅かに魔力を出すとティーノの体を触り出した。

その突然の行動にリビングで寛いでいた皆が驚く。

だがそんな事は関係が無いと、アインハルトはティーノの体を次々にマッサージしていく。

アインハルトの冷たい手が、肌を撫でていくにつれヴィヴィオの時以上にティーノの

口から淫らな音が漏れ出す。

その音を聞かれたくないティーノは涙目になりながらも、唇を噛みしめてそれを耐えていた。

その光景を見て、ヴィヴィオがガタツと音を立てながら椅子から立ち上がるが、それとリオとコロナとルーテシアに防がれる。

「はいはい、お姉ちゃんは少し大人しくしてようね〜」

「ヴィヴィオ、落ち着いて!」

「どうどう!」

その様子が楽しいのか、なのははビデオカメラを回していた。

「な、なのは良いの……?」

フエイトが心配そうに尋ねた。

だが、関係が無いとばかりになのはは、カメラを回し続ける。

「フエイトちゃん……」

「なにかな、なのは!」

「私ね……今、寝取り物の良さが少し分かった気がするの……」

「な、なのは……?ど、どう……?」

「つまりね……。全然興奮出来るよっ!!」

その言葉を聞いたフェイトは思う。

どこで間違えてしまったのか、と――

そんな中、ティーノの体がビクつと跳ねると、突然アインハルトにもたれ掛かるように倒れて来た。

「テイ、ティーノさん？」

「はあはあはあ……」

アインハルトの耳元で荒い息遣いが聞こえる。

ティーノはまるで、体全体で息をしているようであった。

「ありや、少し刺激が強すぎたみたいね」

ティアナはそう言うと、アインハルトからティーノを受け取る。

すると、ティーノは安心したように静かに寝息を出し始めた。

「あ、あのー！」

アインハルトが困ったように声を出す。

「大丈夫よアインハルト、溜まってた疲れが出ただけだから、寧ろありがとうつて言わせて頂戴」

「は、はい……」

途中から夢中になってしまっていたアインハルトは、そう言うと、ティアナの胸の中

で眠るティーノの寝顔を見つめて微笑んだ。

一部始終をカメラに収めたなのは、カメラを終うと、手を叩いた。

「それじゃ、ティーノの目が覚めたら模擬戦をしようか！」

ティーノが目を覚まし、準備運動を終えてから皆は陸戦場に集まっていた。

そしてノーヴェが皆を代表してルールを説明する。

「ええ、これより青組と赤組に解れたフィールドマッチを始めます。ライフポイント
は、今回もD S A A公式試合用タグで管理します。それでは皆さん、ケガが無いよう全
力を出しましょう」

ティーノは、エテルナシグマをポケットから出す。

「頑張ろう」

「はいー」

僕の友達は答えてくれる。

やるべきことはやって来た。

どこまでやれるのか、分からない。

それでも――

「今日は勝ちに行くよー！！」

セットアップ

チーム戦

「ウイングロード！」

「エアライナー！」

陸戦場のフィールドの空を青と黄色の線路が敷き詰められていく。

それぞれのチームの組み合わせは、赤組にフェイト、キャロ、ノーヴェ、アインハルト、コロナ、ティアナ、ティーノ。

そして、青組はなのは、エリオ、ヴィヴィオ、リオ、スバル、ルーテシア、ガリユードで構成され、それぞれに与えられた役割に準じて行動を始めた。

ガードウイングのポジションを与えられたティーノは、線路犇めく空を駆けていく。

「僕の相手になるのは、ルーテシアの召喚獣のガリユードだったよね？」

「その通りです。マイフレンド」

相手となるガリユードとはすでに顔を合わせている。

人型の召喚獣で近接戦を大元にした戦闘スタイルであると、事前に教えてもらった。ティーノが戦術を頭の中で編み出していると、エテルナシグマが注意する。

「マイフレンド、戦いの主旨を思い出して下さい」

その言葉にティーノは、ハツとする。

「……分かつてる。今はチーム戦をしてるんだってことは」

「だから……」

勝負が動くのは数の均衡が崩れたとき——

その篝火は——

「僕が作る！」

赤組の頭脳を務めるティアナは、戦場の全体を見つめながら、どこか嬉しそうに笑っていた。

「ティアナさん、嬉しそうですね」

フルバックを務めるキャロが、ティアナの笑顔が伝染したかの様に笑いながら訪ねた。

「分かる？」

「ええ、すごく楽しそうです」

「あの子とこうやって模擬戦をするとは思ってもしなかったからかしら、情けないところを見せたくないのと同時に、あの子の頑張る姿を見続けていたい」

そう言いながら、目線でティーノを追うティアナを見つめながら、キャロは頑張ろう

と自分に言い聞かし、両腕を胸の前で力一杯握った。

空を飛ぶティーンとフェイトは、誰よりも早く敵陣の内部に入り込んでいた。

「ティーン、気を付けてね」

「それはお互い様です。フェイトさん——ッ!!」

それは突然のことだった。

気が付けばティーンの前目にフェイトがいて、突如として現れたエリオの攻撃から守っていた。

「くっ!」

「はあああああ!」

決めにかかったのだらうエリオは、必中の突撃を防がれ生まれた隙を、フェイトのバルディッシュで逆に弾かれる。

そのフェイトの頭上に影が差せば、そこには人型の昆虫が風の如きしなやかさで、フェイトに蹴りを浴びせようとする。

「エテルナシグマー!」

「ブリッツアクション」

しかし、ガリユーは攻撃モーション中にティーンに殴り飛ばされる。

ビルに突っ込むガリユーを見ながら、ティーノは左手の銃口を構えた。そしてティーノとフェイトはそれぞれの敵に向かっていく。

「デイバインバスター！」

「くっ……」

ヴィヴィオとアインハルトは、それぞれが戦うに適した大人の体へと変身し、すでに戦いの火ぶたを切っていた。

「魔法の打ち合いなら！」

ヴィヴィオは、周囲に展開したソニックシューターをアインハルトに向け放つ。

それと同時に、呐喊を始めた。

だがしかし、ソニックシューターを防ぐことで隙が出来ると思い込んでいたヴィヴィオは驚愕する。

「霸王流、旋衝破」

「いっ!?!」

こともあろうに、アインハルトはヴィヴィオが放ったソニックシューターを一塊に集め、それをヴィヴィオに投げ返したのだ。

「反射技!?!」

ヴィヴィオが叫ぶ中、懐に入り込んだアインハルトの右拳がヴィヴィオの胴体を捕え吹き飛ばす。

勝った——

そう思ったアインハルトの頬に突然痛みが走った。

「カウンター……?」

ヴィヴィオが殴られる瞬間に、魔力弾を放っていたのだ。

「やはり、ヴィヴィオさんは——」

アインハルトが未だライフポイントの残るヴィヴィオに追撃を駆けようとしたところでテイアナから待ったの通信が入った。

「アインハルト、ヴィヴィオは下げられる。その代わりにあなたは先陣突破で斬り込んで、青組のセンターガード、なのはさんの所に！」

「はいっ！」

「ステインガレー」

ビル群が次々と蜂の巣に変えられていく。

その様はまるで模様替えをしているかの様に、鮮やかだった。

「当たらない……ッ」

ビルの内部をまるで壁が無いかのよう移動しているガリユーは、ティーノの弾幕から逃れると、一瞬にしてティーノの背後に移動し、両手から飛び出した角で突きを放つ。ティーノはその突きを、空に舞う枯葉のように回避し逆に蹴り飛ばす。

ガリユーはそれを両手でガードし耐える。

ティーノはガードの上から叩き潰すように拳を振り上げる。

「ブレイクインパルス」

必倒の一撃を加えようとするが、その手をガリユーに取られ、ビルの壁に叩きつけるようにして投げ飛ばされた。

ビルの窓を突き破り、盛大に砂埃を巻き上げるティーノの姿を見て、ガリユーは構えをとる。

「ブレイズキャノン」

今しがた砕け散った窓ガラスを溶かす勢いで放たれたブレイズキャノンは熱量を伴ってガリユーを襲う。

それを間一髪背中から四対の羽を生やし空に逃げたガリユーを紅い鎖が拘束する。

「チェーンバインド」

ビルの中から見えない敵に対してバインドで拘束すると言う離れ業をやつてのけたティーノはポロポロの体を引き吊りながら、姿を現す。

「フィジカルヒール」

エテルナシグマが即座に回復魔法を発動し、ライフポイントの回復を行う。

ティーンはチェーンバインドに拘束され身動きが取れなくなっているガリユーに向け、右手を掲げた。

「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト」

空に縫い付けられたガリユーを囲む様に、合計100本のステインガーブレイドが姿を現す。

「放て！」

ティーンはその言葉を皮切りに、処刑専用の剣達は、ガリユーに殺到する。

そして、刑は執行された。

——かの様に思えた。

「ツぐああああ」

「マイフレンド！」

ティーンへの叫びとエテルナシグマの叫びが響く。

空には何もなく、ガリユーの姿もなかった。

ただ、鎖が引きちぎられていることだけは理解できた。

ティーンはその様を眺めながら強打の連撃を受け続ける。

減り続けるライフポイント、ガリユーの姿はどこにも見えない。

まるで透明人間に殴り回されているかのように、次々にティーノのライフポイントは減っていく。

だが、ティーノは諦めない。

「エテルナシグマツ！」

ティーノは殴られながらも、左手を地面に向けた。

「ブレイズキャノン」

砲撃がティーノの真下のコンクリートを砕き、大穴を開け、周囲一帯を砂埃で埋め尽くす。

「ブリッツアクション」

さらに、ブリッツアクションを唱えたティーノは、瞬間的に砂埃の中から脱し、その中を凝視した。

そして見つける。

砂埃を切り裂く人型を――。

「そっ！」

ティーノはステインガーレイを放ち適格にガリユーに当ててすることに成功する。

「!!？」

今度はガリユーが驚く番だった。

「よしー！」

攻略法を見つけたティーンは、ブリッツアクションで移動しながら、次々にブレイズキャノンで周囲を破壊していく。

さらに、追撃を始めたガリユーに対しステインガレーを確実に当てていく。

ただし、ガリユーも戦士である。

子供に良いようにされてはられない。

ガリユーは、スピードをさらに高めブリッツアクションの合間に攻撃をしかけていく。

「もう少し、もう少しなんだ……」

そう呟いた瞬間にティーンはガリユーに蹴り飛ばされる。

「ぐわッ」

大きく蹴り飛ばされたティーンは、コンクリートの地面を三回バウンドすると、立ち上がる。

目線の先にはガリユーはいない。

ただし、ティーンはこのポジションを狙っていた。

「ティーンさんー！」

そう上空では、先陣突破を果たしなのはと戦っていたアインハルトがいた。そして、そのアインハルトになのはは砲撃を加え止めを刺そうとしている。

ティーンは二人の正確な位置を把握しながら、理解していた。ガリユーも焦り、止めを刺しに来ると――。

その考えは当たっており、上空からまるで流星のような速さで飛び蹴りをガリユーはしている。

運が良かっただけだ。

だが、運はティーンに味方した。

ティーンは肩で息をしながら、顔を空に向けることすら出来ない程に疲れ切った体に鞭を打って、右手を空に掲げる。

この魔法は、オリジナル程の威力は無い。

だが、入り乱れるチーム戦の状況下では最適であった。

ティーンの足元にベルカ式の魔法陣が広がる。

掲げた右手の先には、紅い魔力の塊が脈動していた。

まるで卵から孵るのを今か今かと待ち望むように脈動を繰り返す塊に、ティーンとエテルナシグマは、産声を上げた。

「――闇に……染まれ……」

「デアボリック・エミツション」

解放された魔力の塊は、震源地から生まれる衝撃波のように周囲すべてを紅く染め上げていく。

紅い闇が世界を染め上げ、終わりを迎えると、ガリユーのライフポイントは一桁になつており、ルーテシアによつて後方に下げられていた。

さらに、デアボリック・エミツションが発動する前になのはの砲撃により撃墜間近となつていたアインハルトは、エテルナシグマにより、デアボリック・エミツションによるダメージは無かつたもののキャロにより後方に下げられる。

そして、全てがうまく行つたと思つていたティーノには、相応の洗礼が舞つていた。

「ふう〜……、危ない危ない」

「ど、どうして……」

なのはは、デアボリック・エミツションをプロテクションで防ぎ切つていた。

「ティーノの魔法のレパートリーの豊富さには本当に驚かされるよ。でも、考えが少し浅はかだね」

なのはは、そう言うとレイジングハートを、ティーノに向ける。

「デイバインバスター！」

チーム戦2

なにがなんだか分からなかった……。

ただ、目の前に壁が迫って来ていたのは見ていて分かった。

それが魔力の塊であり、砲撃であると分かったのは、魔力の奔流に飲まれてからだつた。

戦術は出来上がっていたはずだった。

望んだ通りの展開でもあった。

力を手に入れて、守りたい大切な人に見せつけたかった。

僕は、僕自身の力でここまで来たのだと……。

もう、君の重しになんてならない。

逆に僕が引つ張り上げてあげるんだと、そう伝えたかった。

そうするために、ここまで来て、なのに届かないのか……。

いつもそうだ、いつも僕は……。

僕は——ツ!!

風が頬を撫でたのを皮切りに、重そうに瞼を開いたティーノの瞳に映り込んだのは、

青い空と流れる白い雲。

「……痛う」

「目が覚めたんだね」

目覚めて始めて聞いた声は、落ち着きを持った木々の潺のような声。

「キャラさん？」

「ちよつと待つてね」

キャラはそう言うと、回復魔法を唱え、ティーノの傷とライフポイントを回復させていく。

ぼやけていた脳が風が風に覚まされていくと、自分が最後方にあることが理解できた。

おそらくキャラさんの召喚魔法だろう。

遙か彼方では、なのはが移動を始めていた。

その向かう先は、エリオとフェイトが戦っている。

センターガードのなのはが移動を始めた。

ティーノはその様子を見ながら、なにかが始まると予感めたモノを感じていた。

「ティアナさんのクロスファイア・フルバーストで全体的にダメージを追わせられたけど、こっちは負傷者が二名に、コロナは少し追いつめられてる。……うん」

キャラもティーノと同じく嫌な空気を感じたのだろう。

そしてそんなキャロの雰囲気を感じたのか、ティーノの隣で同じくキャロにより回復されていたアインハルトも難しい顔をしていた。

今にも飛び出して行きそうな顔をしたティーノとアインハルトにキャロが、優しく微笑むと、ティアナに通信を繋げたその時だ。

青組が仕掛けて来た。

「2 on 1っ！」

ティアナとキャロがルーテシアの機転に驚く。

すぐ目の前には、ルーテシアとリオがいた。

キャロを速攻で潰し、アインハルトとティーノを仕留めるのだとすぐに判断出来た。

赤組にとってまずい状況である。

このままでは各個撃破されてしまう。

だが、キャロはどこか余裕を見せた笑みを浮かべる。

「大丈夫だよ。ティーノとアインハルトはそのままだね」

そう言うキャロにが笑う。

「うふふ、この状況じゃどうしようもないんじゃないかしら？」

「大丈夫、ここからが赤組の勇気と力が試されるところだから！」

「その通りです。キャロさん！」

コロナが、自身が作り出したゴーレムであるゴライアスの肩に乗り近場まで来ている。

間に合うか……？

ティーンがそんな事を考えていると、キャロがティーンに指示を出す。

「ティーン……」

「はい」

「ティアアナさんが、姿を消した。恐らく、決めにかかっている。でも、その間ティアアナさんは無防備になる……」

ティーンは、キャロが良い終わる前に行動に移っていた。

「行きますー！」

ティーンは、ルーテシアとリオの攻撃を躲しながら、ブリッツアクションを何度も使用し、ティアアナの元に向かった。

「……よかつたの？」

ルーテシアがそう言うと、さらに不利になった筈のキャロは不敵に笑った。

「さすがティアアナさんの子供だね。きっちり、仕事をしてくれる」

「なんのこと……？」

「気づかないルーちゃん、自分達の立ち位置が変わっていることに」

そしてルーテシアとリオは気づく、お互いが同じ射線上にいることに――。
そしてコロナもそれを待っていた。

「ゴライアスパージブラスト！」

巨人の腕が高速回転を始める。

そして唸りを伴って放たれる必殺技。

「ロケットパンチツツ!!」

ルーテシアもリオもまさかと言う思いであった。

まさか、コロナにこんなとって置きがあるんで、だからこそ二人は思った通りに言葉を発し叫んだ。

「ウソーソーソーッ!!」

そしてルーテシアとリオの撃墜に喜ぶキャロとコロナであったが、勝利を確信した時
が、危険な時なのは、どこも同じであった。

「へうううう――っ」

「キャッ！」

「はい、キャロ撃墜にコロナちゃんの捕獲完了」

「な、なのはさ〜〜ん、いつの間に〜〜……」

ティーノは移動をしながら、その様子を見ていた。

「キャロさん……、コロナ……、くっ……」

一人さらに熱くなるティアーノは、ティアーノの姿を探し求める。

そして見つけた。

「ティアーノ！」

ただし、その時にはティアーノもなのも、スターライトブレイカーのチャージをして
いた。

そして、なのはとティアーノの破壊の極光は放たれる。

「スターライトブレイカー・フアントムシフト！」

「スターライトブレイカー・マルチレイド！」

「ブレイカーー!!」

オレンジ色の光と桃色の光がぶつかり、映画で見た最終戦争のワンシーンのような爆
発と情景が広がる。

爆発の余波は広がり、戦場にいる者達を飲み込んでいく。

ティアーノのスターライトブレイカーは、なのはのスターライトブレイカーの殆どを相
殺するが、一筋の光はティアーノに伸びていた。

ティアーノの迫りくる光の壁からティアーノを守るように立ち塞がる。

「ティアーノ！」

ティアナが叫ぶが関係が無い。

ティーノは既に構えていた。

「エテルナシグマッ！」

ティーノの足元にミッド式の魔法陣が広がる。

さらに、その円陣の淵を炎が走りティーノとティアナを守るように燃え広がる。

その炎は地獄の業火——

あの時、ティーノが生まれた日に目にした悪魔——

その暴力を一手に集中させる。

「くう……」

右手の先に集まる紅い炎が熱により周囲を歪めていく。

だが、足りない……。

この程度では、アレには勝てない。

魔力が足りないなら、他所から持つてくるしかない。

ティーノは、体に負担がかかるからとユーノから禁じられていた奥の手を使う。

「エテルナシグマ、——ロードカートリッジッ！」

「ロードカートリッジ」

右手と左手の手首部分から白い煙が立ち上りスバルのリボルバーナックルと同様の

シリンダーが一回転する。

その瞬間、手首から全身に血液が一気に逆流したかのような、不快感がティーンを襲う。

その不快感は、心臓付近まで上り詰めると、内部から破裂するかのよう一気に体外に放出されていく。

その力の濁流を手の先の魔力弾に上乘せしていく。

「ぐうあゝあゝあゝ……」

痛い痛い痛い……。

だが、術式の構築は無理矢理続けていく。

八枚のプレートが魔力弾の前面に直線状に形成されていく。

壁はすぐそこまで迫っている。

青組の皆が勝ったと確信しているような気がして、無性に腹が立つ。

気に入らない——

だから——

それを——

「覆すッ！」

そして、悪魔の如き紅い太陽が放たれる。

「ブレイズ・イレイザーツツ!!」

ブレイズ・イレイザーはプレートを一つまた一つと砕くにつれ、その熱量と速力を増していく。

そして八枚目のプレートが砕かれた時、最高潮に達した悪魔が星の光に真っ向からぶつかった。

相手はまさしく壁。

否、それは星が迫って来ていると錯覚する程に巨大である。

対するブレイズ・イレイザーは、小さな魔力弾である。

サイズ比では、力の差は見た通りとなってしまう。

ダムに小さな穴を空ける程度しか出来ないかもしれない。

それでも、その小さな穴だけで十分であった。

数舜、スターライトブレイカーとブレイズ・イレイザーが拮抗するが、ブレイズ・イレイザーはスターライトブレイカーを内部から食い荒らし、四散させながら突き進んでいく。

そして届いた。

そう思った時、ティーノの全身から力が抜け落ちていった。

目が覚めたティーンに待っていたのは、ティアナとスバル、なのはによる説教地獄であつた。

なんでも、体に負担がかかる行為を軽々しくとしないで、とのことだった。

ティーンはその説教を正座しながら、聞いていたものの心の中では別のことを考えていた。

「勝てたんだ……、あの……スターライトブレイカーに……」

「「ティーン~~~~~ツ!!」」

「は、はいッ!聞いてます!」

そして、その後三戦目まで行われ、日は沈みすっかり夜となっていた。

温泉に入った皆はそれぞれくつろいでいた。

ベランダで椅子に座り夜風に当たっていたティアナとスバルの元に、ノーヴェが顔を出す。

その中で、ヴィヴィオ達がD S A Aに出場する話、さらにはインハルトにもそれとなく誘いをかけてみるなど、ガサツな見た目からは想像も出来ない程に、コーチをしているノーヴェの姿と、それを陰から励ますスバルの姿にティアナは微笑ましい気持ちになる。

そしてその話はティーンにまで及ぶ。

「ティーノは男子の部に出るのか？」

「その方向では考えていないわ」

「ティーノの目指す強さとは、少し違うしね」

「それに、ティーノには少し声が掛かっているね」

「へえ……、どこから？」

「聖王教会、その騎士養成所の訓練について騎士カリムからね」

「まあ、それもティーノ次第だけだね」

三人は、夜が更けていくのも関係無く未来の子供達に花を咲かせていた。

ミッドチルダ北部ベルカ自治領聖王教会

聖王教会と呼ばれる古風な建造物の数々は、まるで健美な城の様で堅牢な要塞のようであった。

その裏庭、莫大な敷地内でも影の日向となりしその場に、黄金色の髪を切りそろえた少年騎士が一人、黙々と何かを振り払うかのように剣を振っていた。

「オルランドお兄様、オルランドお兄様〜！」

影を作る壁の向こう側から、声が聞こえる。

その声は鈴を鳴らしたように清らかで、集中していた神経がそちらに向かってしまった

た。

「お兄様あ〜……」

オルランドは、その声が涙声になるのを聞いて、盛大に溜息を吐くと、後頭部を二度搔く。

剣を鞘に納めると、近場の木にかけていたタオルを手に取り、慣れた手つきで汗を処理していく。

そして、陰から光の元に出るとそこには妹の姿があつた。

「私はここだ、アンジェリカ」

「お兄様〜!」

アンジェリカはそう言うと、オルランドの胸に飛び込んだ。

オルランドは、身動き一つせずにそれを受け止めると、アンジェリカの肩に手を乗せ引っぺがす。

「それで、私になにかようか?」

「ああ、そうでした! 騎士カリムがお呼びです。なんでも、会って欲しい人がいるとか……」

「理解した。お前はすぐに自室に戻れ、体に障る」

「は〜い……」

アンジェリカは返事を返すと、しょんぼりと俯いてしまう。

そんなアンジェリカにオランダは、後頭部を二度搔くと、ポンとアンジェリカの頭に手を乗せた。

「騎士カリムの話が終わり次第、アンジェリカの部屋に遊びに行く」

オランダのその声を聞いたアンジェリカは花が咲いたように笑った。

「本当ですか!？」

オランダは、苦笑いを浮かべた。

「ああ、騎士に二言は無い」

そしてオランダは、教会内部に入っていく。

これから、新たな物語が生まれるとも知らずに――

オルランド

革靴が大理石を叩く甲高い音が響く。

音響は長く広い半円形の廊下を隅々まで震わせた。

優雅に立ち並ぶ観葉植物の姿が、清廉に何かを待ち続ける騎士甲冑の数々が、聖と邪を合わせるように向かい合い威嚇しあう。

その様は、まるでこの世の縮図、終わりの見えない人の業の為せる技。

日の光が窓から差せば、床に敷き詰められた大理石が光り輝く。

見るからに壮大、誇り一つない廊下、余程掃除好きで誰かがいるのだろう。

ここまでしなくても――。

そう言った感情を禁じ得ない。

そんな領域を平然とオルランドは歩く。

気負う必要など微塵も無い。

何故なら、この先にいるのは教会内でも忌子として扱われ、時空管理局にも席を置く唾棄すべき存在しかいないのだから。

人っこ一人いない整えられた美しい廊下をオルランドはただただ歩く。

去來する嫌悪感が歩を進めるたびに眉間に集約されていく。

「司教様の言いつけがなければ、私は……」

オルランドはそう独り言ちると、慌てて口を閉じた。

どこでアイツに聞かれているか分からない。

今は迂闊過ぎた……。

だが、今となつては後の祭りである。

聞かれていたのならその時はその時だ。

オルランドはそう開き直りながら、目的の場所に到着した。

それは、今まで清潔な世界とは打って変わり、年期を感じさせる良く言えば古風な大

扉だった。

「オルランド・グランデイス参りました」

そう呟けば、扉の先から錦糸のような声が微かに聞こえた。

「入りなさい」

オルランドはその声が聞こえると同時に重い扉を開いた。

「よく来たわね。オルランド、さあ、美味しい紅茶とお茶菓子をシャツハに用意して貰つ

たばかりなの、一緒に頂きましょう」

まさに窓際の乙女と言わんばかりの美貌を持つカリム・グラシアは優雅な動作に茶

目つ氣を乗せてそう言った。

隣に直立不動の姿勢で立つのはシャツハ・ヌエラでカリムと同じく時空管理局にも席を持つ女。

聖王陛下に唾を吐くに等しい行いを、聖王陛下の僕が行っている様に感じたオルランドは口の端を一瞬持ち上げ静かに舌打ちした。

「騎士カリム、私に話とは……」

同じテーブルに着くなど、この身に貴様らと同じところまで墮ちろと言っているのか。

オルランドの眉間の皺はさらに厳しいモノになっていく。

その姿を見たカリムは、オルランドのために用意されたティーカップとお茶菓子を寂しげに見ると、努めて明るく話始めた。

「今日はね、あなたに会って欲しい子がいるから呼んだの」

「会って欲しい子……?」

「ええ、その子の名前はティーン・ランスター、ちよつと訳ありの子でね。その子の良き友人になって欲しいのよ」

オルランドは一瞬ポカんと口を開けた。

その内心はこいつは何を言っているんだ?である。

「……騎士カリム、それはなんの冗談ですか？ 欠片も笑えない」

「そんなつもりは無いわ。言ったでしょ？ この子は少し訳ありだね。外にあまり出たことが無いの、そのせいで同年代で同世代の友人がいない。そんな悲しい子を救済するのも我々聖王教会の務めだと私は考えているのだけど？」

「その程度の問題児、世事には溢れている。どうしても言うなら、そこいらの侍者にでもさせれば良いでしょう？」

その仲間を軽んじるような物言いに、シャツハが口を出そうとする。

「オルランド、アナタは！」

その声に応えるようにオルランドは、片眉を上げて挑発的にシャツハを見据えた。

「シャツハ、止めなさい」

「騎士カリム……、ですが！」

だが、カリムの瞳に根負けしたシャツハは引き下がる。

「騎士オルランド、友人を作れと私は言っているの、これは慈善事業では無いわ」

「私にそんな者、必要ありません」

「あなたが何と言おうと、あなたの上司である私が必要だと思ったから言っているの……これは、命令です」

オルランドはその瞬間に瞳孔が開いていくのが理解出来た。

それは、明確な怒りであった。

内部は、溶岩のように煮えたぎり、外部は氷のように冷え切っていく。嫌、まさしくオルランドの周囲の温度は下がっていた。

ただし、その怒りも次の一言で収められる。

「……この件に関しては、デイオニソス司教も了解済みです」

その一言がオルランドの怒りを鎮火させていく。

「司教様の了解を得ているのなら、仕方が無い。……了解した」

オルランドはそう言うと、カリムの再度の茶の席への同席を断り退室した。

重く古い扉が閉じられるのを聞き終えたカリムとシャツハは重い溜息を思わず零してしまった。

「あの子にも困ったものね……」

「まったくです」

二人はそう言うと、今しがたオルランドが立っていた場所を見る。

その足元には、氷の花が咲いていた。

オルランドはカリムの職務室を退室した後、速足でアンジェリカがいる元へと向かった。

「アンジェリカ、私だ……入るぞ」

オランダはそう言うと、了解を得ずに扉を開く。

そこには、一糸纏わぬアンジェリカの姿があつた。

その姿は生まれたての天使の如く純白で、黄金色の髪が風に靡き、その緑と赤の瞳が大きく開かれていても、美しさを損なわせることは無く。

肌に赤みが増して行つても、それは太陽に伸びる花卉のように健気だった。

そんな様子をまざまざと見たオランダは、顔を赤くし逃げるように扉を閉める。

「す、すまない」

扉の内側から返事が無い。

嫌われてしまったらどうか……。

オランダの頬を嫌な汗が流れる。

オランダが自己嫌悪していると、静かに扉が開かれた。

その扉の隙間から白魚のような手が覗き見えると、アンジェリカがジト目で少しだけ顔を出して言った。

「お兄様のエッチ……」

そこから、オランダによる怒涛の謝罪があつたのは言うに及ばずである。

「まあ、オランダお兄様にも遂にお友達が出来ますのね！」

ベッドの上にちよこんと座るアンジェリカはオルランドの話しを聞き終わると、花が咲いたように笑い、両掌を優しく重ね合わせた。

「……司教様も余計なことをして下さる」

オルランドがそう言うと、アンジェリカは不思議そうな顔をして言った。

「でも、オルランドお兄様にはお友達がいらないじゃありませんか？これは、良い機会ですよ！」

オルランドは、後頭部を二度搔くと言った。

「なにを言っているんだアンジェリカ、友の一人や二人ぐらい私にもいるぞ？」

「どなたですか？」

「どなたって……」

オルランドは考えるまでも無くその答えに行きつく。

「すまない、私はアンジェリカに嘘をついてしまった」

「まあ、お兄様は嘘をつかれたのですか？私は悲しいです……」

そう言っつてしよんぼりとするアンジェリカにオルランドは、あたふたとするばかりであつた。

オルランドのそんな姿を見たアンジェリカはくすつと笑うと、ずいつと身を乗り出してきた。

「それでしたら、私のお願いを聞いて下さい！」

「な、なんだ……？」

アンジェリカはそう言うと、勢いよくオルランドの腰に抱き着いた。

「今日は一日、私と遊んで下さい！」

オルランドは少し顔を赤くしながら、じやれついて来るアンジェリカの頭を優しく撫でるとその願いを了承した。

その優しい姿は、アンジェリカにしか見せない姿だった。

それから一週間後——

聖王教会に通じる街道を歩く八神はやてとその守護騎士ヴィータは困り果てていた。

「ひつく……うぐう……あ、り、がと、う、……ひう」

その元凶たるティーノ・ランスターは、はやてに手を引かれ、泣きながら感謝すると言う高等技術をやってのけていた。

「ほら、もう泣き止み……、ああ、鼻水出てる。ほら、チくん」

はやてに鼻水の処理をされるがまま受け入れているティーノは、何とか泣き止もうと努力する。

その頑張りを見たはやては、その努力を誉めるようにティーノの頭を優しく撫でた。

そんな様子を見たヴィータは、つい先ほどまでの事を思い出す。

D S A A インターミドルに出場するために、毎日訓練に明け暮れるヴィヴィオ達とそれに嫌々つき合わされ、ティアナの仕事の関係で高町家に世話になっているティーノが毎日毎日おもちやにされていたのを――。

そんな状況下でのはやての、お友達を作りに行こうと言う誘いをしたはやては、ティーノにとつてまさしく女神に見えたのだろう。

それはもう、泣きながら感謝する程に嬉しかったのだろう……。

ヴィータは一人溜息を零す。

はやてに手を引かれトポトポ歩くティーノを見ながら、なんというか不憫な奴、と思っていたヴィータは、気が付いた。

「あつ、ついたみたいだな……」

聖王教会の大門の先には騎士カリムにシスター・シャツハの姿、さらにその隣にはティーノの同年代位の男の子がいた。

「ようこそ、はやて！」

「お邪魔します」

はやてとカリムが少し挨拶と世間話をする、カリムは目線を下げた。

目線が合ったことに気が付いたティーノは慌てて頭を下げた。

「ティーノ・ランスターです。助けて下さってありがとうございます」
「えっ……？」

「ああ、カリムこつちの話しやから気にせんで」

そしてカリムは小さな声で、オルランドに促す。

皆がその小さな騎士が普通な挨拶をするのだと思っていた。

だが、帰って来た言葉は、予想外であった。

「オルランド・グランデイスです」

「うん、よろしくな」

「……あなたの名は良く知っていますよ。八神はやて、闇の書の主であり、歩くロストロギア、……犯罪者が良くノコノコとここに来れますね？」

その言葉は毒であった。

しかも質の悪いことに、傷口に塗り込むタイプの猛毒であった。

「オルランド!!」

シヤツハが怒鳴るがオルランドはどこ吹く風であった。

そして、ヴィータは一瞬で怒気を膨れ上がらせると、一步踏み出そうとしてはやてにそれを止められる。

ヴィータははやての顔を見るが、その表情を見て引き下がった。

「そうやね……。私は過去に大きな罪を犯してしまった。今でも、それが許されたなんて思つてへんよ。やから、私は私なりのやり方で人のためになろうと努力してる」

そう真摯に向き合つたはやてに対し、オルランドは鼻で笑うことで返す。

「どうだか……。現に今ここに危険人物を連れてきている時点でその言葉を信ずることなど、到底出来んがな」

「どういふことかな……。？」

「そこにいる情けない顔をした男のことだ。……。この世界の裏側を知っている者であれば誰でも知っているだろうその顔……。お前、ジェイル・スカリエツィの関係者だろ？」

ティーノはその名前に一瞬立ち眩む。

足元がおぼつかず、粘土の上に立っているかのような酔いを味わう。

その不快感が止まりボヤ付いた視界が正常に戻ると、はやての温かい手が自身の手を力強く握つてくれているのが見えた。

だが、オルランドは止まらない。

「その反応、凶星か？ 益々と言つたところだな。こんな犯罪者達と友好関係を続けているなど、……。疑われても仕方ありませんよ騎士カリム？」

ヴィータは歯をガチリと鳴らし、はやては悲しい顔をしていた。

悲しんでいた。

優しい、大切な人が悲しんでいた。

だから――

「……謝れよ」

「うん……?」

ティーノは一步踏み出す。

「はやてさんやヴィータに謝れ」

「はっ……本当のことを言っただけだろうか?」

ティーノはさらに一步踏み出す。

「謝れって言ってるんだ」

ティーノのその顔は、つい先ほどまでの情けない顔ではなかった。

それは、どこまでも強い大切な人を守ろうとする男の顔であった。

二人の間に剣呑な空気が流れる。

少しでも刺激を与えれば破裂するダイナマイトのような危うさを孕んだ空気が、二人を包み込む。

その時、黙ってことこの成り行きを見守っていたカリムが声を発した。

「二人共、ストレスが溜まってるとみただし、ここは一つ模擬戦をしようのはいかがか

しらす?」

その提案に二人は頷く。

その素直さに、まだまだ子供だと思いつつも、カリムは念話ではやてとヴィータに謝罪した。

そして、オルランドとティーノは聖王教会の模擬戦場で向き合っていた。

シヤツハからルールを説明された二人は、それぞれ準備を整える。

「セットアップ」

ティーノがバリアジャケットを纏うと、オルランドは剣十字がついたネックレスを手に持ち唱える。

「デュリンダナ、甲冑を……」

すると、オルランドの全身を氷の結晶が包み込み爆ぜた。

現れた姿は、白銀の服に黄金の線が入り、必要最低限の箇所だけ甲冑を身に着けた軽装な姿でその身を現した。

それ以上に目を見張るのが、左手に持たれた鞘と納められた剣だ。

無駄な宝飾はされていらないが、美しさが滲みだす鞘、さらにその長さはオルランドの背丈以上であった。

その姿を見たティーノは完全にスイッチが入ってしまった。
何故なら似ているからだ。

越えなければならぬ壁。

あの、炎の騎士に――

シヤツハは開始の合図を発する。

「はじめッ！」

良い終わると同時に、ティーノは右手の銃口をオルランドに向けていた。

「ブレイズキャノン」

エテルナシグマが発すると同時に着弾する。

決まったかに思われた初撃ではあったが、ティーノは面白くなさそうに顔を歪め銃口を下げずに構えたままであった。

砂埃の先に、まるで鏡のような何かが太陽の光を反射していた。

「……誰にケンカを売ったのか、後悔させてやる」

オルランドの周囲を光の粒が舞う。

それは、ブレイズキャノンを受け止めた氷の盾であった。

振るわれた両刃の剣が、光を集め眩いまでに輝く。

しかして、その周囲を凍土が支配していく。

両者を見ていたはやてとヴィータは驚く。

「あれは……」

その驚きにかリムが答えた。

「オルランド・グランデイス……古代ベルカより聖王家を守り続けて来たグランデイス家の次期当主にして氷結の剣デュリンダナの担い手、そして聖王教会唯一の先天性スキル凍結を授かり生まれた唯一の騎士」

オルランドがデュリンダナを振るう。

一振りしただけで、空気が凍てつき氷の礫が舞う。

「今度は、こちらの番だ」

ティーノが拳を構える。

オルランドが剣を振るいあげる。

そして、拳と剣は交わった。

オルランド2

その目を見た時——

気に入らなかつた

なにが——？

そのあり方が、世界の見方が、まるでこの世を斜め上から見ているような——
なにかに、心の在り方を委ねているようで——

全ての悪に対して、己が完全正義であると物語っているその瞳が——
気に入らなかつた——

まるで一秒間事に昼から夜になったかのような、眩いまでの火花。

金属音は軽やかに、レンガ造りの壁に反響しオーケストラとなる。

踏みしだき砕け散る氷の大地、薙ぎ払われる炎のカーテン。

オルランドとティーノの奏でる演武は、まるで示し合わされ綿密に計算されつくした
ダンスのようであつた。

紅い魔力を纏つた右拳がオルランドの右頬を捕える。

唸り声を高らかに、全体重に魔力加速をプラスし叩きつける。

しかししてその一撃は、氷上を滑る岩石の如く、氷の欠片を巻き上げながら地面に突き刺さる。

続けざまの爆音、重ねて砂埃が巻き上がる。

振り払われた金色の凍剣。

横なぎの必殺を撃たれる前に、ティーノは地面に突き刺さった右手を軸に左足で踵落としでオルランドの腕を蹴り落とす。

眼前に突き刺さったデュリンダナの切先に、ティーノの瞳が写り込む。

写り込んだ瞳は、上空を睨みつけていた。

その写り込んだ視線を追えば、歯を？き出しにして射殺さんばかりにティーノを睨みつけるオルランドの姿があった。

その殺意を受けても尚、ティーノは更なる殺意を上乗せして睨みつける。

オルランドの熱した殺意をティーノの冷めた殺意が中和し、その場の空間をヘドロと変える。

一度足を踏み入れれば逃げ場など無い。

その殺意の渦に心を沈めていく。

睨みつけていた一瞬の間隔、次の時にはティーノの顔面はオルランドにより蹴り上げられていた。

舞う血潮、ガードの隙すら無いまるで道頃の石ころを全力で蹴り抜くようなその動作でティーノは高く空に浮かび上がる。

ティーノの瞳に空の青が写り込み、次に移り込んで来たのは、吹き飛んでいくオルランドの姿。

ブリッツアクションを二段階、併用したティーノが速力をそのままにオルランドの腹を蹴り抜いたのだ。

オルランドは体をくの字に曲げ、聖王教会の壁に突き刺さり粉碎した。

ティーノは止まらない。

右手からブレイズキャノンを放ち、左手からはステインガーレイを高速連射し、周囲の空間からはステインガーブレードを放ち続ける。

その様は、戦争の名を借りた暴虐のように荒々しく対象を殲滅せんがためと呐喊し続ける。

只々無表情に機械の様に、作業をこなしていく。

だが世界の時間が次の瞬間に停止した。

襲い来る危機感、ティーノは体を移動させようと足に力を入れ違和感に気が付く。

見渡す限りの大地が凍てついていた。

ティーノの足底は、地面に接着されたかのようにピクリとも動かない。

意識を足に集中させ何とか氷台から脱しようとするが、力を入れようとも脱することは叶わない。

パキリと目の前で音がした。

ティーノが前を向くと、そこには所々に傷を負ったオルランドがいた。

オルランドはまるで勝負が決したとでも言いたいかののように世界と同化してはいないかと言うほどに冷めた瞳でティーノを見つめ、無言のまま剣を振り上げた。

そこにあつたのは、断罪者の姿、罪人に感情移入などすることなど数の暴力により忘れてしまった哀れな存在。

剣が振り下ろされた瞬間、ティーノは両手を自身の足に向け魔弾を放つ。

それと同時にブリッツアクションを発動、緊急離脱した。

「はあ……はあ……はあ……」

自身の喉の鼓動が聞こえてくる。

煩わしさを感じながらもそれをしなければ死んでしまうから仕方が無いと受け入れる。

それは、オルランドも同様で荒い呼吸を鬱陶しいそうにしている。

お互いに今は眼前の敵を倒すことに、全神経を使っていたかった。

ティーノは傷だらけとなった両足を即座に回復魔法を使い癒していく。

オルランドは眼前のティーノを見ながら一つのあることが頭の中で繰り返し返し囁かれていた。

悪を滅せ——

悪を滅せ——

悪を滅せ——

その声が攻撃を受ける度に鮮明に聞こえてくる。

優しいその声が聞こえてくる。

ティーノは考えていた。

どうしてこんなにも自分は怒りを露わにしているのだろうか、と——

思い出していく。

どこからなのか、と——

そして行き着いた。

その答えに——

ジェイル・スカリエツティ……

その名で呼ばれた時、言い様の無い虚無感と絶望とそしてそれらを食らい尽くす怒りが芽生えたのだと。

オルランドは考える。

悪とは何かを——

眼前の男は悪なのかと——

だが、勘づいてしまった。

アイツはジェイル・スカリエッティに近しい存在なのだ。

ならば——

「悪を滅しなさい。守るために——、オルランド・グランデイス」

その声はつきりと耳元で聞こえた。

だから——

オルランドが声を発する。

戦いの終わりを告げる声を——。

「ジェイル・スカリエッティ、貴様を滅する……」

音が風に乗る、ティーノの耳に届いた瞬間、世界が震えた。

それはティーノが内部の魔力を活性化させたためであった。

ティーノが吠える。

「その名で、私を呼ぶなああああッ!!」

エテルナシグマがその心の震えに応えるようにカートリッジを次々とロードしていく。

葉莢が落ちていく中でティーノは右手の銃口をオルランドに向けていた。円形の魔法陣の淵を炎が走る。

八枚のプレートが形成され、眼前に固定されていく。

オルランドはその姿を見ながら、確信する。

炎に包まれたティーノの姿はまさしく悪魔のそれであり、その中で光る金色の瞳は巨悪の輝きだと。

ならば、ここで滅する——。

オルランドは、デュリンダナを逆手に持つと振り上げた。

その姿は、聖王が選定の剣を引き抜いた時と同じであった。

オルランドが、デュリンダナを地面に突き刺そうとして気が付いた。

自身の四肢に鎖が巻き付いているのを——。

それは、四つの空間から伸びてきていた。

オルランドは、ティーノのバインドに捕らわれていた。

気が付いた時には遅かった。

ティーノはすでに魔力をチャージしている。

小手技では、どうすることも出来ない。

なら、力付くで引きちぎる。

オルランドはぼそりと呟いた。

「武装形態……」

そう唱えたオルランドを再び氷の塊が覆い隠し、砕け散った。

そこにいたのは、青年だった。

その青年……、否、オルランドは強引に鎖を引きちぎると、止まっていた作業を続けるかのように、ゆつくりと地面に切先を突き刺した。

「イスベルグ・プルガトワール」

ティーノの眼前に現れたのは氷山の群れであった。

それはオルランドを中心に広がり続けている。

大小様々な、氷で出来た剣山が斬り刻もうとティーノに迫る。

ただ、ティーノはそんな事など関係が無いと言わんばかりに構えを解かなかつた。

瞳は未だに怒りに燃えている。

訂正など受け付けない——。

ただ、アイツを消す。

「ブレイズ・イレイザーツ!!」

炎の塊と氷山が激突する。

小さな太陽は、氷山の群れを溶かし砕き突き進んでいく。

炎と氷、対局に位置するそれがお互いを喰い殺し合いながら激突を繰り返す。だがティーノは見えてしまった。

氷山の先で、オルランドが勝利の笑みを浮かべるのを――。

ティーノが放ったブレイズ・イレイザーは、確かに貫通力に優れイスベルグ・プルガトワールを粉々にしながら突き進んでいた。

だが、それは数の暴力と大人の姿となり魔力運用能力を格段に上げたオルランドの前では、脆かった。

ティーノの顔を絶望が支配していく。

スターライトブレイカーにも勝った魔法だぞ――

だが、現実には負けてしまった。

イスベルグ・プルガトワールがティーノを滅しようと迫っていく。

ティーノは動くことが出来ない。

後一進みでティーノを滅することが出来る。

そう確信していたオルランドだが、そこに忘れていた存在が割り込んで来た。

「そこまでッ!!」

それは突然の第三者の声。

夜天の書の主、八神はやての声であった。

そして、この場には夜天の守護騎士がいる。

ティーノを斬り刻もうとした氷剣の群れが鉄槌により砕かれる。

ティーノの眼前には、バリアジャケットを纏いグラーフアイゼンを握るヴィータの姿があった。

ヴィータは油断することなくオルランドを睨みつける。

オルランドは更なる悪の登場に歓喜の笑みを浮かべそれを見つめ返した。すると、オルランドの首元にひんやりとした何かが押し当てられた。

「……そこまでです。オルランド」

それは、バリアジャケットを纏ったシャツハのヴィンデルシャフトだった。

「シスター・シャツハ……？」

オルランドはシャツハの姿を確認すると、目の焦点が合っていく。

そして、ピントが合致すると甲冑を解除し、デュリンダナを鞘に納めた。

「……興が醒めた」

オルランドはそう言うと、子供の姿に戻り踵を返し教会内に戻ろうとする。

「オルランドっ！」

シャツハが叫ぶと、オルランドは立ち止まり目線だけを後方に向ける。

「見ずともわかることだが、敢えて言う。——私の勝ちだ」

そして、オルランドは姿を消した。

ヴィータが息を少しだけ吐き出し、振り返る。

兎にも角にも、まず　りつけてやろう。

そう思いながら、視界にティーノを視界に納めると、ヴィータは思わず唾然としてしまった。

「お前——」

そこには、何かは抜け落ちてしまったかのように、立ちすくむティーノの姿があつた。

アンジェリカ

そこは根底の世界——

人が誰しもが持つと言われる、夢の世界——

その名は過去——

人知の限りを尽くそうともいかなる神秘を用いようとも変えることの出来ない悠久の監獄。

暗い雨粒が瞼の下先に当たるような感覚が、ジェイルの瞳をこじ開けた。

「——う、ん……。俺は寝ていたのか……？」

ジェイルは、寝起きにぼやけた視界で瞳に写り込む世界を見る。

暖かさなんて微塵も感じない石で作られた部屋。

小さな窓は木で出来た淵で固定されており、外が吹雪なのだろうガラスを風が叩いている。

視線の恥には暖炉が炎を抱え、冷たい室内に微かな明かりと温もりを与えていた。

ジェイルは、手元の感触に気が付いた。

そこには毛布が敷かれており、冷たい床と自身の体を区切っていた。

それを握りしめ皺を作ってから、その手を軸に体を起き上がらせる。「起きたのね」

その声は不思議な感覚で、腹の底に落ち着くような、ずつと聞いていたい不思議な声だった。

音が聞こえた先に振り返れば、そこには心配そうな顔をしている誰かがいた。

その人がとても……とても大切な人なのだ、感情が処理していく。

だから、ジェイルはその人に対して心配させてしまったのを謝罪した。

「すまない、仕事が思いのほかキツくてね」

ジェイルがそう言うと、その人は少しだけ眉を上げ怒ったかのような動きをすると、ジェイルに近づき、ずいっと手に持っていた皿を渡してきた。

「スープ……、作ったから食べなさい」

その姿に、ジェイルははにかむと皿を受け取ろうと手を伸ばした。

だが、ジェイルに手渡される前にスープの入った皿は冷たい床へと吸い込まれていった。

突然支えを失い、物理の法則に捕らわれ食べることが出来なくなってしまうスープを見て、ジェイルは一瞬声を失う。

そして、視線をスープから手渡そうとしていた人物に向ける。

そこには、闇が広がっていた。

何も無かった。

ただ、空高くには紅く黒い太陽が輝くのみ。

その欲に塗れた太陽を見上げていると、足元から声がした。

「……どうして、守ってくれなかったの？」

今までスूपだと思っていた何かから声がしていた。

「どうして、私を行かせたの……？」

スूपだと思っていたモノは、大切な人が溶けて出来上がった何かだった。

「あなたが弱いから、弱くて何も出来ないから……、だから私を守ることも出来ない

……」

視線の全てを紅と黒が埋め尽くしていく。

欲に塗れた太陽がすぐそこにまで来ていた。

「俺は——、僕は——……」

そして、欲に包まれたジェイルはその憎しみと慈愛を含ませた声を聞いた。

「ティーノ、あなたには私を守るために……、何が出来るの……？」

ヴィータは俯き微動だにしないティーノを心配し、一步踏み出す。

気にするな——

次は負けないようにするために、あたしが鍛えてやるよ——

次こそ、アイツをぎやふんと言わせてやろうぜ——

そう言つてやろうとして、その肩に手を乗せようとして、違和感に気が付いた。

自分が話しかけていたティーノがまるで、土人形にでも変わってしまったかのよう
な、感情を向けるに値しない無価値なモノに思えて来た。

「ヴィータッ!!」

それは歴戦の騎士だったからだろう……。

何度も何度も命を懸けた戦いを繰り返して来たヴォルケンリッターの騎士だからこ
そ出来たことだった。

はやての声が聞こえた瞬間、ヴィータはグラーフアイゼンで何かを叩き落とし、その
場から離脱していた。

はやての前に着地すると、即座にシールドを展開した。

ほぼ無意識の行動。

それは、守ることを宿命付けられた存在だからこそその行動、故に——

無意識の内に、ヴィータはティーノを主を守るために打倒しなければならぬ存在と
認識していた。

ティーノとカリムは、ティーノを睨みつけていた。

ヴィータは何が起こってもはやてだけは、守ることが出来るようにとグラーフアイゼンを握りしめる。

シャツハは、感じたことの無い空気の変化に体を硬直させ、オルランドは足を止め振り返る。

あなたには私を守るために……、何が出来ると……？

その声に導かれるようにして、ティーノは行動を起こしていく。

「あ、それは……？」

はやてがそれに気が付き口にした。

ティーノの足元にはミッド式でもベルカ式でもない魔法陣が、否、テンプレートが展開していた。

それはまるで歯車のような形をしており、大小様々な歯車が互いを削り合いながら回転を続けている。

エテルナシグマが叫び声を上げる様に点滅を繰り返しながら、軋み音を出す。

そしてティーノは、最後のトリガーを引く。

「インヒューレントスキル発動……、アンリミテッド・デザ——」
はやてが叫ぶ。

「あかん、ティーノ!!」

その時、優しい風が吹き抜けた。

「どうして、貴方は泣いているのですか……?」

その人物は突然、皆の前に現れた。

嫌、ティーノの変貌から視線を外すことが出来なかっただけかもしれない。

だが、誰も気づくことが出来なかった。

そして、その少女は何事も無いかのように欲に塗れた泥の中を進み、ティーノの手を取った。

その瞬間、ティーノが生み出した泥が何事も無かったかのように掻き消えた。

泥を薙ぎ倒した魔力光を見たはやとヴィータは目を見開く。

「虹色の魔力光……?」

それはヴィヴィオだけの光、聖王のクローンであるヴィヴィオだけが次元世界でただ一人持つことを許された光であるはずだった。

掌に温もりを感じたティーノは、おずおすと顔を持ち上げる。

ティーノの眼前に写り込んで来たのはヴィヴィオと良く似た少女だった。

少しくすんだ金髪を肩の近くで切り揃え、肌は粉雪の様に白く、緑と赤の瞳は慈愛に揺れている。

「アンジェリカ様、どうして——？」

シヤツハが状況について行けずにたまらず声を出した。

「お兄様が、何か悪いことをしている気がして外を見てみると、この方と戦っているではありませんか。だから、心配で出てきてしまいました」

アンジェリカはそう言うと、ティーノの全身を見て申し訳なさそうにした。

「……すみません、私の剣が貴方を傷つけてしまいました。この責任は、全て私にあります」

そうアンジェリカは言うと、瞼をゆつくりと閉じる。

すると、アンジェリカの全身を薄く虹色の光が覆い、その光がアンジェリカの手からティーノの全身に伝搬していく。

ティーノの全身を虹色が包み込んだ時、ティーノの傷はすべて塞がっていた。

その状況に驚いたティーノがアンジェリカを見ると、アンジェリカはティーノに優しく微笑みかけた。

その笑顔を見てティーノの頬が一気に紅潮していく。

そして、ティーノが照れを隠すように目線を下げると、ティーノの両手はしっかりとアンジェリカに握られていた。

その視線に気が付いたアンジェリカは申し訳なさそうに手を離す。

「あつ……」

その温もりが離れていくのが、何故だか無性に悲しくて恋しくて、自然と口から残念に思う声が出ていた。

そんな様子を見ていたアンジェリカは首をコテンと傾げる。

「なにをしているんだアンジェリカっ!!」

「お、お兄様!」

オルランドはアンジェリカの腕を強引に取ると、まるでティーノ引きはがすように自身に引き寄せた。

アンジェリカが困惑の表情でオルランドを見ると、オルランドは怒りの籠った瞳で言った。

「何をしているんだ。そいつが誰か分かっているのか!」

そう言つてティーノを睨みつけるオルランドだったが、それはアンジェリカによつて阻止された。

「何をしているのかと、問いたいのは私の方です。この方は、お兄様の御友人になつて下さる方なのでしょう?」

アンジェリカが怒り顔でそう言うと、ティーノとオルランドが吼える。

「はあ!?!」

「ほら、息もピッタリじゃないですか！」

アンジェリカはそう言うと、無理矢理オランダとティーノの手を取った。

「仲直りの握手です！」

アンジェリカは一人で勝手に解釈し納得すると、強引に実行しようとする。

だがしかし、オランダとティーノは意地でも仲直りをしたくないのか、手に力を入れなるとかして、握手しないで済もうと抗い続ける。

アンジェリカも両手に力を入れ無理矢理に繋がそうとする。

「ぐぬぬぬぬ」

力一杯にオランダとティーノの手を引くアンジェリカは、体力が無いからだろうか顔を真っ赤にしながら力んでいたが、突如として頭から煙を吐き出しパンクしてしまい、崩れ落ちようとした。

オランダとティーノがアンジェリカを支えようと手を伸ばす。

すると、アンジェリカはその手を掴み直し強引に握手させた。

「へっ……？」

ティーノとオランダから気の抜けた声が漏れ出し、アンジェリカは向日葵の様に笑った。

「仲直りもしたことですし、私の部屋でお話してもっと親睦を深めましょう！よろし

いですか、騎士カリム？」

「え、ええ……」

「では、向かいましょう！」

アンジェリカはそう言うのと、鼻歌を歌いながら教会に握手したままの二人の手を引いて入って行った。

嵐の様に去って行った三人を見ていた四人は、気が抜けたように息を吐き出した。

そしてはやてが厳しい顔のまままでカリムに尋ねた。

「カリム、あの子が例の……？」

「はい、あの子の名前はアンジェリカ・ゼーゲブレヒト……、今も尚教会が秘匿し続ける聖王家の血を引継ぐ最後の一人です」

「じゃあ、あの能力は……」

「はい、時と共に血は薄れその力も衰えましたが、紛れもなくあの力は聖王の鎧によるものです」

そして今度はカリムが厳しい表情を作り出した。

「ティーン君のあの力、そしてあの振舞い、やはり彼は……？」

「私も今まで様々な可能性を考えてたけど、その幅は一気に狭くなってもうた……」

「では、やはり……？」

「そうやね、ティーノの中に彼は生きている」

アンジェリカの部屋に通されたティーノとオルランドは未だに手を繋ぎ続けていた。

「お前が先に手を離せ」

「僕はまだまだ余裕だね。お前が先に手を離したら？」

ティーノとオルランドは互いの手を握りつぶさんばかりの力を籠め、互いに牽制しあっていた。

それを見たアンジェリカは仲直りが出来たと大いに喜んでいた。

その様子を見たティーノとオルランドは互いが馬鹿に写り、どちらかともなく手を離した。

互いが互いに悪感情を持っていながら、オルランドもティーノも感じていた。

コイツとは、長い付き合いになってしまいかもしれないと――

その日の夜、ティーノは八神家に泊まることとなった。

そして――

「なんの真似だ……?」

「僕と勝負して欲しい」

ティーノは八神家のすぐ裏手に存在する砂浜で炎の騎士シグナムと対面していた。

「する必要がない」

シグナムは、当たり前のこととしてそれを断った。

当然だ、シグナムとて仕事や他の事、やらなければならぬことが山のようにある。無駄な労力は割きたくない。

だが、ティーノは断られるのが分かっていたからこそ、すでにバリアジャケットを纏っていた。

その瞳は、真剣なモノとなっていた。

そして、瞳が言っていた。

背を向けてもいいが、攻撃するぞと――

シグナムの頬が軽く上がる。

「私も時間が無い身だ。すぐに終わらせる」

シグナムがバリアジャケットを纏ったと同時に、ティーノは砂を蹴り上げ、拳を振り上げた。

お前にも負けたくないが、アイツにはもつと負けたくない。

次こそは――

「僕が勝つツ!!」

友情

いつもの朝——

道路を走る車の音——

空を飛ぶ飛行機の音——

フライパンで卵焼きを作る音——

風がカーテンをはためかせる音——

いつもの……朝……

階下から階段を上る足音が聞こえて来た。

それでもティーンは、目覚めようとはしない。

いつものリスのパジャマに身を包み。

全力で布団にくるまっていた。

「ティーン……、朝だよ……！」

朝食の準備を終えたなのは、扉の前でティーンを呼ぶ。

だが、室内からは物音一つしない。

なのは笑顔のままドアノブを回した。

ガチャリと音を出し開かれた扉の先では、ヴィヴィオのベッドの上で布団に包まる
ティーノが静かに寝息を立てていた。

そんな姿を見たなのは、叩き起こすでもなく呼びかけて起こすでもなく首元と膝裏
に手を入れて抱き上げる。

布団の温もりを奪われたティーノは少しだけ抗議するように声を漏らすと、なのはの
首元の襟をつかみなのはの首元に顔を寄せて再び気持ちよさそうに眠りについた。

その動作が可愛くて、なのはも幸せそうに笑う。

普段と違うギャップと言う奴だろうか……。

ここまで甘えて貰えるのが、嬉しかった。

なのはがティーノを抱いたまま階段を下りると、そこにはフェイトの姿があった。
フェイトがなのは達に気が付くと、小走りに近寄る。

そしてティーノがまだ寝ていることに気が付いたフェイトは不思議そうにした。
いつもなら、有無を言わずに起こしていたからだ。

するとなのはは小悪魔的な笑みを作りティーノをフェイトに渡した。

そして、あたふたするフェイトを置いてどこかに消えていった。

それから数分後、香ばしい匂いがしてティーノは重い瞼を空けた。

「あれ……?」

ティーノが寝ていたのは、ソファアの上だった。

ティーノは不思議に思いながら首をコテンとさせる。

すると、頭上からなのはが顔を出し顔を洗ってくるように言った。

ティーノはそれに従ってトテトテと廊下を歩き、洗面台にまで辿り着き冷たい水で顔を洗い歯を磨いた。

妙にゴワゴワする体に違和感を覚えたまま――

そして、目が覚め鏡に映る自分を見たと同時に、ティーノは声にならない声を発した。

ドタドタと足音が響き渡り洗面台に続くドアが乱暴に開かれる。

扉の先には顔を真っ赤にしたティーノがいた。

「なんですか、これっ!」

ティーノが身に纏っていた服は、曰くゴスロリの衣装だった。

どこから入手したのか、男の子なのに異様に似合ってしまったているティーノを見ながらフェイトは溜息を零した。

なのはは、そんなティーノの反応がいちいち面白いのか満面の笑みで朝食を食べるよ
うに促す。

「こんな格好で食べる訳がないでしょう!」

至極ごもつともだとフェイトは思う。

そして言い合いを始めるのはとティーノ。

ある種いつもの朝の光景に、フェイトは今日も平和だと思いつつ味噌汁を啜った。

普段の服に着替え、朝食を食べたティーノはいつもの如く聖王教会に足を運ぼうとしていた。

すると、なのはが声をかけて来た。

「ええ、もう行っちゃおうの〜?」

なのはに続きフェイトも玄関に出て来た。

いつもなら普通に送り出してくれるはずなのにとティーノが不思議に思っていると、エテルナシグマがカレンダーを表示した。

そしてティーノは、何故なのはやフェイトがこんなにもテンションが高いのかを理解した。

理解して、ティーノは溜息を零した。

「大丈夫ですよ」

「へっ……?」

「ヴィヴィオ達なら、間違いなく最高の成績で帰って来ますよ」

そう、今日はヴィヴィオ達の初のインターミドルであった。

今日の日のために、いままでの訓練があったと言っても過言ではない。

それを、ヴィヴィオ達の実力を知っているのはだからこそ、心配で仕方が無かったのだ。

靴を履き終えたティーノは立ち上がり振り返る。

「ヴィヴィオ達の実力で、早々に負ける筈がありませんよ。身近で見て来た僕だからこそそれは良く分かります。……だから、大丈夫ですよ。——行つてきます！」

そう言つて出かけて行つてしまったティーノを見ながら、なのはとフェイトは口をポカんと開けていた。

「なんと言うか……」

「子供の成長は早いね」

なのは宅から徒歩数十分の駅まで歩いていくと、そこにはすでに待ち人がいた。

「はやてさん！」

はやては、ティーノに気が付くとはにかみ小さく手を振った。

電車に揺られながら、聖王教会に向かうティーノとはやて、二人は電車の揺れに心地よさを感じながら座席に座っていた。

流れる町の景色を見ながら、はやてが問いかける。

「オルランド君とは仲良くなれた？」

その問いにティーノはそっぽを向くと、僅かに頬を膨らませる。

「今のところ、戦績は10対8で負けてる……」

はやては、別にその事が聞きたかった訳ではないのだけれども、と思いつながら膨れるティーノの頬をつついた。

電車がトンネルに入り車内に電気が灯る。

向かい側の窓には、暗闇に浮かぶ自身の顔が見えた。

なんだか眠たそうな顔だ。

こんなんじゃ、アイツに負けてしまう。

ティーノは突然量頬を両手で叩いた。

トンネルから抜けた電車の窓からは、まるで中世の世界のような光景が広がっていた。

聖王教会まで後少しである。

「よしっ！」

聖王教会その広大な敷地内にくつももあるグラウンドの一つ、そこには将来の聖王教会騎士を目指す者達が切磋琢磨していた。

鉄と鉄がぶつかり合い、肉体からは汗が飛び散る。

瞳からは生気が溢れ、明日を信じて疑われない者達が鍛え合い、友情を育んでいる。

そんな者達の輪から外れ、一人教会の壁で出来た影の中で氷の刃を振るうのはオルランドだった。

「いつまで見ているつもりだ……?」

オルランドが剣を振るうのを止め振り返れば、木陰からティーノが姿を現した。

「お前の準備が整うのを待ってやってたんだよ」

ティーノが腕を組みそう言うと、オルランドはつまらなさそうな顔をする。

「そういう貴様の方が整ってないように見えるが?」

「お前相手には、ちょうど良いハンデだろ?」

「私に負け越している奴の言うセリフとは思えんな」

「なに、を……!!」

ティーノがキレそうになると、オルランドは不意にデュリンダナをティーノに向け構えた。

「構えろ、準備運動くらいは付き合ってやる」

オルランドの意図に気が付いたティーノは、片眉を上げた。

「はっ、吠えてろよ……。昨日の僕より、今日の僕がどれだけ強くなったのか見せてやる」

そして、二人は互いの武器をぶつけ合った。

そんな二人の様子を教会の廊下の窓から見ながら、カリムとはやては話し合いをして
いた。

「もう、随分と仲良くなりましたね」

「最初の方は、どうなるかと思っただけど……時間が解決してくれてよかったわ」

はやては、そう言ってから優し気に笑う。

「それと、アンジェリカ様のおかげやね」

「ええ……」

ティーンとオランダの間を持ったのは、他でもないアンジェリカであった。

事あることに対立し、ケンカを始める二人に対し、アンジェリカは根気強く会話を促し続けその場を設けて来た。

オランダはアンジェリカの願いを断ることが出来ず。

ティーンも又、どこかヴィヴィオに似ているアンジェリカの頼みを断ることが出来な
かった。

はやてとカリムがそろそろ場所を移そうと足に力を入れたその時、まるで除夜の鐘の
様な染み渡る声が二人を呼びめた。

「おや……、騎士カリムに騎士はやてではありませんか」

二人が足を止め声が聞こえた方向に首を向ける。

するとそこには、一見50そこそこの男性が立っていた。

赤紫のキャソックスを着こなし、背筋をまっすぐ伸ばす様はとても初老だとは思えない。

垂れ目の瞳に、僅かに弓を弾く口元は子供達にも人気が出そうな微笑みである。

「ディオニソス司教……」

カリムの後方に控えていたシャツハがその名を漏らす。

その事に気が付いていないのか、ディオニソス司教は柔らかな笑顔のまま続けた。

「ごきげんよう。今日も良い天気ですね」

「お疲れ様です、ディオニソス司教。司教様がこちらまでいらつしやるなんて思っていなかったもので、遣いの者を出すことすらせず誠に申し訳ありません……」

「いえ、気にしないでください騎士カリム。我ら、聖王陛下に仕える者同士……。そこまです、気にしないで下さい」

頭を下げるカリムにディオニソスは片手を軽く上げ、謝罪を受けると、目線を窓の下に向けた。

「騎士オルランドは、アナタの下で日々切磋琢磨しているようですね……。彼を送り出した身としては、私の知る彼から遠くなって行くのは悲しいことですが、同時に彼の成

長が嬉しくて仕方ありません。……おや？」

ディオニソスは、瞳を僅かに入れその姿を収めた。

紫色の髪、金色の瞳、ティーノの姿を――。

「彼は――？」

その問いにはやてが答える。

「彼の名前はティーノ・ランスター、オルランド君の友人としてこの教会に来させてもらっています」

「ああ……彼が……」

「あの、ディオニソス司教様？」

「フフ……、すみません、私としたことが子供達の笑顔に遂童心に帰ってしまったようです」

ディオニソス司教はそう言うと、速足でカリム達の傍を通り過ぎて行った。

ディオニソス司教の姿が見えなくなると、カリムとはやては大きく息を吐き出した。

「ディオニソス司教……、本人と会ったのは初めてやけど、えらく緊張したわ……」

「ふふ……、そうですね。それだけ格のある人だから……」

表ではそう話ながらも、二人は念話で別の事を話合っていた。

と、その時外から爆音が聞こえて来た。

「ありや、なんやろ?……あちあ〜」

「どうかしましたか、はやて?」

二人が音がした方に視線を向けると、そこには騎士養成所の騎士見習い達に囲まれるテイーノとオルランドの姿があった。

「こつちは謝っているのに、なんで攻撃してくるんですか!?!」

テイーノは足元に振り下ろされた切先を睨みつけそう叫んだ。

「お前達が、私達の訓練の邪魔をするからだろう!」

騎士見習いの一人がそう叫ぶと、周囲からそうだそうだの大合唱。

元はと言えば、テイーノとオルランドの訓練に火が灯り、模擬戦に発展。

その音がうるさいと苦情を入れられ、謝罪したところ、ここには二度と近づくなと言われ、それは酷いと抗議したところ、訓練生の一人に脅されたことから今にいたる。

「そもそも貴様達が、我らと同じ場で研鑽出来るなど、本来はあり得ないことなんだぞ!」

テイーノが吼える。

「なんで、そうなるんですか!?!」

ティーノの声を聞き、取り囲んでいた訓練兵の者達の顔が嫌悪に歪む。

「当たり前だろ……。そこにいるオルランド・グランデイスは、実の両親を殺した——
」。我ら聖王教会の最大の禁忌である親殺しをしておきながら、教会騎士を名乗る穢れた男だぞ」

その言葉を聞き、ティーノは一瞬我が耳を疑った。

「えっ……」

信じられなかったし、信じたくなかった。

ティーノにとっては、親とは掛け替えない存在であり、どんなモノよりもどんな事よりも、大切な存在だと考えているからだ。

だから、そんな親を殺したなどと、信じられるはずがなかった。

だが、ティーノの隣で黙り込み掌から血が滲むまで握りしめているオルランドの姿を見てしまえば、本当の話ではないのかと疑ってしまう。

疑ってしまうのだ——

周囲の善意と勘違いした悪意が、オルランドとティーノを襲う。

それは純粹な呪いとなって降り注ぐ。

そこに在るのは全て、醜い欲の塊だった。

ティーノの周囲に人は居らず、黒い泥人形がうねっているだけであった。

酷い目眩がする。

酷い吐き気がする。

泥人形が笑う。

「ここまで言つて分からないなら、痛い目に合わないとは理解しないみたいだな」
泥人形が泥の剣を抜く。

「すまないティーン・ランスタ―……」

声が聞こえた。

その声は、氷の洞窟内で人恋しさに泣き叫ぶ獣のように、か細く弱い。
オルランドは、黒い世界であっても原型を保っていた。

それだけではない。

その瞳から静かに流れる涙が、どこまでも冷たく悲しく映る。

その水に見覚えがあった。

あの時、ティーンが生まれたその日、悪魔と喰っていたモノと似ていた。
何をそこまで腹を立てていたのか理解出来ない。

ティーンの中の何かがストンと落ちた気がした。

ティーンが大きく一歩踏み出す。

それは、泥をかき消すように大きく力強い一歩であった。

魔力を込めての踏み込みは大きな音を立てて周囲を威圧する。

「一々うるさいなあ……」

「ティーノ……？」

「オルランド、お前も言われたい放題言わしてんじやねえよ」

ティーノの態度にオルランドは困惑する。

コイツは、今までの話を聞いていなかったのか？

それよりも、何故コイツがここまで怒っているのか理解出来ない。

私とお前の付き合いなど、所詮仮初であった筈だ。

なのに何故——？

ティーノが一步踏み出す。

「あんた等もさ、コイツの事何も知らないで好き放題言つてんじやねえよ。その親殺しとかも、自分の目で見たわけじゃねえだろ？ だったら、ごちやごちや言うな煩わしい」
ティーノの突然の怒りに始め困惑していた訓練兵達も、次第に顔を赤く染め上げ怒りに飲み込まれる。

そして、自身の剣を構えだした。

ティーノもそれに合わせて構える。

その姿を見てたまらずオルランドが叫んだ。

「貴様には関係の無い事だろう！むざむざ関りを持とうとするなッ！それにコイツ等の言っていることは全て——」

「うるさいッ!!」

「——ッ!？」

「今はそんな事関係ない。僕がムカついたからこうしてるんだ。それこそ、お前に関係がないだろ」

「なにが関係がないだ！相手の力量も判断しないで、ここにいる訓練兵達は、教会内でも腕利きばかりなのだぞ！そんな相手達に対してケンカを買うなど、貴様は——」

そこから先の言葉が出てこなかった。

貴様は、どうして私のことにそこまで本気になる。

私は貴様の大切な人を傷つけ、貴様を犯罪者と言ひ、他者からの頼みだけで嫌々付き合っていただけなのに——、その筈なのに——

どうして……

「おい——」

ティーンノの呼びかけに肩が震えた。

どうしてか分からない。

だが、途轍もなく恐ろしく顔を背けてしまう。

「おいッ！」

語気を強めた再度の呼びかけに、たまらずオルランドは顔を上げてしまう。そこに見えたのは、決して犯罪者のそれでは無い。

眩しいまでに大きな背中だった。

「確かにお前の言う通り、僕一人じゃ少し厳しい。だから——」
オルランドの心に火が灯る。

熱く滾った何かが内を焦がしていく。

「だから手を貸せ、お前となら、こんな奴ら楽勝だろ？」

ああ。嫌だ——

本当に嫌だ——

反吐が出る——

私は今考えてしまった。

この胸を焦がす感情が何かを、愚考してしまった。

その答えを得て、納得出来てしまうのが、嫌で嫌で仕方が無い。

なぜなら、私は——

この感情を友情だと、至ってしまったのだから——

オルランドが自ら一步前に踏み出した。

それはまるで、ガラスを割るように静かだが力強さを連想させるそんな一歩だった。

ティーノが笑う。

「遅えよノロマ」

オルランドが笑う。

「無駄に活きがるな。それよりも、考えはあるのだろうか？」

「そんなものは無い……。けど、お前となら負ける想像が出来ないね」

「ククツ……。初めて意見が合ったな。私もだ」

ティーノがエテルナシグマを起動し、オルランドがデュリンダナを抜き放つ。

そして二人は人生初となるであろう大喧嘩を始めた。

「もうっ、どうしてそんな事をしたんですか!!」

オルランドとティーノはアンジェリカの部屋で正座していた。

喧嘩を聞きつけたアンジェリカに説教を食らっていたのだ。

「でもさ、僕対勝ったよ?」

ティーノがそう言うが、アンジェリカの一睨みで黙らされる。

「喧嘩に勝つたも負けたもありません！」

アンジェリカは徐々にヒートアップしていく。

これは長くなるか？と覚悟を決めようとしていた時、それは起きた。

「だいたいお二人はいつもいつも……」

「アンジェリカ!!」

アンジェリカは突然の目眩に襲われ、ベッドに腰を落とした。

ティーノとオルランドが慌てて駆け寄ると、アンジェリカは苦しそうな顔で笑顔を作った。

「だ、大丈夫です……。すみません……」

オルランドは優しくアンジェリカをベッドに寝かしつけると、アンジェリカの手を握り、ティーノを見た。

ティーノはそれだけで察し、医者を呼びに部屋を退室する。

医者に検診され、特に変わりはないと診断されてから、ティーノはオルランドとアンジェリカに別れを告げ、はやての下に向かうために廊下を歩いていった。

すると、突然後方から呼び止められる。

「君がティーノ君だね？」

「どなたですか？」

「私の名前はディオニソス、聖王教会の司教をしている者だよ」

ディオニソスは名乗ると、ティーノの頭をぼんぼんと優しく撫でた。

「オルランドとアンジェリカ様、両名と仲良くしてくれてありがとう」

ディオニソスにそう言われたティーノは、難しい顔を作った。

「アンジェリカとは、仲良くしているけど、オルランドとはそういう関係じゃないと思いますよ？」

ティーノがそう答えると、ディオニソスは大らかに笑う。

そして、悲しい顔をした。

「アンジェリカ様のごことは聞いているかな？」

「はい、……なんでも病気だとか……」

「ああ、そうだと……。それも不治の病だね。どれだけ高名な医者に見せても原因すら分からないのだよ」

司教の位の人物で尚且つ、ディオニソスがオルランドとアンジェリカの親代わりをしていると事前に聞いていたティーノは、その言葉を鵜呑みし、悲しい顔をした。

ディオニソスは語り出す。

「ティーノ君、どうしてなんの罪も無い子供達がこんな辛い目に合わなければならぬのだらうね……」

「……わかりません」

すると、ディオニソスは天啓を受けたかのように瞳を輝かせティーノの肩に手を乗せた。

「そんな人々を、救う手立てがあるなら、実行に移すべきだとそう思わないかい？」

ティーノは答える。

「……そんな手段があるなら、実行するべきだと思います」

ディオニソスはティーノの答えに満足そうに頷くと、肩に置いていた手を放して立ち去った。

「君には期待しているよ」

そんな言葉を残して――

ティーノがはやてと共に、なのは宅に帰宅するとそこには八神家一同に、フェイト、アインハルト、リオ、コロナに八神家が運営する道場の秘蔵つ子ミウラまで来ていた。

「ただいま」

ティーノとはやての声を聞き、玄関まで迎えに来た皆であったが、ティーノの傷だらけの顔と体を見て、驚く。

「げっ、どうしたの!？」

当然の如く問い詰められるティーンであったが、ティーンはそっぽを向いてしまった。

「……べつに」

そんなティーンに向かってはやてが事のあらましを話す。

それを聞いた皆の反応はそれぞれで、とりわけ心配していたヴィヴィオとリインは、即座にティーンの手を取った。

「今日は私達がスパーパーノービスのクラスになれたおめでたい日で、今はそのパーティーをしているのに、そんな姿じゃ皆が落ち着かないよ!」

「だから、お風呂で治療&キレイキレイです!」

そして悲しみの叫びの尾だけを残してティーンが風呂場へと消えていく。

そんな光景を見て、困惑するミウラであったが皆が何でもない風にパーティーに戻って行くので、自然と皆の後について行った。

そんな幸せな一日だった。

ガソリンの燃え盛る匂いと、雨水によって生み出されたむせ返るようなアスファルト

の匂い。

横転したトラックにはいくつもの切り傷が残っており、荷台が完全に破壊されていた。

「出遅れたか……」

そんな光景を複数の管理局員と確認しながら、ティアナは思考を巡らせていた。

「……度々発生している。ロストロギアの強盗事件、規模は小規模なモノばかりで、盗られたロストロギアも、特に大災害を引き起こすような代物ではない。……でも、なに？ この背筋を撫でる様な不安は」

ティアナは、今一つの事件を追いかけている。

それはロストロギアの窃盗又は強盗事件であり、すでに複数件発生していた。

さらに、現場にはいくつもの切り傷が残されており、魔力残滓の痕跡からベルカ式の使い手がすべての事件に関係しているのが特徴であった。

ティアナはたまらず空を仰いだ。

空は雲で覆われており、光をすべて閉ざしている。

何故だか、その時、ティーノの顔が脳裏に浮かんだ。

「なんだか……嫌な予感がする……」

ティアナの眩きは、風に吹かれ掻き消えた。

霞む視界

聖王教会のグラウンド、その端では一人の魔導士と一人の騎士が相も変わらず、己が力を示すかのように、全力で模擬戦をしていた。

「はあああああッー！」

オルランドが愛剣のデュリランダナを振るえば、氷の礫が無数に生まれ暴風に押されるように、飛び散る。

「その程度ー！」

ティーノが足に魔力を込め地面を大きく蹴ると、水飛沫の壁が生まれ氷の礫を塞ぎ切る。

氷の礫は水中に捕らわれ、身動きが取れない。

それを良いことに壁は収縮を始めサッカーボール大の球体となった。

ティーノは眼前に固定されたそれを、回し蹴りの要領で蹴り飛ばす。

その様はまさしく砲弾であり、その速力もその通りのものであった。

オルランドが水の玉を鞘で受け止める。

ティーノが指先をパチンと鳴らせると、氷の礫を孕んだ水玉は、そのまま爆弾となっ

た。

泡が弾けるように、回転の力から解放された水と氷は、散弾となつてオルランドを切り刻む。

たまらず目元を片手で覆つたオルランドの隙をティーノは見逃さない。

オルランドが片手に覆われた微かな視界の先に見たのは、右拳を振り抜くティーノの姿だった。

晴天の空、小鳥達が歌いながら空を泳いでいる。

ティーノとオルランドは互いに汗だくになりながら、芝生の上に寝転がっていた。

「これで、10対10で並んだ」

ティーノがどこか誇らしげに語ると、オルランドはそれに対して鼻で笑う。

「はっ、今日はたまたま貴様の新魔法に一瞬同様しただけだ。……次は無い」

「へえへえ、じゃあ確かめるか？」

そう互いにじやれ合いながら身動き一つとれないでいると、はやてとカリムにアンジェリカが手にバスケツトを持ってやって来た。

「ああ〜！ また、お兄様達はそんなになるまで！」

その声に昼食の時間だと気がついたティーノとオルランドは、苦し気に軋む体に鞭を

打って体を持ち上げた。

「それにしてもティーノは、水系統の魔法も使えるようになってんな？」

はやてから、サンドイツを手渡されたティーノは、頷く。

「もともと、そういう魔力の運用変換は、クロノ師匠から叩き込まれていたから……。後は、コツとタイミングの問題だったんだ」

タマゴサンドを頬張りながら話すティーノを見ながら、カリムからハムサンドを受け取ったオルランドが悔しそうに顔を歪めた。

「そんな行き当たりばつたりの魔法にまんまとやられてしまったのか……。貴様の力は、底が知れないな」

その瞬間、世界が静止した。

その何とも居心地の悪い空気の中で、オルランドは目をパチクリさせる。

「ど、どうした……？」

「お兄様が、人を誉めた……」

アンジェリカのその言葉に、今しがたの自分の言葉を思い出しオルランドは顔を赤くする。

そしてハムサンドを照れを隠すように頬張った。

その日一日、アンジェリカの体調も良かったことから、三人は教会内を散歩していた。廊下に夕日の光が差し始める。

暗い影が窓の淵にそって光と共に移動を始め、空気がひんやりとしてきた。

子供らしく、会話を花を咲かせていたオルランド、アンジェリカ、ティーノであったが、突如として、アンジェリカの足が止まった。

「どうかしたかアンジェリカ？」

オルランドがそう言うと、アンジェリカは一つの窓に吸い寄せられるように移動を始めた。

「あの丘は……」

窓の先に広がっていたのは、教会の裏手の塀から少し出た場所にある小さな丘であった。

寂しげに一本だけ木がたっており、誰も手入れしていないにも関わらず、木の足元の草はまるで木を除け者にするように背丈を低く保っている。

その風景を見つめて、アンジェリカの瞳は揺らいでいた。

そして、ポツリと言の葉が漏れる。

「——外に……出たいな……」

「……」

二人が黙ったことに気がついたアンジェリカは、慌てて口元を小さな手で隠すと、誤魔化すように笑った。

「あ、アハハハ……なに、変なこと言ってしまったのでしよう。……きつと、疲れてしまったのね」

その笑顔が痛々しくて、見てられない。

ティーノは顔を背けそうになるが、オルランドは何かを決心したように、一步踏み出しアンジェリカの手を握りしめた。

「そうだな……。外に出よう」

「お、お兄様っ!？」

「お、おい……」

オルランドの言葉にアンジェリカとティーノは驚く。

アンジェリカはその存在その者が秘匿されている存在である。

その血は、万人の血よりも価値があり、一たび外に知れ渡れば、一体どうなってしまうのか想像も出来ない。

なにより、アンジェリカ自身の体は病により、いつどうなるかも分からない身である。それなのに……。

「ティーノ」

オルランドが突然、振り返る。

その表情は、どこか達観したような何かを待っているかのようなそんな表情だった。「私達がそろえば、大抵の無理は覆せるだろう？」

その言葉には、圧倒的なまでの信頼が籠っていた。

一体コイツになにが起こったのか。

急に信頼し過ぎだと思いつつも、ティーノはその想いが嬉しくて頷いていた。

「これが、外の空気——、外の風——、外の匂い——」

アンジェリカは感動した様子で、でも子供らしくまるでダンスを踊るように蕾だけの花道を進んで行く。

オルランドとティーノがその様子を見ながら、連れてきて良かったと思っていると、オルランドが幸せそうに話した。

「ティーノ……」

「なんだよ……、急に名前で呼ぶな、気持ち悪い」

「私とアンジェリカが、実の兄弟でないのは知っているな」

「ああ……」

「私とアンジェリカは、幼少期から兄弟としてディオニソス司教様の下で暮らしてきた」

「……」

「アンジェリカ様のご両親は、……すでに他界されている」「亡くなった……理由は……?」

「聖王の血を欲した何者かに、襲われたと聞いている。アンジェリカのご両親は、アンジェリカを教会のもつとも安全な場所に事前に避難させ……そして、血の一滴すら残すことなくこの世から旅立たれた……」

「そ、そう……か……」

テイーノの頭の中にノイズが走る。

聞いてはいけない何かを聞いてしまったような気がした。

アンジェリカの両親の事なんて、知る由もない。

でも、何故だか、オルランドの悲しみの表情と、明るく笑うアンジェリカの顔を見て、途轍もない罪悪感が、胸に襲い掛かってくる。

「それと……、私の両親の話だが……、あの話は真実だ」

「ああ……」

オルランドは夕日を見ながら苦しそうに微笑む。

「記憶は無い……。だが、私がこの剣……デュリンダナで二人を斬り殺したのは覚えて
いる」

オルランドは空を仰ぐ。

「ディオニソス司教様がおっしゃるには、二人は教会内で革命を起こそうとしたらしい。……それを未然に防いだ私は、紛れもなく騎士なのだと……ディオニソス司教様は抱きしめながらおっしゃって下さった。それでも……、騎士としては正義でも……子として、私は最悪の部類に入る人間だ」

オルランドは後悔していた。

過去の己の行いに、何を間違えてしまったのだろうかと泣いていた。

「だからな、ティーノ・ランスター……」

その先を聞いてはいけない気がした。

聞けば、もう後戻りが出来ない気がした。

だが、オルランドは止まらない。

「友としての願いだ……。罪に塗れ、血で真っ赤に染まった私からの願いだ……」

アンジェリカが手を振りながらオルランドの名を呼んでいる。

本当に嬉しそうに、今この瞬間が永遠であるかのように笑っている。

その笑顔を見て、一步踏み出したオルランドは決心がついたかのように微笑み臉を閉じると、ティーノに初めて見せる笑顔で振り向いた。

「もし私がダメになったら……アンジェリカを頼む」

その笑顔を見て、ティーノは息が詰まった。

もうそうなるのが決まっているかのような顔でそんなことを言われて、まして友と言われどうしていいか分からなかった。

だからとりあえず、そんな事にならないために、させないためにティーノはオルランドの背中を力一杯引つ叩いた。

痛がるオルランドの先を進みながら、ティーノが呟く。

まるで独り言だと強調するように――

「情けないこと言ってるじゃねえよ……。アンジェリカの隣にいてやれるのは……。いいのは、僕じゃない。お前以外に、その役目が務まる奴はいない」

だって、アンジェリカも言っていたではないか――

私の剣だと――

「次にそんなことを言ったら、本気でぶん殴るからな」

ティーノのその言葉に、オルランドはどこか安心したように笑う。

そして二人は、アンジェリカの下に歩みを進めた。

その日の夜ティーノはヴィヴィオと同じベッドでいつもの様にヴィヴィオと眠っていた。

ティーノは寝付けずに天井を見つめている。

見つめ続ける天井は次第にぼやけ出す。すると、隣から声が聞こえた。

「まだ起きてるの?」

ヴィヴィオは、眠たげに瞼を擦ると、上半身を起こした。

ティーノもそれに倣い上半身を起こす。

「来週にはインターミドル地区予選でしょ? 早く寝なよ」

ティーノがそう言うと、ヴィヴィオは首を左右に少しだけ振った。

「ティーノが何か悩んでいるようだから、その話を聞くまで寝ません」

強情なヴィヴィオに溜息を吐きたくなったティーノは、何気なく言葉を漏らす。

「ヴィヴィオ……」

「なあに?」

「もし、僕が過去に取り返しがつかない大きな罪を背負っていたら、どうする?」

「えっ……?」

「もし、その罪のせいで大切な人を傷つけることになってしまふなら……僕はどうすれば良い?」

ヴィヴィオは黙っている。

「こんなことを聞くなんで、どうかしている。」

普通は答えなんて出せない。

そうティーノが考えていると、布の擦れる音が聞こえた。

「……………ん！」

「突然、どうしたの……………」

ヴィヴィオはどこか真剣な瞳で両手を広げていた。

「……………んん!!」

ティーノは訳が分からず体をヴィヴィオの方に向けると、ヴィヴィオはティーノの頭を強引に抱きしめ、ベッドに倒れた。

急に抱きしめられたティーノは驚き声を出せない。

だが、ヴィヴィオは静かに語り出す。

「……………私は、分からないよ。どうすれば良いのか、なにが正解なのか……………」

ヴィヴィオの手がティーノの後頭部を撫でる。

優しく壊れ物を扱う様に丁寧に——

「だから、少しでもいい結果に行き着くために……………。少しでも多くお話をするとと思う。それが例え、過去の自分であったとしても、過去のことに苦しんでいる人であっても、苦しんでいる人がいれば、大切な人が苦しんでいるなら、私は……………そうする……………。私が、そうやって助けてもらったから……………」

話し合い——

そんなことで苦しみを取り除かれるなら、どれだけの事が防げるだろうか。現実には、そんなことでどうにか出来る程世界は優しくない。

——

ヴィヴィオがそういうなら、出来そうな気がする。

ヴィヴィオに抱きしめられ、心臓の音を子守歌にティーノは深い眠りに落ちていく。そこでティーノは思った。

ティアナなら、どうするのか、と——

今、どこで何をしているの？

会いたいよ——

ティアナ——

「クロスファイアーシュートツ!!」

街はずれの道路では、夜の静けさを薙ぎ払う爆炎が上がっていた。

「はあ……はあ……クロスミラージュ、大丈夫?」

「大丈夫です」

ティアナは、とうとうロストロギア強盗の犯人を見つけることが出来た。次に狙うと思われていた内の一つのロストロギアが運搬される道沿いで、人がおらず比較的狙われやすいであろうと、決めていたポイントに犯人は現れた。犯人は金髪の青年であつた。

身の丈程ある巨大な剣を持ち、正確無比で協力的な斬撃を放ってくる。だが、ティアナも伊達に修羅場を潜っていない。

幻術魔法と射撃魔法のコンビネーションでうまく敵を錯乱させていた。

それでも、敵の方がティアナに多くの傷を負わせていた。

それは純粹な覚悟の違い、鬼気迫るその覚悟が敵の能力を何倍にも跳ね上げていた。

その時、岩陰に隠れていたティアナは妙に肌寒いことに気が付いた。

「……雪?」

ティアナがそう呟いた瞬間、クロスミラージュが叫ぶ。

「マスター!」

「ツ!!」

気が付いた時には、辺り一面の地面が氷に覆われていた。

ティアナはすぐにこの場を離れなければと移動を始めようとするが、足が地面と共に氷漬けにされ動けない。

そして首筋に寒気が走った。

月の光を反射した剣が首元まで伸びていた。

そしてティアナの首が跳ね飛ばされる。

だが、それと同時にティアナの存在は魔力残滓となって消え去った。

「くっそ……危なかった……」

敵が今まで一人も怪我人を出していないからと舐めていた。

アイツは、障害となるものに対して容赦しない。

ティアナは認識を変える。

だが、その時にはすべてが遅かった。

敵である騎士は、剣を逆手に持つと魔力を収束しだした。

まずいと、直観で理解したティアナは防御魔法を張ろうとする。

そして、剣は白銀の大地に突き刺された。

「……イスベルグ・プルガトワール」

生まれ出は、氷山の群れ。

広域魔法まで扱う敵に戦慄する。

ティアナは即座に回避行動に移り、隙の大きい敵に対してここが決める場だと狙撃の構えをとるが、その時見つけてしまった。

待機を命じていたはずの局員の一人が道端に転がるロストログアの回収に向かって
いるのを――

その場に向かって氷剣の山が突き進んでいるのを――

「くそッ!!」

ティアナは即座に、あまり得意としていない移動魔法を使いロストログアを拾うとしていた局員を突き飛ばす。

さらにその場で、無理に体を反転させる。

「デイベインバスターッ!!」

クロスミラーージュから放たれたデイベインバスターは、氷剣の群れを薙ぎ倒し敵に向けて突き進む。

終わったとそう思った――

だが――

「執務官ッ!!」

別の局員が叫ぶ。

ティアナが振り返ると、そこには剣を掲げた敵がいた。

ティーノは走っていた。

白一色で塗り固められた長い廊下を、脇目も振らず走り続けていた。

そして目的の場所に辿り着くと、そこにはなのはにフェイト、はやて、スバルがいた。

「ティーノ！」

誰かが叫ぶが関係が無かった。

ティーノは白い扉を開け放つ。

一瞬光で塗り固められた視界が正常に機能しだすと、そこは異世界のようにであった。

なにも無い部屋にベッドが一つ。

訳の分からない機材からチューブがベッドまで伸びている。

ティーノはフラフラとした足取りで、ベッドの傍までよるとそれを見ってしまった。

包帯を幾重にも巻いたまま、眠っているティアナの姿を——

ティーノの中で、なにかが大きくひび割れた。

視界がぶれる。

息がまともに出来ない。

それでも、伸ばした手はティアナの手に触れて——

冷たくは無いけど、温かくも無くて、今にも消えてしまいそうで——

その時ティーノの肩に誰かが手を乗せた。

「大丈夫……、命に別状は無いつて医師も言っていた。今は、意識を失っているだけで、すぐに目を覚ますつて……」

だが、ティーノの耳にその声は入ってこなかった。

誰が、一体誰が、ティアナにこんなことをした。

許せない——

許すことが出来ない——

その時、病室の扉が静かに開かれた。

どうやら、ティアナの包帯を変えに来たらしい。

皆が退室していく中で、ティーノだけは退出することなくずっとティアナの手を握りしめていた。

「守るつて、誓ったのに——」

体に巻かれていた包帯が取り除かれていく。

それを虚ろな瞳で見ているティーノは見てしまった。

その傷を——

知る人でなければ知らない、まるで鋭利な氷で斬られたかのような傷を——

それを見て、瞬時に答えに行き着いてしまったティーノは急激な吐き気に襲われる。

そして病室から走り去った。

廊下で待つていた皆が驚くが気にしている場合では無かった。

このこみ上げる何かを吐き出すために、必死だった。

ティーンは気が付けば屋上に来ていた。

そして、コンクリートの壁を力の限り殴りつけた。

「何故ッ！どうしてッ！なにがッ！なんでッ！」

何度も何度も殴りつける。

拳は等に傷つき、血だらけとなっていた。

脳裏でオルランドの言葉が思い出される。

思い出して思い出して思い出して、それでも認めたくなくても、脳が決定付けている。

誰が、ティアナを傷つけたのかを——

「どうしてなんだ。オルランドッッ!!」

頭の中で友と呼んだオルランドの顔が霞んで見えた。

ディオニソスは、祭服に身を包みアンジェリカの部屋にいた。

アンジェリカは静かに寝息を立てている。

ディオニソスはその姿を見て微笑む。

「これで全てが揃った——。道を進もう、扉を開けよう。ジエイル・スカリエツテイが残した遺産……。ティル・ナ・ノーグへ」

終わりへの架け橋

ハア——

視界の先は常に閉ざされた万華鏡

ハア——

満たされた体感ほ摩天楼の上

ハア——

吐かれた吐息は永久の眠りに

ハア——

この思考は今永遠の氷獄へ

なんだコイツ、強すぎる——

オルランドが最後の標的にと定めたロストロギア、その価値は無しに等しく守りも一番薄い。

仕掛けるタイミングは決めていた。

一番被害が少ないと踏んだ、田舎町の先にある休憩所。

出発地点、ゴールのクラナガン管理局支部。

そこまでの道のりと時間と人の体力、すべてを計算に入れて攻め入るはここと決めていた。

護衛の魔導士は、僅か三人——

元々近接戦を得意としていない典型的で模範的なミッド式の魔導士達、昏睡させるのに手間を必要としなかった。

アイツとの模擬戦の成果がこんなところで活かされるのは癪ではあったが仕方が無い。

ロストログアの運搬を任されていた者は、私の姿を見たと同時に逃げ去った。

それでいい——

私がロストログアが収められているトラックの荷台に手を伸ばそうとした時、それは起きた。

「ヴァリアブルシュート！」

——ツ!!

それは荷台を突き破って現れた。

オレンジ色の魔法弾。

それはを間一髪躲すが、その魔法弾は空中を縦横無尽に飛翔し、まるで蜂が獲物を狙

うかのように迫ってくる。

私はそれをデュリンダナで叩き切った。

その剣戟に魔力を乗せ荷台事真つ二つにする。

そして現れたのは、長い夕日のような髪をした女の魔導士だった。

その姿を見た時、私は幻視してしまった。

それはきつとバリアジャケットが似ていたからだろう。

我が友、ティーノ・ランスターと……

「あなたがここ近日発生しているロストロギア強盗事件の犯人つてことでいいかしら？」

女はそう言うのと、荷台からトンつと軽く飛び降りた。

口調は優和、ただし銃口はこちらに向けられたまま一ミリも動いていない。

「そつ……黙秘つて訳ね……。想定内だけど」

コイツはただの魔導士じゃない。

全身の神経がそう告げていた。

だから反応出来た。

「……今回の事件には合計10の容疑で令状が出る。あなたはその被疑者と言うことで任意同行して欲しいのだけれど、構わないわね？」

気が付けば、真後ろから喉元に魔力刃が当てられていた。

いつの間に……

だが未だに眼前には、こちらに銃口を向ける真後ろの人物と同じ女がいた。

不思議に思っていると、眼前の女が魔力の残滓を撒き散らしながら消え去った。

幻術か——

こんな高位な魔法を事も無げに使用し、あまつさえ私の後ろを取ったのだ。

油断ならない、このままでは、私達の計画の邪魔になる。

私の頭の中に声が響く。

それは、ディオニソス司教様の声、私のトリガーとなるその声が響く。

悪を滅しなさい——オルランド——

気が付けば、私は後方の女を蹴り飛ばしていた。

「ふう——……」

たまらず息を吐き出す。

勝てるか分からない。

だが、勝たねばならない——。

そのためなら私は——

決着は意外な結末に終わった。

欲を出した人物が生み出した僅かな隙について、女を倒すことが出来た。執務官、そうあの女は呼ばれていたな。

私は、皮肉気に口元を歪めた。

これで私は、列記とした犯罪者だ。

ロストロギアの入ったケースを片手に持ちながら、私は未だに雪が振り続ける空を見上げる。

殺すつもりで放った最後の一闪、それが鈍ってしまった。

あの刹那の時に眩かれた一声、それにトリガーを斬られた。

あの女の口から出た名前——

最後になると悟ったのか、見開かれた瞳に剣線を写し、乞うように放たれた名前——

「ティーン……」

嘘であって欲しい。

でも、あの女を斬り伏せた時、感覚で理解出来てしまったのだ。

友情と言う器に罅が入ってしまうのを——

聖王教会の一室、そこは暗い只々暗い部屋だった。

天蓋付きのベッド一つ、小さなテーブル一つに丸椅子が三つ、小さめのタンスが一つと慎ましい部屋だった。

少し大きめの窓からは、落雷の光と雨風の音が響き、室内に影を作る。

時折影を彩られる人物、ディオニソスとその眼下で眠りにつく少女アンジェリカ。

再度の雷――

さすがに煩わしくなったのか、ディオニソスがカーテンを閉めようかと思案したとき、部屋の扉が開いた。

「――戻りました」

そこにいたのは、オルランドだった。

オルランドの体は、所々に傷を負っており、予想以上に苛烈な戦いをしてきたことを物語っていた。

「大丈夫なのですか?」

ディオニソスが落ち着いた口調でそう問えば、オルランドは無言で頷いた。

そして腕に抱えていたケースの中からロストロギアを取り出した。

それは見ようによってはただのガラクタであった。

まるで錆びた歯車のようなものであるそれは、なんの力も秘めてはいないように見えた。

「これで全てが揃いましたね……」

「はい……」

ディオニソスは祭服の中から今まで集めたロストロギアを取り出す。

それは、形も大きさもまちまちのガラクタの集まりだった。

ディオニソスはそれらを悲し気に見つめると、オルランドに振り返った。

「……まで巻き込んでしまった私が言えたことではありませんが……良いのですね……？」

それに対し、オルランドは年相応の少年の——男の子の笑みで答えた。

「もう、決めていました。私は……一振りの剣として、男として……アンジェリカのために生きると」

「愚問でしたね……」

ディオニソスはそう言うのと、黙って部屋を出た。

目的の場所に向かうためだ。

静まり返る室内、先程までの雷雨は止み、窓から一筋の月明りが差し込む。

優しく照らされるアンジェリカを見つめ、オルランドは優しく微笑んでその頬を撫でた。

「……大丈夫、私がどうにかして見せる」

そしてアンジェリカの手を握りしめた。

膝を付き額にその手を当て呟いたその言葉は、懺悔のように見えた。

「なんとか……間に合った……」

心からの安堵がその言葉に乗っていた。

「お………にい……さまっ」

静かな、水面に落ちた滴のような声が聞こえた。

オルランドが顔を上げると、アンジェリカが目を覚ましていた。

「ダメじゃないか、寝ていないと……」

オルランドがそう言うて手を放そうとした時だ、アンジェリカは繋がれたその手を握り返した。

「どい………んも………」

その声はとてもか細くて、耳を澄まさないと言き逃してしまいそうな程に弱い。

「どこにも、行きませんよね……う？」

アンジェリカの見目は、特に大事ないように見える。

だが現実が違う。

彼女の体に巣食う病魔は、着実に彼女を苦しめていた。

その命の灯が、明日消えてしまうかもしれないくらいまで……。

それは病魔と呼ぶしかなかった。

先祖代々、聖王の器に生まれた者が有する先天性の悪魔。今この時代においてもその治療方法は確立されておらず。

故に先祖代々聖王を早死にさせてきた悪魔——

それを防ぐ術が、もう目の前にあつて、成功例も存在していた。

だから——

オルランドは半ば無理矢理繋がれた手を放すと、その手でアンジェリカの頭を撫でてやった。

「私はどこにも行かないよ……。私が、アンジェリカに嘘をついたことなどないだろう？」

だが、アンジェリカにはわかっていた。

その微笑みが嘘だつても、今にも壊れてしまいそうな程にオルランドが悲しんでいることも、もう帰つてこないかもしれないと言うことも……。

急激な怠惰感に襲われながら、それに抗う様に涙を流し、落ちてくる瞼に力を入れて、アンジェリカは訴える。

「逝かないで……。私を、一人にしないで……」

涙が頬を伝う。

瞼が完全に落ち、再び眠りについたアンジェリカにオルランドは顔を歪めた。

「……行つてきます」

そして、扉が閉じられる音が室内に響くと月明りも姿を消し、室内を完全な静寂が支配した。

ミッドチルダ首都クラナガンの管理局直下病院、その一室の前には子供達と大人達がいた。

その中で、心配気に病室の扉を見つめるのは高町ヴィヴィオだった。

彼女は、ティアナが意識不明のケガを負い、ティーノがそれに付きつ切りで看病をしていると知ったのは、遂先程だった。

中々顔を出さないティーノに電話を掛けたことから事実が発覚し、その時たまたま一緒にいたコロナ、リオ、アインハルトの静止を振り切りここまで来た。

後から集まって来たアインハルト達と、なのは達にことのあらましを聞き憤慨したのも遂先ほどのこと、大人達が黙っていた理由は単純で、明日にはインターミドルのエリートクラスでの対戦が待っているからだだった。

ヴィヴィオはずっと後悔していた。

どうしてもっと早くにティーノに連絡を入れなかつたのかと……

大切な人が傷つけられる恐怖、いついなくなるか分からない恐怖は自分は理解してい

るはずだった。

姉として失格だと、泣きそうになった。

だが、病室の扉を開くことが出来ない。

どんな顔をしてなんて声をかければいいのかわからないからだ。

その時、ヴィヴィオの肩に手が置かれる。

振り返るとそこには、ノーヴェがいた。

ノーヴェだけではない。

元ナンバーズの皆もいた。

皆が皆、ティアナに救われた人達ばかりであった。

「ヴィヴィオ……」

なのはがヴィヴィオを呼ぶ。

ヴィヴィオはたまらずに、なのはに飛び込んだ。

そして涙を流す。

自分の不甲斐無さを呪うように、それを浄化するために涙を流す。

なのはは、そんなヴィヴィオを優しく抱きしめる。

その時だ。

ヴィヴィオはハッと何かに気が付き、廊下の先を見た。

皆も何事かとそちらに目をやる。

するとそこには、純白の乙女がいた。

真つ白なドレスを着た少女の名はアンジェリカ・ゼーゲブレヒト、覚束ない足取りで騎士カリムに連れられて一歩一歩近づいて来る。

その場にいた皆が目を見開く。

その姿は、余りにもヴィヴィオに似ていたからだ。

ヴィヴィオの別の可能性の一つと言われても違和感が無い少女は、ヴィヴィオ達まで後数歩と言うところで躓く。

「危ないー」

それをヴィヴィオが咄嗟に抱きとめた。

緑と赤の瞳が互いに交差する。

——それだけで十分だった。

語る必要などなかった。

ヴィヴィオはアンジェリカを連れて病室の扉を開く。

眩い太陽の光が二人を包み込んだ。

視界が光に慣れてくると、予想外の光景が二人の瞳に写り込んだ。

空中に飛び交うホログラムの数々、さらに床にはチラシが所狭しと散らかっていた。

この光景には、子供組も大人組も空いた口が塞がらなかった。
「な、なにをしてるんだいアンタは!？」

皆を代表してアルフが口を開く。

その声に気が付いたティーンは、なんて事ないように振り返る。

その服装はいつもの私服だった。

嫌、いつもより気合が入った服装だった。

「ああ、アルフ何って……アンジェリカ?」

ティーンノの姿を見たアンジェリカは溜まらずに、駆け出しティーンノに抱き着いた。

「お兄様が、……お兄様がッ!!」

それは余りにもみつともなかった、とても女の子がして良いようなお淑やかな行いで
はなかった。

だが、ティーンノは理解していたアンジェリカが何を言いたいのかを——

ティーンノは、アンジェリカの両肩に手を置くと真剣な瞳を見た。

「アンジェリカの言いたいことは分かっている。でもね……僕も我慢の限界は等に超えて
いるんだ」

その冷え切った声に、アンジェリカは悲しみに顔を歪める。

「大切な人が傷つけられた……。許すことなんて出来ない」

アンジェリカは泣きそうになり、事を理解していない者達はティーノを止めようとする。

が、次の言葉でそれも止まる。

「だから、アイツを本気でぶん殴ってくる」

「へっ……?」

「僕とアイツは今のところ勝敗は10対10……ここで白黒はつきりさせるのも悪くないだろ?」

ティーノはそう言うと、頭をガシガシと掻いた。

その動作はどこか、オルランドの動作と似ていた。

だからだろう、アンジェリカも少しだけ落ち着くことが出来た。

「あ、あ、く、ムカつくね。なんでアイツはアンジェリカをここまで悲しませてんだ?なんで僕になにも言わない?僕はそこまで頼りないのか?」

ティーノはそう言い終わると、気が付いたようにハツとした。

「それよりも、体は大丈夫なのか!」

ティーノが突然自身を気遣ってくるのが可笑しかったのかアンジェリカはくすくすと笑った。

「少し辛いです、大丈夫です」

「お前の大丈夫は、大丈夫じゃないだろ……」

「な、なにを……ひやつ！」

ティーンはアンジェリカをお姫様だっこすると、眠るティアナの隣に横にした。

「ここは僕の特等席なんだけど、今日は譲ってあげる」

そしてアンジェリカの頭を優しく撫でた。

「オルランドは僕が連れて帰る……。それで、ティアナとアンジェリカに謝らせる。

……約束する」

だから、とティーンは一步引いてアンジェリカと向き合った。

その姿はまるで絵画の姫に問いかける騎士のように、様になっていた。

「許可をくれ姫よ……。僕は今からあなたの剣と戦う。どちらも無事ではすまないかも
しれない。だが、友として男として、僕は行かなければならない。だから、その許可を
くれ」

その勇ましいまでの言葉に瞳にアンジェリカの頬は一瞬赤くなる。

そして、微笑んだ。

「私の剣を頼みます……。我が魔導士よ」

アンジェリカが手を伸ばしティーンの前額に当てた。

そして虹色の魔力光が二人を包む。

ティーノの頭の中に薄暗い中でディオニソスといるオルランドの姿が見えた。

「私がお兄様と別れた最後の夜に見た夢です。恐らくお兄様はそこにいます」

「……理解した」

ティーノはアンジェリカから離れると、エテルナシグマからあるデータを複数出した。

それはどれもデートスポットと呼ばれ有名なところばかりであった。

余りにも場に似つかわしくないそれらの数々に、皆が今までそれを見ていたのだと気が付いた。

「これは、僕がティアナの退院祝いに行こうと思っていた場所なんだ。……オルランドと先に行つて来て感想を教えて欲しいんだけど、頼めるかな？」

ティーノが笑いながらそう言うと、アンジェリカはキョトンとした顔から嬉しそうに笑い、目にダイヤの様な涙をため領いた。

「はいー！」

そしてティーノは魔法陣を展開する。

それは転移魔法陣だった。

それを見ていた大人達がティーノを止めに入ろうとするが、すでに転送は始まっている止める術などなかった。

淡い紅い光の中で、ティーノが振り返る。

その視線の先には、元ナンバーズの面々が写っていた。

元ナンバーズの皆は驚く。

ティーノとして外に出てきてから、ジェルとは会ったことも無かった。

会わないですむなら……そう、思っていたことも正直あった。

だが、見つめられるその瞳には何故だか絶対的な信頼感があった。

ティーノからしてみれば初対面の者達ばかりなのだ。

なのでもなく。

フエイトでもなく。

はやてでもなく。

守護騎士達でもなく。

アルフでもなく。

ティーノはナンバーズにその瞳を向けていた。

「……ティアナとアンジェリカを頼む」

その言葉は、ナンバーズの皆の心を打った。

その小さな体に過去の姿を見た。

裏切り者と罵られるかもしれないとの恐怖心があった。

牢屋に入れられた他の姉妹と違い、外に出て平和を謳歌する自分達を軽蔑しているとも思っていた。

でも、どこまで行っても……、誰がなんと言っても……、彼は、生みの親なのだ。

ナンバーズ達は、知らず知らずのうちに皆が任せると頷いていた。

ティーンはそれを見て満足そうに笑う。

「ティーン！」

その時、ヴィヴィオが叫んだ。

転送が始まり魔法陣から伸びる紅いカーテンに両手を付けて、必死に懇願するように叫んだ。

「明日ッ、明日にエリートクラスの試合があるの！だから……だからッ!!」

そんなヴィヴィオを見ながら、ティーンは優しく笑い、薄い魔力のカーテンで閉ざされたヴィヴィオの手と自身の手を重ねる。

「絶対に見に行くよ。だから負けないでね……お姉ちゃん」

そしてティーンの様子は消えた。

「ヴィヴィオ……」

なのはが、ヴィヴィオを心配して声をかける。

だが、振り返ったヴィヴィオの顔は晴れやかだった。

「アインハルトさん！」

「は、はい！」

「コロナ」

「うん！」

「リオ」

「は〜い！」

ヴィヴィオは両手をぐつと構えた。

「こうしちゃいられない……特訓に付き合って！」

そしてヴィヴィオ達は病室を後にし、それになのはとフェイトも続いた。

皆がこの時確信した。

ティーノなら、なんとかしてくれると——

薄暗い洞窟の先、そこには黄色い蛍光灯の光だけが灯っていた。

洞窟の先に待っていたのは、途轍もなく広い広間であり、その先にはもう一つ扉があつた。

「始めるよ……」

ディオニソスはそう言うと、今まで集めて来たロストロギアを扉に翳す。

すると、扉は勝手に開いた。

そう、今まで集めていたロストロギアはすべてただの鍵でしかなかった。

「この先にあるのですね……？」

オルランドが口を開く。

「ああ、その通りだとも……。この奥に眠っている。全ての次元世界の知識を集約し、不可能と言われたことを神の御業の如く成しえた至宝……。ジェイル・スカリエツティの知識が……ここに」

扉の先には薄く光る廊下が続き、10m先も見えはしない。

まるで地獄の門が口を開けたかのような幻想に捕らわれるも、その一步を踏み出そうとして踏みとどまった。

「どうかしましたか……オルランド？」

オルランドは笑う。

腹の底から楽し気に笑った。

ディオニソスは、今までのストレスからか遂に壊れてしまったのか、と考えたがそれは静かな冷気によって覚まされる。

「……ディオニソス司教様、先に行ってください」

その声を聞き、半ば恐れるようにしてディオニソスは暗闇の先へと姿を消して行っ

た。

オルランドは見つめる。

遙か天を――

そこに集うは流血の紋章。

洞窟内の魔力を集めるかのように、一点に集約されていく血潮の流れ。

来ると思っていた。

不可能だと考えていたが、それでもあいつなら、どうにかして来てくれると。

そう――

願っていた――

血潮が固まり、それが爆ぜた時、そいつが現れた。

一直線に、迷うことなく、拳を振り上げて。

「エテルナシグマツ！」

「始めましょう。マイフレンド！」

だから――

でも――

引くわけには行かない。

ここで終わる訳には行かない。

なにより――

貴様との最後は決めて置きたかった。

「ティーン・ランスターあああああッ!!」

振り下ろされた拳。

振り上げられた刃。

洞窟内の広間の中心で、互いの想いが交差し爆ぜた。

終わらせてたまるか

黄泉路を進むとはこう言ったことを言うのだろうか——

目線の先には闇が広がり気持ちの後退させる。

嗅覚は役に立たず、聴覚には後方から爆音が響くのみ。

手足の間隔はすでに無く。

歩いているのかすら分からない。

それでも、意思のみで前に進み続けた。

微かに漏れ出た光源——

まるで闇に追われるかのようにして、手探りに光を掴み取ろうと歩みを速めた。

その光は、手にしたロストロギアを翳せば自らこちらに近づいてきた。

そしてディオニソスは遂にそこに辿り着いた。

ジェイル・スカリエツィが終ぞその存在を黙秘し続け、管理局にすら掴ませなかつ

た彼の知識の一端。

その価値は世界一つ分と同等と言われ、数多の神秘を人知にまで叩き落とした理想郷

と言われている。

管理局がロストログアとして認定しようにも、その価値を知るばかりに手が出せないパンドラの箱。

その名は、ティル・ナ・ノグ、不可能を可能とした奇跡がそこにはあった。

光さず室内、そのベッドに横になっていたアンジェリカは、隣で眠るティアナの姿を見ていた。

アンジェリカは後悔していた。

ティーノに願い出た自身の過ちを。

その願いは鎖となつて、彼を縛り付ける。

今となつてはそれが理解できる。

だが、あの時は気が動転していて、頼れる人が他にいなかった。

だから、アンジェリカは謝罪した。

隣で眠るティーノの大切な人に――。

「ごめんなさい……」

「大丈夫さ」

間髪入れずにかけられた声、その方向を見ればそこには7人の少女がいた。

見た目、声、佇まい、全てが似ていない。

どういった繋がりなのかも分からない。

それでも、彼女達はどこかティーノと似ていた。

その中の一人、背丈が他の人よりも頭一つ分以上小柄な少女が片目を閉じてそう言った。

「でも……」

「お嬢さんが気にすることないですよ！」

ウエンデイと言われていたカジユアルな服を着た活発そうな人が言うと、ノーヴェと呼ばれた人が前に出る。

そしてアンジェリカの頭を撫でた。

「大丈夫、絶対に大丈夫だ。ティーノなら、どんな不可能も可能にしてくれる」

アンジェリカはその顔を見て――

その自信に満ちた顔を見て、尋ねた。

どうしてそこまで信じられるのか、と――

すると、彼女達は互いに顔を見合わせ、笑顔になった。

その笑顔は、どこか嫉妬したくなる。

そんな笑顔だった。

「――だって、アイツは私達の家族だからな！」

「オルランドおおおおッ!!」

「ティーンおおおおッ!!」

振るわれた拳、弾く剣、闇を染める閃光、熱を奪う氷河、空を埋め尽くす剣の雲、大地を埋め尽くす氷結、流れる汗を血潮を想いを、今この時この瞬間に散らしながら、彼らは戦っていた。

オルランドの一撃を間一髪防いだティーンが吹き飛ばされ洞窟内の壁にぶち当たる。

砂埃が巻き上がり、視界一杯に広がる。

オルランドは油断無く、デュリンダナを中段に構えた。

砂埃が振り払われる。

その中から現れたのは五つの紅い剣。

ティーンが得意としているステインガーブレイドだ。

その剣が真つすぐに切先を向け唖喊してくる。

「ハアアアアッ!!」

剣戟一閃、振り下ろされたデュリンダナが生み出した剣閃は鎌鼬を生み出し、ステインガーブレイドを切り刻む。

紅い魔力残滓が砕けたガラスの様に散る。

「吹き飛ばええええ！」

砂埃の先、そこから聞こえたティーノの声に反応するようにして砕かれたスティンガーブレイドの欠片たちがそれぞれ一つ一つが小さな爆弾であるかの如く、爆ぜた。

「ぐっ！」

オルランドが爆風に巻かれ上空に吹き飛ばされる。

苦痛に顔を歪めながらも、その瞳はしっかりとティーノを捕えていた。

体の至る所には切り傷が出来ており、痣の数は数えきれない。

満身創痍とはこのことを言うのだろう。

だが、奴は立っていた。

そこに立って、まだその手の銃口をこちらに向けている。

諦めていないのだ。

諦めを知らないのだ。

それでこそ——それでこそ——……

だから!!

オルランドが空中で体制を立て直す。

だがしかし、その時には眼前に炎の塊が迫っていた。

その魔法名はブレイズキャノン、ティーノの得意技であった。

ここはどこともしれない洞窟の中、ティーノはいつ崩れ落ちるかも分からない洞窟内で砲撃技をほぼ使えずにいた。

それをここで使ってきた。

決めに来たのだ。

ただし、オルランドはそんなこと百も承知であった。

相手の力が万全に使えない。

だからこそ、ここで勝たなければならない。

卑怯だとか、悔しくないのかとか、そんなこと知ったことでは無い。

勝つか負けるか、その場の状況の優劣すら味方につけてそれでも勝ちたい。

そう、オルランドも勝ちたくて仕方が無かった。

こんな自分を止めて欲しいとそう願っていながらも、どうしようもなく勝ちたかった。

オルランドはブレイズキャノンを甘んじて受け止めた。

空に爆炎が轟く。

ティーノはそれを見て、体内に溜まった二酸化炭素を一気に吐き出した。

「はぁー……」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫、まだいける……。エテルナシグマも大丈夫？」

「問題ありません」

ティーノはエテルナシグマのその返しに嬉し気に笑った。

そしてその視線の先の爆炎の渦の中から、特大のそれこそ巨人相手に使うかのような巨大な氷の槍が姿を現したのを見て獰猛な笑みを作った。

そうこなくては、こんなところで終わってしまつては期待外れも良いところだ。

こんなモノじゃないだろ——

「互いにツ!!」

放たれた氷の槍は、空間を削りながら真つすぐにティーノに向かう。

限定された空間、逃げようにもサイズの的にその余波を受けてしまう。

ティーノは逃げずにその迫る氷槍を睨みつける。

そして、右手を構えた。

ティーノの足元に広がる魔法陣、その淵を炎が走り、右手の前には八枚のプレートが姿を現す。

「ブレイズイレイザーツ!!」

放たれた炎弾

オルランドとティーノの中心点でぶつかり合い、炎と氷が互いを喰いあう。その様はなんと呼べばよいのだろうか……？

不規則に回転を続ける炎の弾丸に対し、愚直なまでに進む氷の槍。

槍と弾丸——

まるで、過去と未来が戦場の主役を決めるために、競い合っているようだ。炎と氷の欠片が二人の間を埋め尽くす。

それはどこまでも幻想的な光景だった。

見上げるティーノの瞳には未だに滑稽なまでの戦意が宿っている。

オルランドはそんなティーノを見つめながら、静かに大地に足を下した。

「……どうして僕がここにいるか分かるか？」

ティーノは突然口を開いた。

そのことにまるで、学校帰りにどこに寄り道するか思案するかのようなそぶりです。オルランドも続く。

「さあね……、私には想像も出来ない方法なんじゃないか？」

「アンジェリカが……、ここに導いてくれたんだ」

ティーノのその言葉にオルランドは一瞬堪えるように口を一文字にして唇を噛みしめた。

「アイツはお前の事を心の底から心配していた。それと同時に帰ってきて欲しいと本気で願っていた……」

「知って……いるさ……、そんなこと……私は、あの子の兄だぞ？」

「ならッ!!なら……帰ってやれよ。アンジェリカの下に——」

テイノは気が付いていた。

オルランドが既にアンジェリカの下に戻る気が無い事を——

既に罪と言う泥に塗れてしまったが故に、戻る気が無い事を——

「そんな可能性、毛ほどもない……。私にはもう……帰る場所も……抱きしめる相手も……いない……」

「そんな事は無いだろうっ！まだ間に合う！一緒に帰って、一緒に謝って、一緒に引っ叩かれて、それから……それから、この続きをしたらいいだろう？」

「そんな時期は等に過ぎてしまっている」

「なら、なんでそこまで行つちまう前に話してくれなかった！」

オルランドは遙か天を仰ぎ見た。

そこには暗い洞窟の天井しか見えない。

ただし、オルランドの瞳には三人で遊ぶ風景が、何よりも幸せだった時間が写っていた。

「話せる筈がないだろ……。アンジェリカに残された時間は後僅かで、これ以外に方法が無かったんだ。……知ってるか？ 私達は、教会の力を使って次元世界中の名医にアンジェリカの病の治療を頼んだんだ。帰って来た答えは、全て謝罪の言葉だけだった。

力になれませんか？ すみませんでした？ 神に祈るしか手立ては？ 後の時間を大切に？ ふざけるな!! 諦められる訳がないだろ! だから、たった一つのこの方法に全てを委ねた! 例え、歴史上最悪の犯罪者に縋ろうとも、悪魔に願うことになったとしても、私はアンジェリカの騎士だ!!」

その叫びを聞いてティーノは笑った。

優しい笑みを、それこそ友人を案じているかのような優しい笑みを向けた。

「そうだ。お前はアンジェリカの騎士だ。唯一無二の存在だ」

オルランドがデュリンダナを構える。

今にも泣きだしそうな瞳に怒りを込めて、内心を吐露し、世界を憎む想いを眼前の存在に叩きつけるかのように――

オルランドは、これで終わらせるとでも言うかのように、青年の体になっていた。

こればかりはティーノにも真似できない大人の肉体への変身。

それは、身体的能力も魔力量も底上げする。

その姿を見て、ティーノは思い出した。

「そう言えば、あの姿のオルランドに勝ったことは一度もなかったな」
ティーノは理解した。

オルランドは、アンジェリカの傍にいたいのだ。

あの時の時間を大切に思ってくれているのだ。

今を後悔しているのだ。

でも、男だ。

ここまで来た以上引き下がれない。

誰かに無理矢理連れて帰られない限り——

オルランドの内部から膨大な魔力の風が生み出され、周囲を凍てつかせていく。

デュリンダナはさらに輝きを増して行く。

「お前は確かに特別だ——」

ティーノはエテルナシグマを撫でた。

「ロードカートリッジ」

それだけで理解してくれた初めての友人にティーノは感謝する。

「その力も、血筋も、想いも——」

思い出すのは、大人達との模擬戦——

「けどな——」

魔力の塊が全身を駆け巡り、痛む体を内部からさらに痛みつける。

「僕だって——」

そう、ティーノの周りには、その道の最強しか存在していなかった。

「特別だツ!!」

「モード2、形状変化——ストレンジス」

腕から炎がティーノを包み。

足から水がティーノを隠す。

炎と水が交わり消えたその先に、エテルナシグマとティーノの姿があった。

エテルナシグマの形状は変わり、銃口が消えたことによりさらにスリムになり、手首のカートリッジ部分が剥き出しになっていた。

さらに足元も変化しており、まるでフルプレートフルプレートの騎士甲冑騎士甲冑の足部のような鉄靴鉄靴に変化していた。

さらにバリアジャケットは軽量化のためだろう全体的に薄着になっている。

その姿を見てオルランドは呟く。

「その姿は——」

その言葉に呼応するようにして足底と手の甲に魔法陣が浮かび上がり、静かに回転を始めた。

「これは、お前に勝つためだけにエテルナシグマと考えた姿だ」

「その姿では、今の私に一撃入れられただけで、大怪我を免れないが？」

「構いやしねえよ。——お前に勝てるなら」

医務室で眠ることが出来ずに祈りを捧げ続けているアンジエリカを元ナンバーズの面々は心配するも、その行いを止めることが出来ずにいた。

その時、医務室の扉が乱暴に開かれる。

「ティアナさん！」

飛び込んで来たのは、キャロとエリオであった。

「キャロ、エリオ！」

スバルが二人の名を呼ぶと、シグナムが静かに叫んだ。

「怪我人の前だ静かにしろ」

シグナムに叱られた二人が慌てて空気を察し、黙り込む。

その時、待ちに待った声が聞こえた。

「もう手遅れですよシグナムさん……」

そうティアナだった。

「ティアア!!」

ティアアナが目を覚ましたことに喜びが爆発したスバルはたまらずにティアアナに抱き着く。

「こらっ、馬鹿スバル、私怪我人!!」

「あはは、ごめんごめん……」

「つたくもう……。それよりも、あなたがアンジェリカさんで良かったかな?」

祈りを捧げていたアンジェリカは、ティアアナが目を覚ましたことに涙を流しながら、口元を押さえていた。

ティアアナはそんなアンジェリカを抱き寄せると、優しく頭を撫でてやった。

アンジェリカはその温もりから、遠い過去の母を思い出し、ティアアナの胸元の服を握りしめていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

そう謝り続けるアンジェリカの頭を優しく撫で続けていたティアアナは、執務官の目になるとキャラコを呼ぶ。

そして、アンジェリカにこう言った。

「ねえ、ティーノが今いる場所を教えてください?」

その言葉に皆が驚いた。

中には、止める様に促す者までいた。

だが、ティアナの瞳に負けてしまったのだ。

その母の瞳は、どんな瞳よりも強く。

そして、輝いて見えた。

「……まったく、貴様の頑固さも治っていないな」

「この頑固さは、なのはさん譲りですよシグナムさん」

ティアナがそう笑うと、シグナムも微笑かに笑い、はやてに頭を下げた。

「我が主よ。どうか、ティアナの行いを許可して頂きたい」

シグナムの行動に周囲だけでなくティアナすら、驚く。

だが、はやてにはそうなることが分かっていたのか静かに溜息を吐くとティアナを

真つすぐに見つめた。

「……今回の件に関しては私にも少なからず責任がある。やから……約束して欲しい、

無事にティーノを連れて帰ってくるって」

「はいッ!!」

ティアナはそう言うと、突然立ち上がり来ていた服を脱ぎだした。

「男どもはあっち向いてろ!」

エリオとザフィーラは、さすがと言う他ないほどの速度で回れ右をした。

執務官服に着替えたティアナが靴を履き終わる。

キヤロに振り返れば、キヤロはすでに転送魔法陣を準備していた。

ティアナは、天井を仰ぎ見た。

「ねえ、スバル……？」

「なあにティアナ？」

スバルも優しい気にティアナを見つめる。

「子育てって大変ね」

「うん、一つの命を預かるのって大変なことだと思う」

「大体の事情は、臆気だけど寝ながら聞いてたわ。だから、ティーノをうんとりつけて

その後に、うくん褒めてあげなきゃいけない」

「そうだね」

「だからね……お願い……力を貸して……」

「任せて！」

ティアナのお願いは、口約束だけで出来る程優しくは無い。

皆理解していた。

ティーノの今いる場所がどんなどころで、そこになにがあつて、今後どんな災厄を撒き散らすのかを――

でも——

「僕も行きまますからね！」

「私もですよ」

エリオもキャロも、スバルも当たり前のように頷いてくれる。

ティアナは思う。

本当に良い仲間を持ったと——

ディオニソスは闇に向け、両手を掲げていた。

「おお、これがこれこそがティル・ナ・ノーグ！ ジェイル・スカリエツティが残した至宝——！」

それは付近一帯を黄金で固めたような祭壇の上に存在していた。

どういった原理なのか分からない。

ただ、周囲に無数に存在する生態ポッドを見れば、スカリエツティは己のクローンにこの知識を埋めつけようとしていたのだろう。

ディオニソスが一步また一步と祭壇に近づくとつれ、欲求が増して行く。

欲しい……あれが、欲しい——

その欲望は、一人の少女を救いたいと願う純粋な心を真つ黒に染め上げた。

「エテルナシグマツ！」

ティーンが叫ぶと同時に、オルランドの剣の届かない程傍まで詰め寄る。

無動作のその特異な動きと速さに、オルランドは驚く。

だがオルランドはまがりなりにも、先祖代々聖王を守り続けて来た騎士の末裔である。

振り抜かれた拳に対し、ピンポイントで氷のシールドを張る。

だが、ティーンのものの一撃は手の甲の魔法陣が押し当てられると同時に、内部に魔法弾を撃ち込んだ。

オルランドはたまらずに吹き飛ばされる。

だがしかし、吹き飛ばされた先に、すでにティーンは構えており、さらに殴り飛ばされた。

「この、舐めるなツ!!」

オルランドはその身体能力で吹き飛ばされながら強引に体の向きを変えると、氷の足場を作り、ティーンに飛び掛かる。

その速度は、砲弾のようであり、触れる物を細切れに変えていく。

ティーノはそれを流れるように躲すと、隙だらけの背面に踵落としをくらわした。

大地に大きな窪みが生まれ、その中心ではオルランドが無様に倒れていた。

「ぐっ……くそ……」

そんなオルランドを見ながら、ティーノが語る。

「僕はどこまで行っても中途半端な力しか使うことは出来ない。砲撃も射撃も格闘術も防御もすべてが中途半端だ。だから、僕はその力を格闘戦のみに集約した。中途半端じゃ、お前に勝てない。だから、一点にのみ力を活用するようにエテルナシグマにお願いしたんだ」

オルランドは気が付いていた。

ティーノの足元の魔法陣からは、水が出ていた。

その上をまるで滑るようにして、移動し、噴射することによって無動作での高速移動を可能としているのを。

さらに、腕の魔法陣から叩き込むたびにブレイズイレイザーのような貫通力の高い炎弾を放っているのを。

どちらも紛れもない進化だった。

今までの戦闘経験から、オルランドに勝つために進化した姿だった。

だから負けてしまう。

その時、オルランドの覚悟が決まった。

勝つための覚悟が——

そしてトリガーを落とした。

悪を滅しなさい——オルランド——

ティーノは寒気に襲われその場を飛びのく。

魔力も残り僅かで、オルランドも同じはずだった。

それなのに——

「まだ、こっただけ余力あるのかよ」

オルランドを中心に氷の花が咲いていた。

それを砕くようにして現れたオルランドは、先程の雰囲気とはガラリと変わっている。
る。

やっと本気になったようだった。

そして、この戦いの決着も後数手で決まる。

オルランドはデュリランダナを逆手に構えた。

あれが来る——

そう確信したティーノは息を整えた。

「頼むぞエテルナシグマ」

そしてデュリンダナが振り下ろされる。

「イスベルグ・プルガトワール！」

生まれ出氷剣の群れ。

それはオルランドを中心に溢れ出す。

「エテルナシグマッ！」

ティーノが叫ぶと、右足から膨大な量の水が溢れ出す。

さらに加速魔法で自身を一本の槍とし、突き出した右足から溢れる水を圧縮し回転させた。

さながらドリルとなったティーノは、氷剣の群れを削り壊し突き進む。

一か八かの呐喊攻撃であるが、その破壊力は折り紙付きであった。

そして氷剣の群れの先にオルランドを捕え、届いた。

だが――

「う、そ……だろ……？」

オルランドはその攻撃を防ぐでも躲すでもなく。

体で受け止めた。

肉体を高圧縮の水が削るのも関係なくオルランドは、地面に突き刺さるデュリンダナ

を引き抜くと、そのままの動作で円を描くようにティーノを叩き斬った。

「マイフレンド！」

エテルナシグマが叫び最後の力を振り絞り、オルランドの攻撃をシールドを張り防いだ。

だが、それも僅かな時間だけであり、ティーノは袈裟切りにされる。

地面にぶつかりその勢いそのまま跳ね上がるティーノの胸倉をオルランドは冷めきつた瞳で見つめる。

勝った——

その感情がオルランドを支配した。

ティーノからは、滝のように血が溢れ出し、時折嘔き出してすらいる。

このまま何もしなければ、後数分の命だろう。

オルランドも一杯一杯であった。

この一撃が決まらなければ、確実に負けていた。

それでも、勝ったのは自分だった。

オルランドは悲し気に瞼を閉じると、溢れ出る血潮を止めるためにティーノの切口を指でなぞり、氷を張った。

張った氷が微かに血の色に変わっていくのを見て、勝利の余韻に浸ることすら出来ず

に、ティーノを置いてディオニソスの元まで向かおうとした。

そう、完全に油断していた。

自分の勝利を疑わなかった。

この戦いは、勝ち負け以前に――

「喧嘩だつてこと、忘れてんぞ……」

ふらつくようにオルランドに倒れ込んでくるティーノ。

その右手には、小さな紅い魔力の塊が生まれていた。

そしてその塊が、トンと優しくオルランドの腹に当たる。

しかしなにも起こらない。

オルランドはティーノの執念に驚かされながらも、完全に倒さなければならぬと感じ、再度デュリンダナをを振り上げる。

その時、微かに聞こえた。

その魔法名が――

「……ブレイク・インパルス」

その魔法は至つてシンプルであった。

相手の固有振動数に自身の魔力による振動エネルギーを送り込み、それを掻き乱すと

いうものである。

デメリットは、相手に触れていながらも一定時間を要することであるが、それ以上にこの技のメリットは大きい。

なにせ——

「ぐ、……がはっ、あ……」

相手を内部から破壊するのだから——

オランダはブレイクインパルスをもろに受けてしまい。

全ての魔力の流れを断たれ、武装形態を解かれた状態となり倒れ伏す。

その手からデュリンダナが離れるのを見たティーノは、拳を掲げるとオランダにもたれ掛かるようにして倒れた。

「——勝った」

終わった——

そう思った。

だが、洞窟の奥にある扉から、禍々しい何かを感じたティーノはバリアジャケットを解除せずに、オランダを叩きつける。

「起きろって、オイッ!!」

「な、なんだッ!?!」

気絶していたオランダがティーノに叩き起こされると、その異変に気がついた。

「あの先には、ディオニソス司教様がッ！」

「お前、ブレイクインパルスを諸に受けて簡単に立ち上がれる訳がないだろ!」

「だがッ!!」

「立つ必要は無いよ」

その声は突然響いてきた。

そして扉の先、闇の中からそいつは姿を現した。

「はあ……、この様子を見る限り、世界はなにも変わってないと見える」

闇から出て来たのは、ディオニソス司教であつた。

だが、その雰囲気はそれはもはや別人と語っている。

「ディオニソス司教様ッ……ではないな……誰だ貴様ッ!!」

オerlandが叫ぶ。

だが、ディオニソスはその叫びすら心地よいと言わんばかりに、顔を崩した。

その表情は見る者を不快にさせる。

ただただ、世界に憎悪を振りまくだけにしか見えなかつた。

「私……、私かい? そうだね、君には私が誰に見えるかな?」

まるでクイズをするかのようなその問いに、さらなる不快感が二人を襲う。

だが、口元を押さえて必死に叫びそうになるのを堪えていたティーノがその名を口に

した。

「……ジエイル・スカリエツティ」

その答えに満足したのか、ディオニソスでは無くジエイル・スカリエツティは満足そうに笑い拍手した。

「素晴らしい、さすが私と言ったところだね」

スカリエツティは体を仰け反らせる。

「私は恵まれている！こんなにも早くに私と出会えたのだから！」

訳が分からないと、困惑するオルランドと違い、ティーノの内部を憤怒が支配した。

「黙れッ!!」

「でも、私にはある意味がっかりしたよ。所詮私も、有象無象と同じだったというわけか」

ハツとしたオルランドが叫ぶ。

「ディオニソス司教様は、どうした!」

「ああ、彼かい?彼ならここにいるよ」

スカリエツティはそう言うのと、自身の胸元を指さした。

「彼は善良で信仰心の厚い人物だったみたいだね。教会の権威をたかめるための駒にすぎない幼気な一人の少女を救うために、わざわざ私と会いにくるなんて……フフ、アハ

ハハハハハハハッ!!」

「なにが可笑しいッ!!」

「嫌ね、君も安心すると良い。君達の願いは私が叶えて上げるよ。なに、聖王家の末裔だ。健康な体にすぐにでもしてあげられるよ。ただし、その血筋は有効活用させてもらうけどね」

「させるかッ!!」

その瞬間、オルランドとティーノはなけなしの魔力を振り絞り、ジエイルに飛び掛かろうとした。

だがその魔力が突然掻き消える。

「おっと、暴力は反対だよ?」

いつの間に現れたのか、洞窟内のありとあらゆる場所に、卵型の機械兵器が浮いていた。

「ガジェットドローンだったかな。良い名前じゃないか」

ティーノとオルランドが再度魔力を集めようとリンカーコアに力を加えるが、魔力が出てこない。

「無駄だよ。このガジェットドローンにはね。IMFが搭載されているんだ。ガジェットドローンが発するフィールドから出なければ、魔力結合を行うことすら出来なくな

る」

ジェイルが右手を上げると、一体のガジェットドローンの瞳が光り出す。

「そして、こんなことも出来る」

ガジェットドローンから放たれた、魔力弾はティーノとオランダを難なく吹き飛ばした。

吹き飛ばされる中で、ティーノは思う。

ちくしょう、ここまで来たのに、やつと掴んだのに——

そして、涙で滲んだ空には無数の魔力弾の光が見えた。

ここで終わりたくない——

終わりたくないよ——

「ティアナ——」

「よく頑張ったわね。……お疲れ様」

無数のオレンジ色の魔力弾と雷光が洞窟内に充満した。

それらに貫かれていくガジェットドローンは次々と爆散していく。

そんな光景を、暖かな温もりに包まれてティーノは見ていた。

「ひつく……うぐつ……えう……」

溢れ出る涙は、喜びの涙。

欲していた温もりがすぐそこにあつた。

「ティアナあ……」

「今はゆっくり休んでなさい。帰ったらこっぴど叱ってあげるから——」
そして温もりが晴れると、ティーノとオルランドを守るようにして四人の背中が見えた。

その背中はずただただ大きくて、もう安心以外の感情を抱けなかった。

「……あの人たちは？」

隣で同じく四人の背を見つめるオルランドがティーノに問いかけると、ティーノは満面の笑みで答えた。

「あの人はストライカーズ……、僕が目指す最強の姿さ」

愛のカタチ

「はて……、君達はどこの誰かな？ 私のラボに招待はしていないはずだが……」

ジェイル・スカリエツティがそう言いながら、顎に手を添えた。

「そうね、ジェイル・スカリエツティ……。私達が誰かと問われれば、こう答えるしかないわね。——あなたに勝つことが出来る者よ」

ティアナ・ランスターがそう答えれば、何が可笑しいのかジェイル・スカリエツティはくすくすと笑った。

「そうかそうか——。私に勝つことがある者達が、こうして集った訳だね。……実際に、興味深い」

ジェイル・スカリエツティはそう言うと、両手を掲げる。

まるで、神託を受けるかのように——。

「ならば、今の私が敵う道理は無いと言うわけだ。ただ、私も久方ぶりだね。もう少し夢の続きが見たいのだよ。……その鍵は、すでに見つけることが出来たしね」

ジェイル・スカリエツティの瞳とティーノ・ランスターの瞳が交差する。

深く深く、底に通じるように、短くけれど長く、その様を認識し合う。

「そうさせないって言ってるのよ」

その視線の糸を断ち切るように、ティアナがジェイルとティーノの間に割って入る。

「私とて人だ。ならば、最大限に抵抗させてもらおうかな」

ジェイルが戦いの火蓋を斬る一言を発した瞬間に、無数に存在するガジェットドローンがジェイルを守るように壁となる。

さらに、空に浮かぶガジェットドローン達の瞳に光が集い出す。

その光景は、空に浮かぶ満天の星空のように美しい。

「空は僕に任せて下さい」

エリオがそう言うと、スバルは踏み込むように足を振り上げ、叩き落とした。

「ウイングロード！」

洞窟内に縦横無尽に天走る道が生まれる。

ウイングロードが完成した同時に、ジェイルは片眉を上げた。

「IMFが作動していない……？嫌……、あの少女か……」

ジェイルの見つめる先、キャロル・ルシエはすでに魔法陣を展開し、詠唱を始めていた。

「天駆ける蒼穹の道に導を……」

ジェイルがそれを確認し、ガジェットドローンの出力を上げようとした瞬間、ほんの一瞬、瞬きの間に、その視界から一人の少年が姿を消した。

「若き槍騎士に雷光の靴を……重ねて詠唱す」

「二重詠唱……」

ジェイルがキャロの技術の高さに敵の危険度を少し上昇させる。

「若き槍騎士に敵を貫く力を……」

キャロが詠唱が区切られた瞬間、浮かべていたガジェットドローンの二割が一瞬のうちに爆ぜた。

その爆音、爆光に反応した時、ジェイルは目の前の存在が自身を滅ぼすために生み出された存在であると、自身の戦術はすべて研究しつくされていると結論に至った。

だが遅い——

その結論に至ると同時に、壁となっていたガジェットドローンはすべてスバル・ナカリジマに打倒されていた。

「く……ッ」

ジェイルが慌てて後退する。

だが、スバルは逃がさない。

リボルバーナツクルを振り上げ、それをジェイルに叩きつけようとして。

止まった——。

「フフ——、危ない危ない」

スバル達は、紅い魔力の系にいつの間にか体を絡めとられていた。

ジェイルは、全てのガジェットドローンを生贄に、スバル達をバインドで捕える。戦いが始まる前、一目見た時から勝ち目が無い事は理解した。

ならば、勝てる環境を作ってやればいい。

今までの会話、動作はこのための布石。

全ては、今この瞬間のために。

ジェイルは片手を握りしめる。

それだけで、魔力の系に捕らわれていたスバル達は細切れになった。

「フフフフ……、ハハハハハハ……アハハハハハ!!」

ジェイルが高笑いする。

それは、勝利が確定したからだ。

だがそれは、こめかみに当てられた冷たい感触により、終わりを迎える。

「何がそんなにおかしいのかしら?」

そこにはクロスミラーージュを構えたティアナがいた。

ジェイルに動揺が走る。

そして、今しがた細切れに変えた軀を見れば、それらは魔力となつて消えた。「幻術……だと……？」

自分にすら見破ることの出来ない幻術を目の前の年若い女が使えることにも驚いたが、それよりもいつから幻術と入れ替わっていたのか。

そこにすべての疑問が向けられた。

それを察したティアナが、引き金に力を籠めて答える。

「全てよ——」。ガジェットも私達も何もかもが幻術……、あなたの前に姿を現した時点で、全て片付けていたわ」

それだけを言うと、抵抗しようとしたジェイルに向け魔弾を放った。

「おやすみなさい、ジェイル・スカリエツティ……。二度と目覚めないで……」

ジェイル・スカリエツティは思う。

目覚めてすぐにこれかと——

つくづく自分はついていないのだと実感させられる。

今の自分は、オリジナルのジェイル・スカリエツティが予備として残した過去のメモリの集合体。

私には、こんな結末がお似合いなのか……。

ああ、もつと欲しかったな……。

欲しい、とにかく欲しい……。

おいで——

誰だ君は……？

おいで——

私を欲してくれるのか……？

おいで——

ああ、行くよ……今すぐにも、君の下へ……。

ディオニソスの体が倒れ伏す。

「ディオニソス司教様!!」

その様子を見ていたオルランドが叫んだ。

「大丈夫、ティアアナさんの魔法弾は優秀なんだ。ディオニソス司教に傷を残すことなく内部の敵を撃ち抜くことが出来る」

オルランドとティーノの後方からエリオがそう声をかけて来た。

「エリオさん？」

ティーノがそう声をかけると、エリオはニコリと微笑む。

「うん、よく頑張ったねティーノ」

エリオはそう言つて、ティーノの頭を一撫ですると、キャロと共にディオニソスを拘

束しているスバルとティアナの下に向かった。

その時、拘束されていたディオニソスを中心にテンプレートが広がる。

互いを削り合う歯車が高速回転し、光り輝く。

その光景にティアナとスバルが驚き、エリオとキャロは二人の下に駆け出す。

だが、テンプレートは一つでは無かった。

「え……、なに……これ……？」

「ティーノ！」

ティーノの下にもテンプレートが生まれていた。

そして回転を進める互いのテンプレートから、幾何学模様が生まれ、それが世界樹の枝のように伸び始める。

一つの世界がもう一つの世界を飲み込む様に、新たな命を吹き込むように、ティーノの世界がディオニソスの世界を侵食していく。

「ハイ、は、こつもの……っ！」

その世界は、河川敷だった。

清さにおいて他の侵入を拒む大きな川を挟み、男とティーノは見つめ合う。

そこはティーノの夢の世界だった。

「やあ、随分と無茶をしたようだね」

川を挟んで向かい側から、いつものように幸薄そうな男が声をかけて来た。

ティーノもそれに対して、いつものように答えた。

「それでも、意地があつたんだ。どれだけ傷ついても貫きたい想いがあつたんだ」

そう笑うティーノに対し、幸薄そうな男は誇らしげに笑った。

「そうかい、それは良かった……」

「うん……、本当に良かったよ」

その時、ティーノの後方から砂を踏みしめる音が響いた。

ティーノがそちらに振り返ると、ティーノを大人にした姿、ティーノの別の未来の姿をした人物がいた。

それは、幸薄そうな男とも似ていて、ティーノとも似ている。

丁度その中間のような男だった。

その男がティーノの隣に立つ。

「痛かった？」

ティーノがそう言うと、ティーノの隣に立つ男、ジェル・スカリエツティが頬を掻いた。

「すごく痛かったよ。あの女子が放った魔力はまるで頬を引つ叩かれたかのように痛

かった」

「でしょ？ティアナは怒ると怖いんだ」

ティーノが笑い、ジェイルも笑った。

そしてジェイルが川を挟んで向かい側にいる人物に向き合った。

「……私は、こちら側にいることにしたよ」

「そうかい、君が選んだことなら、私はそれでいいと思うよ」

「ああ、だってこちらの私は私に手を差し伸べてくれたんだ。……こんなに嬉しいことはなかったよ」

そしてジェイルがティーノを見ると、ティーノはジェイルを見つめていた。

「でも、僕をあげることは出来ないよ。僕は僕で君じゃないんだ」

そう言ったティーノに対し、ジェイルはバツが悪そうに笑った。

「そんなことは考えていないさ。それに、君が許してくれても他の人達が許してくれそうにないからね」

ジェイルがそう言つて空を見上げると、霧に覆われた空から雪が降って来た。

その雪はティーノの側にだけ降り注いでおり、川を挟んで向かい側には振っていない。

雪の礫がティーノの掌に収まると、そこから光が溢れ出した。

その光の先には、外の光景が写されており、ティーノの手を握りしめてなけなしの魔力を振り絞っているオルランドの姿が写っていた。

「何をしているんだティーノ・ランスター！ 私達のケンカはまだ終わっていないだろう！ 寝てるんじゃない！ 飲まれるな！ 帰ってこいッ!!」

光が収まると、オルランドの姿は見えなくなった。

「まったく、アイツは……」

ティーノがそう言うと、目の前にいるジェイルが眩しそうに羨ましそうに微笑む。

「良い友人を得たね……」

「そうだね、だから、ごめん——」

「良いとも、私は君の一部となって、君の感情を愛を自由を見させてもらうことにしたからね。その代わりと言ってはなんだけど、私の力は君に託そう——。きっと、今の君の願いを叶えてくれるはずだからね」

ジェイルが光の礫となってティーノの体に入り込む。

不快感は無い。

むしろ、冷たいその感情をティーノは優しく抱きしめて、様々な人から受け取った温もりで暖めていく。

冷たい思い出を暖めたティーノは、空を見上げた。

「一緒にいこうジエイル・スカリエツィ……、君の力が今必要なんだ！」
さあ帰ろう。

愛した皆が待つ、あの場所へ――

「う、うん……」

「ティーノ!!」

「あわツ!!」

ティーノがぼやける視界を目を擦り鮮明にすると、そこはティアナが元いた病室であつた。

ティーノはアンジェリカのベッドの隣に用意されたベッドに寝ておりそのティーノにティアナが抱き着いていた。

アンジェリカのベッドの方にはオルランドが椅子に腰かけていた。

ティーノが目を覚ましたのを確認したオルランドは、嬉しそうに微笑む。
アンジェリカは口元を押さえて喜んだ。

色々と過保護に聞いて来るティアナに相槌を打ちながら、アンジェリカを見たティーノは、自身の胸元に手を当てた。

そして立ち上がる。

その光景を見ていた、ティアナをはじめとしたストライカーズの皆にナンバーズの皆、八神はやては、言葉を発することが出来ない。

ティーノの姿がどこか神々しく見えたからだ。

アンジェリカの前に立ったティーノにオルランドが声をかけようとした。

「アンジェリカの治療を始めるぞ。オルランド……」

だが、その言葉を聞いてオルランドが固まる。

「ほ、本当に可能なのか……?」

震える声で聞くオルランドに対して、ティーノが真剣な目で答えた。

「僕とお前がいれば大丈夫だ。……僕たちに不可能は無い」

その言葉があまりにも自信に満ちていて、力強くて、オルランドは涙を堪えるために空を仰いだ。

「……始めるぞオルランド」

「ああ、よろしく頼む……」

ティーノとオルランドはバリアジャケットを纏う。

横にさせたアンジェリカをティーノが見つめる。

アンジェリカの様態は、見た目は大丈夫そうに見える。

だが、ティーノには理解出来ていた。

もう、アンジェリカの体は一日ともたないことを、アンジェリカが気丈に振舞い苦しみを誤魔化しているのを――

だから、皆の夢を現実にするために――
神秘を奇跡に落とし、人の力で現実と為す。

その力の名を眩く。

自分にのみ与えられた。

万人の夢と言う名の欲望を形にした力。

その名は――

「インヒューレントスキル発動……、アンリミテッド・デザイアー」

その名をティーノが眩くと同時に、足元に歯車をいくつも重ね合わせたようなテンプレートが姿を現す。

さらに、そのテンプレートから光が溢れ出し、アンジェリカの虹色の魔力と共鳴を始める。

病が表面に姿を現したからだろう。

アンジェリカの口から静かな悲鳴が上がる。

額には汗がびっしりと張り付き、全身が痛みに抗っていた。

その様子を苦悶の表情で見ていたオルランドがたまらず叫ぶ。

「ティーノ!!」

だが、真剣な顔をしたティーノはその瞳をオルランドに向けた。

その金色の瞳の奥に、幾何学模様の歯車達が見えた。

オルランドが言葉に詰まっていると、ティーノが口を開ける。

「オルランド、お前はアンジェリカを愛しているか?」

「当たり前のことを聞くな私は、アンジェリカの兄だぞ!」

「違う——男として、アンジェリカと言う女を愛しているか?」

その言葉に、オルランドは狼狽える。

目の前で苦しむアンジェリカを見て、胸の内から湧き上がる想いが、兄妹だからと済まされる感情でないことは、理解している。

だが、自分はグランデイス家の人間で聖王家を守るために存在を許された家で、アンジェリカは罪に塗れた自分を許容してくれる存在で、そんな存在にこんな穢れた感情を向けていいわけが無い。

だから、答えをだせない——。

アンジェリカを自分で汚してはならない——。

「私は……愛しています……」

だが、その声は苦しむアンジェリカから発せられた。

「私は……、一人の女として……お兄様を……オルランド・グランデイスを……愛して
います」

息も絶え絶えで、何を言っているのかも聞こえないくらいに弱弱い声でアンジェリカは言った。

愛の言葉を――

オルランドはその言葉を聞いて、覚悟を決めた。

自分の穢れを背負わせてしまったとしても、彼女と共にいたいと決意した。

「私も愛している。アンジェリカ――」

その告白を聞いて、アンジェリカとオルランドの双方は笑った。

これで終わっても悔いはないと言わんばかりに、やっと互いの本心が聞けたと涙を流しながら笑った。

だから、こんな二人を終わらせてはならない。

「オルランド、アンジェリカの胸元に手を乗せる……」

「えっ……」

ティーンにそう言われたオルランドは一瞬頬を赤くさせる。

「色気づいてんじゃねえ馬鹿野郎！ つたく、早くやれつての!!」

ティーンは強引にオルランドの手をアンジェリカの胸元に乗せる。

「良いか、願え——。全ての不幸からアンジェリカを愛した女を救うための力を願え——。願え、愛した男と今後もあり続けるために、ともに生きるために、すべての災厄に打ち勝つように願え！」

アンジェリカとオルランドは願った。

ずっと、ずっと一緒にいたいと——

そのための力を——

剣を——！

アンジェリカの胸元、リンカーコアから虹色の魔力光が輝き出し、それが生まれた。

「なんだ……これは……？」

それは一振りの剣だった。

ただ、虹色に輝く剣だった。

その剣を抜ききったオルランドにティーンが言う。

「そいつの名前はオートクレール、アンジェリカとオルランドの願いを形にした。二人のための、二人だけの災厄を斬り伏せる剣だ」

そしてオルランドは、オートクレールでアンジェリカの体に巣食う聖王家を代々苦しめて来た病魔を断ち斬った。

オートクレールに斬られたアンジェリカの体には傷一つない。

血色も良くなってきている。

疲れから安眠を始めたアンジェリカを見つめて、オルランドは腰を抜かした。

そして、跪くとティイーノに頭を下げた。

「感謝を……、ティイーノ・ランスターに最大限の感謝を……」

そう言つて喜びの涙を流すオルランドにティイーノは笑いかけた。

「気にすんな——。僕は、友達だろ？」

オルランドはその言葉に笑うと、立ち上がった。

その顔には、輝きしかなかった。

「ああ、私達は友達だ！」

そう言つたオルランドだったが、今までの無理が疲れとなつて噴出したのか、ティイー

ノ

へもたれ掛かる形で気を失つた。

ティイーノはオルランドを受け止めると、アンジェリカの隣に寝かせる。

すると、オルランドの胸元にアンジェリカは顔をすり寄せ、オルランドはアンジェ

リカを抱きしめた。

そんな二人の姿に満足気に頷くティイーノであつたが、ふと目に映つたカレンダーを見

て、青ざめる。

「……ティアナ」

「どうしたのよ？」

「僕はどれだけ寝てた？」

「だいたい、半日程よ。……はいはい、分かっているからそんな泣きそうな顔をしない」
「ティーノとティアナが駆けだす。」

そう今日は、ヴィヴィオのエリートクラスの試合の日だった。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

エリートクラスの二回戦目、ヴィヴィオは苦戦していた。

相手が何度もD S A Aに出場している選手であることもそうだが、ヴィヴィオはいつもの集中力を出せずにいた。

一回戦、ティーノは来てくれなかった……。

大丈夫だよね……？

その時、相手選手の右ストレートがヴィヴィオの頬を捕える。

「ぐっ!!」

そのまま膝をつけてしまいそうになる。

だが、ヴィヴィオは堪えた堪えてしまった。

相手選手の左ストレートが叩きつけられるようにして迫る。

これで決まる。

観客のほとんどがそう思った。

盛大にヴィヴィオを打ち倒すのだと、その光景を今か今かと待ちわびる。

試合をしているドームは満員で、その観客席から見ている人達が全て自分の負けを期待して歓声を上げているのだと思ってしまう。

ヴィヴィオの試合を見ていたなのはとフェイトが精一杯に声を出す。

ヴィヴィオの後方では、セコンドとして自分についているノーヴェや友人達が声援を送ってくれる。

頑張れって言ってくれる。

でも、もう足にも腕にも力が入らないよ。

ヴィヴィオの弱り切った瞳が相手選手の拳を捕える。

ああ——……、ここまでなのかな——……

そう思った時だった。

「負けるなああああああ!!」

ふと耳に待ち望んだ声が聞こえた気がした。
錯覚かもしれない。

でも、足に力が戻った。

「僕は勝つたんだ！だから、お姉ちゃんも負けるなああああ!!」
聞き間違いじゃない！

ヴィヴィオの腕に力が戻る。

迫る拳を確実に瞳に納め、さらにその先を指す。

「アクセル・スマッシュ!!」

ヴィヴィオの放った渾身の一撃は、相手選手の腕をすり抜けるように相手選手の頬を打つ抜き吹き飛ばした。

見事なまでの、クロスカウンターであった。

割れんばかりの歓声が響き渡る。

相手選手のダウンを審判が認め、ヴィヴィオのKO勝ちが決まった。

その瞬間、ヴィヴィオは力が抜け落ち尻餅をついてしまった。

そして目的の人物を探す。

すぐに見つけることが出来た。

ティーノは会場の入り口のすぐそばにいた。

体はボロボロで傷だらけだった。

でも、無事にいてくれた。

それがとても嬉しかった。

だが理不尽にもこうも思ってしまった。

来るのが遅い、と――。

ヴィヴィオに向け、ティーノがサムズアップした。

その顔が満面の笑みだったからだろう。

ヴィヴィオもティーノに向け、満面の笑みでサムズアップした。

そしてヴィヴィオとティーノは互いにサムズアップしていた腕を下すと、倒れ込み溜

息を零すように呟いた。

「良かったあ〜〜…」

歯車

心地よい香りが鼻孔をくすぐる。

ここがなによりも、どこよりも安全な場所で大好きな場所だから、感じる事が出来る温もり。

ティーノはその温もりを感じながら静かに目を覚ました。

「ぶあつー！」

ティアナと同じベッドで眠るティーノはティアナに抱きしめられていた。

それは、幼女が大好きな人形を肌身離さず抱きしめるように、優しくけれど強く逃がさないようにしていた。

ティーノはティアナの胸の谷間から顔を出し空気を吐き出すと、視線を少し上げティアナの寝顔を確認する。

「す……す……す……」

「くすつ……」

ティーノはティアナの寝顔を見てから静かに笑顔になり、お見事と言われる程鮮やか

にティアナの腕の中から這い出した。

「う、うくん……」

心地よい感触と温もりが無くなったからだろう。

ティアナが、寝苦しそうにしている。

そんな姿を見たティーノは慣れた動作で、自身の枕をティアナに抱かせた。

するとティアナは枕に鼻を擦り付けて、ティーノの匂いを感じながら再び眠りにつく。

そんなティアナを見ていたティーノは少し頬を赤くした。

「匂いを嗅いじやダメ〜」

声量を落としながらそう言うも、夢の中のティアナには関係が無かった。

オルランドとの壮絶なケンカの後、すぐに退院することが出来たティアナとティーノはティアナの家に帰って来ていた。

あの日から、すでに一か月の月日がたっている。

ティアナはオルランド並びにディオニソスの裁判のために毎日夜遅くまで書類作成等の仕事をしている。

ティーノは、管理局で毎日精密検査を受ける羽目になっていた。

ディオニソスとオルランドだが、彼らは立場が立場なだけに、事件については公にす

ることなく、ある種静かにされていた。

又、聖王教会が今回の件に関して前面的に受け持つとの話しも出てきており、管理局では聖王教会に恩を売るチャンスだとの声も出ている。

大人達の都合に振り回されているオルランドではあつたが、ティーノと最後に面会した時には、清々しい顔をしていた。

アンジェリカは、順調に病魔は死滅して来ており、体調が本来の形になるまでもう少しというところまで来ている。

保護者のディオニソスの頼みもあつて、今現在は騎士カリムの庇護下にいる。

世界は緩やかに進んでいる。

今日も何事もないかのよう、静かにけれど確実に進んでいた。

ティーノが朝食を作り終わると、ティアナがパタパタと走りリビングのドアを開けた。

そして、ティーノの姿を見つけると、一目散に駆け寄り、ティーノの脇に手を入れて持ち上げると、ぎゅぐゅと抱きしめた。

「おはよう、ティーノ」

それに対し、ティーノもティアナを抱きしめ返した。

「おっはよう、ティアナ。朝ごはん出来てるよ」

「いつも、ありがとう。助かるわ〜♡」

ティアナはそう言うと、ティーンノの頬に自身の頬を擦り付ける。

ティーンノはそれをくすぐったそうに喜ぶが、すぐにティアナの顔を両手で押しつけた。

「……ティアナ？」

「はい……」

「今日……も……？」

ティーンノがジト目でそう言うと、ティアナはティーンノを下して両手を合わせた。

「ほんつと、ごめん。この埋め合わせは又今度するから！」

「それ、五回目だよ？」

ティアナは溜まった仕事の整理や書類集めに毎日、遅くまで管理局に缶詰になっていた。

酷い時には、帰ってこないこともしばしばだ。

そのため、ティーンノのデートの誘いを悉く断っていた。

ティーンノは頬をぶくつと膨らませる。

子供にとつて大人の事情は二の次だ。

それがわからないティアナではない。

だから、ティアナは謝ることしか出来ない。

ティーノもティアナがオランダ達のために頑張ってくれていることは理解している。

だから、はあくくつと息を吐き出すとティアナに朝食が冷めてしまうからとこの話を止めた。

テーブルをはさみながら、ティアナとティーノは向かい合いながら朝食を食べていた。

ティアナが皿に乗ったプチトマトをフォークで突き刺す。

「今日の予定は？」

ティーノは咀嚼していた食パンを飲み込む。

「いつも通り、アルフと本局に行つて検査を受けてくる。その後は、予定が空いちやつたから、オランダの所にも遊びに行つてくるよ」

「そつ——」。今日の晩御飯は、なのはさんの家でよばれるからね」

ティーノは手に持っていたパンをポトリと落とした。

「へ——？」

「私は帰りが少し遅れるから、なのはさんの家でつてことになったのよ。それに、アインハルトとコロナの試合もあるからね。試合に向けてスパートをきるための区切りに皆

でパーティーをすることになったのよ」

「い、いや……。僕は遠慮しておくよ……。だってほら、僕が行っても迷惑だろうし？」
ティーノがどうにかして逃れようとしていると、ティアナはクロスミラーージュを持ち上げた。

すると、空中にホログラムが姿を現し、そこにはなのはとヴィヴィオとフェイトの姿が写っていた。

電話回線を開いていたのだろう。

今までの会話は聞かれていたみたいだ。

「ティーノ、ちゃんと来なくちゃオハナシだからね？」

なのはがウィンクして言うてくる。

「別に無理なら無理って言うてくれていいからね？でも、ちゃんとした晩御飯は食べな
くちやダメだよ」

フェイトがオロオロしながら言うてくる。

そして最後にヴィヴィオは一言。

「待つてるからね！」

そして回線は閉じられた。

それと同時に、ティーノは目に見えて項垂れた。

ティアナはそんなティーノのことをほったらかしにして、コーヒーを口に含んだ。

午前から午後が変わろうかと言う時間、朝早くから活動を始めた人達の憩いの時間、昼休憩の時間までもうじきという微妙な時間帯。

昼休憩を満喫するために、せわしなく動き回る人の波を泳ぎながら、明るいオレンジ色の長い髪の毛に犬耳をつけた女と、フードを目深に被った少年がいた。

「なんでそんなにヴィヴィオやなのはのこことを苦手にしてんのさ？」

ティーノは本局での検査を終え、人型のアルフと本局の廊下を並んで歩いている。

ティーノから今夜のことを聞いたアルフは自然と疑問に思ったことを口にした。

すると、ティーノは目を逸らしながら答えた。

「だってあの二人は、僕をすぐにからかうし……」

「それでも、ヴィヴィオに対してはとくにじゃないかい？」

「ムズムズするんだもん……」

「は……？」

「ヴィヴィオに体を触られると、胸の中がなんかムズムズするんだもん……。でも、ヴィオはそんなのお構いなしに触ってくるし……」

少し長めの袖から、小さな指を出しつんつんと指どうしをつつき合わせながら、

ティーノがそう言うのと、アルフは腹を抱えそうな勢いで笑いだした。

「ぷっ……アツハハハハ!!」

「なにが可笑しいんだよ。アルフの意地悪……」

「ヒューヒュー、ごめんごめん。さっ、今日も行くんだろ？」

アルフはそう言いながら、ティーノの手を引いて歩みを進めた。

ティーノ達が辿り着いたのは、コンクリートの壁に覆われた鳥籠のような建物だった。

そこは、外部からも内部からも許可なく出入りすることを防いでいるかのように、聳え立ち管理局員が壁の隙間から目を光らせている。

だが、一歩中に踏み込めば、そこはエデンと見間違う程に緑あふれる世界だった。

一面に整えられた芝生が並び、木々の数々が優しく風に揺れる。

ここは、罪を背負った者達が立ち直るために与えられた箱庭、更生施設だった。

その芝生の上で、病人のような真つ白な囚人服を身を包む人物が寝そべっていた。

「よく来てくれたな、ティーノ」

「元氣そうで何よりだよ。オルランド」

オルランドは、以前のような何かに追いつめられているような硬い表情を無くし、

清々しい笑みを浮かべていた。

ティーノはオルランドと少し会話をすると、ポケットをあさり出した。そして、取り出した手紙をオルランドに手渡す。

「いつもすまないな」

「気にするな、僕は気にしない」

「ああ、では遠慮なくそうすることにするよ」

オルランドはそう言うと、ティーノの目の前で手紙を読みだした。

ティーノはオルランドが手紙を読み終わるまでの間、狼の姿になったアルフの腹を枕にして、芝生の上に寝転がる。

雲が静かに流れ、木々が揺れる音が辺りを占める。

静かに紙をこする音が聞こえ、時折笑みをこぼしたような音がする。

なんとも、落ち着いた良い時間が流れて行った。

ふと、紙が擦れる音が止まる。

ティーノがその音を辿るように首を動かすと、手紙を大事に抱えたオルランドと目が合った。

「……なに女みたいなことやってんだ。……気持ち悪い」

「おい、アンジェリカの手紙を読み感動に耽っていた私の想いを返せ」

ティーノはアンジェリカと会うことが出来ないオルランドのために、手紙のやりとりを手助けしていた。

ティーノはオルランドとアンジェリカの繋がりの糸を断ち斬りたくなかった。その想いを形にした結果が今となっていた。

ティーノは立ち上がり服に貼り付いた草葉を払い落とす。

「もう行くのか？」

「ああ、僕にも色々と用事があつてね。お前一人に構つてられないんだ」

「そうか……、寂しいな……」

ティーノは小さく一歩を踏み出した。

「……また来る。それまでに、アンジェリカに渡す手紙、ちゃんと用意しておけよ？」
ティーノはそう言うのと、一度も振り返ることなく歩き出した。

その顔をちらりと見たアルフはクスリと笑う。

なぜなら、振り返らないティーノの表情もオルランドと同様の顔をしていたからだつた。

日が地平線の先に半身を埋め、街を見つめている。

モノレールにアルフと乗るティーノは、座席に座り窓から夕陽に染まった街を見てい

た。

彩りが街を埋め尽くす。

今まで灰色にしか見えていなかった世界にすっかりと色が付いている。

ここ最近幸せ過ぎて、色々な幸せが自身を埋め尽くして行つて、それが当たり前となつていた。

でも、ティーノは知っていた。

その世界から色が無くなる恐怖が、だからだろう。

ティーノは街を見つめながら、何一つ言葉を発しなかった。

「なのはの家に行くには、次の駅で乗り換えだからね」

アルフがそうティーノに声をかけた瞬間、ティーノは何か弾かれたように立ち上がった。

「ど、どうしたんだい？」

「……ごめん、次の駅で降りる」

「な、なにを言つて……？」

アルフが困惑している間に、モノレールは次の駅についてしまった。

そして扉が開くと、ティーノが走り出す。

「テイ、ティーノ!!」

それを追いかけてアルフも走る。

「ハア、ハア、ハア!!」

ずっと考えていた。

オルランドと戦ったあの洞窟内で、僕の体の中に入り込んで来た意識。

それは、ジェイル・スカリエツテイの意識で今は僕に溶け落ちている。

それが生み出す僕への影響、それを検査し続けていたが、特に変化は無かった。

でも、確かに変化はあるはずなのだ。

周りの大人の対応が、目が、そう物語っていた。

なのに、答えは未だに出ない。

答えの鍵を知るのは、ジェイル・スカリエツテイしかなく。

僕はその容姿と名前しか知らない。

彼がどういった生き方をして、どんな思いでいたのか、知らない。

それを調べようとしても、皆がそれを邪魔してくる。

まるで、それが答えであり、悪いことであるかのように。

でも、そこに答えがあるのだ。

どんなに悪いことであっても、ジェイル・スカリエツテイと言う者に、僕の答

えが。

記憶の手掛かりがあるはずなのだ。

あの灰色の世界に浸ってしまふ前の僕の記憶が眠っているはずなのだ。そう考えていたときに、ふと目に飛び込んで来た。

墓石の数々。

そこは、墓地なのだろう。

一目では、把握しきれない量の墓石が並んでいた。

その一つに何故だか、僕は妙に引かれてしまった。

だから思ったのだ。

そこにジエイル・スカリエツテイの手掛かりがあるのではないかと――。

「ティーノ！待ちな、ティーノ!!」

後方からアルフの声が聞こえるが、立ち止まってなんていられない。

僕は知りたいんだ。

過去の僕がどんな人物だったのかを――。

そしてティーノは、目的の場所に辿り着いた。

ティーノは肩で息をしながら、その目的の墓を見た。

墓は、ミッドチルダにありふれたただの墓だった。

夕日に石が染まり、影を作って輝いている。

手入れが隅々まで行き届いており、ここに眠る人物が余程大切にされていたのだろう。ことはすぐに理解出来た。

だが、ティーノはその場所に辿り着いた時には、先程までの熱が冷めてしまっていた。ここに目当てのモノは無かった。

そう思い、踵を返そうとした時、ティーノの頭にゲンコツが振るわれる。

「イタイツ!!」

「痛くしたんだから当たり前だ!!」

そこには、人型となりフーフー唸っているアルフがいた。

アルフが自分を心配して怒っていることを察したティーノは、しゅんとする。

「……ごめんなさい」

「まったく……肝が冷えたよ」

アルフはそう言うと、今度はティーノの頭をワシワシと撫でた。

アルフとティーノの影が伸びて行く。

それは、もうすぐに夜が来ると告げているようだった。

そして、その二つの影に新たにもう一つの影が重なる。

「あれ、もしかしてアルフさんですか?」

声が出た方を振り向く。

すると、そこにはギンガ・ナカジマが花束を持って立っていた。

ギンガの存在に気が付いたアルフは気さくに手を上げると、ギンガに歩みより何か会話を始めた。

だが、その会話の声が耳に入っていない。

この時、ギンガの姿を見たティーンは墓を再度確認する。

そして、歯車の一つがカチリと音を立てて自身の中で回り始めたのを感じた。

ここは、ミッドチルダ西部エルセア地方に存在する場所。

その名を、ポートフォール・メモリアルガーデンと言う。

その19号第5区画24番地に立つティーンは一つの墓を見つめ続ける。

そこには、こう書かれていた。

クイント・ナカジマここに眠る、と――

壁

得体の知れない何かが不意に思いついたことはないだろうか？

それは聞いたことも無いメロデーを知らず知らずの内に口ずさんでいたり、急に紙にペンを走らせれば、それとなくどこかにいそうな何かを書いていたり、歩いている時に、頭の中で悲劇が鮮明に思い浮かび人知れず泣きそうになったり。

これらを行き過ぎた妄想だと断ち切ることは容易であろう。

人は自身の頭の中のタンスに収納された物事しか信じない。

故に自身と違う何かを経験した者を、説明できない何かを経験した誰かを忌み子とする。

それは種として防衛本能か、攻撃本能か。

得てして人とは、理解出来ないモノを全力で排除しようとするし、現にしてきた。

今、ティーノの内ではその理解出来ない何かが蠢いていた。

生態ポッドが無数に立ち並びまるでそれが美しい物であるかのように展示されてい

る。

そこは機人プラントの施設であった。

クイント・ナカジマは首都防衛隊の一つであるゼスト隊の一員として親友であり戦友であるメガーヌ・アルピーノと共にその施設に潜入していた。

だがしかし、その深部で発見された今までのプラントとは明らかに異色なプラント群を発見したと同時に、クイントとメガーヌは謎の機械兵器によって仲間達と分断され且つ蜘蛛のような形をした機械兵器に取り囲まれていた。

「隊長達との通信は？」

「ダメ、何かに妨害されているみたい……」

「何かって……そりゃ、十中八九周りにいるコイツ等のせいでしょ？」

「それもそうね……。兎にも角にも、まずはここを通してもらわないとならないわけだけども」

「通してくれそうにないし、どうしましょう？」

「女は根性と愛嬌よ、力付くで申し訳ないけど道を開けていただきますよう！」

「それもそうね。そうしましょう！」

二人の女性は、見たこともない兵器を前にして、十二分に相手を圧倒していた。物怖じせずひるまず、彼女達は光を指す。

その時——

「クイントさん！」

「どうしたの!?!」

繋がった通信から後輩の悲痛な叫びが聞こえた。

「隊長が！私達を庇ったせいで!!」

それだけでどういった状況なのかすぐに理解できた。

クイントはすぐにメガーヌに声をかけようとした。

だが、クイントの瞳に写ったのは、今にも機械兵器の刃に貫かれそうになっているメ

ガーヌの姿だった。

クイントは飛び出した。

咄嗟のことだった。

クイントはメガーヌと機械兵器の間に体を割り込ませ。

そして——

割れた生体ポッドから粘性のある液体が零れ落ちていく。

ゆっくり、けれど確実に、命を零していくように着実に——

視界が移り変わり見えたのは、別の研究施設の一つの生体ポッドだった。

そこには今しがた戦っていたクイント・ナカジマが浮いている。
それを私は見つめた。

「まったく、たいがい馬鹿だよ。君も——」
そこで視点が反転し、闇に落ちた。

「——ノ——イノ——ティーノ!!」

ティーノはハツとして、声をした方を見た。

するとそこには、アルフが呆れた顔をして立っており、その隣にギンガが立って心配そうにティーノを見ていた。

「どうしたんだい、急にボーっとしてさ。今日のアンタはどこかおかしいよ?」

「僕は大丈夫だよアルフ。ギンガさんもすみません、少し上の空でした」

「えっ……ううん! 私は別に良いのよ」

「ありがとうございます」

そうこうしている間に到着したのは、なのは宅の玄関先であった。

「でもよかったのかしら、私まで及ばれしてしまつて……」

「良いつてことよ。ゲンヤのおやつさんも急遽来ることが決まったらしいしね!」

そんな会話を隣に聞きながら、ティーノは胸に手を当てた。
あの妄想はなんだったのか。

妙にリアルだった。

まるで今しがた体験したかのように、匂いや体感まで感じ取られた。
だがしかしと、ティーノは首を振る。

今日の前に広がる世界が真実だと、自分に言い聞かす。

それでも不安になってしまう。

だから、ティーノは「んツ！」と言って、アルフに向け手を広げた。

そんなティーノを見たアルフは溜息を吐きながらも、ティーノを抱き上げる。

すると、ティーノはアルフをきつく抱きしめた。

「なんだいなんだい？」

「フフ……」

アルフが困惑し、ギンガが笑う。

それでもティーノは抱き着く力を弱めない。

まるで、保護者を全身に理解させるかのように抱きしめた。

なのは家の前まで来ると、アルフはティーノを下した。

そしてチャイムを鳴らす。

すると突然、ホログラムがティーノの前に浮かび上がった。

「待つていたですよ！」

そこに写つていたのはリインだった。

「今日もするですよ！」

「ええええ、この前飽きたつていったじゃん」

「またやりたくなつたのです！」

リインはそう言うと、通信を閉じた。

「はあ………」

ティーノは大きく溜息を吐く。

そんなティーノを不思議そうに眺めるアルフとギンガを無視して、ティーノは背伸びしながらチャイムを押しした。

ピンポン、とチャイムの音が鳴ると玄関の先からドタバタと音がして、玄関の扉が開いた。

「待つていたですよアナタ！」

そこにはエプロンを身に着けたリインがいた。

「ハア………」

ティーノはワザとらしく溜息を吐くと、リインの脇を通り過ぎてわざわざ来ていた

パーカーを脱いだ。

それをティーノの後を追いかけていたリインに乱雑に手渡し、リビングに通じる扉を開けた。

そして「ふうー」と疲れたように息を吐き出しソファアにドカツと座る。

リインは手渡されたパーカーをハンガーにかけようとして、その手を止めパーカーに鼻を付けた。

「……女性用の香水の香りがするです。アナタ今日は局の飲み会だつて……」

「チツ……そうだよ。まったくあのクソ上司にも困ったものだよ」

「ウソですよ！アナタの部署には女性の局員はいないじゃないですか?!」

「うるさいな！他の部署の上司と飲みに行っていたんだよ!!」

「まさか浮気……ですか……?」

「浮気なんてするはずないだろ?!君じゃあるまいし!」

「な、なんで……」

「僕は知っているんだぞ！僕が出張で外にいた時間帯に他の男と会っていたのを!」

「ち、違う！違うですよ!!アレは私のお兄さんで!」

「言い訳なんて聞きたくない!その話が本当だと言うなら、そのお兄さんとやらをここに連れて来てくれ、まあできないだろうけどね!」

「……お兄さんなら今ここにいます」

そう言つてリインはポカんと目を丸くするエリオを見た。

「えっ！僕!? その……あつと……兄のエリオです」

「ふん、口裏でも合わせていたのだろう?」

「違います! お兄さんに相談して、これを買に行っていたのですよ」

「これは、三つ葉のクローバーのネックレス?」

「そうです、二人の記念の……でも、男の人様のは中々選べなくて……」

ソファアールから立ち上がったティーノはリインに近づく。

そしてポケットから何かを取り出した。

それはリインが手に持つものと同様の三つ葉のクローバーのネックレスであった。

それを見たリインの瞳が驚きに開く。

「こ、これは……?」

「これを買うのに、上司のキャロさんに相談に乗って貰っていたんだ」

ティーノはそう言うと、リインの首にネックレスを付けるとその肩に両手を置いた。

「し、信じてもいいですか?」

潤んだ瞳でそう言うリインにティーノは頬を掻きながら照れくさそうに笑う。

「信じくれ……僕は君を……愛している……」

その言葉がトリガーになったかのようにリインとティノーの唇が互いに引かれ合っ
ていく。

そしてそれが触れそうになったとき、ヴィヴィオが二人の間に割って入った。

「ストローチップ!!二人共なにしてるの!?!」

ゼーゼーと肩で息をするヴィヴィオに対しティノーはきよとんとした顔で答え
た。

「なにつて、おままごこと?」

「はい、おままごことなのです!」

「じゃ、じゃあ、そのネックレスは!?!」

「これは前にリインと遊びに出た時に買ったんだ」

「ずるい!」

「ずるいつて……、ねえリイン、おままごとはもう終わりでいいでしょ?」

「ええー?!」

わいわい騒ぐ三人を見ながら、ヴィヴィオの友人達は思う。

ヴィヴィオは本当に弟のことが好きなのだなぁと——

エリオは登場したは良いが、一瞬で出番が終わってしまい何かやりきれない気持ちに
なっていた。

「あははは……、僕はこの後どうすれば良いのかな？」

すると、ちよんちよんとエリオの腕がつかれた。

そちらを見ると、キヤロが頬を膨れさせていた。

「浮気はダメだからね！」

「きゃ、キヤロ!?!」

子供達の様子を楽し気にカメラに収めていたなのは、カメラを置くと隣に座るユーノの手に自身の手を重ねた。

「あんなのもいいなあ……」

「そうかな？僕はそう思わないけど……?」

この二人、どこまでもかみ合わない。

その時、さらに来客を知らせるチャイムが鳴る。

「もうそんな時間なんやね」

「あ、私もいきますね」

時計を見て、誰が来たのか理解したはやてとシャマルが立ち上がると玄関に消えて行った。

「おいおい、こりやまたすごい事になってるな」

数秒後リビングに現れたのは、初老の男性ゲンヤ・ナカジマであった。

その隣には、ティアナとゲンヤの娘の一人スバルが立っている。

ティアナが何も言わずに手を広げると、リインとヴィヴィオ、さらにリオにコロナ、アインハルトに遊び倒されていたティーノが駆け寄り抱き着いた。

抱き上げられたティーノはティアナに頬擦りする勢いで甘えている。

その姿を見たゲンヤは、苦笑するとティーノの頭を恐る恐る撫でた。

突然のゴツゴツとして温かい大きな温もりを感じたティーノが瞳をそちらに向ける。すると、少し皺の寄った目と目があった。

「あつ……と……その、よ……」

父のそんな様子を見てか、ギンガがゲンヤの脇を小突く。

「俺はゲンヤってんだ。よろしくな……」

そうぎこちなく言うゲンヤに対し、ティーノはティアナの首元に顔を埋めながら頷いた。

互いの挨拶が済んだところで、はやてが手を鳴らす。

「さて、これで全員揃たね！パーティーを始めよか!!」

そこからの流れは別に語るでもない程に皆が笑う、どんちゃん騒ぎであった。

楽しい時間が過ぎ、子供達が皆眠りについた頃――

ゲンヤは一人、庭先で空を見上げていた。

その胸中は計り知れない。

愛した妻を奪った張本人が目の前に現れたのだ。

目があった瞬間、殴り倒してしまいかもしれないと考えていた。

彼がやったことを考えれば、それでもおつりが帰って来る。

そう思っていた。

だが、見てしまった。

彼は変わっていた。

生まれ変わったと言っても良い。

ただの子供として、無垢に生きている。

聞いた話によると、一人の女の子と友人を救うために大喧嘩をしたと言うではないか。

男じゃないか——

そんなアイツにティーノに憎しみを向けるべきではない。

ゲンヤは大きく溜息を零した。

「俺も……変わらねえとな……」

「父さん？」

「おお、ギンガかどうした？」

「そんなところにいたら、風邪をひいてしまいますよ?」
「おっと、そいつは困るな」

ゲンヤは室内に戻る前に、満天の星空を見た。
その星達が、間違っっちゃいないと教えてくれているみたいだった。

リビングでは、酔いつぶれた大人達の中でティーノが一人起きていた。
どういふ訳か、珍しく酔いつぶれたシグナムに抱かれている。

犬猿の仲だったはずだが、シグナムの強引なスキンシップに捕まってしまったようだった。

ゲンヤは酔いつぶれたスバルやはやての姿を見て、腹を抱えて笑いそうになるのをなんとか堪える。

ギンガとエリオにキヤロは、床に寝転がる大人達を必死に寝室に運んだり毛布をかけたりと忙しそうにしている。

そんな様子を見ながら、ゲンヤはテーブルにつき、目の前にあつた開いていたコップに酒を入れそれを飲み干した。

呷ったコップを下げると、いつの間にか向かいの席にはティーノがいた。

「おお坊主、てめえもこれが欲しいのかい?」

ゲンヤが酒瓶を揺らすとティーノは首を振った。

ゲンヤはティーノを見つめる。

その金色の瞳は全てを見通すかのように不気味に感じた。

ゲンヤは一人首を強引に振る。

「いけねえな酔っちゃまった」

だがしかし、その手は再び酒に伸びた。

「酔ったのならお酒はダメだよ？」

「大人は良いんだよ」

そして二人の間に沈黙が満ちる。

ゲンヤはどういった会話をするべきなのか悩みかねていた。

対するティーノもそれは同じなのだろう。

しきりに頭を捻っている。

そうして、数分たった頃だろうか。

ゲンヤは感傷にふけてしまったからだろう、胸元からペンダントを取り出した。

そのペンダントはハート型で、大人の男がしていて良いような物ではない。

だが、ゲンヤはそれを眺めペンダントの先についているハートに指を這わせると、そのハートが割れ、中には小さな写真が入っていた。

今時データじゃない写真なんてものを持ってるのは、物好きだけだが古い人間の自分にはこの方が良く、娘たちに言ってきた想い出の品。

その写真には、二人の少女と一人の女性が写っていた。

その写真を眺めていると、目の前に突然誰かの後頭部が入り込んで来た。

「ねえねえ、この人は誰？」

それはティーノの頭で、ゲンヤは困りながらも答えていく。

「このちゃんまいのが、スバルとギンガだ。で、その後ろにいるのが俺の女房のクイントだ」

ゲンヤは気が付かない。

過去の幸せに浸かっているその時に、ティーノが小さく胸元を握りしめているのを――

「クイントさんは今どこにいるの？」

そう聞かれたゲンヤは内心怒りに染まりそうになるが、それを抑え込み無理に笑顔を作った。

「……遠い、すごく遠いところにいるんだ。だから……今は会えない……」

「そっか……」

ティーノはそう言うと、ゲンヤの隣の席に座る。

ゲンヤはもうどこかに行つて欲しい、そう願つた。

でもテイノはどこにも行こうとしない。

行かないのであれば、吐いてしまつていいのだろうか？

コイツを前にして我慢をしていられない。

ゲンヤは重い口を開く。

「なあ坊主？」

「？」

「この世の何よりも愛した人が急にいなくなった時、どうすれば良い？」

子供に何を言っているんだ。

ゲンヤはそう我に返り、なんとか誤魔化そうとした時だった。

「僕なら、……探すよ」

「は？」

「どこにいたつて探し出して見せる。もう会いたくないつて言われたのなら、仕方がないつて諦めるかもだけど、……でもそうじゃないなら、どこにいたつて見つけ出して見せる」

「だつて——」

「大切な人だから」

ゲンヤは慈しみに満ちた顔でそんなことを言うティーノを見て声を大にして笑った。「そうか……そうか……そうか……そうだったな。まだ、待つてるのかもしれないんだよな」

そうだと、自分は諦めていた。

諦める必要などなかったのだ。

なぜならクイント・ナカジマの死体はどこにもないのだから——

なら、まだ可能性はある。

希望が残っている。

ゲンヤは笑うのを止めると、ティーノの頭を力一杯撫でた。

「ありがとうよ。お前に気付かされるなんて夢にも思っていなかったぜ」

そしてさらに酒を呷った。

「本当に、誰かを愛するのは難しいな。ああ、難しいとも……」

ゲンヤの皺のよった瞳に涙が溜まり一滴零れ落ちた。

すると、ゲンヤの白髪交じりの頭に小さな手が乗せられた。

「大丈夫……その願いは叶うよ……」

「えっ……？」

「大丈夫！」

顔を上げた先には力強く頷くティーノがいた。

「僕がなんとかかして見せるから……、でも、最後にはゲンヤさんの言葉が必要になると思うんだ。だから、待っていて」

「お、おい——」

その時、ゲンヤを突然の睡魔が襲う。

酒の飲み過ぎなのかなんなのか分からない。

だが、抗うことが出来ない睡魔がゲンヤの臉を強制的に落とした。
眠り落ちたゲンヤを見て、ティーノは優しく笑う。

「……よしー」

そしてティーノは一人、玄関に向かい外に出た。

外の世界は自分が知る世界とは違っていた。

人通りが無く。

生物の鳴き声も無く。

街灯のみが照らす町。

それは夜の世界だった。

「マイフレンド……」

「ごめん、エテルナシグマ。我儘に付き合ってた」

ティーノは思い出していた。

なんの気なしに、スバルに尋ねたスバル達の母の事。

その人は、温かくて大きくて優しく、太陽のような笑顔の人だったとスバルは言った。

今にも泣きだしそうな辛そうな顔でそう言った。

もう会えないと、出来ることならまた会いたいと、ティアナがいないときに、そう言っていた。

墓地に寄ってその墓を見たとき、僕はなにか違和感を覚えていた。

僕の過去がそこにあるのだと思った。

そして、ゲンヤさんに見せてもらった写真の女性を見て確信に変わった。

僕は、知っている。

クイント・ナカジマのことを知っている。

だから行かなければならない。

一人で行かなければならない。

この記憶が確かなのかどうなのかも分からない。

でも、確かめなければならぬ。

だから、と歩き出す。

そして気が付いた。

「これは、結界魔法？」

周囲の色が抜け落ちていく。

そしてティーノは途轍もない寒気に襲われた。

「この感じは——」

「こんな夜更けにどこに行こうと言うんだ？」

「シグナム！」

長い道の先、暗闇の中からそいつは現れた。

桃色の髪を一束にして風に揺らし、片手には炎の剣を持って、悠然と歩いて来る。

「ちよつとした用事を思い出してね。急がないといけないんだ、そこをどいてくれるかな？」

「それは出来ない相談だ。保護者のティアナの断りも無く夜のこんな時間に子供の外出を大人の私が許すとも思っているのか？」

「だつたらッ！」

ティーノはバリアジャケットを纏う。

その姿を見ながら、シグナムはやれやれと頭を振った。

「他人に説教した割には、自身のことはお粗末……見た目通り子供だな」

そしてシグナムは、剣を抜き放つ。

「レヴァンティン……」

ティーンノの越えなければならぬ壁が、炎を纏いそこに立っていた。

「はああああああ!!」

だがティーンノは負けるわけにはいかない。

だから今は突き進む。

なのは家の寝室で寝ていたリインは、寝苦しさを感じ瞼を開く。

「う、ううん……ティーンノ？」

再戦

月夜に走る銀閃。

壁際まで追い詰められていたティーノはそれを躲すと背にしたビルの壁を足場に高く飛び上がる。

見下ろす眼下の炎の騎士が振るった剣閃は、先程ティーノが足場にしたビルを切り崩した。

空の優位を活かす。

ティーノはシグナムを捕えた瞳を逸らさない。

両手首から甲にかけて突き出す形である銃口を向けると、まるで豪雨の如くステインガレーイを放ち続けた。

巻き上がる砂埃でシグナムを見失わないように、なのはに教えられた通りに常に落ちて着いて確実に勝利を取りに行く。

だがしかして、相手は烈火の将であった。

その身を貫く弾丸を受けたまま、のそりと重たそうに重心を落とすとレヴァンティン

を鞘に納めた。

「レヴァンティン！」

「シユランゲフォルム」

抜刀と同時に姿を現した剣はまるで蛇のように剣先が空を飛んでいく。

その速度はもはや直射砲撃のそれと変わらぬ。

己が技量だけで操っているのか疑問に思わせるほどであった。

空に浮かぶティーノの真下から突き刺す勢いで迫る剣の蛇を躲す。

だが、躲した先には同じく空に浮かんだシグナムがいた。

シグナムがティーノを蹴り抜く。

その重さはいままで受けたどんな打撃よりも重くティーノは耐えきれずに蹴り飛ばされた。

だがそこはクロノ達に師事を受けていたティーノである。

予めセットしておいたバインドがシグナムを束縛しようと現れた。

だがそれらは、シグナムの領域に入ったと同時に切り裂かれる。

さらにシグナムの領域の外側にステインガブレイドの群れが姿を現すが、それらすらシユランゲフォルムのレヴァンティンに叩き落とされた。

「何度も同じ手が通用すると思うな」

シグナムがそう呟きティーノを見つめる。

その先では、すでにティーノは紅い闇を出現させていた。

「闇に染まれッ!!」

「デアボリック・エミツション」

ティーノを中心に爆発的に膨れ上がった紅い闇が結界内を染め上げていく。

「ほう……」

シグナムは息を少し吐き出すと、レヴァンティンを握る右腕を振り上げた。

「飛竜一閃!!」

シグナムの魔力がシュランゲフォルムのレヴァンティンを包み込み炎の鞭となった。

「はあっ!」

振り抜かれたその一撃はまさに敵を薙ぎ払う騎士に相応しいものであった。

球状に膨れ続けるティーノのデアボリック・エミツションを縦に切り裂いたのだ。

「なッ!」

これにはティーノも驚くことしか出来ない。

デアボリック・エミツションはランクSの魔法である。

そこに込められた魔力は、ランクに恥じないものであった。

だがシグナムは、その魔力の塊をただ魔力を乗せただけの剣で切り裂いたのだ。

ありえない——

ティーンノの心がその言葉で埋め尽くされる。

その壁の高さを改めて理解させられてしまう。

「でも僕だつてええええええッ!!」

「モード2形状変化——ストレンジス」

レヴァンティンが鞘に収まる。

それと同時にティーンノがシグナムに肉薄し殴り飛ばした。

「ぐっ……」

殴られたと同時に体を撃ち抜いた貫通性の高い魔力弾がシグナムの後方の空間を歪ませる。

歪んだ空で吹き飛ばされたシグナムが体制を立て直すと、コンマ一秒とかがらずに抜刀し頭上の脅威を振り払う。

「くそー!」

そこにはすでにティーンノがいた。

ティーンノは防がれた左拳を引き戻し、踵落としを振るう。

噴射され続ける水が速力を高め、撃滅の一撃をシグナムに叩き落とした。

シグナムは咄嗟にシールドを張るが、それは水流に削り取られてしまう。

そして踵落としを受けてしまったシグナムは大地に叩き落とされた。

まるでミサイルでも降って来たかのように大地に爆音が響き砂埃が巻き上がる。

ティーノは流れるように高速移動し、砂埃の中にいるシグナムに向け殴りかかった。

シグナムはティーノの拳をレヴァンティンで受け止めるが、ティーノの拳が触れた瞬間に魔力弾により再度吹き飛ばされる。

吹き飛ばされたシグナムは頭からビルの窓に突っ込みガラス片を撒き散らした。

数秒後、ティーノに熱風と爆音が襲い掛かりビルが内側から燃やし尽くされた。

溶かされていくビルの中から出て来たシグナムの視線は、今まで感じていた冷たいものではなく。

逃げ出したくなる程に、熱かった。

「……その攻撃は？」

シグナムからの問いに、半歩後退してしまったティーノであったが、それを誤魔化すために構えを取る。

「僕の拳はどんな盾も貫通し、蹴りはどんな盾も削り飛ばす！」

シグナムはティーノ両手両足に展開している魔法陣を視認する。

「なるほど……、どおりで防いだ上からでも攻撃が届くはずだ」

——だがそこには焦りが見えない。

——むしろ楽しんでるようであった。

「なら、その四肢に当らぬように斬り伏せれば良いわけか」

「そんな事させる筈がないだろ！」

ティーノはストレンジスを解除すると、一足飛びで距離を開けた。

その距離は互いが踏み込むには離れすぎている距離であった。

「(っ)は僕の距離だ！」

ティーノが右手の銃口をシグナムに向ける。

さらに魔法陣が生まれ円陣を炎が走る。

右手の前には八枚のプレートが姿を現し、軋み音を出しながら静かに回転する。

アウトレンジからの一方的な砲撃。

近接戦では勝てないときのための、逃げ道。

本来であれば、こんな方法ではなく正々堂々と戦い勝ちたかった。

だが、今の実力ではまだ勝てないと理解してしまった。

理解したのなら、勝てる手段を取るほかない。

このままアウトレンジから弄り潰す。

この時、ティーノは勘違いしていた。

シグナムの戦闘スタイルやその出で立ちから、シグナムは近接戦しか出来ない。

精々がミドルレンジまでだと思いついでいた。

思い込んでしまっていたが故に忘れていた。

ティーノにとってシグナムとはその思い込みを叩き潰す存在であると言うことを――

「レヴァンティン……」

「ボーゲンフォルム」

シグナムが徐に鞘とレヴァンティンの柄を重ね合わせる。

するとレヴァンティンの形状が変化し、弓となった。

シグナムがその弓をティーノに向け、まるで照準を合わせるかのように沿わせていた。右手を引くと、炎の鳥が生まれその内部から一本の矢が姿を現す。

ティーノとシグナム、互いの熱気が空間内の空気を燃焼し、息苦しさを感じながらもティーノは焦った。

ありえない、と――

だからこそ、今残存する魔力のすべてをこの一撃に込める。

そして――

「打ち砕けッ！」

「駆けよ隼……」

放った——

「ブレイズイレイザー！」

「シュツルムファルケン！」

長く開けた道路のアスファルトを吹き飛ばしながら、炎弾と炎の矢が突き進みぶつかりあった。

両者は音速を超えぶつかり合ったことで、周囲一帯を根こそぎ吹き飛ばす。

ただその中心点では、互いに速力を弱めることなく相手を押しつぶすかのように火花を散らす。

テイーノは全ての魔力を込めたことにより膝から崩れ落ち、最後の一撃を見守る。

ブレイズイレイザーは自壊することも無視しながらシュツルムファルケンを崩壊に導く。

だが互いが拮抗していたのは、数秒のことであった。

「くそつたれ……」

ブレイズイレイザーは、発射前に魔力を込め打ち出す一般的な直射型魔法であった。

そのため、拮抗する力をぶつけられれば当然のごとくその威力は徐々に失われていく。

それに対して、シグナムのシュツルムファルケンにはその常識が通用しなかった。

「ハアアアアアアアッ!!」

シグナムはシュツルムファアルケンに向け右手を翳し、魔力を送り込んでいく。魔力を送り込むことが出来た。

シュツルムファアルケンが魔力を上乗せされたことでさらに勢いをつけだす。

その様は、まるで炎の鳥のように美しい。

そして炎の鳥が倒れ伏すティーノ目掛けて飛翔していく。

それを止めることはもうティーノには出来ない。

ティーノには――

「防げーイスベルグ・プルガトワール!!」

地中より生まれしは、氷山の群れ。

氷山の群れは炎の鳥と化したシュツルムファアルケンを包み込む。

貫かれ、溶かされ、砕かれてもそれを上回る勢いで生成されていく氷は遂にシュツルムファアルケンを圧死させた。

蒸気が立ち込め次第に雨が降り始めた。

「貴様は……?」

シグナムはボーゲンフォルムを解除し、レヴァンティンを正眼に構えた。

それに対し、デュリランダナを地面に突き刺したままのオルランドはデュリランダナを抜

くと鞆に納めた。

「オルランド・グランデイス……、ここで寝転んでいる阿呆の友達だ」

その言葉を聞いたときに、シグナムは懐かしい何かを感じた。

そう、フェイトと始めて相見えた時と似ている。

いつのまにか、自身が悪者になっているのだと気が付いたシグナムは、ならあの時と同じで悪に徹してやろうかと、口元を歪めた。

それは戦いに悦楽を見出したシグナムだからこそその思考だった。

そんなシグナムに対し、オルランドは残念そうにしていた。

「あなたとは、一度きちんとした形で戦ってみたが、今はその時ではない」

「なに——？」

「すまないが、行かせてもらおう。と、言うことだ——」

そしてシグナムは気が付いた。

いつの間にか月明りが消えていることに。

シグナムが空を見上げると、そこには入道雲のように大きく美しい氷山があった。

「逆巻き連なり天に座せ——落ちろ、ヘイムダル」

その言葉を合図に、空にあったヘイムダルが落下を始める。

そして氷山は結界内を踏みつぶした。

「なんで、お前がここに……?」

結界から抜け出したオルランドとティーノは、繁華街の裏道で座り込んでいた。

「アンジェリカから、貴様が何か無茶をすると連絡があつてな」

「そうか——あイタ!!」

「拳骨を落としたのだから当然だろう。まったく、あれだけ人に相談しろと私に言っておきながら、自身は私に一言も無くとはな——悲しみの前に怒りが湧き上がってくる」

そう言つてさらに拳を振り上げたオルランドに向けティーノは両手を上げた。

「ストツプ、ストツプ!!仕方がないだろ?さつき思いついたことなんだから!」

「貴様——そこまで、阿呆だとはな——もっと、計画性を持て」

オルランドはそう言いながら、ティーノを立たせる。

「そんなことより、お前の方は良いのかよ。更生施設を抜け出して……」

「友の危機だ、構わんよ」

「お前も対外に計画性がないよ」

ティーノとオルランドはそう言いあうと、笑いあつた。

「——では、話してくれるんだろ？今から、何をしに行くのかを」

オルランドにそう言われたティーノは口を開こうとした。

その時、予想外の人物が二人の前に現れた。

「その話、私も聞きたいです♪」

ティーノが驚きに耳を疑いながらも、声の方に目を向けるとそこには銀髪の少女がいた。

「リ、リイン……?!」

ティーノのその心底驚いた声を聞いたリインは、対照的に花が咲いたように笑った。

「ハイです♪」

町は一変していた。

まるで絵具をぶちまけたかのようなその景観に命の息吹は無く。

心を冷やす風が静かに流れた。

そんな街並みを押し流すかのような氷の塊、まるで氷山が逆さまになって降って来たかのようなその場所から、一つの炎の柱が天に昇った。

その中心点から現れたのは、烈火の将シグナムであった。

「ふう……」

シグナムは、小さく息を吹き出すと体についた埃を払った。

そして、結界を解除する。

それと同時に、戦火の後が何事もなかったかのように元に戻って行った。

そして、街に人の息吹が帰って来た。

だと言っても、時間は深夜だ。

出歩いている人間などたかが知れていた。

「さてと……」

シグナムは欠けた月を見上げる。

これからどうするか。

シグナムがそのことについて考えようかとすると、目の前にホログラムが映った。それははやてからの通信であり、シグナムは通信を繋げた。

すると、映像の先では少し慌てたようすのはやてがいた。

「良かったシグナム、リインとティーンがどこに行ったか知らん？」

「すみません、主はやて……。先程までティーンと戦闘をしておりました」

「な、なんやて——!？」

「説明は、後程……。今から戻りますので」

「了解や……。ケガは無い？」

「はい」

そう告げて通信は閉じられた。

ティーンとオルランドとリインは、電車に乗りながらこれからを話し合う。

「つまり貴様は、そのクイント・ナカジマと言う人が実はまだ生きていて、クイント・ナ

カジマの眠っている場所がわかるから、連れ戻しに行くと?」

「そういうこと……。でもまだ可能性の話しだ」

ティーノはオルランドに説明した。

ナカジマ家のことを、そしてクイントの事を。

その話を聞いた後だと言うのに、死んだ人間がもしかしたら生きているかも知れないと言う、半ば妄想の世界の話を聞いてもオルランドは痛く真剣だった。

「でも、クイントさんがいる場所に当てはあるのか?」

「それは、ここに入ってる」

ティーノはそう言うと、自身の額をつんつんと突いた。

「でもそれだけじゃないですよね?」

そう言ってきたのは、リインだった。

リインは、座席に座るティーノの顔を覗き込むと微笑む。

「……」

それに対してティーノは不貞腐れた顔をして、目を背けた。

そんな黙り込むティーノを見たリインは、ティーノの頭を優しく撫でる。

「今は良いですけど、話したくなったら話すですよ?」

「……うん」

ティーノが微かに頷き漏らした言葉を聞いて、リインは満足気に笑う。そんな様子を見ていたオルランドは、不思議に思ったことをそのまま口に出すことにした。

「失礼ですがリインさんは、ティーノとはどのような関係なのでしょうか？」

オルランドにそう聞かれたリインは、一瞬キョトンとすると、ニンマリと笑顔を浮かべティーノの頭を抱え込む様に抱きしめた。

「私は、ティーノのお姉ちゃん第二号です！」

「はあ……？」

頭を傾げるオルランドの視線の先には、顔を赤くしたティーノがいた。

「すまねえ、俺のせいだ!!」

その光景はある種異常であつた。

大の大人がそれも男が、一人の女子に頭を下げている。

恥も外聞も関係無く頭を下げたままの男、ゲンヤにティアナは重い口を開いた。

「事情は聴きました。それで何故ティーノが出て行つたのかも分かりました」

「俺が……、俺がガキのあいつに変な事を言ってしまったために……、本当にすまねえ」

「大丈夫ですよゲンヤさん。ゲンヤさんの気持ちも理解出来ますし……、恐らくティーノの目的はもう一つある。いえ、それがメインであると言っても過言ではないと思います」

ティアナがそう言うと、周りにいた大人達が皆苦虫を噛み潰したような表情に変わる。

だがそこで、はやてが両手を強く鳴らした。

「ティーノの目的はクイントさんを見つけ出すことと、おそらく自身の記憶……：ジエイル・スカリエツティだったころの記憶を蘇らせること！これは、今までティーノからその手の質問を受けてもはぐらかせてきた私達の責任や。ティーノの気持ちも理解は出来る。でも、それはそれだけは何としても防がなあかん！現在、ティーノと行動を共にしているのはオルランド君とリインヤ。この二人がおる限り無茶なことはせんと思うけど、万が一とすることもある。やから、これからティーノを連れ戻すために私達も行動を始めるで！」

はやてのその声を聞いて、大人達が立ち上がる。

だが、はやてから待ったがかかった。

「なのはちゃんとフェイトちゃんそれにエリオとキャロは、このままここに残って子供達が不安がらんようにしてあげて。ティアナとシヤマルは、私と一緒に本局に行つて今回

の一件を上層部の連中に利用させへんために行動するよ。それで——」

そこではやては一息つく。

そして願う様に告げていく。

「ヴィータ」

「はいよ！」

「シグナム」

「はい」

「ザフィーラ」

「お任せを……」

「頼んだで……」

はやてが自身の家族に伝えると、ゲンヤが慌てた様に口を開いた。

「俺も行く。ティアナはああ言ってくれたがこれは俺の責任だ。自分のケツは自分で拭かせてもらう」

ゲンヤとはやての瞳が重なり合う。

はつきりと言ってしまったば、魔法が使えないゲンヤは足手まとい以外の何物でもない。

だが、それでも下りないとゲンヤの瞳が物語る。

二人の間に言葉にしない口論が生まれる中、ゲンヤの後ろから、ギンガとスバルが顔を出した。

「はやてさん、私達が行くので大丈夫です」

「父さんは、すぐに熱くなっちゃうからね」

「お前ら……」

そうして、各々が準備を始める中ティアナはスバルに近づきその手を弱弱しく握る。

「ティーノのこと、お願い……」

悲し気に呟いたティアナの声に、その手に、スバルは力を入れる。

「大丈夫だよ。任せといて!!」

その時、はやての眼前にホログラムが浮かび上がった。

そこには、サウンドオンリーと書かれており、通信相手がラインであることが書かれていた。

ミッドチルダ東部、その一つの駅を降りたところでティーノ達は困り果てていた。

「なあ、この森の中を歩くのか？」

「うええ……」

「…………どうしよ」

三人の眼前には、深い森が広がっていた。

木々の背丈は、優に50メートルを超え枝から伸びた葉が日の光を遮っていた。

時間はすでに朝の時間帯になっている。

それなのに、出ている筈の太陽が見えない。

三人は途方に暮れていた。

その時、オルランドは仕方が無いなど溜息を零しながら、魔力を指先に集中させると、指笛を鳴らした。

「な、なにをしてるんだ？」

テイーノとリインが目を丸くさせていると、オルランドはドヤ顔で言った。

「まあ、見て居ろ」

すると、木々の間から何かがガサガサと蠢く音が聞こえて来た。

「テイ、テイーノ……」

リインがたまらず、テイーノの腕にしがみつく。

だが、オルランドはそんなテイーノ達を前にしても余裕のドヤ顔のままだった。

そして木々の闇から、六つの光る瞳を前にしてリインが叫びそうになった所で、それは姿を現した。

「……鹿？」

「違うは馬鹿者、馬だ」

「でも角が生えているですね？」

「それは当然だ。彼らはユニコーンだからな！」

だがその風貌はどこからどう見ても、鹿であった。

嫌、サイズ的には馬並みではあるのだが、見た目が白い鹿だった。

そんなことを考えていたからだろう。

オルランドとリインを即座に乗せたユニコーンは、我先にと進もうとする。

「ちよ、ちよつと待てよ！」

すると、一頭のユニコーンがティーノの前に頭を出してきた。

否、ガンをくれて来た。

そしてその瞳が語る。

認めろと――

「ああもうわかったよ！お前はユニコーンだ!!」

ティーノが叫ぶと、ユニコーンは嫌そうな顔をしながらもティーノをその背に乗せ

た。

「……お前の正確はオルランドとそっくりだよ」

そしてユニコーンは走り出す。

「凄く凄く！速いですよ〜！」

木々の中を文字通り風のように走るユニコーンの背中の上でリインははしゃいでいた。

「おい、そんなにはしゃいでいると危ないぞ？」

「あつ痛!!」

「言うまでもなかったな……」

盛大に舌を噛むリインを見ながら、オルランドはやれやれと首を振る。

そんな二人の会話を後方に感じながら、ティーノは思考の海に浸かっていた。

分かる——

この先にあるのが——

僕の中に溶けたジェイルが疼いているのが分かる——

でもなんだこの感じは——？

後ろ髪を引かれるようなこの感じは——

「……考えても仕方が無いか」

ティーノはそう言うと、後方の二人に向け声を張り上げた。

「もう少しだ！」

ティーノのその声を聞いて、オルランドとリインの顔も引き締まる。

そして木々が作り出す闇が開け太陽の光が差す世界に飛び出した。

「ハハ」が……」

それはまるで隕石が衝突したかのように巨大な穴であり、それは地獄に通じているのではないかと思えるほどに深い。

まさに断崖絶壁であり、向かい側が見えない。

よくその崖を見れば、その下側から上側に向け削れている。

まるで、地底から何かが這い出したかのように――

「ハハ」は……」

リインが険しい顔で呟く。

三頭のユニコーンは何かに恐怖し始める。

「ここにクイントさんがいるんだな……」

オルランドは地底を眺めながら呟く。

その隣でティーノは独り言のように言った。

「ああ、僕の記憶も……ここに……」

それを聞いて、オルランドは驚いたように瞳を開けた。

「ティーノ……貴様……」

だが、オルランドはそれ以上言えなかった。

ジェイル・スカリエツィが何をしてきたかは知っている。

だが、ティーノは本気でそれを求めていた。

泣きそうな顔になってまで求めていた。

ならば――

これ以上何かを言うのは無粋だ。

オルランドはそう自身の中で結論付けた。

そして、余りにも深い穴に足を竦めているリインに聞く。

「リインさんは戦えるのですか？」

すると、リインはムツとした顔になる。

「私だって戦えるですよ！」

リインはそう言うのと、蒼い本を取り出しバリアジャケットを身に纏った。

「二人共いくぞ……」

そして三人は、深淵に飛び込んで行った。

なのは家でリインから通信を受けたはやては、拳を握りしめながら震える唇をなんとかして動かした。

「三人居場所が分かった……」

大人達は、はやてのその雰囲気からそこがまずい場所であることが理解出来た。

「三人がおるんは、ミッドチルダ東部森林地帯中部……。かつて、聖王のゆりかごが浮上した場所や」

知っている

ザファイーラ達は、管理局本局からミッドチルダでの飛行の許可を得て眼下に街並みを残しながら空を飛んでいた。

「それにしてもなんで今まで、ミッドチルダ東部森林地帯中部に存在する聖王のゆりかごの浮上跡地に管理局の手が入っていなかったんだ？」

騎士甲冑を身に纏ったヴィータが、先行するザファイーラに疑問を投げかける。

「管理局は聖王のゆりかごのあった場所に関してはJS事件終結とともに大規模な調査をしている」

「ならなんで……」

ヴィータが小さな頭を使って考え出すと、同じく騎士甲冑を纏い空を飛んでいるシグナムが答える。

「ゆりかごの存在を隠していたのは、あのジェイル・スカリエツィだ。我々に発見されないように処置を施すことくらい簡単に出来てしまうだろう」

「でもさ、なにか釈然としないんだ……」

その時、皆の前にホログラムが現れた。

そこに映っていたのは、無限書庫で数多の本を開き情報を集めているユーノとアルフであった。

「ヴィータの考えは正しいよ。あそこには、少なからずジェイル・スカリエツテイの知識が眠っている。その知識を悪用しようとする者達からしてみれば喉から手が出るほどに欲しい物ばかりだ。そのために、管理局ではあの辺り一帯に高ランクの魔導士を配置し外部からの侵入を拒絶しているんだ」

「でも、ティーノ達はその中に入ることが出来た。誰にも邪魔をされずに……」
会話が止まり皆黙り込む。

誰もその先を口に出来ない。

その考えは非常にまずい。

だから、誰もがそんな事は起きていないと口を噤む。

そう――

管理局のしかも高い地位にあるものが――

J S事件で吐き出された管理局の膿以外に存在しているなど、誰も考えたくなどなかつた。

空を飛ぶことが出来ないゲンヤ達は、車で目的の場所を目指す。

「……すまねえな。俺の我儘に付き合わせてしまった」

「そんなことないよ。私だってお母さんが生きているなら、何が何でも助け出そうと思うだろうし、何が何でも助け出して見せる」

「スバル……」

「だから、お父さん一人に背負わせたりしない……私も戦う」

「もちろん私もですけどね」

「ギンガ……すまねえ……」

ティーン達一行は、まるで底なしなのではないかと疑いたくなるほどに巨大な穴の底に足を下していた。

そこはまるで巨大な生物の口の中にも入ってしまったかのように空気が湿っており暗かった。

踏みしめた土の音が泥水の上を歩いているかのような音で、数歩先も視認できない。心が体事へし折れそうな環境下、それでも三人はどことなく楽し気であった。

「うへえ……太陽の光が届いていないのですよ……」

「それだけ深いと言うことだろう……、だがこども暗くては前に進むことも出来ない」
「そこは私に任せるですよ！」

ラインはそう言うと、片手を振るった。

すると、洞窟全体が街灯に照らされた夜のように明るくなる。

まるで豆電球に照らされた部屋のように、なんとも言い難い光量がティーン、ライン、オルランドを照らす。

そこはどこまでも続く泥の砂漠であった。

「なにもないな……」

地下の水源よりもさらに深い穴の底であるためだろう。

岩壁からは少くない水が小さな滝となっていた。

さらに、その水が足元の砂を掻き混ぜ泥となっていた。

そんな光景が延々と闇に伸びている。

まるで悪魔が闇の先で手招きしているように不気味である。

「こつちだ……」

ティーンはそれだけ呟くと歩みを進めた。

「お、オイ！」

オルランドが、声をかけて歩む速度を増す。

すると、リインはオルランドを抜かしてティーノの隣に並ぶと、その手に自身の手を重ね合わせた。

ティーノはそれに気が付いていないかのように無視しながら歩みを進め続ける。

だが、重ねられたその手をティーノは確かに握りしめ返した。

ティーノは闇の中を進みながら考える。

わかる——。

僕は知っている——。

頭の中にこの風景が残っている訳ではない。

けれど、この体が心がまるで家の中であるかのように、足を運ばせてくれる。

僕には、この闇の中をどう進めばいいのかわかつている。

ある。

この先にあるんだ。

僕の記憶が——、そして恐らく過去の僕が深く関わりそのせいで犠牲になつてし

まったクイントさんが、この先に——。

ティーノの瞳には、光しか見えていない。

どれだけ闇が覆い隠そうとも、その中の光が確かに道しるべとなつて見えていた。

だからこそ、盲目になっていた。

その闇は、過去は——未来を殺すと——。

はやてとシヤマルは速足で本局内の廊下を歩いていった。

それは上層部でも、テイノ達の事に理解を示す人達、本局統幕議長のミゼット・クローベル、武装隊榮譽元帥のラルゴ・キール、法務顧問相談役のレオーネ・フィルス。

時空管理局黎明期の功労者として伝説になっている三人であり、実質の管理局内での最高権力者に陳謝と助力を乞うためである。

はやて達三人は、三又に分かれる廊下の中心で立ち止まる。

そして三人がそれぞれ三手に分かれて、動くため行動に移そうとした時、後方から声が聞こえた。

その声は、何か楽しい事を思いついた子供のように無邪気で狂気に満ちていた。

「やあ、お久しぶりです。八神二等陸佐」

「サンザ・グラトン刑務官……」

サンザは、はやてに名を呼ばれると嬉しそうにその手を重ね合わせた。

「どうかされたのですか、そんなに急いで？ なにか危急な要件でも？」

「あなたには関係の無い事です……」

「嫌ね、別に私としてはあなた達が何をしようともどうでもいいのですけどね？その執務官殿には、色々とまあありましてね」

サンザはそう言うのと、ティアナを一瞥した。

ティアナもその瞳に受けて立つ。

「私の監獄から逃げ出した犯罪者を託ってどういふつもりか知らないが、これだけは言っておきます。——犯罪者ジエイル・スカリエツティは必ず牢獄に送り返す。どんな手を使つても必ずね」

サンザはその瞳に明らかな侮蔑を込めてティアナに言った。

そして一瞬たじろぐティアナを鼻で笑い来た道を引き返そうとした時、思い出したと言わんばかりに言い出した。

「ああ私としたことが、言いたい事を言った満足感から肝心なことを聞き忘れていた」
そしてその瞳に三人を収めて語る。

それははやて達にとって衝撃以外の何物でもなかった。

「第17無人世界ラブソウルム軌道拘置所11番監房ウーノ、第6無人世界キリーク軌道拘置所1番監房トーレ、第6無人世界ゲルダ軌道拘置所2番監房クアットロ、第17無人世界ラブソウルム軌道拘置所6番監房セツテ」

その単語の羅列を聞いて、はやて、ティアナ、シャマルは顔を青くしていく。

「今から数時間前、何者かに手引きされ脱獄した元ナンバーズ達、……犯罪者達がどこにいるのか御存知ですか？」

目的地まで後数分、すでに森林の先に巨大な穴が見えていた。

風邪を斬り進むシグナム、その時風の中から嫌な空気が肌を撫でたのを感知した。

それと同時にシグナムは叫ぶ。

「躲せ!!」

その声が終わるよりも早くヴィータとザフィーラは回避行動に出る。

その刹那、三人の間に魔力弾のような光弾が通過し、さらに周囲に刃のついたブーメランが無数に姿を現す。

「これは!」

ヴィータが叫ぶ。

見覚えがあつた。

この戦術も、攻撃も、空気も全て覚えがあつた。

「久しいな、と言うべきか……あの時は世話になったな機動六課」

「……」

雲の切れ目から現れたのはかつてのジェイル・スカリエツテイの最高戦力。

その腕と足に虫の羽のようなブレードを顕現させ武人の如き立ち姿。

桃色の髪を風に靡かせ、その手を油断無く構える戦人。

「戦闘機人……」

そこにいたのは、いるはずの無い者達。

トーレとセツテであった。

スバルとギンガとゲンヤはミッドチルダ東部森林地帯の鬱蒼とした木々の中にいた。

「お父さん大丈夫〜?」

木々や草の数々を文字通り倒しながら道を作るスバルが自身の後ろでゼーハーゼーハーと肩で息をいっているゲンヤに声をかける。

「だ、大丈夫だ!これくらい……」

そんなゲンヤに肩をかそうとギンガが近づいたときに、それは起きた。

「ッ!?!」

スバルがシールドを張り、ギンガがゲンヤの前に立つ。

スバルのシールドに弾き飛ばされたのは、触手のようなコードの群れであった。「あらく、少し見ない間に随分鼻が利くようになったのね〜」

その声は、どこか甘い雰囲気を持っていた。

だが、スバルとギンガは知っていた。

その裏に隠された棘を、その存在を——

「ど、どうして……?」

「そんなの脱獄したからに決まってるじゃない〜、お馬鹿ちゃんなんだから〜」

「あなたが収監されていた場所は、そんな簡単に脱獄出来る場所じゃないはず」

「でも、現に私はここに居るのだし、どれだけ疑われてもそれが証拠ですし……」

世界が歪んでいく。

木々が草花が空が、まるで歯車のように回り出し、巨大な牢獄と化していく。

その光景に驚くスバル達を可笑しそうに笑いながら、クアットロは宣言した。

「ここから先に、通すわけにはいかない」

暗闇の中を進み続けるティーノの手を握りしめていたリインは、突然の身震いに襲わ

れる。

「てい、ティーノ……」

「……」

「ティーノ……」

「……」

「ティーノッ!!」

「わわ、どうしたの!?!」

「無視するなんてひどいです!」

「ご、ごめん……」

「もう……」

リインは頬を膨らませながらもティーノを見つめる。

ティーノは謝罪の言葉を口にしながらもその視線は暗闇の先に向けていた。

その金色の瞳には何も映していない。

リインもオルランドもなにも映してくれていない。

目的も忘れ、自身も忘れたかのように、闇に心を奪われているようにしか見えない。

だから、少しでもティーノに闇から遠ざかってもらおうと、リインは小さな頭で考え

て掌にあるものに乗せてティーノに渡した。

「これは？」

ティーンが受け取ったのは三つ葉のクローバーのネックレスだった。

「私のネックレスを渡すので、ティーンノのネックレスを下さい！」

ティーンは突然そんなことを言われて、何を言っているんだコイツとは思いながらも、リインも一度言い出したら聞かない性格であるのを知っているティーンは早く先に進むためにも、溜息を吐きながらも、ポケットの中からネックレスを取り出し、リインに手渡した。

それを受け取ったリインはネックレスを大事そうに抱え込むと真剣な瞳で言った。

「忘れないでください……。私は、ティーンのお姉ちゃんなんです」

「あ、ああ……?」

「お姉ちゃんなんですからねー」

「わ、わかったよ」

理解したのならそれで良しと、リインが鼻からフンスと息を吐き出したのを合図に再び歩みを進める。

そして目的の場所に辿り着いた。

そこはティアナの家に置いてある転送装置と良く似た機械だった。

闇の中で淡く光る装置は、未だにそれが生きているのを示していた。

「ここがそうなのか？」

「ああそうだ……この先にある」

オルランドに答えたティーノは淡く光る円柱の中心に歩みを進め。

ラインとオルランドも続いた。

そして装置は独りでに稼働を始める。

三人ともどれだけ強くともどれだけ修羅場をくぐっていようとまだまだ子供であつた。

だからだろう。

三人とも知らず知らずの内に手を握りしめ合っていた。

周囲の鉄の輪が回転し、光が強くなっていく。

ラインは思う。

クイントさんを無事に連れて帰ると――

オルランドは考える。

クイント・ナカジマを救い出すのが親友の願いなら、その願いを叶えるためにこの剣を振るうと、それが大きな借りを返すことに繋がると――

ティーノは欲する。

クイントを救い出し、そして自身の記憶も取り戻して、ティアナに大丈夫だと、自分

「は悪い子では無いと言って、又皆で笑うのだと——

光が一段と強くなる。

握り合う手に力がこもる。

そして三人は転送された。

「う、うゝん……」

「(ハハ)は……」

オルランドとリインは眩い光に瞼の裏側を照らされたまらずに瞼を開けた。

そして見た光景に絶句する。

そこには卵型のカプセルが所せましに並べられた場所だった。

まるで大樹の根に守られているかのように分厚いコードが絡み合い、気味の悪い色をした液体をカプセルの中に注いでいる。

そこに浮かぶは、一人の女性——

まるで無重力の世界にいるかのように、液体の中で眠っている。

だがしかし、オルランドとリインは吐き気がした。

その装置の数々が人命を弄んだ結果だと、瞬時に理解し何がなされていたのかを想像

してしまったからだ。

そして気が付く。

一緒にいたはずのティーノがいないことに――

「リイン、オルランド？」

同じ時間、ティーノも二人がいない事に気がついていた。

ティーノが転送された場所、それは不思議な場所であった。

天井に所狭しと並べられたモニターの数々、黄金色に彩られた壁、大樹の根のような装飾が施された床、赤い宝石が光一直線に道を作り出していた。

その全てを視認すると同時に激しい動悸がティーノを襲う。

「痛っあ……うう……」

ノイズが視界一杯に広がり、見たことも無い情景がノイズの隙間に流れる。

今とは別の時間が今の時間と重なり合い瞳に写る全てを塗りつぶしていく。

「知っている……僕は……知っている！」

まるで警報を鳴らすように脈打つ心臓を右手を胸に持って行き握りしめることで黙らせる。

一步を踏み出す。

その一步が重い。

まるで鎖に繋がれているみたいに、重い。

だが、ティーノは進む。

鎖の先に繋がる何かごと引きずるように一步、一步、着実に前に進んで行く。

なぜなら分かっているからだ。

そこに得たいものがあるのだと……。

だが、足に繋がる鎖も重い。

まるで今のティーノが過ちを犯さないように必死に引き留めようとしているかのよう
うに重い。

ティーノはとうとうその重さに耐えきれず前のめりに倒れ込む。

だが、そのティーノを抱き止める誰かがそこにはいた。

「やつと……やつと……お会いできました」

その声は慈愛に満ちていて、今にも叫び出しそうなまでに喜びに溢れていた。

ティーノは前に進むためにも、誰であつても利用してやると、助けてくれた人の肩を
支えにしても前に進むとうとする。

「やはりあなたは、頑固ですね……」

助けてくれた誰かは、ティーノに支えにされても嫌な声色一つ出さず。むしろそれすら受け入れる優しさを持っていた。

ティーノが無理矢理に顔を上げると、今までノイズが走っていた視界が急にクリアになっっていく。

そして視界一杯に広がる女性の姿を見て、何故だか涙が止まらなくなった。

「お久しぶりです」

その人の笑顔がとても懐かしい。

その人の紫色の髪が自身と重なって見える。

その人の匂いが胸を焦がす。

その人は――

「ウーノは、お父様を……いえ、ドクターをお待ちしておりました」

過去の地獄

天に翔は光芒の星——

地に蔓延るは、樹木の雄叫び——

「テートリヒシユラークツ!!」

振るわれる鎚、その小さな体軀から繰り出されているとは到底信じられない風切り音を発しながら、ヴィータのハンマー型デバイス、グラーフアイゼンが振り落とされる。

「……」

桃色の長髪を靡かせながら、セツテは大きく後退した。

セツテは後退しながら左手を右手の肘に添わせ、右手を固定しその右手をグラーフアイゼンを振り抜いたままの状態にいるヴィータに向ける。

「ふっー」

放たれた光弾。

それは轟音を以てしてヴィータに直撃する。

さらにセツテはブーメランプレードを自身の手元に二本呼び出す。

睨みつける先には、爆炎が晴れ何食わぬ顔で傷一つつけずにグラーファイゼンを肩に構えるヴィータの姿があった。

ヴィータは肩に担いだグラーファイゼンを構え直す。

すると、グラーファイゼンは独りでカートリッジをロードした。

グラーファイゼンから落ちていく排莖、それが合図であるかのようにグラーファイゼンはその姿形を変える。

ハンマーの両面が変形し、三角錐の突起物にロケットの噴射口のような物が出現した。

ヴィータが前傾姿勢に移る。

そして、今か今かと待ちわびる相棒に向け着火剤を投与した。

「ラケーテンハンマーッ!!」

噴射口から炎が噴き出し、ヴィータは景色が歪むほどの速度で突き進む。

その様はまさに一個のミサイルのようであった。

セツテはその姿を見つめながら、静かにブーメランブレードを投げては手元に新たに呼び出し、投げては新たに呼び出し、と続けていた。

その数が三十を超えたあたりで、セツテは深く瞳を閉じる。

そしてその小さな口で勝利の方程式を口遊ぶ。

「IS発動——、スローターアームズ」

その言葉を合図として、乱れ飛んでいたブーメランプレードの数々は一斉に罅を獲物に向けるかの如く突き進むヴィータに殺到していく。

「グラーフアイゼン!!」

「パンツアーヒンダネス」

ヴィータが吼えグラーフアイゼンが応える。

すると、ヴィータを中心としたダイヤモンド型のシールドがヴィータを囲う様に出現した。

その瞬間——

セツテのIS、スローターアームズによつて操られているブーメランプレードの群れが一斉にヴィータに襲い掛かった。

だがしかし、ヴィータは子供のような容姿をしていようと夜天の主を守護するヴォルケンリッターの鉄槌の騎士、そのヴィータが生み出した盾が、破られるはずもない。

「はあああああああアツ!!」

縦横無尽に襲い掛かって来るブーメランプレードの中を一直線に進みその懐に入った。

そしてセツテを打ち砕くように全力で加減なしにグラーフアイゼンを振り抜いた。

ヴィータは半ば確信していた。

この一撃が決まると、すぐにシグナム達の援護に迎えると、だがその考えは即座に否定される。

「なっ！」

「……………の程度！」

セツテは片手でグラーフアイゼンを受け止めていた。

グラーフアイゼンからは噴炎が出続けている。

それは受け止められても尚、嫌、受け止められたからこそより一層その勢いを増して行く。

だが、動かない。

セツテを打倒するまで後一センチそこらである。

だが動かない。

見えない鎖で拘束されているようにビクともしない。

「ッのッ……………」

ヴィータは逃れることが不可能ならと、さらに魔力を込めラケーテンハンマーの推力を増して行く。

その甲斐あつてか、グラーフアイゼンは僅かに動き出そうとした。

その時、今まで感情らしい感情を見せなかったセツテが初めて感情を見せた。それは僅かな時間だった。

無機質な瞳に一瞬だけ見えた炎、それは怒りだった。

「——ッ!!」

ヴィータが突然のセツテの感情の発露に一瞬戸惑った瞬間、力点をずらされる。

そして体制を崩されたヴィータはまるで鉛のような拳に殴り飛ばされた。

「うわあッ!!」

「ヴィータ!」

その姿を見たザファイラが援護に向かおうとするが、それはトーレに防がれる。

「シッ!」

「ぬう!」

トーレの鎌のようなするどい蹴りを受けたザファイラは大きく後退する。

ただし、それは隙を作ったことと同義だった。

「紫電一閃」

烈火の将はそれを見逃さない。

振り抜かれた炎剣、だがそれは交差されたインパルスブレードに難なく防がれる。

紫電一閃が防がれたことにより逃げ場を失った衝撃は、爆発を生み出した。

それが合図であるかのようにトーレとセツテ、シグナムとザファイラとヴィータは向かい合う形で距離をとる。

「……強え」

「ああ……」

「我らが知る戦闘データを大幅に修正せねばなるまい」

そこはまるで鳥籠の内部であるかのようだった。

天と地は木々の柵で覆われ、漏れ出す光が刻まれた。

世界の縮図であるかのような世界の檻、逃げ場は無く行き着く先も無い。

その世界は生まれた時から完結していた。

「はあああああッ!!」

「ヤアッ!」

スバルとギンガは、何も無い空間から放たれてくるコードの束を叩き落としていく。

一つ一つにはたいした威力は無い。

だが、いつどこからどういった形で伸びてくるから分からないその攻撃は着実にスバルとギンガの体力と気力を奪っていく。

「ギン姉！」

「わかってる」

スバルが叫ぶよりも早く。

ゲンヤに向かい伸びていたコードの束をギンガが叩き潰す。

前衛に出ていたスバルが二人の下に戻ると、ギンガとスバルでゲンヤを守るようにたつ。

その時、全方位から声が響いた。

「お荷物を抱えながらと言うのは、厳しいんじゃないかしら？」

その言葉にスバルが叫ぶ。

「邪魔をしないでクアットロ！ 私達は早く進まなくちゃいけないんだー！」

「そう言われても、私はあなた達を足止めしないとイケないの、だからそれは無理な相談ね」

その言葉を最後にいくら呼びかけてもクアットロからの返事はなかった。

だがそれは予想通りだった。

いくら戦闘機人であろうとも、クアットロが行えることは幻術のみ。

ゲンヤだけならまだしも、数々の試練を乗り越えて来たスバルやギンガにしてみれば倒せない敵ではない。

だが、今は時間が無い。

付き合つてやる道理もない。

ならば、打ち砕くのみ。

「ギン姉……」

「わかつてる」

二人は勝負を決めにかかろうとしていた。

まるで玉座の如き広間、中央に悠然と構えるのは紅い宝石。

その宝石を中心に広がるバラのような黄金色の管。

脈打つ力が空気を震わせ、放つ輝きが魔力を生み出す。

懐かしい温もりに抱かれたティーノは、僅かに顔の位置をずらす。

するとそこには、自身と同じ紫色の髪に黄金色の瞳を持つ女性が微笑んでいた。

「ウーノ……?」

「はい……、ウーノは、この日を待ちわびておりました」

その瞳には涙が浮かび、抱きしめる腕の力が増す。

戦場に行った男と再会出来たかのように、喜びに打ち震えていた。

だが、ティーノは違った。

自身でも驚くほどの低く拒絶する声が無意識に口から零れる。

「邪魔をするな……」

なにも考えられない。

ただ、体の赴くままにティーノはウーノを押しつけ歩き出す。

「本当に……あの頃の、ドクターなのですね……」

「僕をその名で呼ぶなッ!!」

前に進むようにしたティーノは投げかけられたその言葉に反応し、言葉と言う空気の振動を薙ぎ払うように腕を振るった。

だがしかし、ティーノの体はいつの間にか限界に来ていた。

振るった腕の勢いに負け、バランスを崩す。

「ぐっ!」

ティーノはその事を理解し次に来る衝撃に瞳を閉じた。

だがいつまでたつてもその衝撃は来ない。

何故なら、振り払われた手をウーノがしっかりと握っていたのだから。

ティーノはその手を嫌悪を込めた瞳で見つめる。

そして腕を辿って見上げれば、やはりウーノは慈愛の籠った笑みを浮かべていた。どうして自分が親切な人に対してこんな感情を態度を向けてしまうのか理解できない。

それでも、我慢が出来なかった。

裏側の想いが表に溢れ出す。

でも心が理解していた。

この人は、ながあつてもどんな状況であつても、きっと自分の味方でいてくれるの
だろうと——

だからだろう。

ティーノは再度、腕を振りほどくと一言呟いた。

「……ついでにい」

ウーノはそんなティーノに対し、静かに呟いた。

「は……」

歩く——

固まり切っていないコンクリートの中を進むように、重い足を着実に進めていく。

そのたびに、頭に激しい痛みが走る。

それは、脳味噌に電極を刺しているかのように、決まったタイミングで痛みを走らせ

知らない僕の記憶が入って来る。

欲しかったものがやつと手に入る。

ティーノは激痛の波に飲まれながら、それでも手を伸ばした。

痛みで闇に閉ざされていく中で、一筋の光に手を伸ばす。

そして届いた。

「えっ——？」

ティーノは見知らぬ世界に立っていた。

鼻につくのは、薬品と硫黄と鉄の匂い。

幾分高くなった視界で、ティーノはその世界に立っていた。

どこだ、ここ——

ティーノは周囲を見回そうと、足を動かした。

すると足元から粘性のある音が聞こえた。

足を動かすさらに音が聞こえる。

まるで、ジャムの上を歩いているかのような音に不快感が襲う。

「どうかされましたかな？」

そんな世界で声が聞こえた。

声の聞こえた方に顔を向ければ、そこには管理局の制服の上から白衣を纏う男がいた。

いたのは男だけではない。

普通のスーツを着ている者、私服を着ている者、多種多様な人がいつのまにか周囲にはいた。皆忙しなく動き回っている。

声をかけて来た男が下賤な笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「ドクターの眼から見てどうですか。我々の成果は？」

ティーノは男に促されるように顔を動かす。

そしてそれを視界に収めた時、気が付いてしまった。

見なくなかったそれを、防衛本能として拒絶したそれを、理解してしまった。

それはベッドに寝かされた一人の女性だった。

下腹部を切り裂かれそこから数多のコードが伸びていた。

足元のあの音は、そこから溢れ出た血と、そこらに捨てられていた人みたいな何かから溢れ出していたモノだった。

あの臭いは、血と臓物の臭いだった。

あ、か、あああ——

叫び声が脳に響く。

だが口からは出てこない。

たまたらずティーンは視線をそらした。

すると、今まで見えていなかった者達が見えて来た。

「クソつ、これも失敗だ！おい、誰かこのゴミを廃棄場に持って行ってくれ！」

「あ、後少しだったのに、耐えろよなこのガラクター！」

「チツ、うるせえな！今その口を縫い合わせてやるよ。これで、叫ぶ必要がなくなったな

？」

皆ベッドに寝かされた人に何かをしていた。

切って繋いで打って流して——

人を人だった何かを、弄っている。

笑って怒って悲しんで、そして笑って——

粘土をこねるように、おもちゃで遊ぶように、皆が様々な感情を見せている。

ただしていることが理解出来ない。

人を冒瀆する何かだったとしても、皆イキイキとしていた。

急激な吐き気が、内側で叫び続ける中でせりあがってくる。

重なってしまった。

すると、虚ろな瞳で天井を見上げていた実験体の女が顔を動かしてこちらを見て来た。

瞳と瞳が交わり合う。

空虚と絶望が交わり合う。

その中で見てしまった。

聞いてしまった。

空虚な瞳から一滴の涙が零れ落ちて、小さな口が僅かに動く。

「——助けて」

その世界は——

地獄だった——

「うわあああああああああああああああああああッ
!!!!!!」
ティーノは紅い寶石。

レリックに触れた途端に叫び出した。

まるでこの世全てを憎むかのような絶望を乗せた叫びを喉が切れ血を吹き出しても叫び続けた。

「やはり……まだ、ダメなのですね……」

ウーノは叫び声を上げ続けるティーノを優しく抱きしめる。

「まだ壊れないで……大丈夫、きつと大丈夫……あなたはその地獄を一度は乗り越えた」
だから大丈夫、とウーノは優しくけれども力強くティーノを抱きしめる。

けれども理解していた。

これ以上は彼の心を壊してしまうことになる、だから今自分に出来ることをする。

「IS発動——フローレス・セレクトアリー」

ウーノとティーノの足元に歯車の形をした魔法陣が浮かび上がりそこから暖かな光がティーノを包み込む。

すると、ティーノは今までの叫びが嘘のように黙り込みそして気絶した。

糸が解けた操り人形のように崩れ落ちるティーノをウーノは抱きとめると、その額にキスをした。

「また今度、いつかきつと……、迎えにいきます」

ウーノはそういうと、ティーノを地面に横にさせ、闇の中に姿を消した。

ティーノがいる空間には只々虚無のみが広がっていた。

苦しみ

揺れる波面——

上がる気泡——

黄色の液体に満たされたカプセルに眠るその女性は、ただ悲し気に表情を歪め、悪夢を見ているかのように涙を浮かべ、悲しみを感情と共に体から切り離していくかのように黄色の液体に溶け込む。

そう、その女性が浸かる世界は悲しみに満たされていた。

闇の中に浮かぶかのようなその姿を見たオルランドとリインの二人は、うまく言葉を出すことが出来なかった。

金縛りで体が捕らわれ、見えない感じない魂だけとなった不気味などこのどなたかに体を抱きしめられているかのような不快感。

自然と背中を汗が伝い、知らないうちに手汗が指先から伝い落ちた。

高所から低所へ。

天上から下界へ。

響き渡る水面を叩く音。

始まりを告げる福音は、静かに彼女の眠りを妨げた。

「クイントさん！」

まず解放されたのはリインであった。

彼女は薄く瞼を開けたクイントの姿を瞳に納めると、自身に纏わりついていた何かを振り払い駆け出した。

「クイントさん！大丈夫ですからね！今すぐ出してあげますから！」

リインはガラス一枚に阻まれた世界に浮かぶクイントにそう叫ぶと、目につくところに存在していたコントロールパネルを自身の知識を全て引きずり出して叩き出した。

リインの瞳にどこの世界の言語か意味の分からない文字の羅列と数字の羅列が出ては消えていく。

「大丈夫、大丈夫ですからね！」

それは誰に向けて言った言葉なのか。

自分自身に？

捕らわれのクイントに？

行方知れずのテイノに？

その全てに向けてリインは叫び続けた。

そしてその叫びを浴びた男がここに一人いた。

「私も手伝う」

「オルランドさん！」

「指示をくれ！」

「はい！」

そこからの二人は実に迅速であつた。

ただ救いたい。

速く家族に会わせてやりたい。

そして、この喜びを今どこかに行つてしまい心配させているアイツと分かち合いた
い。

ラインの心がティーノを優先しろと叫んだ。

だが、ラインはその手を止めることはしなかつた。

彼なら、どちらを優先すべきなのか。

順序がどうなっているのか。

何を選択するのか。

わかつていたから……。

だから——

「絶対に助けます！クイントさん!!」

リイン達がクイントの救出を急ぎ、ティーノが絶望に叫ぶ中、遙か空の上では騎士と機士が睨み合っていた。

動けない――

シグナムは敵の戦闘機人をその鷹のような瞳で射貫く。

パワーに技量、そのどちらも同等かもしくは上。

速さにあつてはあちらに分があり、守りに在つてはこちらに分がある。

だが、時間がなかった。

ティーノ達がいる場所は、まさに魔窟。

地獄の始まりにして、天にいきつく螺旋階段。

ジェイル・スカリエツティの欲望の窯底。

そこに彼らはいる。

何も知らずただ求めることしか出来ない子供が、そこにいるのだ。

後悔がシグナムの胸中に押し寄せる。

あの時、もっとキツく留めるべきであった。

子供の背伸びが身を結ぶ姿が眩しく、それを尊いと平和に沈んだ体と平和に腐った心

がこの結果を生み出した。

一度犯した過ちは取り戻すことが出来ない。

けれどもシグナムは呼吸を整えた。

「まだ間に合う！」

その言葉に、悠久の時を共に戦い。

共に腐った同志が応えた。

「その通りだ」

「ちやつちやか終わらせんぞ！」

シグナムはレヴァンティンを構える。

腐って結構、沈んで結構——

この身は既にその次元を超越した愛によって受肉した偽物の人生。

だから打倒する。

目の前の敵を——

ただただ思いつく限りの全てで打倒する。

シグナム、ザフィーラ、ヴィータの体の中から出た魔力の奔流が周囲を歪めていく。

そしてまるで松明に油を注ぐかのように、爆発させた。

「レヴァンティン！」

その斬撃は速かった。

その斬撃は重かった。

その斬撃はシンプルであった。

シグナムは己が魔力の爆風に方向性を与えてやることで、トーレとセツテに一瞬で肉薄する。

懐に入って斬る。

シンプルであるが故に切り札と為りうる最速最重の一撃。

だがしかして——

戦闘機人は、そんな規格外を葬るために生まれた純粹種——。

「IS発動——ライドインパルス」

シグナムの一撃はトーレとセツテの残像を斬り伏せ空を割った。

「どうやら、今日はここまでのようだ。では、この戦いの行方はいずれまた——」

トーレとセツテは、言の葉がシグナム達の鼓膜を揺するより早くその場を後にした。

「くっ……」

シグナムは悔しさに唇を噛みしめる。

だが悔しさに潰され俯くシグナムの背中を小さな手がひっ叩いた。

「アイツらの事は、後で良い。むしろ好都合だ——行くぞ?」

ウィータの張り手により背中の一部が僅かに熱い。

だが、その熱は再びシグナムの体を伝播していき活力を生み出した。

「ああ、その通りだ！」

シグナム、ヴィータ、ザフィーラの三人は大穴の中に自ら飛び込んでいく。取り戻すために――。

樹海の中では、スバルとギンガ、ゲンヤの三人がクアットロの足止めに苦戦していた。つい先程までは――

「ダイバインバスターー！」

スバルが魔力の塊を叩きつける。

生み出された魔力の波が幻の世界の一点に集約され押し寄せる。

砕け散る世界。

ガラス片のような世界の欠片が降り注ぎ、木々の青臭さと微かな太陽の光が現れた。

それは元の世界に帰ってこられたことを意味しており、それを成しえたのは一人の無力な男の洞察力であった。

「ふう……うまく行ったな……」

膝をついた状態のゲンヤ・ナカジマは顎にへばり付いた汗と泥を拭くと勝ち誇るように立ち上がる。

その先には、茫然と立ちすくむクアット口の姿があつた。

「ど、どうして……」

クアット口の瞳に疑問の色がやどり、言葉は弱音を吐き出した。

「これぐらい出来ないよ、魔力のない人間が一つの部隊を持つことなんて出来やせんよ」
その言葉が耳に届いたクアット口は怒りに震えた。

認めたくなかつた。

自身の力が、ただの人間に負けたことが、ただ認めたくなかつた。

そして、そんな人間をまた侮つてしまつていた自身を認めたくなかつた。

「はああああああー」

怒りに震えるクアット口をギンガが襲い掛かる。

これで決まるそうスバルもギンガもゲンヤも思つていた。

そもそもクアット口は幻術に長けたサポートタイプであり、前線に一人で現れるような人物ではない。

さらに、時間稼ぎのみが目的だと判明した以上その幻術を破つた時点で勝敗は決したはずだった。

だが、予想は大きく裏切られる。

「えっ?」

ギンガの拳をクアットロは受け止めていた。

そして、ギンガを放り投げる。

「くっ……」

「ギン姉！」

「大丈夫よ」

態勢を立て直したギンガとスバルは油断することなく構える。

目の前にいるクアットロがJS事件のときの人物とは違って見えて来ていたからだ。

体中から発せられる危険信号。

震えが知らず知らず押し寄せてくる。

だが瞬きした一瞬の間にクアットロの姿はそこには無かった。

そして虚空より声が響く。

「今日はここまでにしとくわ。それとこれは忠告なんだけど、先に進まない方が賢明よ。」

「それはどういう意味!？」

「私が言えるのはそれだけ……じゃあね」

それだけを残し、付近一带からクアットロの気配が消えた。

三人の間を無言が支配する。

クアットロが残した言葉、その意味が虚言に聞こえないのだ。だからこそ、身動きが取れない。

その時、ゲンヤが息を大きく吸い込んだ。

そして大きく娘二人に向け頭を下げた。

「力を貸してくれ！俺は……俺は、クイントに会いたいんだ！」

その言葉を聞いたスバルとギンガは互いに笑い合い、それぞれが優しくゲンヤの肩を持ち上げる。

「その想いは皆一緒ですよ」

「皆でお母さんに、おかえりなさいって言おう！」

娘二人に励まされたゲンヤは思わず涙ぐんでしまう。

だがゲンヤはその涙を拭くと、前をまっすぐに見つめた。

「行くぞー！」

その心に、一抹の不安を抱きながら……

オルランドは驚愕していた。

隣で必死にクイントと呼ばれた女性を救おうとしている少女は、まるで長年使い倒した

機械を触るかのように、手足のように見たことも無いコントロールパネルを叩いている。

その動作一つ一つに迷いは無く。

オルランドに指示を出しながら、作業を進めている。

それが驚異的なことであることくらい、オルランドでも理解出来た。

現に、クイントに取り付けられていた機材の数々はほとんどが取り除かれていた。

後は、気味の悪い液体を輩出して呼吸器をはずせば終わりというところまで来た。

後少し――

後少し――

オルランドは心の中で何度も呟く。

気味が悪かった。

場所の空気が、光が、音が、機材が、全て気味が悪かった。

だからだろう。

気味が悪かったが故に警戒していたから反応出来た。

クイントの腕がガラスを突き破り、ラインに伸びたことに――

「――ッ!!」

「へ——?」

オルランドはリインを突き飛ばす。

その瞬間、横腹に強烈な衝撃が走るのが分かった。

「オルランドさん!!」

オルランドは吐瀉物を撒き散らしながら吹き飛ばされ、壁に激突した。

「どう……して……」

リインは信じられないと座り込み動くことが出来ない。

クイントはスバルの家族だ。

ギンガの家族だ。

ゲンヤの家族だ。

今まで、リインは裏切られたことが無かった。

はやて達の知り合いにそんな人はいなかった。

だから、目の前で起きていることが理解できなかった。

ガラス片と黄色の液体を踏みしめ、まるで戦闘機人のようなバリアジャケットを着込み。
み。

その両手にスバルのリボルバーナックルとよく似た物を装着して構えているのが、まるで敵を見据えているかのように無表情に立つその姿を理解しなくなかった。

その時、部屋全体の温度が急激に下がり息が白くなって吐き出された。白い閃光が走る。

クイントは寸分たがわず閃光に拳を合わせた。

そこには、デュリランダナを振り抜いたオルランドがいた。

拳にデュリランダナが弾かれるとオルランドとクイントは間合いを取る。

オルランドがデュリランダナを正眼に構えた。

「いきなりの挨拶だがまあ良い……とにかく今は大人しくしてもらおう！」

そして二人は激しく戦いを始めた。

その様を見ることしか出来ないリインは涙を流すことしか出来ない。

二人の戦いに割って入れれば、オルランドの邪魔になることが確定しているからだ。

リインは悔しさに唇を噛んだ。

どうして自分には力が無いのか——

元々、リインにはモデルが存在した。

リインの本名はリインフォース・ツヴァイ。

そう、二番目なのだ。

リインは、リインフォースの欠片をもとにはやてが作った融合型デバイス。

元となったリインフォースは力に翻弄され辛い過去に苦しめられたことは聞いてい

た。

だがその力は絶大であったことは、なんとなく覚えていた。

まさに圧倒的なまでの力であったことはわかっていた。

だが、リインにはその力は受け継がれていない。

親であるはやても元となったリインフォースもそれを望まなかったからだ。

だが、リインは今それを悔やんだ。

ここにいたのが、自分では無くリインフォースであったのなら、状況は違っていた。

もつと良くなっていた。

そんな自己否定が頭から離れない。

その頭痛がさらなる涙を溢れさせる。

力があつたなら——

そう望まずにはいられなかった。

シグナム達は、リインの居場所を微かなリンカーコアの反応から特定し、壁をぶち抜き進んでいた。

シグナム達がそのような強引な方法に打って出たのには理由があつた。

胸騒ぎが収まらないのだ。

それは、どのような精神統一でも収まることは無く。

時間がたつにつれ、距離が近づくにつれ、勢いを増して行く。

嫌な予感しかなかった。

そして最後の壁をぶち抜いたところで、それを見た。

クイントに首を握りしめられ持ち上げられているオルランドの姿を――

その先で、涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら座り込むリインの姿を――

どうしてこうもうまく事が運ばないのか。

誰しもがそう思った。

皆が笑い合うハッピーエンドを夢想した。

なのになんで世界はこんなにも、人を苦しめる。

シグナムは静かにレヴァンティンを抜き取った。

欠片

瞼の裏側に微かな光量が差していた。

後頭部から足の先まで半身を胃液のような粘着物が包み、鼻の奥をツンとした刺激臭が襲い掛かる。

「——さん」

指先に感触は無く、この微睡が疲れから来ているため仕方が無いと結論付けた。

「兄さん——」

聴覚を無遠慮にノックされ続ける。

煩わしいと感じるその暴力は、休む暇さえくれそうには無かった。

「兄さん！」

だから俺は、疲れから来る怠惰感を前面に押し出して疲れているのだと訴えかける。

「少し黙ってくれクイント、俺は今疲れているんだ……」

そう言つて瞼を開ければ、目の前に不機嫌を前面に押し出したよく知った顔があった。

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！今、どういいう状況か分かっているの!」

「分かっているさ。俺らを追って来た管理局の連中から隠れているところだろう?」

「ところだろう?……じゃ、ありません!もう捕捉されているんですけど!」

やれやれそんな叫ぶことじゃないだろう。

今俺達がいるのは首都クラナガンの使われなくなった下水道跡地だぞ?

こんな肥溜めみたいなところに、清廉な本局様の使いが来るものか。

だがそんなことを目の前で眉間に皺を寄せているコイツに言っても火に油を注ぐことになるのは、明白だろう?

ならここは、黙って言われた通りに行動してやるのが最適解だろうな。

「ふう……、ならすぐに移動を始めよう。こんなくっさい所にしても仕方が無いしな」

「その匂いの元凶に体を浸けて眠っている人に言われたくないんですけど……」

眉間の皺を揉みながら顔を離す我が妹を確認したところで、俺は体を起こした。

すると、まるで下水は俺を逃がさないようにするかのよう、ビチャビチャと体に纏わりついては落ちていく。

クイントはそんな俺を見ながら、うえ〜……と、鼻をつまんでいる。

そこまで嫌がる必要は無いだろうに……。

俺はポケットからグローブ型のデバイスを取り出すと、それを腕につける。

「エルピス、体を清潔にしてくれ」

グローブ型のデバイスに赤い線が走ると、一瞬で体全体を清潔な状態にしてしまう。

「いつみても兄さんのエルピスは反則よね……」

「何を言っているんだクイント？」

「なによ……？」

「エルピスが優秀なのではない、俺が優秀なんだ！」

「あゝ……はいはい、そうねその通りですよね……」

「なんだ、俺の事を疑っているのか？」

「べつつに〜」

そして先を歩き出すクイントに続き俺も足を動かす。

だが途中で足を止めた。

後方から管理局の追つてが迫っているのがわかったからだ。

「はぁー、ったく……」

だからこの道は塞がらせてもらう。

「IS発動——、ランブルデトネイター」

俺はエルピスからナイフを一つ取り出し壁に突き刺す。

歩いて数分後、後方から爆音が響いた。

歩いて数分後、何とか追つてを振り切れた俺達は、太陽の光を一身に浴びていた。

「あぁ〜ん……、太陽の光が気持ちいい！」

クイントはそう言うと、大きく伸びをした。

その動作のせいだろう。

平均より大きい方に入る胸が強調される。

戦闘タイプのかくせして何故女性型なのか。

何故胸を大きくしているのか疑問に思つて見ていると、俺の視線に気がついたクイントが体を守るかのように抱きしめた。

「何を見ているのよこのスケベッ！」

顔を赤くして子犬のように吼えるクイントに対し、俺は鼻で笑つてやった。

「ハッ、そんな脂肪の塊に興味はないね。そんなことより、管理局の連中がどうしてクイントを戦闘に不向きな体にしたのか、とそちらが気になってね」

俺がそう言うと、クイントはペーっと舌を出した。

「私は生まれつきこんな体なんです！後から被検体にされたんだから、生まれについては神様に聞いて！」

「神様ねえ……」

そんな存在がいるならば是非とも聞いてみたいね。

どうして、世界をこんなになるまで放置しておいたのかをね——

「それよりも、気が付けばクラナガンから大分離れた場所まで歩いてきてしまったみたいだけれど、どうする？」

クイントがそう言うてくるのを片耳に聞きながら、近くの看板に目を通した。

「西部エルセアか……。まだこの辺りは再開発がされてないみたいだな。少し不便だが、ここを少しの間拠点にしよう」

街並みに目を凝らす。

エルセアは管理局地上本部が行っている再開発という名の犯罪率を下げると言う名目の監視しやすい街づくりをまだされていない場所のようだ。

ビル群も民家も、あの不気味なまでに整頓された街並みからは程遠い独自の文化を孕んでいた。

平地に為らされたミッドチルダには珍しい山に、林などの緑も非常に多い。

俺の言葉を聞いたクイントは向日葵のような笑顔で頷いた。

少し歩いた先の林の中に丁度いい感じの一軒家を見つけた。

どうやら長い間放置されていたようで、中はひどい有様であった。

天上には蜘蛛の巣、床はところどころ抜けており、太陽の光が壁の隙間から漏れ出し、

笑うと言う行動はクイントと出会ってから増えたとは思うが、それにしても今のは最高だ。

理性で止めることが出来ない。

だが、笑い続ける俺に対し鬼の手が乗せられた。

「に・い・さ・ん〜?」

「……ごめんなさい」

ああそうだったな。

怒ったクイントは本当に怖い。

俺はクイントの気を逸らすために、話題を変えることにした。

「部屋が汚いのが嫌だと言うのなら、俺が綺麗にしてやるよ」

俺はそう言いながら、エルピスを取り出した。

そしてそれを右手に装着しようとしたところで優しくクイントの手が乗せられる。

「これからここに住むことになるのだから、自分達の手で綺麗にしましょう」

「は?何を言っているんだ?これくらいなら俺の力で一瞬だ。そんな無駄な労力必要ないだろ」

そう言っただけで俺は力行使しようとした。

だが、それはクイントによって阻止された。

「兄さんく？」

「……わかつたよ」

「わかればよろしい！」

「はあ……」

部屋を綺麗にするという無意味無駄な行いは結局夕方までかかってしまった。

「体がいたい、もう動くことすら出来ない……」

俺はそう言いながら、綺麗にされたソファーに寝転がる。

「もう、普段から運動しないからそんなことになるのよ？」

クイントはそう言いながら、御盆にコップを乗せて近づいてきた。

手渡されたコップの中を見ると、冷えたお茶が入っているのがわかつた。

「金は後どれくらい残っている？」

俺がそう聞くと、クイントは顎に人差し指を当てて思い出すように瞳を上に向ける。

「うーんと、来週までの食費なら確保できてるかな」

「なら、明日からまた始めるか……」

俺がそう言うと、クイントは目に見えて嬉しそうにした。

まったく、コイツはなにがそんなに嬉しいのか。

やってることは、ただの医者 of 真似事だ。

俺の知識と力があれば、治せないものなんてこの世に存在していない。

そこいらの不治の病なんて片手間で治せる。

それで生活するだけの金が手に入るんだ。

まったくちよろい仕事だよ。

逆に言ってしまうえば、その程度のものすら治すことの出来ない今の人間に溜息をつきたくなる。

クイントは善は急げと、鼻歌を歌いながら明日の準備を始めだした。

コイツのこの行動も意味がわからない。

他人なんてのは、とくにふこの時代の人間は救われて当たり前だと勘違いした奴の吹き溜まりだ。

助けてやってその場で感謝しても、次の日には助けられたことすら忘れ、俺達を迫害する。

管理局から逃げる中で学んでいないのか？

ときたま俺はクイントが理解出来なくなる。

コイツはあの場所——

この世の地獄から連れ出してから変わらずにこんな感じだ。

あれだけの苦痛と凌辱を受けていながら、その博愛精神はどこからくるのか。

まったく理解できない。

俺がそんな風に考えながらクイントを見ているとアイツは何を思ったのか顔を赤くして立ち上がった。

「ちよ、ちよつと外の様子を見てくる。追つてがすぐそこまで来てるかもしれないし！」
捲し立てて出て行ったクイントに対し、俺は溜息をついた。

「外に敵はいないつうの……」

俺はそう言いながら、空中にいくつものホログラムを浮かばせる。

そこには、今いる場所ではない。

林の外もその外側も、すべて映し出されている。

管理体制は万全だ。

奴らが来たらずくにわかる。

だから、アイツのあの行動も意味が無い事だ。

ホログラムの一つ一つに目を通していくと、外に出たクイントの姿を見つけた。

クイントは月を見上げると、静かに泣いていた。

俺はそれを見た瞬間に全てのホログラムを消した。

そして状態を起こして部屋を見て回した後、何も無いと思った。

「ふむ……」

「な、なによ……これ……」

部屋に帰って来たクイントは驚きに目を大きくしていた。

それに対し、俺は得意げに胸を張って答えた。

「俺が住むにしてはちと寂しいのでな。家具をすべて揃えて置いた！」

部屋はクイントが出て行ってから一変していた。

何故なら、人が住むのに必要な物は全て揃えておいたからだ。

冷蔵庫にテレビ、空調機にさらにキッチン周りも全て揃えている。

俺の力を使えばこの程度朝飯前だ。

「ふふんー」

さあクイントよ。

泣いて喜ぶが良い！

だが、クイントは肩を震わせていた。

はははは！

体が震えるレベルで嬉しいか。

そうだろう、そうだろう！

なんて言ったって、俺自らが作ってやったのだ。

嬉しくないはずがない。

クイントは俺にゆっくり近づくと俺の肩に手を乗せた。

「ねえ兄さん……」

「なんだ妹よ？」

「家具を揃えてくれたのは嬉しいわ。ありがとう……」

「そうだろうそうだろう、もつと俺を誉めろ！」

「でもね兄さん……。この家具達を動かすための電気はどこから用意してるの？」

「そんなもの決まっている。俺達の存在がばれないように、近隣の建物や民家から分け
てもらっているんだ！」

「つまり……？」

「つまり、奴らは僅かに上がった電気代を馬鹿だから気が付かずに俺達の代わりに支払
い続けるということだ！」

「どうだ凄いだろう、と胸を張ると俺の肩からミシリとあり得ない音がした。

「に・い・さ・ん~~~~ッ！」

怒っている。

クイントは怒っていた。

「何故だ、何故怒る!？」

「そこに座りなさい……」

「何故だ！」

「良いから、座りなさいッ!!」

自分で磨いたピカピカの硬いフローリングに正座をさせられる。

そこから始まるは説教の嵐。

クイントの気が晴れ、説得するまでに三時間を要してしまった。

この思い出はクイントと俺の話し。

ジェイル・スカリエッティと血の繋がっていない妹との今は無い思いである。

欠片2

時間と言う概念を呪うのならば今だろう。

体全体を無遠慮に包み込む熱さも、鼻につく生温い独特の臭いも、何よりも俺の憩いの時間を断りも無く奪い取った存在は、眼下に大地を見下ろして、さも自分は良い事をしてあげているのだと鼻を高くしているに違いない太陽の野郎も、等しく呪い殺したい衝動を向けて良い連中ばかりだ。

ああ、朝は嫌いだ。

いつもいつも翌日を強制的に告げる朝が嫌いだ。

俺は、そんな時間の経過を歓迎などしていない。

むしろソイツをぶん殴って今を停滞させていたいのだ。

でもそんなこと出来るわけが無い。

だから俺は、全力で抵抗の意思を見せるためにも、布団をすっぽりと頭頂部まで被るのだ。

だが、そんな抵抗も無意味だと分かっている。

ほんの僅かな時間稼ぎにしかならないと知っている。

なぜなら――

「起つきろ〜〜〜〜〜！」

クイントが無理矢理布団をはぎ取るのだから……。

だから、ついつい愚痴を零してしまっても許してくれるだろう。

ああ、本当に――

「ちくしょうめ……」

カチャカチャと食器を叩く音が静かに響く。

目の前には綺麗にど真ん中に穴を空けられ内面を垂れ流した目玉焼きに、綺麗なピンク色をした薄っぺらいハムに、千切りにされたレタス、それと白米。

俺が目玉焼きをぐちゃぐちゃにかき回して、それを白米にかける。

そしていつもの調味料を手探りで探す。

だが置いてあると予想をたてて伸ばした手の先には目当ての物が無いようで、机を撫でるように触る。

「はっ」

「……うん」

俺が探していた物。

醤油は、クイントが用意してくれた。

俺はそれが当たり前であるかのように、適当に返事を返し、醤油を目玉焼きだった物に少量かけると、テレビのチャンネルを変えた。

チャンネルを変えた先ではお天気お姉さんが、今日の天気を予報していた。

「本日は午後から傘が必要になります。テレビの前の皆さんは、傘をお忘れなきように！」

変に身振り手振りを加えてそんなことを言うお天気お姉さんに感謝の意味も込めて、俺は返事を返した。

「なるほど、理解した」

だが、俺が返事を返したと同時に天気お姉さんの姿は闇に消えてしまった。

「あつ、テレビを消すなよ」

「ご飯はちゃんと味わって食べてよ！」

「味わって食べているだろ？いつもと同じ味だ。美味しい」

俺がそう言うのと、クイントはまだ何か言いたそうにしていた。

「なんだ、朝飯に何かいつもと違うことをしたのか？」

俺がそう言うのと、クイントは腕を組んで自信満々に言った。

「心を込めてみたの！」

「はあ？」

「だ・か・ら、心を込めたの！」

「そんなありもしないモノをどうやって、込めることができたんだ？」

「もう、兄さんはなにもわかかってない！」

「お前こそわかかってないぞ。心なんて呼ばれているモノは、所詮妄想だ。人が自分は特別だと思ひ込みたいからこそ生み出したこの世に存在しない夢だ」

「そんなことない！だって、嬉しかったらなんかこうわあくくってなるし、悲しくなったらずきずきするし、イライラしたらきーきーッってなるもん！」

「それは脳の情報処理の副産物であり、過剰に排出されたホルモンと電気信号とそれにつらなる筋肉の収縮によるものだ」

俺がそう言いながら、朝ごはんを食べ終わると、クイントからの反論が聞こえてこなくなつた。

俺は、対面に座るクイントの方に向け視線を泳がせると、クイントは目に見えて落ち込んでいた。

「心は……あるわよ……」

俺はそう呟くクイントに対し、溜息をつきながら答えた。

「だから……」

「なら何故、兄さんは私をあそこから連れ出してくれたの？」

「……」

「…………ちそうさま」

クイントはそう言うのと、俺のと自身の食器を手に取りキッチンに姿を消した。

俺はその後ろ姿を眺めていきその流れのまままで天井を見た。

「そんなこと……決まってるだろ……」

そうあの瞬間、決まってしまったんだ。

数多存在する次元世界から管理局が集めた天才達の楽園。

そこで行われていた実験の数々。

唯一の成功例であり、最終目標創造物、戦闘機人のために生み出された試作機にすらなれていない成功体。

そんな出来ない女の口から発せられた言葉。

その言葉には、乗せられていたんだ。

欲望が夢が、万物のそれを上回る純粋な願い。

それが美しいと、命の輝きを、そこに見た。

だから連れ出したんだ。

その輝きがもつとみたかったから——

「ああ、くそッ!」

俺は立ち上がるとキッチンに向け、声を張り上げた。

「一時間後に仕事にいくぞ!」

「……うん!」

少ししてキッチンの奥から元気な声が聞こえて来た。

だから俺はクイントが今どんな表情をしているのか確認せずにリビングを後にした。

「これで、よし……!」

俺はある程度の薬品を入れた鞆を肩に下げる。

そして玄関に向かうとそこにはクイントがすでに準備を終えて立っていた。

その顔はいつも増してニヤケ付いている。

俺はその顔が気に入らなくて、ジト目で睨みつけた。

するとクイントはさらに花を咲かせたように笑い、手に持っていたモノを俺に手渡した。

俺はそれを見て、溜息を零す。

「それを着る意味があるのか?」

「患者さんがすぐに医者だつて気づくためには必要なの！」

俺はしぶしぶクイントから白衣を受け取ると、袖に腕を通した。

ゴワゴワしていて、それでいてどことなく硬い。

着ているだけで肩が凝ってしまう。

だが、仕方が無いと自分に言い聞かせる。

「では、行くとしようか」

エルセアは、小さな田舎町の集合体のような場所だ。

田舎町の一つ一つに形ばかりの病院が立ち、その日をその日を無難にやり過ごす医者
の見本市のような様相をしていた。

そのためだろう。

病院にこれないような客は知らないと、金が無い奴には興味が無いとでも言うかのよ
うに、その門はある意味で硬く閉ざされていた。

そんな場所だからこそ。

俺達は仕事が出来る。

「血圧に脈も安定しました。これで、大丈夫だろう……。助手」

「はい、ドクター。こちらが薬になります。一週間分出しておきますので毎食後に必ず
飲んで下さいね！」

クイントが薬を渡し終えると、俺は患者の家から外に出る。

無言で出て行く俺に対して、クイントは患者とその家族に対してお大事に、と言葉を残し俺に続いて外に出て来た。

外から周囲を見渡す。

辺り一面が草原で、乳牛が放逐されている。

民家なんてものは背伸びしなければ、見えない程に遠くに一軒あるだけでなんとも、寂しい場所であつた。

さらに、ミッドチルダの中でも貧しい部類に入る生活をしていることも理解していた。

「金は回収したか？」

俺がそう言うのと、クイントはボロボロになつた革の財布を取り出した。

「そうだね。今日の晩御飯分くらいは貰えたかな」

そう言つてえへへ、と嬉しそうに今夜の献立を考えているクイントに対し俺は溜息をついた。

するとクイントは、頭を浮かべながら聞いてきた。

「へえ、珍しいね？」

「なにが？」

「いつもなら、命を救ってやったんだ。もつと回収してこいって言つてたと思うんだけど。」

「あの家には、金が無いだろうことは入る前から知つていた。今回渡された金が、あいつらの感謝の極みなら、それ以上を望むべくもないだろう」

「んふふ〜」

「……んだよ」

「い〜え〜、ドクターも随分と丸くなられたなあ〜と思ひまして」

草原の道を歩きながら、クイントは嬉しそうに笑つた。

俺はそれが無性に恥ずかしくて、顔を背けた。

それからさらに数か所さらに民家を回つた帰り道。

夕焼け空が辺り一面を照らし出したころ。

帰り道の道中で少し大きめの公園を見つけた俺達は、意味も無く立ち寄ることにした。

「兄さん、気づいてるよね……?」

「まあな」

エルセアはある種異常だった。

病氣、怪我、俺が今日見て来た患者はどれも命の危機はないまでも、仕事に支障をきたすレベルの者達ばかりであった。

その者達は今の医療技術で十分に救える者達ばかりであった。

なのに、ここの医者達は金がないからと、その者達を門前払いにしていた。

管理局の定める法では、そう言った者達を救済するためのネットは幾重にも張られてはいるはずであったが、この地ではそれが機能していなかった。

ある者の話しでは、そう言った患者を放置し、命の危機を迎えてから、救いの手を差し伸べるのだという。

死ぬかもしれないのだ。

救いの手を差し伸べられた者は、法外な金額であったとしても払うだろう。

それこそ、未来を売り払ってでも。

そんな状況なのだ。

管理局の手が入っていないのかと、問えば。

管理局とこの地の医療団体が癒着しているのだという。

なんとも馬鹿げた話ではあるが、入院が必要だと言われ連れていかれた家族の行方が分からなくなってしまうと言う者もいた。

噂では、管理局の奴らにモルモットにされているのだという。

そちらに関しては、なんとも言えなかった。

ついこの前まで、俺もそちら側の人間であり、モルモットがどこからつれられてくるのかなど、興味を持っていなかったのだから。

だからだろう。

そんな噂話を聞いてしまったのだ。

管理局から逃亡している身である俺が、見て見ぬ振りをしてやるかと聞かれれば答えはNOである。

とことんやってやろうではないか。

アイツらの悔しがる顔が今にも眼前に現れてくるようで、笑いが止まらない。

「兄さん……?」

「クイント、俺は決めたぞ?」

「なにを?」

「この地に住む患者と言う患者、全てを完治させてやろうではないか!」

そう不敵に笑い夕日を背にして宣言した俺をクイントはポカンと間抜けな顔で見えて来た。

クイントの顔に俺の影が被さる。

だから、クイントの表情はどこか暗く見えた。

俺にはそれが納得出来ない。

こんな顔をさせるために、連れ出した訳ではない。

ならばと、俺はクイントの手を引いた。

「きゃっ！」

クイントがバランスを崩し倒れかけるのを俺は体全体で受け止めた。

二人を夕日が包み込む。

影は俺達の後方にしか落ちない。

クイントの照れたような表情が良く見えた。

そうだ、それでいい。

決してお前のためにしてやる訳ではないが、いつまでも辛気臭い顔でいられるのはこちらが疲れるだけだ。

だから、これは俺のためにすることだ。

俺は、クイント肩に手を乗せる。

クイントが少しだけ赤くなった顔で俺を見る。

「さて、明日から忙しくなるぞ助手0号」

「ふふ、1号じゃないの?」

「ああ、お前は0号だ！」

そして俺は夕日を背に歩き出した。

それから俺達は、片っ端から救いを求める患者を救済していった。

得られる賃金も微々たる物で、その日暮らしなのは間違いなかった。

でも、それでも、人から感謝されるたびに、クイントの笑顔が増えていった。

それなら、そういうことで、俺としても納得することが出来た。

そんな事を想いながら、愛用となったソファアに座りながら夕刊を広げる。

「あれ、これ私達のことじゃない？」

夕刊を読む俺の顔の隣にクイントの顔が突然現れた。

シャワーを浴びて来たのだろう。

どこことなくシャンプーの臭いがした。

さらに、さらりと伸びた髪の毛が俺の手にかかり、少しだけ熱くなった息が頬を撫でた。

一瞬、心臓のあたりが痛んだ。

さらに、下腹部に熱がこもって理解不能な欲望が俺を刺激した。

横目でクイントを見た。

湿った唇が目に入った。

ピンク色になった頬が目に入った。

普段見ることが無い首筋が目に入った。

ソファの後ろから体を乗り出したクイントの胸が肩に当たった。

脂肪の塊だと馬鹿にしたそれが、当たった瞬間に、動悸が激しくなった。

壊してやりたい——

この穢れを知らない女を、壊して犯して俺の色に染めてやりたい——

そんな欲望が芽生えた瞬間、俺は新聞を折りたたんで立ち上がっていた。

「どうしたの？」

その声が俺の動機を速める。

冷静になれ——

俺はそう念じ続ける。

「少し、外の空気を吸ってくる」

俺はそう言って、机の上に放り投げた。

そして、玄関の扉に手をかけた瞬間に、今までの欲望は消えて無くなった。

何故なら、侵入者がいたからだ。

俺は静かに扉を開いて、その侵入者に声をかけた。

「……なにかようか、ガキ？」

「ここには、どんな病気も治してくれる医者がいるんだろ！」

俺の視線の先には、まるで夕日のような髪をしたガキがいた。

ガキは何かを背負っている。

余程急いでいたのか靴も服もボロボロであった。

嫌、まともな生活を送っていないのだろう。

頬は痩せこけ、栄養失調の気さえ見えている。

膝もガクガクと笑っており、気力だけで立っているような状況だった。

「人にモノを訪ねる時は、どうするのか知っているか？」

「ぐっ……、僕の名前はティータ・ランスター……、お願いだ！妹を、ティアナを助けて

!!

今にも死んでしまいそうな声でガキは、ティータは叫んだ。

「どうしたの!？」

その叫び声を聞いて、クイントが現れた。

クイントはティータの様子を確認すると、一瞬口元を押さえて、すぐに助手としての

顔つきになり、俺を押しつけて、ティータを我が家に招いた。

ふらふらと暗闇から光の世界に入って行くティードを横目で見る。

すると、その背におぶられているまだ赤子を卒業したばかりの少女の顔が目映つた。

何故だろうか、そいつの顔を見ると、なんとなくだが、こいつは俺の終わりを告げる存在のような気がした。

俺はそんな考えを笑って吹き飛ばすと、ティードの後について行く。

そして、机に投げた新聞に自然と目が行った。

そこには、小さくこう書かれていた。

西部エルセア地方にて、謎のドクター現ると――

世界の欠片

ティード・ランスターとは少し変わったガキであった。

自身のことより他者を第一と考える一種の破綻者であった。

生物とは、極論を言ってしまうれば種の保存のために生きている。

その行動の一つ一つを、「何故行つたのか？」と答えを求めれば、全て種の保存のためだ。

もつと簡単に言ってしまうえば、生物とは自己中心的にしか生きておらず。

人とは、その究極の一つだと言える。

故に、損得勘定なく。

誰かのために生きていたいと、己から苦渋の海に飛び込むこのガキは、人類の亜種であり破綻者であると言えた。

そう、俺が結論付け、そうであつても俺には関係の無い事だと結論を出したのが、丁度このガキと出会って一月が経とうとしていた時だった。

「おい、このクソガキ……。テメエに手渡していた昨日までの給料、どこに捨てて来やがった？」

気が付けば、俺の両手には抱えきれない量の荷物が存在していた。

街にいる連中は、そのほとんどが俺に救われた連中ばかりだ。

八百屋の親父も、魚屋の奥さんも、花屋のガキも、今となつてはどこにでも俺が救つた人がいた。

クイントはその行いと人々からの感謝に幸せを見出し、ティエダは俺に張り合おうと背伸びをして、ティアナは周りにつられて笑っている。

こんな事をしていれば、いずれ破綻することは理解していた。

だが、これで良い。

俺はどこまでいっても人間だ。

だから、すでにやることはやっている。

この生活を壊されることは、当分ないだろう。

そう思っていた。

「祭り……？」

いつも通りの夜を迎え、いつも通りにソファーで寛いでいるとティアナがおずおずとお小さな手で俺に一枚のチラシを見せて来た。

そこには、来週の夜、この地域で中々に大きな祭りをすると書かれていた。

俺はそれを一瞥すると、そのチラシをティアナに返した。

「行きたいのか？」

「……うん」

「はあ……」

「——ッ」

ティアナは、ティエーダと違い普段から小動物のようにビクビクしているガキだった。自己主張は最低限に、ただ流されるように生きている。

そんなガキだった。

俺は一々ビクつくティアナに、なんと対応すれば良いのか頭を悩ませていると、エプロンを付けたクイントがやって来た。

「あらあら、どうしたの？」

クイントはティアナを抱き上げると、その手に持ってたチラシを見た。

「あら、お祭りなんて久しぶりね。ね、兄さん？」

俺は祭りなんてものに行っただけはこれまで一度も無いが……。

「お、お？なんだ、祭りか！いいなあ〜！」

遂にはティエーダまでやってきて俺に期待の眼を向けてくる。

なんとも居心地が悪い。

俺は溜息を吐くと、ティアナからチラシを奪い取った。

「時間は、夜の7時からか……。クイント、その時間帯は予定を開けて置け」
「もう、素直じゃないんだから！」

寝室に移動を始めた俺の背にクイントからそんな言葉が投げられる。

俺はそれを無視して寝室に続く扉を開くと、背後から俺が祭りにいくことに許可を出したとクイントに説明をうけて、歓声を上げるガキ共の声が響いた。

この時俺は、なんだか良く分からないが、自然と口角が上がった。

夜も深く沈んで、虫があちらこちらで合唱を始める時間帯。

俺は寝苦しさを感じて布団を蹴飛ばした。

そして数回頭を搔くと、リビングに足を延ばした。

リビングに続く扉を開けると、そこには光が満ちていて、クイントが一人で窓の外を眺めていた。

その姿が、酷く儂く見えて、このままどこかに行ってしまうように見えた俺は、声をかけてしまった。

「こんな時間に何をしているんだ？」

「兄さん？」

「俺以外の誰に見える？」

「うん、いつもの兄さんね」

クイントはそう言うのと、黙って席を立ちキッチンに姿を消した。

俺は何も考えずにソファーに腰掛けると、キッチンからクイントがマグカップを二つ手に持って現れた。

「よいしょ……」

クイントがそう言いながら、俺の隣に腰掛けると二つの内の一つのマグカップを手渡してきた。

中から、香ばしい匂いがして俺は一瞬眉を顰めた。

「コーヒーか……」

俺は一口つける。

感じる微かな苦み。

「しかも、無糖……はあ……」

クイントが俺を寝させない気なのは良く分かった。

「どうしたんだ？」

俺が溜息をつくのをニシシと笑っていたクイントは、俺がそう言うのと手元のコーヒーに視線を落とした。

「嫌……ね……。幸せだなあ〜ってさ」

「なにが？」

「今のこの時間を、私はすごく幸せに思ってるってこと！兄さんの仕事の手伝いをして、いたずらした兄さんとティーダに説教して、ティアナの世話をして、そんな毎日がすごく良いなって……」

「俺には、その感情が分からない。幸せを語るのであれば、お前は今より過去を語るべきだと、俺は思う」

「ううん……、今までの私の人生って空虚だったんだ。毎日とくに目標も何も無くて、ただ流されるままに生きてきた。なんにも感じなくて、喜怒哀楽全てが偽物の張りぼてみたいな感じだった。でも、今は違う。なんでだろう、そう断言出来ちゃう」

「そっか……俺には理解出来ないが、お前がそれでいいなら、そうなんだろう」

「うん……だから……兄さんにもこの気持ちを分かって欲しいなって」

「別に俺はどうでもいいだろ？」

「そんなことないわよ！だから、いつか兄さんに幸せだって言ってもらうために、私頑張るね！」

「なんでお前が頑張るんだよ……」

俺がそう言うと、クイントは俺の肩に頭を乗せた。

「それぐらい察しろ……バカ……」

なんだか、部屋全体の温度が数度上がった気がした。
動悸が早くなる。

少し発汗しだした。

理解出来ない感情が俺の中を渦巻く。

だが、俺はこの時間がいつまでも続いて欲しいと思った。

その時、子供用の寢室の扉から声が漏れ出した。

「ちよ、ティアナ押さないで！」

「見えない……」

「うわ、ちよ——ッ！」

そして、リビングに転がり込んで来たのは我が家のガキ共であった。

さすがのクイントもこれには目を点にしている。

「なにをやつてんだお前ら……」

俺がソファアールから立ち上がると、ティードとティアナは勢いよく立ち上がる。

「い、いや……その……そう！水、水を飲もうとしてたんだ！」

「うんうん……」

俺はそんな言い訳をする二人の前に立つ。

俺の影が二人を覆いつくすと、二人は抱き合う様にして身構えた。

すると俺の後ろからクイントが顔を出す。

「あら、喉が渇いちやったのね！」

クイントはそう言うと、水を取りにキッチンに姿を消した。

ティアナがその後続く。

俺は、説教する気がそれでそれてしまったので、頭をガシガシと掻きながら、再びソ

ファーに座り直した。

すると、俺の隣にティエーダが座る。

ティエーダは俺の隣で深刻な顔をしていた。

それでも、俺は何も反応を示さない。

じつくりと、待ってみようと思ったからだ。

すると、ティエーダが語り出した。

「なあ……」

「なんだ？」

「僕達がここにずっといる理由聞かないのか？」

ティエーダの瞳が俺を見つめる。

その視線は子供特融で、本当のことを言わなければ逃がさないと告げていた。

だからこそ、俺は思ったことをそのままに伝える。

「べつになんとも思っていない」

「な、なんとも……?」

「ああ、そうだ。お前達が何故衰弱しきった状態で助けを求めにきたのかも興味が無いし、それからここにいつくようになったのも興味が無い。ただ、お前達がここにいてくれるだけで、俺もクイントも助かっている。それだけだ」

俺がそう言うのと、ティーダはポカンとした。

「なんだその間抜け面は……?」

「い、いや……僕達はここにいてもいいのかなって思ってる」

「良いも悪いも自分で決めろ。俺は知らん」

「でも、もし僕達がただ家出しただけだったとして、管理局が探したりしたら、あんた等は誘拐犯ってことにされちゃうかも……」

そう自分で勝手に言うてから、勝手に落ち込むティーダを見る。

コイツは、ここに長くいることに対して俺達の迷惑になっちゃってしまっていると考えているのだろうか。

だからこそ、こここそ隠れて俺とクイントの会話を聞いていたりしたのである。

まったく馬鹿な考えだ。

俺は黙ってティーダの頭をグシャグシャと撫でる。

俺はティアナ事抱き上げると、ソファアーにティアナを座らせる。

そして頭を一撫でして、コップを一つ手に取った。

俺に撫でられたティアナは、くすぐったかのか首を小さくして目を細めた。

そうやって、ソファアーに四人で座る。

そうすると、必然的に肌が触れ合うくらいにキツキツになつてしまふのは仕方がないことだった。

だが、何故だろうか。

俺はこの窮屈と生温さが心地よいと感じた。

そうこうしているうちに、ティーダとティアナは眠りにつき出す。

ティーダはクイントにもたれ掛かり、ティアナは俺の膝に頭を乗せて眠っている。

なんとも無防備なこと……

手のやり場に困った俺は、ティアナの頭に片手を乗せる。

すると、ティアナは少し身じろぎしてから頭を少し動かした。

これは催促しているのだろうか？

俺は、そのまま手を動かす。

すると、ティアナは満足したのか身じろぎを止めた。

「ねえ、兄さん……？」

「なんだ？」

「今……、幸せ？」

「そうだな……」

幸せなんてものがどういったものなのか俺は知らない。

そもそもこのガキ共は、俺とクイントに親の愛を求めているなんてことは知っていた。

一日の間にこの小さな地域内で多くの人と接しているのだ。

このガキ共の親がすでにこの世にいないことも、手助けしてくれる存在がいなくても知っていた。

町の医者連中も金が無いガキを見ることは絶対にありえない。

そこに利益が無いからだ。

だから、ティータは最後の最後に俺達のところに助けを求めに来たのだろう。

きつと、ティータは周りの大人が信用出来ないのだろう。

そして誰かに迷惑をかけることに酷く怯えている。

その気持ちは少し理解出来る。

試験管の中で物心つくまで過ごしていた俺には、少しばかり理解出来た。

だから、俺もその愛とか幸せに飢えていたのだろうか。

いや、違うな……。

俺は、あの地獄の中で悪魔や鬼達と日夜ダンスを踊っていたんだ。だから、無条件に信頼されることが嬉しかったのだろう。

その理由の無い想いが、俺を満たす。

だから――

きつと――

「幸せなんだろうな……」

俺がそう言うと、クイントは向日葵のように笑った。

俺はその笑顔がむず痒くて、テレビのリモコンに手を伸ばした。

それからの俺達は、いつもと変わらない毎日を過ごした。

俺達の関係に変化はない。

なにも変わりはないまま、祭りの日を迎えた。

「テイ〜〜ダ〜、早く準備なさ〜い！」

「わかってるよ。クイントさん！」

「ティアナ、準備は出来ているな？」

「大丈夫、ジェイルの言われた通りに事前に準備してた」

「よし、いい子だ」

「……ん」

「ジェイルはどうして、僕にはなにも言ってくれなかったんだよ！」

「テイーダ、お前もいい年だ。自分の事は自分でしろ」

「くっそ〜〜〜！」

「はいはい、吼えない吼えない」

俺達はそんな会話をしながら、林を抜け目的の場所に向かう。

そこは、湖畔であった。

太陽は地に落ち、月が昇る。

星々が我先にと輝き、それに負けない程に地上では人々が人口の明かりを灯す。

出店の数々が並び、大声を張り上げながら客を呼び込んでいる。

俺達は手を握り合いながら、本当の親子のように歩いていた。

「この辺りでいいんじゃない？」

クイントがそう言うのと、ブルーシートを広げる。

「花火ってどんなのかな？」

「俺も知識でしか知らないからな。見るまでのお楽しみってことでもいいだろ」

「それもそうだな！」

人の声が風に乗る。

今か今かと皆が期待に胸を膨らませている。

湖畔に座る俺達に色々の人々が声をかけてくる。

皆、俺が治療した者達ばかりであつた。

そうやって声をかけてもらう度に、クイントは嬉しそうに笑い。

ティーダとティアナは誇らしげにしていた。

そんな三人を見ていて、俺も何故だか少し満足していた。

クイントと始めた逃避行。

その途中でしかないこの地は、いつのまにか終着になつてしまつていた。

腐つた連中なんてのは、どこにでも存在している。

この地にも多くそんな連中はいる。

けれども、良い連中も多くいた。

クイントも俺もここがいつの間にか居心地がいい場所になつていた。

だから、決心がついた。

ここで終わり、そして始めようと――

「すつげえ！」

「きやつ……」

「綺麗ね……」

気が付けば、花火は上がっていた。

向こう岸から、天に向け伸びる光点、終わりがくると弾けて眩く輝く。

その有様が皆が美しいと言う。

短いその輝きを好む。

儚さに感動する。

俺はクイントの顔を見た。

クイントは俺の視線に気が付くと、笑顔になり頬を染めた。

その笑顔から視線を外すことが出来ない。

俺の手をティーダとティアナが握る。

その温もりが俺を満たす。

世界が俺を満たしていく。

ああ——俺が欲しかったのは——これだったのか——。

そして最後の花火が天高く舞い、その短い生涯を終わらせようとして——

時が止まった——

その異変に気が付いたのは、ティーダであった。

「な、なんだよ……」「レ……」

ティーダが世界を見つめる。

風に靡いだ湖面が固まり、一つの水彩画と化していた。

天に昇ろうとしていた花火は、天井からつらされた豆電球のようだった。

周囲の人々がマネキンのように生命の活動を停止していた。

「見事です。インヒューレントスキルの重ね掛け、私の結界内であっても活動を続けるとは……」

「どうやら、上は本気らしいな。貴様のような規格外をよこすなんて」

「フフ……それは、お互い様でしょう?」

ジェイルは時が止まった世界で立ち上がる。

その瞳は闇を溶かし込んだ金色に輝き、神々しささえ感じさせる。

ジェイルの目線の先には、管理局の制服に身を包みながらも、その上から真っ白なコートを羽織り顔の全てを覆い隠す程のフードを被った人物であった。

フードの中から声が伸びる。

「彼らがお待ちです。遊びの時間は終わりだと……。それと、そこにいる作品を返してくれと……」

ティアナが怯え、ティーダに抱き着く。

「お兄ちゃん……」

俺は不敵に笑った。

俺の足元にいる奴らに見せつけるように、強者がだれかみせつけるように。

「俺がそれに、はいそうですかかって領くと思うか？」

「いいえ、ですのでこの結界の外で武装隊を待機させています」

「本来、クラナガンの守護のためだけに存在を許された正義の味方達をよく連れてこれたな？」

「彼らは、ここに次元世界クラスのテロリストが存在しているとしたか聞かされていません。ここで、私と事を構えても構いませんが、お荷物を抱えながらあなたにそれが出来ますか？」

「無理だな……。さらに、貴様を殺したとしても結界を解いた瞬間に武装隊が雪崩れ込んでくるってことか……」

「そういうことです」

フードの男が勝ち誇るかのように宣言した。

今まで黙っていたクイントが何かを決心するかのようになり立ち上がったが、俺はそれを手で制した。

さらに言葉を紡ぐ。

「けどな……。良いのか……？」

「なにがですか?」

ああ、楽しい。

自分が絶対の正義だと勘違いしている野郎を、捻じ伏せるのが、突き落とすのが、お前らが一番に欲している望みを俺が知らないとしても?

「俺が来ると分かっている害悪に対して手を打っていないとしても?」

「なにを……?」

俺がそう言えば、フードの男は思案するように問いかけてくる。

知っているとも——

俺は、お前達を知っている。

正義と平和の名のもとに繰り返される地獄を知っている。

「この湖畔にいるだけで、百人強ってところだな」

俺は大袈裟に、停止した世界を見回す。

「ハハ……、規模も戦力もやり口も、全て想定内。お前達はいつも自分に正義という仮面を被せ、悪と言う仮面を被らせた敵を撃つ。故に、対策などいくらでもとれる」

俺がそう手を広げ、喜劇を演じるように高らかに宣言すると、今まで停止していたマネキン達が動き出す。

その動きは散漫で、生者と死者の中間点のような動作であった。

その瞳に生氣は無く、息吹すら感じられず。けれど、確かに皆、動き出した。

「これは、アンチマギリンクシールド？ AAAランクの魔法を何故一般人が？ま、まさか貴様ツ!!」

始めてフードの男が声を荒げた。

それは、目の前の存在を見誤っていた報い。

一介の科学者でしかないと言う驕り、自分達に逆らうメリットを見出せない人形だと決めつけた慢心。

「クックククク、ハハハハ……、アーツハハハツハハハ!!」

俺は笑う。

これは、たまらない。

これも一つの愉悅。

最高だ——。

「さあ、どうする？ こちらは多勢に無勢、この結界を破壊する時間など有り余っている」

「グツ!!」

フードの男が魔法陣をその手に展開する。

攻撃対象は、悪に操られた無辜の民。

「おっと、良いのかい？この街には無数の自立型の監視カメラを設置させている。もちろん、それらはAMFが組み込まれ、魔法の阻害は受け付けない。ここでの惨劇の映像は私の意志一つで全次元世界に配信される。……管理局の権威は失墜するな？」

そう会話を続けている中でも、亡者の群れはフードの男に一步一步着実に近づく。その者達は皆、さきほどジェイル達に感謝の言葉を投げた者達ばかり。

俺が救った者達ばかりであった。

フードの男も気が付いただろう。

俺が一声かけるだけで、この操り人形達が一斉に襲い掛かるだろうことは。しかし所詮は、戦闘訓練すらうけたことの無い一般人、恐れる必要は無い。

だが、その僅かな時間で俺は結界を破ることが出来る。

さらに、こちらには戦闘機人のプロトタイプとも呼べるクイントがいる。

逃走を図ることなど容易だ。

そして、外の武装隊の連中を呼び込んでも俺に操られているだけの一般人が街のありとあらゆる場所から襲い掛かって来る。

意味も無く、命令も無く、彼らは手出しができない。

もし、手を出そうものならその映像は全次元世界に知れ渡ることとなる。

管理局の掲げる平和が、瓦解する。

俺は、悪役よろしく笑顔を作つてやると、ティアナの顔を見た。

彼女は信じたくない現実を直視しないようにティーダの胸に顔を埋めて泣いていた。

ティーダを見る。

ティーダは嘘だ、嘘だと呟きながら瞳から涙を流しこちらを見続けていた。

そしてクイントは……。

「兄さん……」

そう言つて立ち上がった。

だが、クイントのことだ。

そう行動するのはわかつていた。

だから……。

「だが、一つお前の願いを叶えてやろう」

クイントを無視してフードの男に近づく。

「こんな生活にも飽き飽きしていてな。どうやら、俺の居場所はお前達側らしい」

一歩足を進める。

「いやだ……パパ、ヒック……嫌だよ……」

ティアナが呼び止める。

父と初めて呼ばれて、振り返りたくなつた。

だが、足を一歩進める。

「ウソだろ……こんな……ウソだつて、ウソだつて言えよ Jewel!!」

ティーダが喉が切れそうな程に叫ぶ。

足を止めそうになる。

だが、もう一歩進める。

「お願い……どこにも……いかないで……」

俺の前に立ち塞がるようにして立つクイントが立っている。

その顔は、涙と悲しみで歪んでいる。

俺は抱きしめてやりたくなつた。

そんな顔をするなど、似合わないといつてやりたくなつた。

だが、俺はそんな欲望を押し殺してクイントを押しつける。

そしてフードの男の前に立った。

「連れていくなら、俺だけにしろ。アイツの情報は既に俺の頭の中にある。あんな不良

品より、完成された人形を作つてやるよ」

そして俺は、フードの男の前に立った。

「あの不良品は、俺とのままごとを経て、心なんて不必要なモノを得たらしい。そんな感情を織り交ぜたガラクタ、俺達の計画には不要と判断するが、いかがか？」

その間にも、操り人形の群れはその距離を狭め囲い逃げ場を徐々に失わせていく。ジェイルの金色の瞳を睨み上げ、フードの男は歯茎を剥き出しにした。

「不要だと……？よくもそんな戯言を……、アレを不要と貶めたのは貴様だろうが……ッ！」

その言葉を聞いてクイントが微かに驚く。

「——へ？」

「おや、よく気が付いたな規格外。そうとも、俺は完璧を目指すためにアレを隅々まで調べつくした。その過程であれに施されていた機人化を全て人に下したことに關しては謝罪しよう」

「狂人が……。アレは、当時の能力を保持しているだろうか……」

「気づいたかい？さすが、規格外だね。そうとも、あれは既に人だ。故に感情に支配されている。故に我らの計画に不必要となった」

思った通りだった。

この規格外は、まだ若い。

もの事の地獄を知らずにいる。

ただ、理想を胸に秘め進む道化だ。

ならば、その経験の無さを責める他あるまい。

今ある手札で、為すべきことを完遂させる。

クイント達との関係の修復は、後でいくらでも出来る。

後もう一押し、そう思っていた時だった。

「く、がっ……ああああ!!」

目の前のフードの男が突然苦しみだした。

そしてそれが止むと、俺は途轍もない悪寒を感じた。

まるで、この世全てに敵意を向けられているかのような敗北感が背筋から全身を撫で

まわしてきた。

「「貴様も大概だな。……我が子よ」」

その声は、まるで三人が同時に話しているかのように幾重もの声が重なっていた。

その声は、絶対的な王のように不敵で澄んでいた。

これには、俺も笑うことしか出来ない。

俺には強がりしか出来ない。

「お久しぶりです……。最高評議会のお三方……。いえ、父上」

俺がそう言うと、最高評議会は――。

嫌、父上は笑い出した。

「「なに、我が子の我儘を聞いてやるも生みの親の務め……。して家出はどうであったか

？」」

俺はそう問われ、ティーダとティアナを見て、そしてクイントを見た。

三人とも、刻々と変化する状況についてこれていない。

でも、その顔は……何故だろうか……どれだけ歪んでいようと、俺に何かを訴えてくる。

コイツ等には、嘘は通じない。

だから——

「非常に……、非常に良いものでした。世界の広さを知り美しさを知り、そして……」
俺はクイントを見た。

クイントは涙を流し続け、それを隠すことすら忘れ、必死に口元を動かそうともがいている。

俺はその姿を見て、笑顔が自然と溢れた。

クイントの瞳が大きく開く。

「俺は……愛を……心を知りました。僅かな時の中で、多くを学び守るものを得ました」
俺の本心を知り、ティーダとティアナが信じられないと俺を見る。

「そんな顔で見るんじゃない。お前達が捨てて子であり、多くの人間から裏切られてきたのは知っていた。そんな、お前達なら利用しやすいとも考えた。けれどな……」

俺はティーダとティアナの前まで行くと、かがんでティアナの頭をゆつくりと撫でた。

「父と呼んで貰えて、嬉しかった……」

そしてクイントの前に立つ。

クイントは未だに俺の顔を凝視したまま動くことが出来ない。

まるで、鎖に雁字搦めにされているように指先一つ動かすことが出来ない。

「クイント……」

だから、それを良い事に俺はクイントを抱きしめた。

力強く、けれど壊れないように確かに抱きしめた。

「ありがとう……」

だから、これだけで――

十分だ――

「父上……」

「我が子に次元世界の恒久的平和の心積もりを、我らからでは無くこのような形で得ようとは思っていません。そして、我が子はそれを理解している。ならば、もう一つ、我儘を聞くも良しとしよう」

「ありがとうございます」

初まりはいつも唐突で長くて、終わりはあつと言う間に刹那的で——
けれど、得た者は——心は——ここにあつた。

だから——

「インヒューレントスキル発動——アンリミテッド・デザイアー……」

世界が闇に染まっていく。

フードの男が展開していた時間止めの結界事なにもかもを、すべて闇の彼方に追いや
る。

これで良い——。

この闇に飲まれた者達は、俺の望む形に記憶を上書きされる。

それは、俺がいなかった世界だ。

でも、それでも良い。

俺は、それでも良い——

コイツのためなら——

世界が闇に染まる。

テイアナもティーダも闇の中で、眠りについた。

フードの男もすでにいない。

結界の外にいた者達も、街の人も等しく皆闇の中へ。

だが、一人その中で、確かに手を伸ばした者がいた。

「兄さんッ!!」

それはクイントだった。

クイントは闇に捕らわれながらも、それを振り切りながら、確かに俺の手を掴んだ。その手から、温もりが満ちてくる。

否定していた心が俺の中に流れ込んでくる。

一瞬、ほんの一瞬だけ、心が引かれそうになった。

クイントの顔を間近で見たら、吸い込まれてしまいそうになった。

でも、だから――

俺は最後の嫌がらせをしてやることにした。

もうすでに殆どの記憶が書き換えられているだろうクイントの心に傷を作ろう。

俺はクイントの頬に自分の唇をつけた。

その瞬間、心臓からダイナマイトを爆発させたかのように血流が顔に昇って来るのが分かった。

これは凄いな――

そんな馬鹿な事を考えながら、俺は今まで意識したことも無かった。

今自分が出来る最高の意地悪な笑顔を作った。

「またな」

闇が消え、世界に花火の光が降り注ぐ。

まるで世界が今まで通り回っていると、信じさせるように町全体に光の礫が降り注ぐ。

そこに、俺の記憶は含まれていなくとも――

それでも世界は回っている。

そして僕は、目を覚ました。

クイント

右頬に冷たい感触が広がった。

それは、右頬を中心に首筋から全身に広がりを見せる。

その寒さが、ティーノの意識を覚醒させた。

「う……………」

両掌を体の下側に回し、無理矢理体を引き起こす。

まるで、そこに地面があると信じたがっているようであった。

次にぼやけた視界を正常に戻すために、両目をその小さな手で擦った。

次第に鮮明になっていく視界。

まず初めに映ったのが、真暗な岩壁。

それを目にして、ティーノは急激な酔いに襲われその場で嘔吐した。

「うげ……………うつく……………」

止まることの無い不快感。

今まで全身を支配していた冷たさは、その頃には熱を帯びていた。

体の内側から何か外に出ようと暴れる。

まるで、肉と皮膚が無理矢理ひっくり返ろうとしているかのような激痛が全身を支配していく。

「俺は……僕は……うなんだ、ここは？俺は何をして……？違う！僕は、空っぽだった僕を満たすために、ここに！」

二人の自分が記憶の混濁を招き、ティーノの世界を飲み込んでいく。

それはなんと皮肉な事か——

無くした記憶を欲したティーノは、その代償として、自分の今までを贄に捧げようとしていた。

「痛い、イタイ、いたいっ……」

小さな体を包み込む苦痛を封じるように両手で抱きしめる。

だが足りない。

贄が混生が器が足りない。

だから、混じった。

交わり合った。

夕日のような髪の女性と、海原のような青い髪の女性の笑顔が重なった。

守りたい笑顔が交わった。

それは、新たな生の誕生を意味し、そしてティーノの死を意味していた。

「守らない、と——」

だから、行かなければ。

俺は、行かなければならない。

ティーノであつた何かは、痛む体に鞭をうち立ち上がると、その歩みを一步踏み出し闇に溶けた。

「オアアアアアッ!!」

飛び出したザフィーラは、狼形態でクイントの懐に飛び込むと瞬時に人形態に変身し、鉄をも砕く拳をクイントの腹部に叩き込む。

今し方が覚めたばかりのクイントは回避しようとする出来ずにその拳が体にめり込んでいくのを知覚し、徐にそれを相殺した。

「又っ!」

ザフィーラは驚愕した。

クイントがした行為に対してだ。

クイントは自身の背に拳を叩き込んでいた。

それは、ザフィーラの繰り返し出した衝撃を体の内部に止め、さらに体の内部を動き回る

衝撃に指向性を与えた。

ザファイラの拳がまるで飴細工のように骨が砕け指の関節一つ一つがありとあらゆる方向に向きを変える。

「下がれザファイラ!!」

後方に大きく飛び退くザファイラと入れ替わりヴィータが前に躍り出る。

グラーフアイゼンをラケーテンフォルムに移行させ、ザファイラが微かに飛ばす血飛沫を顔に浴び、それでも瞳の中にクイントを捕えて離さず。

そして、一度大きく地面を踏みしめるとヴィータは加速した。

「おりゃあああああッ!!」

ヴィータの渾身の一撃は、まるでギロチンのようにクイントの頭頂部を狙う。

クイントは、グラーフアイゼンの軌跡に視線を移すことなく。

体を半身移動させ目の前でグラーフアイゼンを振り抜いているヴィータに向け左手を伸ばした。

その動きは散漫で億劫であった。

そう見えた。

だが、伸ばされた腕は人ならず姿形となる。

それは、回転刃であった。

ドリルのように、揃わせた指先が手首から先、駆動音を奏で回転している。クイントが小さく呟く。

「リボルバー・ギムレット……」

回転刃はさらに速度を増し、風すら生み出す。

伸びる、伸びていく——

ゆつくりと、ヴィータの首先目掛けて一直線に——

だが、ヴィータの瞳に悲壮感はない。

その刃が届かないことは織り込み済みだからだ。

「はっ！」

シグナムが間一髪、レヴァンティンの刃先でクイントの左腕を弾く。

大きく体制を崩されたクイントの瞳にはもうヴィータは写っていない。

その寂寥を帯びた瞳には、さらなる敵である桃色の髪 of 騎士を捕えて離さない。

その粘り気は、水飴の様に甘美で嫌気がさす。

だから気が付かない。

機械だから、心が凍てついたから、感情が枯れ果てた砂漠の様だから。

だから、気が付かない——。

その時、クイントの足元から莫大な熱量を感じた。

敵意を乗せたかのような、肌に突き刺さる熱。

それを知覚した時、唸り上げる声を聞く。

「フランメ・シュラーク!!」

突如として、クイントの視界は爆炎に飲み込まれた。

大きく吹き飛ぶクイントを見たヴィータとシグナムは、体制を整えるため、ザファイラの傍まで跳躍した。

ザファイラの傍には、オルランドとリインがいた。

オルランドは咳き込み続け、リインは震えている。

傍らで膝を付け、二人の様子を確認するザファイラの丸太のような腕を、オツランドは咳き込みながら掴んで立ち上がる。

「ゲホっ、カハっ……ハアハア……、情けない。この程度で……」

そう言って立ち上がるうと、自身の膝に片手をつき上体を起き上がらせるオルランドにザファイラは告げる。

「無理をするな」

だが、そんなザファイラに対して、オルランドはニヒルに笑みを作った。

「無理はするでしょ……男の子なんでね」

オルランドはそう言うのと、戦線に加わるために駆け出した。

その背を見つめ、少しばかり羨望を覚えたザフィーラは足元に座り込むリインに視線を移す。

「……お前は何をしている？」

「わ、私は……ただ、ただ……」

そう言いながら、大きな瞳から涙を零し震えるリインがザフィーラを見上げる。

そんなリインの頭をザフィーラは大きな手を乗せて悲しみを奪う様に撫でた。

「お前がそれでも私は構わないと思っっている。お前の優しき、気品、温もり、それはお前の中に眠るアイツと同種で、アイツから我々が奪ったモノだ。だからこそ、お前の立ちは弱さしか無い燃えカスだろう。だが、そこから何を生み出すかはお前しだいだ」

ザフィーラとリインは見つめる。

すぐ傍で繰り広げられている戦闘を、シグナムもヴィータもオルランドも一人の女を救うために、懸命に戦っている。

リインは気づいていた。

シグナムやヴィータが全力を出せば、相手の命を奪うつもりなら、クイントをすでに大地に足を立ててはいないだろうと、だが目的はそこでは無く救済にある。

そのため、クイントになるべく傷を負わせないで無力化させなければならぬ。

それは、余りにも難しいことである。

——でも動かない。

心が脳が後一手足りないと言っているのに、体が震えて動かない。

「私は……私はあ……」

ラインのその眩きが闇に飲まれ霞んでいく。

その時、シグナム達の頭上が爆ぜた。

そして爆炎の中から声が降り注ぐ。

「マツハキヤリバアアアアアアアア!!」

天より伸びる青い道、その先からスバルとギンガ、ゲンヤが姿を現す。

そして、スバルはクイントの攻撃を真正面から受け止めると、マツハキヤリバーの出力を上げ、クイント事壁に突っ込んだ。

シグナム達の前にギンガとゲンヤが立つ。

「遅くなつてすまねえ……」

「いえ、助かりました」

短い言葉のやりとり、だがそれだけでゲンヤの言いたいことは伝わったのだろう。

シグナムは一步下がる。

「……から先は、家の問題だ」

「お母さん、お母さん!!目を覚まして、私だよ!スバルだよ!!」

スバルはシールド越しにクイントに叫ぶ。

当然だ。

目の前には死んだと思っていた母親がいるのだ。

黙っていることなど出来るわけが無い。

出来ることなら、今すぐにでも抱きしめたい。

でも、それは出来ない。

クイントは今も尚捕らわれている。

なら、目を覚まさせなければならぬ。

自身の欲求を、寸でのところで押し込めて、その思いすら力に変換する。

エース・オブ・エーズである高町なのはの生き様に学んだこと。

今為さなければならぬ行動。

優先順位の確立。

力付くでも、意地を通して、話し合う。

それしか出来ない。

でも、それだけで高町なのはは困難な壁を不可能と言われた事柄を成し遂げて来た。

その教え子が、出来ない道理なんてこの世に無い。

「リボルバー・キャノン……」

「くっ！」

クイントの攻撃を、シールドで受け流す。

爆炎が立ち上り、その先から腕が伸びる。

スバルはその腕を取り、背負い投げの要領で投げ飛ばす。

「はあああああッ！」

投げ飛ばされながらも空中で体制を立て直すクイントにギンガの拳が襲い掛かる。

殴り飛ばされたクイントは受け身を取りダメージを最小に抑えた。

スバルの隣にギンガが立つ。

「ギン姉！」

「分かってる！」

スバルとギンガ、そしてクイントの間に静寂が生まれた。

それは、緊迫感を持っていて、頬を伝う汗が顎先から零れ落ちる。

「はあッ!!」

刹那の時、ギンガが躍り出る。

それと呼応するかのようにして、クイントが飛び出した。

ギンガが繰り出した左の拳を叩き落とし、クイントは左足を大きく振り上げた。

ギンガの蟀谷に迫る。

だが、ギンガとクイントの間にスバルが割り込み、クイントの腹部を強打した。

一瞬の貯めの後に放たれた右ストレート。

今までの疲れが吹きだしてきたのか、クイントはその攻撃をまともに受けてしまい、溜まらず後退してしまう。

そのタイミングを待っていたギンガは、即座にバインドを発動した。

淡い紫色の鎖に捕らわれたクイントは、バインドを振り払うでもなく、ただ力任せに引き千切ろうとしていた。

その光景を見たギンガは、泣き出しそうになってしまった。

自身の母親であるクイントの二つ名は、アンチエイン、それは如何なる拘束だろうと意味をなさない体術の奥義。

バインドの無効化。

それを、得意としていたクイントが、今は力でバインドから脱そうとしていた。

それが、目の前のクイントが見た目が似ているだけの別人であると、告げているような気がして、それを認めたくないのにけど脳が結論付けようとして来て、そのことがどうしようもなく辛くて、ギンガは視界が涙で歪んでいくのを知覚してすぐに拭い取った。

だが、ギンガはまだ諦めない。

何故なら、妹のスバルは、ずっと母の名を叫んでいるからだ。

諦めることを知らないスバルらしいその一直線な思いが、ギンガの心に火を灯す。

だから、握りしめろ。

その拳は誰に授かった。

その心は誰に磨かれた。

その血潮は、どこから来た！

全てだ、全て譲り受けた物ばかりだ。

まだ、その礼を言えてない。

まだまだ、まだ足りない。

だから！

「母さん!!」

ギンガは、駆け出した。

その時だ。

本当に微かだった。

自身の神経が極限までに高められていたからこそ、聞き取ることが出来た。

「強く………なったわね……。ギンガ……。スバル……」

「……母さん？」

虚ろな瞳、震えただけの唇。

でも、聞こえた。

その言葉が、今まで待ち望んでいた。

ずっと、欲しかったその言葉が聞こえた。

聞こえてしまった。

だから、一瞬立ち止まってしまった。

その一瞬の内に、スバルはクイントに殴り飛ばされた。

「うわー！」

「スバル!!」

吹き飛ばされたスバルの名を叫ぶギンガ。

だが、その眼前にはクイントの蹴りが迫っていた。

「しまッ！」

それに気が付いた時には、ギンガの意識は刈り取られた。

ギンガは薄れゆく意識の中、瞼の闇の隙間から確かに見た。

自身とスバルを守るように、そしてクイントを救い出すように。

まるで、母と娘の親子喧嘩の仲裁に入るかのようにして、ゲンヤが割って入るのを、そ

の大きな背中を見ながら、ギンガの視界は幕を閉じた。

クイントの前にゲンヤは立つ。

クイントの体は、至る所に切り傷や打撲の跡が付いており、長く蒼穹を思わせる髪も、汗と埃で汚れてくすんでいた。

そんな女だ。

どれだけ、美しい女だとしても、その魅力は半減以下になってしまおうだろう。

ましてや、暴力まで振るってくるのだ。

ヒステリックで済む話ではない。

それでも、ゲンヤは気だるげにそれこそ、一泊二日の旅行から帰って来た妻に土産を強請るような仕草で、そこに立っていた。

「おいおい、ちいゝとばかり見ない間に、随分と別嬪さんになったじゃねえか？」

ゲンヤは、皺が増えた頬を吊り上げそう言うが、皺の一つも無い若い姿のままのクイントの頬は動くことが無い。

「お前がどこぞに家出をしている間に、俺は大分苦勞をしたんだぞ？ギンガの野郎が思春期に突入した時なんてのは、死ぬ思いだった。スバルも昔は父さん父さん、可愛かったのに、お前がいなくなつてから、変に背伸びを始めやがった」

ゲンヤの一人語りにクイントは動かない。

それでも、続ける。

「俺がどれだけ情けない男なのかお前が一番良く知っているだろう？俺一人に子育ての全部を任せやがって、仕事と家庭の両立とかどれだけ苦労したことか……。だから……」

そして、ゲンヤはクイントの瞳を全身をその全てを視界に納め、一步踏み出す。

「やつぱり、俺にはお前が必要だ。お前がいないと、俺はどうにもうまく人生を歩いていけない。だから、帰ってこい」

ゲンヤが大きく一步を踏み出す。

クイントが半歩下がる。

クイントはまるで、何かに怯えるように下がり続ける。

だがゲンヤは、その恐怖すら包み込んでやると、クイントの目の前に立ち。

そして、クイントを抱きしめた。

「もう……離さねえ……。俺を、俺達を……一人にするな……」

クイントは、ゲンヤの少しだけ覚えていた男臭さに包まれて、その温もりと音を聞いて、虚ろな瞳に輝きを戻し、涙を流した。

垂れさがっていた両手に力が戻り、ゲンヤを抱きしめ返す。

クイントを取り戻すと言う行い。

奇跡的にも今、それが叶うとしていた。

そんな姿を見て、ヴィータ達は溜息をつく。

「私達って別にいらなかったんじゃないか？」

そう不満げでありながらも、嬉しそうに笑うヴィータにザフィーラがポツリと零した。

「……これも愛の力か」

「は？」

シグナムとヴィータが驚愕に染まった顔をザフィーラに向けると、ザフィーラは「何でもない」、とそっぽを向いた。

その時だ。

ザフィーラの耳が微かに動いた。

そして、知覚したそれを把握するためにその発信源に視線を向けた時、思わず叫んだ。

「今すぐ離れるんだ、ゲンヤ!!」

その声と同時に、魔力の暴風が空間内を埋め尽くす。

そして、その暴力のすぐ傍にいたゲンヤは容易く吹き飛ばされた。

「クイントツ!!」

ゲンヤが尻餅を付きながらも叫ぶ。

魔力が集中的に吹き出し、そして集まっていく。

そんなあり得ない光景の中心で、クイントは辛そうに顔を歪めながらも、笑った。

「まったく……私が目を覚ました途端にこれとか……簡便してほしいのだけれど……」

「く、クイント？」

「アナタも何そんなところで……、情けない恰好してるのよ……。ちゃんと、ギンガとスバルを守り……なさい……」

クイントは必死に体を抱きしめていた。

それは、体の中から何かを出さないための行いのようにも見えた。

光がどんどん強くなる。

もうまともに瞳を開けることも出来ない。

それでも、ゲンヤは立ちあがり前に進もうとする。

魔力が無いゲンヤにとつて魔力の暴風はそれだけで災害であった。

触れればたちまちに傷つき壊れ去ってしまう程の、暴力であった。

それでも、諦める訳にはいかなかった。

愛した存在だからだ。

共に愛し合った存在だからだ。

世界に一人しかいないから、だから、手を伸ばす。

魔力の波がゲンヤの伸ばした手を切り刻んでいく。

魔力の光がゲンヤを吹き飛ばす。

それでもゲンヤは止まろうとしない。

なんどでも、立ち上がる。

その光景を見て、クイントはさらに涙を流した。

自分をここまで愛してくれた男の姿が、どこまでも眩しく見えて胸が高鳴った。

クイントは思った。

もう、いい歳をしたおばちゃんなのに、何を乙女なことを思っているのかと、でも堪らなく嬉しかった。

そして、悲しかった。

そんな愛した男にもう二度と抱きしめて貰えないと、なんとなく理解しだしていたからだ。

さらに光が、クイントを飲み込んで行く。

それは、もはや抑え込めない程に大きく膨らんで行った。

嫌だ——

クイントは思った。

こんなところで、終わりたくない。

こんなところで、離れたくない。

娘たちの成長を傍で見ることが出来なかった。

夫老けていく様を隣で見えられなかった。

もつと、もつと、今まででできなかったことを、これからしていきたい。

こんなの、後もう少しで手が届くのに、後少しなのに、私はいつも届かない。

嫌だ、こんなのはもう嫌だ——。

助けて、誰か助けて——。

「兄さんッ!!」

「つたく、お前は……仕方ねえな……」

あなたは誰

その声は、何処からとも無く響いた。

バターを熱したフライパンで溶かし込む様に、じわりと沈み込み広がる様に、空間内を満たした。

だが、その粘性を持った音を振り払ったのは、光に飲まれようとしている、クイントだった。

「ぼ、僕……？危険いから……私から……離れて……」

まるでマジックかのように、瞬きの間に姿を現した子供、その子供は気だるげにクイントを見上げている。

その瞳は黄金色に輝き、光と闇の中で輝きの線を生んでいた。

唇が三日月に歪む。

「お前なあ……、せつかく俺が逃がしてやったのに、何こんなところで馬鹿やってんだよ……」

三日月の口から零れ落ちたのは嘲笑。

その笑みは子供がして良いような表情では無かった。

唯我独尊を体現したような立ち姿、背筋が自然と伸びてしまいそうな威圧感、その存在はクイントにとってひどく懐かしいものであった。

——のだが

「僕……う？お願いだから言うことを聞いて……ね……？」

「はあ……」

クイントを中心として暴風が巻き上がる。

だが、その子供は——、止まりはしない。

「まだ俺のISの効果は持続しているか。ならば後天的な付与術式か——いや、これはリカバリーか。……ったく」

子供は一步近づく。

魔力の風がその身を切り裂こうが、胸を張り真つすぐに愚直なまでに突き進む。

そして、その右手を、等々届かせた。

「今となつちや、これは不要だ。よかつたなクイント、お前はまだ——、生きて良いんだ」

そして子供の右手に虫が集る様にして姿を現した歯車を模した魔法陣がクイントを貫いた。

管理局本局の白く長い廊下、足元を照らす白光が自身の影を霞めていく。

「ティアナ——」

ティアナが顔を上げればそこには八神はやてがいた。

「なんとかこつちは、助力を乞うことが出来た。シャマルの方も話が纏まり次第こちらに向かうとのことや」

なんとかうまく話が纏まった。

八神はやてはそう考えていた。

ティーノの処遇、さらには今後の在り方、それらは八神はやてが望んだ通りに向かう手筈となった。

つまりは、ティアナとティーノを引き離すことなく。

今まで通りの生活を約束させることに成功したのだ。

だが、ティアナの顔はすぐれない。

いつもの正義感が表面に現れたかのようなキリツとした眉は今では情けなくハの字となつてしまっている。

嫌、それどころか疲労の色が色濃く顔に出ていた。

はやてには、ティアナがどうしてそうなってしまったのか見当はついていなかったからだ。

はやては、ティアナを抱きしめた。

「どうやった？」

優しく語りかける。

急かすでもなく、黙らせるでもなく、先を促した。

「……………」こちらも、怖いくらいにうまく纏まりました。本当に、よかった……………」

「うん」

「でも、私は、あの子の母親なのに……………」

「うん」

ティアナがはやての胸元に顔を埋めて来た。

それは、甘えを知らずに育ったティアナの成長のあかしでもあった。

だから、はやては優しく母親のように丁寧に、ティアナを抱きしめ返しその頭を撫でてやる。

「私はツ!!……………」あの子が、どれだけ苦しんでいたのか知っていたのに！それなのにツ

……………」でもツ……………」私は、それでもツ」

「分かるよ、ティアナ……………」その気持ちは、私にも痛いほどわかる」

ティアナは恥も外聞もなく泣き叫んだ。

今までの苦勞がその小さな背中から次々と溢れ出してくる。

はやては、その苦しみその物事、ティアナを抱きしめ続けた。

歯車の形をした魔法陣から紅い光が伸びる。

それは一つ一つが糸の様に細く長い、それらが群れを成し腕となつてクイントの体を貫いた。

「があ……」

その衝撃は、クイントの体内から暴風の源を抉り出した。

だが、クイントはその衝撃に耐えることが出来なかつた。

倒れ来るクイントを子供は抱きとめる。

そして、一度だけ優しくクイントを抱きしめると、後方に放り投げた。

「クイントー！」

放り投げられた先、そこには未だに尻餅をついた状態のゲンヤがいた。

ゲンヤは放物線を描き飛んでくるクイントを抱きとめる。

「クイント、おいクイント！」

ゲンヤはクイントの名を叫び肩を揺する。

「う、うつく……」

その時、クイントの口から苦悶の声が聞こえた。

ゲンヤはそれを確認すると、万感の想いを込めて、力強く抱きしめる。

やつと、やつと手に戻すことが出来た温もりがそこにはあった。

その様子を眺めていた子供は、ポツリと漏らした。

「……見つけることが出来たんだな」

右手の先には、暴れ回る諸悪の原因。

今だに、逃れようとも言うのか、爆発的に魔力の奔流を吹き出す。

それは、赤い宝石。

レリックであった。

子供はそれを掲げる。

「ここじゃ、ちと場所が悪い……飛ぶか」

その瞬間、子供は先程と同様、まるで霧の様にレリック事、姿を消した。

「ティーノ!!」

誰かが、その子供の名を叫んだ。

音が死んだ。

そう表現したくなるほどの無音。

今し方の騒ぎが全てもうそで有るかのような静謐。

まず、叫んだのはラインだった。

「ティーノ！」

今すぐにでも駆け出そうとしたラインを、ザフィーラが止める。

「どこに行こうと言うのだ？」

「そんなの！そんなことツ!!」

「落ち着け!!」

強制的にラインを黙らせたザフィーラは、ゲンヤの下に歩みを進める。

そこには、目を覚ましたギンガとスバルもいた。

「お前達はすぐにクイントを病院に連れていけ」

「でも、ティーノは……」

「なに、気にするな」

ザフィーラはそう言うと、ゲンヤ達に背を向けた。

「アレは我らが対処する」

そこには、守護騎士達が立っていた。

今し方目にした光景は、到底信じられるモノでは無かった。

雰囲気のみで言えば、アレはもはやティーノでは無く。

ジェイル・スカリエッティのものであった。

それでも、連れ戻す。

いかに不可能であろうとも、困難であろうとも、為せと言うなら成してみよう。

なにより、我らが主がそう望んでいる。

ザフィーラ達はサポート担当のシャマルがない以上それを三人に分担するために、
各々並列思考を重ねていく。

そして、見つけた。

「捕えた」

ザフィーラ達は転送の準備に入る。

その時、オルランドに肩を貸しながら、転送魔法陣の内部にリインも入り込んで来た。
ザフィーラ達の眼がリインとオルランドに突き刺さる。

その目が語っていた。

今のお前では、足手まといになると――

だが、リイン達は折れなかった。

折れる訳にはいかなかった。

「私はまだ、アイツに借りを返してないのでね……」

オルランドが痛む体に鞭を撃って答える。

その隣で震えていたリインは、その瞳に力の光を宿しザフィーラ達の瞳を射貫く。

「私は……私は、ティーンのお姉ちゃんです！」

その言葉に最初に嘖き出したのはヴィータであった。

「なんだそりゃ？」

シグナムは、リインの肩からオルランドを受け取る。

「では、お前も転送の準備を手伝ってくれ」

そしてザフィーラは、リインの頭を大きな手で一撫でした。

「……では行くか。蒼天の騎士よ」

その言葉に目を開いたリインは、顔に笑みを浮かべた。

「はー！」

皆がそんなリインを見て思った。

もう、この子は大丈夫だと——。

そして、リイン達は空間を飛翔する。

救うべき者が待つその地に向けて。

リイン達が飛んだ先は、さほど離れた場所ではなかった。

そこは、今までいた場所の直上の樹海の中であった。

風の臭い、土の感触、光の加減からそれを判断する。

だが、何かが違っていた。

穴倉の中に入るまで感じていた感触とこの場所が同一でないと、第六感が告げてくる。

だが、転送先の計算式、その前段階としてのティーノの索敵では、ここだと告げていた。

ならば、何が違うのか。

その答えはすぐ真上にあつた。

「な、なんだ……アレは……？」

オルランドが驚愕に瞳を開く。

それに続くようにして、各々が顔を上げた。

そして、見つけた。

見てしまった。

世の理から外れた法、それが与える影響から、森から息吹が消えていた。

そう、空には――

紅い星が我らを見下ろしていた。

偽の聖王

そこには何も無かった。

空も大地も風も全てが紅にそまる。

どこまでも、いつまでも続く無限世界。

時すら止まったかのようなこの場は封絶結界であった。

子供は見つめる。

眼前20メートル先に浮かぶ紅い結晶体レリックを、金色に光る瞳を鷹のように細め射貫く。

レリックは周囲から貪るように魔力を掻き集め体を構成していく。

それはまるで、ゼリーが同族食いをするかのように醜く膨れ上がり続ける。

「そこまで、肉の器が欲しいか残滓風情が」

子供は鬱陶し気に前髪を掻き上げると、その手をそのまま腰に持って行き溜息をついた。

「馬鹿馬鹿しい、力の塊と成り果てても未だに現世に執着するとは……怒りを通り越し

て憐憫すら感じてしまうよ」

子供のその言葉を浴びて、レリックは憤怒に震えるかのように、急激に体を作り出していく。

そして、それは姿を現した。

透き通った体、伸びた髪らしき物、透き通った胸元には紅い結晶体であるレリックが浮かぶ。

その姿は見る者が見れば、悲鳴を上げてしまう代物であった。

もし、ここに高町なのはがいたのならば、怒りに我を忘れてしまうだろう。

もし、オルランドがいたのならば、悲しみに涙を零すだろう。

その姿は、かつて聖王のゆりかご内部で猛威を振るった。

偽の聖王の姿であった。

偽の聖王から虹色の魔力が溢れ出す。

それは明確な敵意だった。

眼前に映る全てを破壊しつくしてやるとの宣誓であった。

「へえ、……ふふふ、アツハハハハハハ!!」

それに返すは嘲笑、余りにふざけた出来栄えに笑いが止まらない。

「そういうことか……結局、お前もあの親が作り出した防衛プログラムでしかないわけ

だ！」

子供は笑った。

無駄な足掻きだと精一杯に笑った。

自身の親がしでかした間抜けを笑った。

「そこまでして聖王が欲しいのか。そのカードはジョーカーだと言ったろうに、痴呆が入った親の介護は骨が折れる」

そう言いながら、子供は懐から一枚の金属で出来たカードを出した。

「……俺は貴様の主ではないが、その力貸して貰うぞ？ お前もこの体が傷つくのは見たくないだろう？」

「我が友になにをした！」

「吼えるなデバイス風情が、この体がお前の主だと言うことを忘れるな」

子供はそう言うと、無理矢理にエテルナシグマに魔力を通しデバイスを起動させる。

歯車が重ね合わされた魔法陣が姿を現すと全身を包み、子供はバリアジャケットを纏う。

子供はバリアジャケットを纏った自身の姿を見ると、眉を顰めた。

「……この程度か。これだと、時間が足らんだろう」

子供はその姿が気に入らなかつた。

これから始まるであろう戦いに向かないと考えた。だから、次の手を使う。

子供は虚空に手を伸ばす。

手を伸ばした先が、湖面の如く波打つ。

それは簡易な転送術式だった。

転送されて来たのは、一発の銃弾。

それは何の特徴も持たないただの弾丸だ。

だが、エテルナシグマはそれを見た瞬間に悲鳴に近い声を上げる。

「やめろ、我が友に何をさせる気だ！やめろ、やめてくれえ！」

子供はエテルナシグマのその叫びに機嫌を悪くした。

「やめ——」

「少し黙ってろよ」

子供はエテルナシグマの戦闘に必要な部分以外の全ての機能をスリープモードに移行させた。

そして、右手首のシリンドラーに手に持つ弾丸を入れる。

さらに、そのシリンドラーを左手で回転させた。

金属が擦れる音が世界を満たしていく。

視界一杯には虹色が広がっている。

非常に煩わしい。

だから、そんなモノこの世から消してやる。

「エテルナシグマ、カートリッジロード」

「ロードカートリッジ」

撃鉄が叩かれ、一瞬硝煙が舞う。

その瞬間、子供の体を異変が襲う。

頭上から咀嚼されていくように、ゆつくりと魔法陣が下りていく。

魔法陣が足元まで下りきると、子供の目線は遙か天にあった。

嫌、体すべて変わっていた。

鍛え上げられた肉体に、漏れ出す魔力、その姿は青年の姿だった。

「ふうく、やつぱりこっちの方がいい」

口から少しばかり低くなつた声が漏れる。

「目を覚ませ、エルピス」

エテルナシグマから摩擦音が響く。

それは、エテルナシグマが最後の抵抗をしているかのように、苦痛に骨を歪ませているかのように擦れた音を発し続けた。

軋み音が増して行くとエテルナシグマの形状が変化していく。

歯車型の魔法陣に導かれて体の構造を変えていった。

エテルナシグマの表面をまるで血管のように脈打つ紅い線が伸びていく。

それは、青年を飲み込むかのように体のあちこちを侵食していく。

「やっぱ無理な魔力ブーストは、体に響くな……」

青年はそう呟くと眼前を見据えた。

その瞳は熱を放っていた。

余りに熱く、汗を拭き出してしまいそうになってしまふ程の殺意。

身じろぎをすることすら躊躇ってしまいそうになるほどの感情の奔流。

その波がレリックを覆う。

だが、それしきで狼狽える程に偽の聖王は弱くなかった。

むしろ、さらなる魔力の発露によって浴びせられる殺気を相殺していく。

その時だ、偽の聖王は胸の前で腕をクロスさせた。

それと同時に遠ざかる視界、まるで次元跳躍でもしたかのような周囲が線になってしまふ程の速度。

まう程の速度。

偽の聖王が疑問に思う前に踏ん張りブレーキをかけると腕の感触が無くなっていった。

嫌、腕自体が無くなっていった。

理解できないと、偽の聖王は啞然とする。

砕けた腕は元の魔力の塊となり、崩れ落ちていく。

偽の聖王がそれを行つたであろう人物に視線を向けると、青年が右腕を振り抜いた体制で立っていた。

そして青年は笑つた。

その紫色の髪が邪魔して表情の全ては理解出来ないが、確かに口元は歪んでいた。

「何が何だか分からないと言つた風だな偽の聖王？」

青年はそう言うと、面を上げた。

その顔には変わりなく歪んだ欲望が張り付いている。

その欲はどこまでも、どこまでも深く深い闇そのものであつた。

偽の聖王は瞬時に砕かれた腕を再生した。

そして構えを作る。

偽の聖王の体に纏わりつく虹色の魔力達。

それは、かつての最強の鎧の複製だつた。

「聖王の鎧まで偽るか……。俺とお前、とことん似通っているな」

そして青年は、互いに不運な生まれをしたな……と笑つた。

それが意味していることは、偽の聖王には分からない。

そもそも偽の聖王はただのロストロギアが自身を守るために生み出した魔力で出来た体を弄んでいるだけだ。

人の心など理解出来ようはずもない。

でも、いくら想い無き鉱物であろうと、抗う事を止めはしない。

そうプログラムされそうするように埋め込まれているのだから。

だから、青年は笑った。

哀れだなど、俺とお前は似ていると――。

そして、眩いた。

もう、終わらせてやると――。

青年が両手を肩先まで持ち上げると、紅い魔力で生み出された糸が絡まり合っている。く。

線から生み出されたのは、二本の剣だった。

見た目は特に何ともないただの紅いだけの剣、だが青年はそれがあたかも神剣であるかのように、優雅な動作で眼前で交差させた。

その瞬間、青年の姿は欠き消えた。

そして突如として偽の聖王の後頭部直上から音が響いた。

それは、聖王の鎧により防がれていた。

過去の文献に置いて、最強の盾として次元世界中に知れ渡っている聖王の鎧。それが今、偽の聖王の身を守っていた。

偽の聖王が振り返る。

その視線の先には、先程まで眼前数十メートル先にいた青年がいた。紅い糸で出来た剣を振り切った状態で静止している。

「IS発動ツインブレイズ——」

まるで遅れて音が届いたかのように先程まで青年がいたところから声が聞こえた。

だが、偽の聖王はそのことを気にはしていられなかった。

なぜなら、敵が今にも自分を壊そうとしてきているのだから。

偽の聖王が徐に、右手を掲げる。

向けられた掌の先には聖王の鎧に阻まれ火花を上げ続ける紅い剣のみ、その箇所にはさらに魔力を掻き集めていく。

強度が増して行く聖王の鎧、それだけではない。

反発する力に、指向性が生み出されていく。

だが青年は、その表情から笑みを消しはしない。

そればかりか、その顔は余裕すら見せていた。

聖王の鎧と剣の間に莫大な魔力の渦が生まれる。

そしてそれが炸裂弾のように爆ぜ青年に襲い掛かる。吹き飛ばされていく青年。

先程とは打って変わり、偽の聖王の表情が余裕に歪む。

だが、青年はそんなことを許可していない。

偽の聖王は気が付いた。

青年にばかり意識が集中していたがために、ほんの一瞬気づくのが遅れてしまった。

そう、聖王の鎧に蓄積された魔力に指向性を持たせ爆ぜさせた時、ほんの僅かな空間が外界と内部を繋げてしまっていたのだ。

それを青年は見逃していなかった。

だからこそ出来た芸当、聖王の鎧に僅かに生まれた隙間に一本の紅い剣が差し込まれていた。

青年はその差し込まれた剣に煙の中からでも視線を向けた。

そして、指をパチンと鳴らせる。

「IS発動ランブルデトネーター……」

青年がそう呟いたその瞬間、聖王の鎧に出来た僅かな隙間に突き刺さっていた剣は、元の魔力で出来上がっただけの糸に解け落ちていく。

すると、どうだ。

僅かだが聖王の鎧の内部にもその糸は入り込んでいた。

そして一瞬の閃光の後に爆ぜた。

青年は着地すると、仕返しだと中指を立てた。

聖王の鎧とは確かに鉄壁の守りを使用者にもたらすだろう。

だが、それは所詮纏っているに過ぎない。

密着している訳ではないのだ。

なら、その隙間に爆発物を入れて起動させてやればどうなる？

爆発により生み出された力の全ては聖王の鎧により逃げ場を塞がれ、その内部で暴れ狂う。

その衝撃の最後の一最後まで吸収されない限り永遠に猛威を振るい続ける。

偽の聖王の無様な姿を目の当たりにして、青年はざまあ見ろと笑った。

膝は疲労と激痛に笑うことしか出来ない。

肺は二酸化炭素と共に有害物を体外に配収しようと収縮を繰り返し、それに肩が連動する。

額からは汗が零れ落ち、眉間は頭痛に狭められている。

「「ホッ……」

さらに、体内から喉を通して鮮血が撒き散らされた。

その頃には、青年の顔からは余裕が消えていた。

「くそが……所詮この体ではここらが限界か……」

エルピスと化したエテルナシグマから浮かび上がる血管を通して、ダメージの軽減が行われている。

だが、それでも間に合わない。

当然と言えば当然のことであつた。

青年は、ティーン・ランスターの体に無理矢理ジェル・スカリエツテイの過去の戦闘方法を模倣させていたのだ。

しかも、それは本来それを遂行するためだけに作られた戦闘機人の技法である。

生身の体で、慣れない事を、無理にさせる。

それは例えれば、市販されているバイクにジェットエンジンを乗せて、その力の全てを引き出そうとしているようなことであつた。

そんなことをすればどうなるかなど、明らかであつた。

だが、しなければならなかつた。

大切な存在を守るためには、時間を稼ぎ、御ぜん立てをするにはこれしか方法が無かつた。

結界の外を、エルピスに命令し覗き見る。

眼下には夜天の書の守護騎士がこちらを見上げている。

彼らなら、この後、レリックをどうにかしてくれよう。

さらに別の視点を見る。

そこには、クイントが彼女の娘と夫に連れられ安全圏に離脱していた。

「……ふう〜」

汗でへばり付いた前髪を掻き揚げる。

吹きすさぶ爆炎を睨みつけ、悠然と背を伸ばす。

口元の血を拭い、口角を歪める。

それは美学だ。

敵に対して、絶対の強者と見せつけるための虚栄。

そして――

――そうしないと、心が折れてしまう。

だから、笑っていられる内に――

「お前を処分する。――I S発動」

伸ばされた腕の左記には歯車型の魔法陣、編み込まれ生み出されるは武骨なまでの狙

撃砲。

銃口を向ける位置はわかり切っている。

内部で暴れる衝撃を逃がすために、一端聖王の鎧をパージした。だから、余計に輝いて見えた。

胸部に浮かび上がるレリックの輝き。ゆつくりと、それに狙撃砲を向けた。

「へヴィバレル！」

そして放たれた弾丸は、レリックに向け突き進む。

決まった——。

そう思った。

今放たれた弾丸は、ランク表記するならSオーバー、ただの鉋物にはオーバーキルだ。だが、これだけしなければ倒せない。

相手は、平和の名の下に次元世界を掌握した超人が片手間に生み出した兵器だ。

片手間だろうと、その力は折り紙付きだ。

元から勝てるなんて思っていない。

レリックの力は少なからず理解している。

だから加減はしない。

たとえば、罅の一つをつけるだけになろうとも、眼下の猛者が後はどうにかしてくれると確信する。

でも、叶うならば、彼女達も危険に晒したくない。

何故なら、この体を貸してくれた子供が叫んでいるからだ。

あの人達に傷を負わせるなど、叫んでいるからだ。

だから、俺はある意味満足していた。

俺にも、見つけることが出来たから——。

へヴィバレルが着弾する。

結界内を衝撃が遅い、結界の欠片が降り注ぐ。

その欠片の光の反射を見て、青年、嫌ジェイル・スカリエツティは毒づいた。

「ああ——クソツ——」

出来れば、この体は無事に返してやりたかった。

なのに——。

なのに——!!

「IS発動、エリアルレイヴ!!」

糸が編み込まれ生まれた盾が展開される。

だが、エリアルレイヴは虹色を纏った拳に叩き割られた。

その衝撃がジェイルの体を木霊する。

「ガハッ——コフッ——」

鉄の味がする液体が体内から溢れ出す。

眼前が赤く染まっていく。

それでも微かに見えた。

それは最早、聖王の姿すら取っていないかった。

ただの人型のマネキンが、聖王の鎧の力を拳に飲み集約していた。

その瞬間、最強の盾が最強の鉾に生まれ変わった。

だが、それでも諦める訳にはいかない。

良い夢を見たのだ。

今の自分が、ただの記憶の残滓であることは知っていた。

今も尚、力を行使する度にティーノの脳から俺と言う存在が消えていくのは分かっていた。

いた。

何の因果かこうやってアイツの幸せのスタートを見たのだ。

だから、可能性は全て根こそぎ俺が排除する。

俺がどうなろうと、これからのアイツの未来を奪うことは許さない。

だから――

「クイントの兄であるこの俺、ジェイル・スカリエツィが、己が欲を成就させる以外に

答えは無い！」

そうとも、だから堪えてくれよ。ティーノ・ランスター。

お前はまだ終わりたくないだろ！

「IS発動、ライドイン。パルス!!」

紅い星が見下ろす森の中では、シグナム達により結界内部への侵入が行われようとしていた。

だが、その間にも世界を震わせるほどの振動が結界内部から発せられ続けている。速く向かわなければティーノの身が危ない。

その認識はすべての者であり、だからこそ皆急いでいた。

その中で、リインは三つ葉のクローバーのネックレスを抱え祈る様に結界の分析を行っていた。

このネックレスは、なんてことは無い。

別に記念の品と言う訳でもなかった。

ただ、リインとティーノが街を歩いていた時に、出店の店員から売れ残りだからと貰った品物だ。

そこに思い入れなど無く。

ただ、形としてあるだけのネックレスであった。

それでもリインにとつては、ティーノと自分を繋ぐ掛け替えのない物であった。

だから、リインはそれに縋った。

ティーノが無事であるようにと、願った。

「ザファイラー！まだなのかよ!？」

ヴィータは、グラーフアイゼンを抱え今にも飛び出してしまいそうな権幕でザファイラーに詰め寄る。

「あと少しだ」

ザファイラーも淡泊にしか答ええない。

ザファイラーも事の危急さを理解していた。

だからこそ、余計なことに思考を割きたくなかった。

「……」

シグナムも黙々と解析を行っていた。

だが、拳はきつく握りしめられ、額からは汗が流れている。

皆、必死だった。

必死に現状を打破しようとしていた。

その時だ。

一段と大きな振動が辺りを埋め尽くした。

そして、封絶結界が内部から粉々に破壊される。

結界の結晶が降り注ぐ中で確かにリインを見た。

紅い結晶の光の乱反射により視界が機能しなくても見つけることが出来た。

それを、三つ葉のクローバーの輝きを――

だからリインは飛び立った。

誰かが、静止の声を上げるが聞いてはいられない。

「ティーノーっ！」

リインは、蒼天に落ちるティーノーに手を伸ばす。

その姿形が変わっていようとも関係が無かった。

リインには、姉であるリインには、ティーノーだと確信的な想いがあった。

手を伸ばす。

ティーノーは蒼天の中を沈む様に落下していく。

ティーノーのさらに奥、上空には禍々しいまでの虹色の輝きがあった。

まるで天使が降臨したかのような幻想的な光だ。

その光が、闇を払いに来たかのようにだ。

闇とはなんだ。

それは罪の名だ。

ならば、この場の罪とはそれを成した者とは……

ダレダ——？

光が伸びる。

大罪人を裁く聖なる光が有罪を言い渡す。

だがダメだ。

どれだけの罪を背をつけていても、どれだけの恨みがかつていても、断罪させる訳には
いかない。

その闇もろとも抱きしめて、世界からすら守ってみせよう。

なぜなら——

「私は、お姉ちゃんですから!!」

そして光より早くリインは闇に届いた。

随分と大きくなってしまった弟の血塗れの顔をリインは優しく撫でて微笑む。

「本当に、悪い子なのです……」

そしてリインは弟の顔を自身に引き寄せた。

二人に断罪の光が伸びる。

「やめろ————ッ!!」

シグナム、ヴィータ、ザファイラ、オルランドが叫んだ。

回避不可能の絶対の裁きの光、祝福を知らせる光の乱反射、それが闇に飲まれた男と闇を抱えた少女を包む。

「あつ……あぁ……」

ヴィータはその場に膝をついてしまった。

「おあああああああッッッ!!」

オルランドは怒りに我を忘れ飛び掛かろうとデュリンダナを抜き放つ。

「リインフォース！」

「ティーン！」

シグナムとザファイラは二人の救護に向かおうとする。

その瞬間、世界を不気味な音が支配した。

その音は、耳障りな音だった。

その音は、恐怖を巻き起こす音だった。

その音は、耳を塞ごうが心に響いてきた。

その音は、産声のような音だった。

その音は、金属を擦り合せていくような音だった。

その音は、重い扉を開くような音だった。

その音は、絶望を手繰り寄せていくような音だった。

そして、世界は――

蒼天は――

夜天に飲まれた――

ユニゾン・イン

いつの事だっただろうか――

私と彼との出会いは――

ああそうだ――

私と彼は、そうあの時に――

朝焼けがセミフラットの歩道を暖め、鳥が囀った。

歩幅が違う影が二つ、歩道を歩く速度を合せ流れていた。

風が頬を一撫でした。

「わわ……！」

突然の風に銀色の髪が乱れた。

久方ぶりの休暇にお出掛け、時間をかけてのおめかしが意味を失う。

それが無性に悔しくて、スカートの端を小さな両手で握りしめた。

「ありや……、風さんに悪戯されてもうたね♪」

影が覆いかぶさる、それに合わせて視線を持ち上げると麦畑を連想させる色が優しく微笑んだ。

「はやてちゃん……」

「じつとしてな」

はやてはそう言うと、優しい手つきでリインの乱れた髪を整えていく。

まるで撫でる様に、所々跳ねた髪の毛を整える動作は優しく暖かい。

私は思わず鼻歌を歌い出しそうになってしまう。

そうやって微笑む私にはやてちゃんもつられて笑った。

私ははやてちゃんの手を握りしめ歩き出す。

はやてちゃんの手は、初めて私のはやてちゃんと出会った時と比べて、大きくなった。

それだけで時間の流れを感じてしまう。

でも、そんな事はどうでもよかった。

時間の流れとか、取り戻すことが出来ない過去とかそんなのどうでも良かった。

だって、今が幸せならそれで良いじゃないか。

それ以上の幸福の感じ方なんて私は知らないし、前の私もたぶん知らないと思う。

だから、私は今が大好きだ。

「到着……」

はやてちゃんに連れられて来た場所は、前に一度だけ来たことがある場所だった。

その家の家主の名前はティアナ・ランスター、元機動六課の隊員で、私の大切な後輩だ。

はやてちゃんがインターホンを襲うと人差し指を伸ばす。

その時だ。家の中から、この世の終わりを宣告されたかのような泣き叫ぶ声が聞こえたのは。

私とはやてちゃんは互いに向き合うと頷き合い、家主の許可なく玄関の扉を開けた。

「ふええええあああああゝゝゝゝゝゝ、嫌だあゝゝゝゝゝゝ！」

その声はどこまでも悲しみに溢れていて、でもどこか微笑ましい、不思議な音色だった。

「お邪魔してるよ〜?」

はやてちゃんがそ言いながら靴を脱ぎだすと、玄関の先の扉から、見覚えのある夕日のような色が顔を覗かせた。

「あ、はやてさん! すみません、出迎えもしなくて……!」

「別にええよ。それより、この声は例の子かな?」

「はい。ほら、ティーノご挨拶は?」

扉の先、顔だけ覗かせていたティアナは抱き上げ宥めていた子供に、優しくそう言う

と、私たちの前に姿を出した。

私はその姿を見た瞬間に息を飲んだのを、客観的に理解した。

その常闇のような髪色、すべてを見透かされそうなまでに澄んだ黄金色の瞳、中世的な顔立ち、神のような両性具有を連想させる。

私の今までの人生において、もつとも理解が出来ない事件を引き起こし、そしてその余波で世界を作り替えた男。

ジェイル・スカリエツィがそこにはいた。

私は動くことが出来なかった。

今までどこか温かった胸元が急激に温度を失っていく。

指先が震え、何かに縋りつかなくては立つてすら居られなくなってしまっそうだ。

私は知らず知らずの内に、守護騎士の皆に向け念話のパスを繋げようとしていた。

その時だ。

またしても大きな掌が私の頭を一撫でした。

それをしたのは、勿論はやてちゃん、はやてちゃんは私に一度微笑むと玄関を抜け扉の中に消えていった。

私もその姿に慌てて靴を脱いだ。

リビングに通されると、その部屋の中はどこかある種の戦場を思わせた。

まるで怪獣の通り道の様に散らかったおもちゃの山、野獣に食い散らかされたかのような朝食が乗ったテーブル、テレビからは子供用番組のお姉さんと着ぐるみが陽気な曲に合わせて踊っていた。

そんな室内に茫然としてみると、ティアナは本当にすまなさそうにしていた。

「すみません、お願いした立場であるにも関わらずこんな惨状で……」

「ふふふ……、いくら執務官様でもこればかりは難しいやんな？」

「面目も無いです……」

「ええよええよ！ほらっ、ティアナはお仕事やる？」

はやてちゃんがそう言うと、ティアナは頬を掻いた。

「そうしたいのですが……」

そう言って、ティアナが視線を下げると、そこにはまるで子猿の様に全力でティアナに抱き着く子供ジェイルがいた。

「ありやりや……」

はやてちゃんはそう言うと、ティアナの傍まで近づき腰を少し落とした。

「初めまして、ウチは八神はやてつていいいます。君のお名前は？」

子供ジェイルはティアナの胸元から少しだけ顔を動かして、その金色の瞳にはやてを写した。

「うん？」

はやてちゃんは、ゆっくりとした動作で首を傾げた。

その姿はまさに母親のそれであった。

嫌、この場合は近所のお姉さんか……？

私がそんな事を考えていると、どうも恥ずかしいのか。

子供ジエイルは、再びティアナの胸元に逃げてしまった。

「こらっ、ティーノ、ちゃんとご挨拶しなさい！」

ティアナにそう言われても、子供ジエイル改めティーノは、首をイヤイヤと振るばかりであった。

その時だ。

何を思ったのか、はやてちゃんはティアナに抱き着くティーノの脇に手を入れると、優しくけれどどこか強引に、ティアナからティーノを引っぺがした。

その突然の動作に、ティーノは驚き固まって動けずにいる。

その予測不可能だと言わんばかりに大きく驚きに開かれた瞳と口は笑ってしまいうになる。

「よいしょつと……！」

はやてちゃんは、ティーノを抱きしめ直すと、無理矢理にティーノの小さな手を取っ

てブンブンと振らせた。

「それじゃ、ママはお仕事にいつてらっしやい♪」

どこかポカンとした表情をしていたティアナであったが一瞬で状況を把握したのか足早にはやてちやんと私に頭を下げて仕事に向かつていった。

そして、未だに方針状態のティーノは玄関の扉の閉まる音を聞いて我に返る。

そうして、ゆつくりと顔を持ち上げはやてちやんの顔を見た。

その瞬間、ティーノの胸元とお腹が空気によつて膨らんでいく。

これはマズイ――

私はそう考え、カ一杯両の耳を塞いだ。

その数秒後に家を揺らす程の泣き声が轟いたのは言うまでもない。

室内を、掃除機の吸引と排気の音が支配する。

「ヒツク……うえ……」

時折混じるそんな声、だがそんな声もガーガーうるさい生活音に消されていく。

「ティーノはホンマにお利口さんやな♪」

ティーノは泣きながら、掃除機をかけると言う器用な事をしている。

そんなティーノの隣では、はやてちゃんが鼻歌を歌いながら洗濯物を畳んでいた。

はやてちゃんに褒められても、ティーノはどこか仰々しくて、一々ビクビクしている。

「はあ……」

私はそんなティーノの姿に溜息を吐くと、ティーノの腕から掃除機を引つ手繰った。

「はわッ！」

「はあ……、掃除機の使い方を間違っています。そんなに同じ場所ばかりしていても意味はありません」

私はそう言うと、ティーノに説明しながら部屋の隅々まで掃除機を当てていく。

そんな私の姿にティーノはビクビクしながらも真剣な瞳で見えて来た。

はやてちゃんに少し前に聞いた。

なんでもティーノはティアナに褒めてもらいたくて、ティアナがいない間に家の掃除をしているのだそうだ。

ただ、そこはやはりと言うべきか子供のすることだ。

余計に家の中をめちやくちやにしてしまい、ティアナが帰って来る頃には泣き叫んでいるらしい。

だからこれはティアナのためだ。

仕事で疲れて帰って来たティアナの負担を減らすための行いだ。

決して、この子供のためではない。

そんな訳がない——。

掃除が粗方片付いて、お昼時となった。

はやてちゃん、昼食を作るためにキッチンに姿を消した。

そしてリビングには、私とティーノだけとなってしまった。

ティーノは一人で人形遊びをしていた。

男の子の人形と女の子の人形、その二つを手に持って何かをしている。

何をしているのか不思議に思つて耳を向けた。

すると、こんな声が聞こえて来た。

「おかえりなさい！今日はね僕頑張つてお仕事をしたんだよ！」

「本当？それなら、今日のご飯は豪華にしなくちゃいけないね」

「ありがとう。そうだ、子供たちはどうしたんだい？」

「子供達なら、先に寝てしまったわ。パパが帰ってくるまで待つて聞かなかつた

のだけど、疲れてしまったのね」

「そうかそれは残念だ」

それは、朝のドラマのシーンをツギハギしたような人形劇、嫌おままごだった。

一般の男の子の様に、ヒーローが悪を倒すようなものではなく。

どちらかと言えば、女の子がしていそうな遊びだった。

だが、そう言つて遊んでいるティーンノの表情は、どこまでも幸せそうで、本当のその光景を夢見ているかのようだった。

でも、おままごとはそこで止まつてしまう。

まるで、その先を知らないかのよう——

そして、ひとしきり悩んだ後、ティーンノはまた初めからやり直す。

「はあ~~~~~……」

何を考えてしまったのだろうか。

気が付けば、私はティーンノから女の子の人形を奪つていた。

その瞬間にティーンノは男の子の人形を落としてしまう。

それほどまでに驚いてしまつていたのだ。

私はそんなティーンノをほつたらかしくしておままごとの続きをする。

「だから、今だけは久しぶりの夫婦の時間を楽しみましょう」

突然の私の乱入にティーンノは目をパチパチさせるが、私が視線で先を促すと慌てて男の子人形を手を取つた。

「えつと……えつと、そ、そうだね。それじゃ、ごはんにしようかな？お風呂にしようかな？それとも僕……？」

は……？

この子は何を言っているのだ？

それは男のセリフではないだろう？

そう思っていると、ティーノの後方にあつたテレビから昼ドラの音が聞こえた。

「奥さん、僕はもう我慢できない！」

「そんな、止めて下さい。私には愛した夫が……」

そして突然のラブシーンだ。

私は何も言わずに立ち上がると、リモコンを手にとって問答無用でテレビの電源を落とした。

いきなり無言で私が立ったため、ティーノは何か間違ってしまったのかと涙目になっている。

その時、私の中で何か熱が灯った気がした。

なんというか、この子は無垢過ぎたのだ。

そして、俗世に染まり切っていないが故にどのような色にも染まることが出来る。

この子に常識を教えなくてはならない。

教育しなければ、世間に出すことは出来ない。

気が付けば、私はそんなことを考えていた。

もう私の中では、ジェルとティノは別人であった。

私は無言でティノに近づく。

ティノは私の迫力に負けたのか後ずさりし始めた。

ゾクゾクと背筋を何か張った。

私は、少し乾燥した唇を一舐めた。

そして――

「もちろん、あ・な・た・です♪」

私はティノに飛びついた。

ティノとはやてちゃんと過ごす時間は驚くほどに早く過ぎていった。

来た当初は考えもしなかった。

私がジェル・スカリエツティかもしれない子供と仲良く出来るなんて、でも今の時

間が本当に楽しい。

私はそう感じていた。

ティノをおもちやししながら――

その時だ、私の頭の中で電子音がした。

私はそれに気が付くと、はやてちゃん宛のメールであると気が付きそれを表示した。

空中にホログラムが現れ、そこにティアナが映っていた。

私の隣ではそれにびっくりしたティーノが、腰を抜かしたかのように尻餅をついていた。

ああもう、可愛いな——

ホログラムの中のティアナは申し訳なさそうにしていた。

「すみません、はやてさん。危急の仕事が入ってしまいました、帰るのが遅れてしまうと思います。なるべく早く帰りますので、もうしばらくティーノのことよろしく願います」

ティアナはそう言うと、ホログラム事消えてしまう。

私は、はやてちゃんの顔を見た。

はやてちゃんはどうするのだろうか？

まさか、帰るなんて言ってしまうのだろうか？

だが、違った。

「ライン、ティアナに返信しといて！OKやって」

そうウインクしながら言うはやてちゃんに対して私は満面の笑みで返した。

「はいです！」

そこからさらに時間が過ぎてしまい、時計は午後八時を知らせていた。

ティーノはラインの肩に頭を乗せて、静かに寝息を出していた。

「ふふ……」

その時だ、はやてちゃんが小さく笑った。

「どうかしましたか?」

私が右手でティーノの頬を撫でながら聞くと、はやてちゃんは小さな幸せを見つけたかのように目を細めた。

「いやな……。この静かな時間が幸せやなって、そう思ってたな」

はやてちゃんのその言葉に私もつられて笑った。

「はい」

それからさらに時間がたった時だ。

はやてちゃんは立ち上がる。

「ちよつとシグナム達に帰りが遅れるって電話しに行ってくるね」

「それじゃ、私は布団を準備するのです」

ティーノをソファアに寝かせて、私とはやてちゃんはそれぞれがお泊りの準備を始めた。

そして、布団の準備をしてティーノの様子を見に戻った時、私は気が付いた。

そこにティーノがいなくなっていることに――

「ティーノ!!」

そこから私は、自分の行動をあまり覚えていない。

ただ、必死に走っていたのは覚えている。

夜も深く、犬の鳴き声や、車の音、ガラの悪い人達を見て、私は一々顔を青くしていた。

想像してしまっただのだ。

ティーノの最悪を、私の最悪を――

嫌だ、嫌だと走った。

そして見つけた。

小さな公園のジャングルジムの中、檻の様に囲まれたその中心にティーノはいた。

「ティアナあ……どこお……？」

ティーノは一人で泣いていた。

我儘を言っている、迷惑をかけていると理解しているかのように、小さく膝を抱えて泣いていた。

そこはまさしく檻だった。

ティーノを閉じ込める檻、悪を縛る牢獄、公園の砂を踏みしめてその音を聞いてそんな風に幻視した。

何を間違えたのか。

全てだった。

勘違いしていたのだ。

ティーノがそこまで成長していると、自分に懐いてくれていると、そう思い違いをしていたのだ。

ティーノの中では、やはり一番はティアナでその一番がいつも帰って来る時間にな
いのだ。

捨てられたと思っていたとしてもおかしくない。

どこまでいってもティーノは子供なのだ。

それも男の子だ。

行動力がある。

ティアナに何かあったと考えたのかもしれない。

でも、何故だろうか。

私は少しイラつとしていた。

何故？

それは私にも分からない。

でも、この感情を抑えることは出来ない。

だから、私は力一杯に一步を踏み出した。

ティーノが顔を上げた。

だが、その瞬間にティーノは小さな悲鳴を漏らした。
当然だろう。

今の私は、髪の毛が逆立っている。

まさに怒髪天を衝いていた。

しかも、全身汗でびっしょりで、湯気すら上っている。

迫力満点だ。

私はそんなこと、関係なしにジャングルジムの檻を力一杯つかんだ。

「ティーノッ！」

「ヒッ——」

ティーノが怯える。

だが、関係が無い。

もう抑えられない。

「あなたは、今までどこにいて何をしていたのですか？私がどれだけ心配したのかわかりますか？あなたはまだ子供でしょ？それをこんな時間に一人で外に出て……、あなたに何かあればはやてちゃんも、ティアナも、……私も悲しいじゃないですか！それが分からないのですか!?!どうして、そんなことも考えられないのですか？なにかあれば相談

くらいして下さい。私は……私は、そんなにも信用できませんか!」
一息で全て出し切った。

私ははあはあと、肩で息をしていた。

それほどまでに、怒っていた。

今まで一番怒っていたのかもしれない。

なんで今日あつたばかりの子にこんな感情を発露しているのか。

分からないそれでも、出さずにいられなかった。

私の怒鳴り声を聞いて、ティーノはさらに逃げる様に小さくなった。

「逃げるなッ！男の子でしょ！」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

ティーノはそう言つて、膝に埋めていた顔を上げた。

その顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃで、とても見ていれるようなものじゃなかった。

でも、それでも、心がズキンと痛んでも、私は怒らなくてはいけない。

でも——

「……わかつたのなら、それでいいのです。さ、帰りますよ?」

私は檻の隙間から手を伸ばして、小さな本当に小さな男の子の手をとつた。

街の街灯が私達を包んでいた。

私に手を引かれて歩くティーノは未だに涙を流して、それを必死に隠そうと袖で拭っていた。

私はそれに気が付かないように、敢えて前だけを見て歩き続ける。

ティーノの温もりを感じながら、私は考えた。

今ならば、言えるだろう。

怖い犬からも、暴走した車からも、ガラの悪い人達からも私はティーノを守って見せる。

守り切つて見せると、だがこの気持ちはなんなのか分からない。

説明できない。

そうどこか理解出来ない自身の感情に、必死に頭を捻つていると突然手が引かれた。

「ぐえ」

私は突然の事に、声を出してしまった。

「どうしたのですか？」

私が驚きティーノの方を見ると、ティーノはある一点を見つめて止まっていた。

そして、私の手を振りほどき視線の方に向かって歩き出した。

「あ、こらっ！」

私も慌ててティーノ後を追いかける。

ティーノが向かった先は、一軒の露天だった。

その露天は、どこにでもあるようなアクセサリを歩道の上に広げた布の上に置いてあるだけの店だった。

そこで店の人だろう一見30代のおじさんが困ったような顔をしていた何かを抱き上げていた。

ティーノはそのおじさんの前までいくと、おじさんの腕を見上げた。

そしておじさんの袖を引っ張った。

「おっ、どうしたんだ坊主？客か……んな訳ないか。もし、そうだとっても悪いな今日は店じまいだ」

「どうかしたのですか？」

私がそう聞くと、おじさんは視線を合わせる様にしゃがみ腕に抱えるそれを見せて来た。

それは、弱り切った犬だった。

そして足を怪我してしまっただろう。

少しばかり血が滲んでいた。

「それがよ。さつき気が付いた時に、俺の隣にこの犬がいてよ。弱っているし怪我しているし、困ってよ」

おじさんがそう説明する中でも、ティーノは犬から視線を外さない。

そればかりか、ティーノはその犬に両手を向けた。

そして、両手から紅い光が漏れだす。

それは紛れもない回復魔法だった。

「お、おい……」

これにはおじさんも驚いていた。

そして私も驚いた。

ティーノは人見知りだ。

それも極度に、だが男の子なのだ。

困っている人がいたら見捨てて置けない。

どこかテレビの中のヒーローの様な思考、だがそれが男の子の特権だった。

光が止むと、犬は目に見えて元気になった。

そしてティーノの頬を感謝しているかのように舐めていた。

私はその姿に見惚れながらも、おじさんにこの時間でも空いている動物病院を教え
た。

そして犬との別れを惜しむティーノの手を引いて帰路につこうとした時だ。

おじさんは、私達に二つの三つ葉のクローバーのネックレスを手渡した。

「なんかありがとよ。これは感謝の気持ちだ受け取つていてくれ！」
おじさんはそう言うのと、私たちにそれぞれ手渡した。

「それと坊主、余りお姉ちゃんに迷惑かけるなよ？この姉ちゃんさつきすつげえ怖い顔
でお前の事探し回っていたんだからな？」

おじさんはそう言うのと、また私たちにお礼を言つて動物病院に向かつていった。

だが、私はその場に固まって動くことが出来なかつた。

それはおじさんのある言葉が私にとっては衝撃的だつたからだ。

「帰らないの……？」

ティーノがそう言つて、私の顔を覗き込んでくる。

ああそうか——

やつと気が付いた——

この気持ちは——

「ティーノ？」

「……どうしたの？」

「今から、私がティーノのお姉ちゃんです！」

「……えっ？」

「なんですかその嫌そうな顔は！」

「いや……その……なんていうか……」

「なんでもかんでも、決めました！ ティーノは少しも目を離して置けません！ 私がお姉ちゃんとなって、きつちりと教育します!!」

そう、この時私はティーノ・ランスターの姉となった。

姉となって、弟を立派な男にすると決めたのだ。

だから――

光が私とティーノを満たす。

それは激痛を伴って体の一遍まで削り取っていく。

「……本当にティーノは昔から変わりませぬね」

私はそう言って笑った。

体は今も激痛に悲鳴を上げている。

逃げ出したいと脳が叫んでいる。

でも、逃げられない。

「はあ、少し走馬灯を見てしまったのですよ」

私はそう言いながら、血にまみれたティーノの顔を持ち上げて額と額を合せた。

「……ごめんなさいです。私は知っていました。ティーノが自己を確立させていくにつれて足りない過去を欲しているのを、それをティアナはやてちゃんに打ち明けて、否定されて落ち込んでいるのを、ごめんなさい。私はそんな姿を見て見ぬ振りをしていました」

だって——

「だって、過去を思い出してしまったら、私の弟がいなくなってしまうなんて思ってしまったのですから……。だから、これは私の罪です。だから——」

ティーノとリインの三つ葉のクロバーのネックレスが偽の聖王の砲撃に耐え兼ね融解し粉碎されていく。

銀色の光が虹色の魔力光と重なり合わされ、ティーノとリインの周囲を漂う。

「——あなたのせいではないです。全てお姉ちゃんの責任です。弱い私の責任です。巻き込んでしまつて本当にごめんなさい」

リインの瞳から一筋の涙が零れ落ちた。

「でも、許されるならこの罪を清めて下さい。この闇を抱えて下さい。お姉ちゃん一人ではすぐにでも潰れてしまいます」

そして、銀が舞う光だけの世界で、リインはティーノの頬を両手で包み口づけを交わ

した。

「だからテイノ、私と一緒に闇を切り裂いて——ユニゾン・イン」

祝福の風

深層のそのさらに下、思考の海を見上げる深海、この場に名をと言われたならば心と答えよう。

ティーノ・ランスタールは見上げる。

遙か高みを、波打つ思考の飛沫を、飛沫の一つ一つが所狭しと並べられた監視カメラの映像のようにランダムに写されては消えていく。

その一つに、血だらけとなった外の世界の大人となった自身がいた。
波が跳ねる。

移り変わる自身の姿形。

ある時は、絶望に泣き叫んでいた。

ある時は、何かを決心したかのように虚空を睨みつけていた。

ある時は、誰かと敵対していた。

どの映像も写っては消えていく刹那の微睡でしかない。

そんな映像の数々を見させられて、ティーノは大きく舌打ちをした。

情けない、と――

自然に口から零れた。

ああ、見るに堪えない――

あの世界にいる僕は情けなさ過ぎる。

僕ならもつとうまくやって見せる。

そんな驕りが胸の内から全身を焦がしていく。

過去か未来かなんてわからない。

けれども、自身とよく似た人物の失敗ばかりの映画を見させられて喜ぶ人間なんていない。

それは恥以外の何物でもないからだ。

そして見つけてしまった。

打ち上げられては消えていくしか出来ない飛沫の一部、他よりも一回り大きな飛沫、その中のティーノは、何も出来ずにいて、そんなティーノを守るようにして抱きしめているリインの姿を見てしまった。

リインは泣いていた。

血だらけのティーノらしき人物を抱きしめて泣いていた。

そして、そんな二人に向け魔力の塊が迫る。

ティーノは叫んだ。

「ふぎけるな！ふぎけるなよ！お前はそこで何をしているんだ！お前しかいないだろ！お前が守る以外に、リインを救えないだろ——。一体何をしているだ!!」

それは無駄なことだった。

馬鹿馬鹿しいことだった。

テレビで放送されたドラマのストーリーに納得がいかずテレビに向かって吠えるかのように愚かなことであった。

当然だ。

それは決められた脚本通りの流れで、すでに撮影は終わっている。

それは確定した未来を垂れ流すだけの機械でしかない。

そんな物にくら八つ当たりをしたところで、意味の無い事だ。

確定した未来とは過去だ。

過去は変えることが出来ない。

そんな事、赤子ですら知っている神が定めた世界の常識だ。

だが、ティーノは深海の中でもがいた。

そして遥か天に向け手を伸ばす。

「ふぎけるな——。認めるか、そんな未来を認めてたまるものか。リインは、家族は僕

が守るんだ。そう——決めたんだ！」

ティーノは手を伸ばす。

遙か天で消え入りそうな飛沫の一つに向け引き千切れてしまいそうになるまで手を伸ばす。

そこにいるリインに向け手を伸ばす。

海面に打ち付けられ消えてしまうだけの世界。

そんなところに大切な人を置いていける訳が無い。

だからティーノは手を伸ばす。

いずれ滅びることしか出来ない光の満ちた世界よりも、永久に生き永らえることが出来る闇の世界へリインを導くために手を伸ばす。

リインの感情なんて今は知らない。

光の中で消えることを望んでいるかもしれない。

それでも、ティーノにとってそんな事は関係が無い。

光だろうと、闇だろうと、一度守ると誓った相手は、何が何でも守り切って見せる。

「だからッ!!」

だから——

「僕の手を取れ、リインフォース!!」

その時だ。

海面が揺れた。

光の世界で水面に叩きつけられた一つの世界が、全ての世界を未来を揺り動かす。一つの小さな波紋が全てに派生していく。

そして――

掴んだ――

過去を――

未来を――

欲望を――

光が流れ込んでくる。

闇に満ちた深海に外界が押し寄せてくる。

だがそれと同時にティーノは感じる事が出来た。

掌に感じる微かな温もりを、その命の鼓動を、掴むことが出来た。

だからこそ、ティーノはその手を力任せに引き寄せる。

光の侵食で瞳は既に機能していない。

それでも、理解出来た。

抱きしめたこの温もりは守ると誓った存在だと――

ティーノは重い瞼を徐々に開けていく。

腕の中に抱く温もりを敵から守るために、その敵を見据えるために、強引に痙攣していた瞼をこじ開ける。

そして、瞳に写る光景は、良く知った川辺だった。

「あれ……？」

「ようやくお目覚めかい？」

そう声がティーノの鼓膜を揺すった。

目を凝らし一点を見つめると、そこにはいつもの幸薄そうな男が立っていた。

「相変わらず君はアグレッシブだね」

その声はどこか落ち着きを孕んでいて、聞くだけで心の漣は澄んでいく。

だからこそ、ティーノはゆっくりと口を開いた。

「……無茶なことをしたのは理解している。僕がしたことによつてどれだけの人に迷惑をかけたのかも、分かっているつもりだよ」

「なら良いんだ。君は間違いだと分かっているながら、それでも突き進んだ。そんなことが出来るのは子供の特権だ。そしてその特権を振りかざした君は、他者にかけて迷惑と同等以上の成果を果たした。これは、実に素晴らしいことだ。失敗を成果で洗い流した」

そう言う幸薄そうな男に対して、ティーノは首を振った。

「……そんなこと、出来ていないよ。だって、リインを傷つけてしまった」

ティーノはそう言いながら、腕に抱く存在、リインの頬を撫でた。

「……傷つけてしまった。……悲しませてしまった。僕は……」

幸薄そうな男は、やれやれと首を振る。

「君は考え過ぎだ」

その言葉に、ティーノの眼光が一瞬鋭くなる。

「君は己に素直になるべきだ。人間の行動原理は全て欲望で構成されている。君は大切な存在を守りたいと言った。そして、自身の過去も追い求めた。全て、ただの自己の欲でしかない。ならば、そこに他者の入り込む余地なんてものは無い。全てが己がために、全てが己の欲望を満きを満たすために……、だからこそ、その少女がどうなるうとも気にも留めるな」

「なにを——ッ」

「君だつて今し方選んだばかりではないか。守るために、その少女を、光から闇に……こちら側に引き込んだ。相手の了承も得ずに、何も分からず聞こうともせず、微かな繋がりやを断ちたくないからと、その細い糸を手繰り寄せて見せた。それこそが、人の本質だ」
ティーノは金槌で殴られたかのように揺らいでしまう。

その通りだったのだ。

ティーノはただ必死だった。

必死に最善を選んだ。

それは、全て独断と偏見と自己満足でしかなかった。

ティーノは温もりに逃げる様に、腕の中で眠るリインを強く抱きしめる。

「じゃあ、じゃあ……僕はどうすればよかったんだ！」

ティーノは叫んだ。

どうすればよかったのかと、何が正解だったのかと、だがそれに対して幸薄そうな男は薄く笑うだけだった。

「考えるんだティーノ・ランスター」

その声はティーノの後方から聞こえた。

項垂れかけていたティーノは、声のした方を向くとそこには、今もつとも憎い男がいた。

その男は、紫色の髪を乱雑に伸ばし、金色の瞳はどこか死んだ魚のように生気が感じられない。

だが、その男はどこか自身を大きくしたような一つの可能性だった。

「お前は……お前がッ！」

ティーノは怒鳴り散らしたくなった。

お前がしつかりしていれば、こうならなかった。

そう叫びたかった。

だが、ティーノはその憎悪を喉で押しとどめる。

今し方理解したばかりだからだ。

そうして、歯を噛みしめている上で、その男は幸薄そうな男に話しかけていた。

「このガキは俺が連れていくが構わないか？」

「別に構わないよ。君ならよく分かっていると思うしね」

「……言ってくれるね」

男は少し怒気を含ませてそう言うと、ティーノの髪の毛を掴み放り投げた。

「ぐっ……痛ッあ……」

ティーノは放り投げられた先で、受け身もとることが出来ずに無様に背中から着地した。

それでも、腕に抱くりインだけは傷つけないように守る。

そんな様子を見ていた男は鼻を鳴らした。

「フン……一貯前に女は守るってか……、嫌、それは人ですらないモノ、融合機なのに

……本当に、滑稽だよ。お前——」

「お前に何がわかる——」

ティーノは立ち上がる。

拳を握りしめて、血潮を指先まで行き渡らせて、酸素を脳に全力で送り込む。

「お前に僕の何がわかるって言うんだッ！」

「分かるさ。俺はお前の可能性でお前は俺なのだから——」

その言葉が鼓膜に届いた時、心臓内を血の塊が通ったような衝撃がした。

ティーノと男、ジェイル・スカリエティを包む空間は今までの場所とも先程いた場所でもない。

全てが闇に包まれた世界だった。

嫌、遙か天には黒いばかりの太陽が輝き、その太陽の涙が大地を濁していた。

そんな世界で目の前の男はダルそうに腕を組んでいた。

「そんでお前も見たんだろ。——地獄を？」

「……かつ……ぐ」

「言葉にも出来ないくらい程強烈だったか？でもな、あれがお前の欲した世界だ。……どうだった？素晴らしいまでに地獄だっただろう？」

ティーノは必死に口元を抑える。

その地獄を見てしまったからだ。

「脳裏に霞めただけで、吐き出してしまいそうなまでの地獄、精神を汚す猛毒を思い出してしまったからだ。」

「ティーノの瞳からは涙が次から次に溢れてくる。」

「……あの程度でビビってんじゃねえよ。あの程度の地獄はな、世界のあちこちに溢れかえってんだ。その一つでしかないんだよアレは——」

「でも、僕は——」

「ティーノがそう涙声になりながらも泥を吐き出しそうになりながらも口を開く。」

「僕には、力がない——」

「ジェイルの口元が歪む。」

「そうだと、お前には力が無い。だから、お前の全てを俺に寄越せ」

「えっ——?」

「俺なら、その地獄もろともぶつ殺してやる。お前が守りたいと叫んだ全てを守ってやる。でも、今のお前ではそんなことは不可能だ。だから、俺に全てを任せてお前は眠れ」

「言外に伝わった。」

「お前に無理な事でも、俺なら出来る。」

「だがら楽になれと、ジェイルは告げていた。」

「その言葉のなんと甘美な事か。」

目の前の男は、全ての苦悩を一手に引き受けてくれると、そう言っているのだ。目の前にぶら下げられた安楽へと繋がるエサ。

今のティーノにはそれが猛毒であろうと、黄金のリンゴのように見えた。

だから、手を差し伸べるジェイルに手を伸ばそうとした。

今すぐにでも、こんな地獄から逃げ出したいと願ったから。

だが、それは予期せぬ妨害を受ける。

「——その必要は無いのですよ」

伸ばしたティーノの手を握っていたのはリインだった。

「リイン……?」

「はい♪」

リインは笑顔でティーノに応えると立ち上がる。

そして、ジェイルに向かって指さした。

「ウチの弟を甘やかさないで下さい! さっ、ティーノしっかりするのですよ!!」

リインはそう言うのと、ティーノの背を力一杯叩いた。

「痛いッ!!」

「痛くて当たり前です! 強く叩いたのですから」

「なんでこんな……、それよりも、なんで飛び出して来たんだ!」

「ティーノが危なかったからですよ！」

「それでも飛び出して良い筈がないだろう!？」

「良いのです。私はお姉ちゃんですから、弟を守るのは当然です!」

「そういう事じゃなくて!!」

ジェイルの目の前で繰り広げられる口論。

それはなんとも下品で、意味がなくて、とても眩しいものであった。

ジェイルはその光景を見て、伸ばしていた手を下げる。

そして、ニヤケ面のまま口を開く。

「そんでどうするんだ。ティーノ・ランスター?」

その声に今の今まで口論をしていたティーノとリインは真剣な顔になり、ジェイルを見た。

互いに固く握りあっている手の内から微かに光が漏れる。

「……やっぱり、止めておくよ」

「それはどうして?」

「だって、カツコ悪いじゃないか。男なのに、楽な方に逃げてばかりで……」

「さつきも言ったが、それが人の本質だ。人はどこまで行っても自己のためにしか動けない欲の袋でしかない」

「分かつてる……。なんて、言えないけど……。これは、僕が決めたことなんだ。……。僕だけの欲望。僕の、ただの我儘だ。それに——」

「それに？」

「甘えてばかりいると、お姉ちゃんに怒られちゃうからね」

テイーノはそう言うと、リインを見た。

リインは満面の笑みで、慈しむ様にテイーノを見ている。

そんな二人を見て、等々ジェイルは笑い出した。

「ククククつ、そうか、そうだな。それも立派な欲望だ。女に情けない姿は見せられないよな？」

ジェイルのその言葉に、リインの頬は一瞬で桜色に染まり声なき声を発する。

だが、テイーノは堂々としていた。

「うん。大切な人の前では強い僕でいたいんだ」

その言葉に等々、リインの頭から湯気が噴き出した。

「ああ……。本当に言い物語を見せてもらったよ。後は、俺が望んでお前が望んで融合機が望んだ結末を用意すればいい。そこに行き着くまでの道順は俺が教えてやる」

ジェイル・スカリエツィは徐に右手を掲げた。

そして、一度世界を叩き起こすかのように指を鳴らす。

次の瞬間、世界が砕けた。

黒く全てを抱いた闇がガラス細工のように砕け落ちていく。

ティーノとリインは見つめる。

世界の終焉を、今と過去の境界を見つめる。

過去に取り残されたジェイルはティーノとリインを見つめていた。

ティーノにはその顔が挑発的な笑みに見えて、そしてリインには自身が知るジェイル・スカリエツテイと同じ人間なのかと疑いたくなるまで、眩しいまでのまるで少年のような笑みに見えた。

闇の欠片に徐々に飲まれるジェイルが思い出したかのように口を開いた。

「ああ、アイツに一言頼む。——おめでとう、俺は間違つてなかった。だから俺は悪くない」

その言葉を聞いて、ティーノは確かに頷いた。

任せておけと——

それくらいの事は僕にも出来ると——

力強く頷いた。

そうして、全ての欠片が抜け落ちた先には、別の地獄が広がっていた。

空を炎が覆い、足元には透き通るまでに澄んだ水面が広がっている。

そして見渡す限りの地獄をたった一つの夕日が炎と水面の中間で照らしていた
その世界の名は原初。

ティーノがティーノとして産声を上げた心象世界。

ティーノの心の奥深くに生まれたこの世の全てであった。

「ここがティーノなのですね……」

いつの間にか向かい合い小さく両手を握りあっていたティーノとリインは微笑み
あっている。

「僕もここにくるのは初めてなんだ。だから、少し恥ずかしいな……」

ティーノがそう言うと、リインは首を左右に振った。

「そんなこと無いです。皆が皆、もっている世界。誰にも明かすことの無いその場所
……、わたしは……私は、嬉しいです！」

リインは微笑む。

その笑顔は夕日に照らされ、輝く。

そんな表情を見ていられなかったティーノは、独白を始めた。

「ねえ……。お姉ちゃん……。？」

「はい……」

「僕は……。僕はね……。怖かったんだ。すごく、怖かったんだ——」

ティーンノの口から漏れ出した後悔の念。

それは止まることを知らない。

「ティアナがね、言ってくれたんだ。僕は、僕のままでいて良いんだって。僕が良いって言ってくれたんだ」

「でもね。僕……知っていたんだ。皆、僕の事をどこかで怖がっているんだってこと……。ううん違う……。皆、僕の事を敵と認識していたんだ」

「目がね……。そう言っているんだ。僕を抱き上げてくれた時も、僕に笑いかけてくれた時も、僕を叱っている時も、いつもいつも瞳の奥底で僕を恐れていた」

「だから僕は出来る限り努力したんだ。僕は敵じゃない、悪い子じゃないってことを知ってほしくて……。つでもダメだった。なにがダメなのか分からないけど、ダメだった」

「ずっと、ずっと考えていた。皆を、僕が守りたい家族にそんな目をさせる僕は何者なのかって、……。でも、心当たりはあつたんだ」

「ジェイル・スカリエツティ——、この名前を聞くと、僕は無性にイライラしてしまうんだ。……。それこそ、殺してしまいたくなる程に」

「だから、僕は調べたんだ。調べようとしたんだ。……。でも、出来なかった」

「どの端末を使っても、無限書庫に行っても、調べることが出来なかった。させてもらえ

なかった」

「だから、僕は聞きに行ったんだ」

「高町なのはに、フェイト・テスタロツサ・ハラオウンに、八神はやてに、——ティアナ・ランスターに……ッ！」

名を上げた瞬間、ティーノの喉は震え、瞳からは滴が止めどなく溢れる。

「みんな……皆、その瞬間に、僕の知らない皆になつていたんだ。一瞬だったかもしれない。でも、僕を見る皆は、僕を敵として見ていたんだ」

「僕は……僕はッ!!怖かったッ! やつと手に入れた温もりを、笑顔を、全てを失うのが怖かった!」

「でも今の僕にはなんでなのかわからない!」

「だから、僕の知らない僕、過去の僕が関係しているんだって、そう考えた」

「だから、ゲンヤさんの奥さんの話しを聞いて、僕は正直有り難かった」

「だって、そこに僕の過去が眠っているって感覚で分かっていたし、ゲンヤさんの奥さんであるクイントさんを救い出すことが出来れば皆の僕を見る目が変わるって、そう思ってたんだ」

「でも……、でも、ダメだよりイン……。僕は……。僕は……。どれだけ、ジェイル・スカリエッティの事を知っても……。どれだけ彼の過去を見て来ても、彼と僕に何があるのか

分からないんだ。なにも——なにも分からないんだ！」

「僕は、どうにかなってしまっそうだ……。怖い、怖いよ……。お姉ちゃん」

ティーノは震える声で全てを出し切った。

顔は涙でぐしゃぐしゃで、叫ぶその姿はお世辞にも良いとは言えない。

それでも、心の全てを開けたティーノの苦悩は、リインが思う以上であった。

リイン自身は、区別したつもりであった。

ジェイルとティーノは別人だと、赤の他人だと、そう裁定を下したと。

だが、違っていたのかも知れない。

自分が知らない間に自分は、ティーノをジェイルとして見て、線引きしていたのかも知れない。

自身すら気づかないその深層を、ティーノには見えていたのかも知れない。

皆、ジェイル・スカリエッティに対してトラウマを抱えている。

そして、絶対悪と断じ——戦った。

その過去を全て無かったことにすることなど、出来はしない。

だが、でも、それとこれは話が別だ。

ジェイル・スカリエッティがしてきたことを許すことは出来ない。

だが、ティーノのこれからを、ジェイルという過去で覆う事は出来ない。

私を含め、皆がそう決めたのだ。

そう決めて、今を生きているのだ。

リインは、ティーンノの両手を引つ張り抱きしめた。

ティーンノの背中に手を回しきつく抱きしめる。

「ティーンノの苦しみも悲しみも、私は少しだけです。理解出来ます」

ティーンノとリインの足元にベルカ式の魔法陣が現れ薄く輝き始める。

「……私も同じです」

「私も、過去にとても多くの人を傷つけました。取り返しのつかない事を多くしました」

「それは私の中で生きる記憶でしかありません。私自身は、その罪を犯した人とは別人

です」

「その人の記憶は確かに私に引き継がれている。私の中でその罪は闇となって生きてい

ます」

「でも、私は決めました。その罪すら私は背負って生きていくのだと、関係が無い赤の他

人だったとしても、それが私の記憶なら、私はそうやって生きていこうと、決めました」

「難しく考える必要は無いのです。その記憶も含めて自分自身でなのです。過去に苦し

みを見出すことは簡単です。でもだからこそ、その頃の私が感じた幸せを噛み締めて今

を生きているのです」

「でも、時にはその闇に負けてしまいそうになってしまいう時があります」

ラインの肩に顔を埋めているティーノが聞き返す。

「負けてしまいそうになったら、どうするの？」

その言葉にラインは微笑み、ティーノの頬にキスをした。

「皆に一杯甘えます。助けてって叫びます」

「誰も助けてくれなかったら……、どうするの？」

「そんな事はありません。誰かがきつと助けに来てくれます。——少なくとも、私は

ティーノを助けに行きます。なにがあっても、どんなことがあっても、絶対に助けます」

ラインがその言葉を発した瞬間、足元の魔法陣を中心に世界が脈動した。

「僕も助けるよ——。なにがあっても、どんなことがあっても、どれだけ傷ついても、

絶対にラインを助けるよ」

脈動が加速する。

足元の水面が震え、天から火の粉が降り出す。

だが、夕日の温かさが、その双方からティーノとラインを守る。

そして僅かな粉雪と黒い羽が魔法陣から溢れ出し、天に向かって舞進む。

ラインとティーノは互いに抱きしめ合っていたのを止める。

黒い羽が舞う世界の中心で、ティーノはラインの瞳を見た。

リインの瞳には、慈愛しかない。

そこに、ティーノに対する恐れや憎しみ、敵対心は無い。その瞳を見て、ティーノの内側に温もりが溢れていく。

何も解決はしていないだろう。

これから、苦しみ抜くのだろう。

だが、その度に、目の前のこの人は自分を助けしてくれる。

そんな確固たる信頼が、生まれていた。

だからこそ、自分もそうであらねばならない。

例え世界を敵に回しても、守り通して見せる。

ティーノとして生を受けてから張り通してきた意地。

それは、その想いは——

何も間違つてなどいない。

リインは笑う。

「それでは、ここから始めましょう」

「……うん、ここから始めよう」

二人は笑い合ひながら、まるでそうなるのが当然かのように声を合せた。

「ティーノ、私を助けて下さい」

「リイン、僕を助けて」

光が二人を包む。

温もりに溢れた光が、産声を上げる。

その光は二人を祝福し、優しい風が吹いた。

暗天が世界を照らし、粉雪が息を白くした。

そこは、どこか知らない世界の丘だった。

見える眼下には町の光が灯る。

一つだけの街灯とそれを守るかのように聳える一本の木。

足元には古代ベルカ式の魔法陣が刻まれている。

その光景はまさに息を飲む程美しく悲しみに溢れていた。

それもそのはずだった。

その光景は、誰かの墓標の記憶なのだから。

初代リインフォース、夜天の書の管制人格、かつて地球と呼ばれる世界の海鳴と言う

町で少女達に悲しみの中から救われた。

その最後の風景なのだから。

雪の絨毯の上に立つ男は、寒さにズボンのポケットに腕を突っ込み、無遠慮に新雪を

踏み荒らし歩を進めた。

それに呼応するかのように、周囲の粉雪が一斉に浮き上がった。

そして、そんな世界にその者はいた。

今必要な最後のピース、足りない力を埋める存在、初代リインフォースがそこに。

「……………こんなところになんの用だ？」

「嫌ね。あのガキ共の心が触れ合った場所に道が出来てたんでね。こうやって、好奇心に身を任せて歩いていただけさ」

「そうか……。存外、貴様も暇な身の様だな、ジェイル・スカリエツティ？」

「まあね。多忙に多忙を重ねて、過労死する寸前だったんだ。たまの息抜きくらい構わないだろう？」

「ふん……。戯言をいうために、ここまで来たわけではあるまい？」

初代リインフォースが銀髪を靡かせジェイルに向き合う。

「話が早くて助かる……。お前の力、それを頂に来了。文句は無いだろ？」

ジェイルのその言葉に、リインフォースは悲し気に瞳を伏せる。

「……………力を貸すことに文句は無い。まさか、私の存在があの子をあそこまで苦しめていたなど、想いもしなかった。この罪をあの子の手でなく自身の手で償うことが出来るなら、その申し出、例えば悪魔の囁きであったとしても握りしめよう」

「その答えを聞いて助かるよ。では、さようなら」

ジェイルが指を鳴らすと、リインフォースは黒い羽の束と化し天に昇って行った。

リインフォースは理解していた。

自身が死ななければならなかった最大の要因、夜天の書の防衛プログラムの再構築並びに、その暴走。

だが、ここにいるのはただの記憶の残滓、リインフォースの本体は防衛プログラム諸共すでに、死んでいる。

さらには、目の前の男の力量と知識が、この世界に足を踏み入れた瞬間に、全ての不安材料を消し去っていた事実。

さらに万が一すら潰すその徹底ぶりは、ジェイルの心を読むことで理解出来た。

そしてだからこそ、そのための犠牲も初代リインフォースは知っている。

だが、初代リインフォースはそのことについてとやかく言うつもりは無い。

何故なら、ジェイル自身も、初代リインフォースと同等の大罪人なのだから。

黒い羽が風に流されたのを見送ったジェイルは、主を失った世界を塗りつぶすかのよう

に歩みを進める。
人口的に作り上げられた仮初の人の息吹を見下ろすために、丘の先に足を向け、眼下の街を見下ろした。

その光の群れは、どうにも好きになれそうにない。

ただ――

「存外、こういったのも悪くないな」

そして、溜息を一つ零す。

「気張れよ。ティーン・ランスター、俺に出来ることはしてやったからな……」

さらに、頭をボリボリと乱暴に掻きむしる。

思いつくのは、過去のひと時、あの時は本当に幸せだった。

そう、今でもあの時の光景は瞼の裏に焼き付いている。

「……おめでとう。君に心からの賛辞を、クイント」

シグナム達は、困惑していた。

嫌、既視感を覚え、だがそんなことはありえないと脳が拒否反応を示し、行動を阻害した。

見上げた先には、すでに蒼天は無く。

今は、夜と見間違えうまでの夜天の天幕が世界を覆っている。

突然の天変地異、偽の聖王すらその事に動くことが出来ずにいた。

嫌違う。

偽の聖王は恐れていた。

無機物でありながら、恐怖していた。

今から生れ落ちる何かに、恐れ戦いていた。

「ハ、これ……」

ヴィータが静かに、だがつかりと口を開いた。

知っていた。

この前触れを——

忘れる訳が無い。

心の奥底で繋がった同胞を忘れる訳が無い。

だが、心は歓喜を叫ぶが脳が冷静に言葉を述べる。

それ即ち、ナハトヴァールの復活を意味しているのだと。

まるで難解な暗号を紐解いたようにそれを理解した守護騎士達は、即座に動こうとする。

何故なら、ナハトヴァールの復活は、八神はやての命運を左右する事象そのものだからだ。

その時、鐘の音が響いた。

その都度は七。

先程の世界終焉の音と違い、今度は祝福の音に他ならない。だから、涙した。

ヴィータも、ザフィーラも、シグナムも皆涙を流した。

そして、これで決着したと確信を得た。

突然の三人の変化に怒りで我を忘れかけていたオルランドも狼狽える。

「ど、どうした?」

その問いに、ヴィータがどこか安堵に似た表情で、涙を拭い言った。

「帰って来たんだよ。アイツが——」

その言葉に、オルランドが疑問を告げようとした時、オルランドは途轍もない寒気を覚えた。

まるで、背筋に剣を突き刺されたかのように、弾け飛ぶようにその発信源に顔を向ける。

そこには、天使がいた。

黒い片翼を羽ばたかせ、祝福の風を全身に浴び、そして顕現した。

誰かが叫んだその名は、世界最強にして最幸の魔道書の名。

「リインフォース!!」

綺麗な青

夜天に天使が顕現した。

聖書に綴られた数多の使徒とは、似て非なる存在。

左側腰辺りから見えるのは、歪なまでに肥大化した片翼で、まるでドレスの様に自身の体を包み込んでいた。

翼の隙間から覗く血のように紅い二つの瞳。

唯一外気に晒されていた右手には、銃口が覗くガントレット、それは紛れもないエテルナシグマの姿だった。

それをオルランドが視認したと同時に偽の聖王は掌を夜天の天使に向けた。

そこから放たれたのは直射砲撃魔法、貫通力のみに特化したその砲撃は寸分の狂い無く夜天の天使を飲み込む。

——かに、思われた。

夜天の天使、初代リインフォースは身動き一つ取はししない。

その必要が無いからだ。

漆黒の翼にぶち当たった砲撃は、翼に接触すると同時に四散する。

その光景に、驚くような素振りを見せる偽の聖王。

それを開戦の合図とするかのように、天使は翼をゆつくりとドレスを脱ぐかのように、はためかせる。

「ああ、この世にくるのもいつ振りか……。死して尚捨てること叶わなかった残滓が、何の因果化こうして幼子達の力を借りて形を得てしまった」

初代リインフォースは、黒翼で空を一撫ですると眼下を見下ろした。

その瞳に射貫かれるようにして、偽の聖王は身構える。

だが、初代リインフォースは眼下を見下ろしながら微笑んだ。

その動作の意味を思考するために偽の聖王は動けずにいた。

だが、次の言葉で思い知る。

「懐かしい顔ぶれだが、君達は本当に変わらないな……」

その声を聞いて、偽の聖王は震えてしまった。

相手の化け物染みた雰囲気とか、得体の知れない人物の登場とか、そういった未知に関しての警戒からの震えではない。

偽の聖王は別段、初代リインフォースを恐れてはいない。

ただ、怒りを覚えた。

自身を、紛れもない、この場で最強である筈の自身を差し置いて、他者を氣遣う。

それも、まるで休日の公園で久しぶりに友人と会った時のような、その視線の中にもまたま写り込んでしまった草木のような。

そう、どうでもいい存在として自身を見ているのだと理解したその時、今まで知らなかった痺れが、偽の聖王の体を震わせた。

それに感応したかのように、世界が震える。

偽の聖王から溢れ出す膨大な魔力の波動が、空気を震わせ世界を恐怖に染める。

そしてやつと、初代リインフォースが視線の中に偽の聖王を捕えた。

偽の聖王は初代リインフォースを見据える。

やつとこちらに気が付いた。

これから、私の邪魔をするであろう貴様を壊す。

そうした考えの下、全身に聖王の鎧を徐々に纏っていく。

初代リインフォースが瞼を閉じた。

これで私の勝ちだ。

偽の聖王が勝利を確信した。

相手である初代リインフォースの今までの行動が諦めから来るものだと考えたからだ。

そもそもの話しだ。

いくら見た目が変わろうとも、相手は先程まで相手にしていた人物と同一なのだ。魔力量その物はそこまで変化していない。

故に自身の鎧を抜くことは出来ず、勝利は揺るがない。

その筈だった。

「エテルナシグマと言ったか……、手を貸して貰えるだろうか？」

「我が友が認めた相手です。十全とはいきませんが、この拳、この弾丸、眼下の敵を撃つために——、共に——」

その声が聞こえたと同時に、偽の聖王は生まれて初めて感じる危機感を知る。

初代リインフォースは瞳を開くと同時に右手を持ち上げる。

掌を上に向け持ち上げられたそれは、丁度偽の聖王が掌に乗る位置まで移動する。

そして一瞬右手の指の一本一本全てに力を行き渡らせるように力む。

その瞬間、偽の聖王の周囲にはステインガーブレイドがその切先を偽の聖王に向け静止していた。

偽の聖王が驚愕に聖王の鎧を纏っていくのを気にも留めず初代リインフォースは、右手を握りしめる。

一斉に放たれたステインガーブレイド、その数は30、たいした魔力を込められてい

ないその剣の群れは、まさに諸刃のそれであった。

それが聖王の鎧を身に纏った偽の聖王に我先にと突き刺さる。

だが偽の聖王は狼狽えはしない。

この程度の剣で貫けるほど、聖王の鎧の名は伊達ではない。

故に慌てない。

だが、それが命取りだった。

偽の聖王の全身の至る所に切先を突き付けるステインガーブレイド、確かにそこに込められた魔力の量自体は極少量だ。

だがしかし、それはすべて次につなげるための一手にしか過ぎない。

初代リインフォースは見つけていた。

くまなく全身の全てを守る聖王の鎧。

だがしかし、所詮は操られた特殊な魔力でしかない。

故に完璧ではなく存在した。

他よりも僅かに薄い個所を、聖王の鎧の綻びが。

偽の聖王が、初代リインフォースの狙いに気が付き意識を向けるまでに2秒。

その時間的猶予は余りにも大きい。

それだけの時間があれば、初代リインフォースは既に決めている。

初代リインフォースは、偽の聖王の背後を瞬時にとると、唯一の綻びであるうなじに向け、拳を叩きつける。

その拳には、アンチ魔力の効力のみを乗せた魔力を纏わせている。

その拳が、まるで針の穴に糸を通すかのように精密に、うなじの一点を殴りつけた。

偽の聖王は後方から無防備に殴り飛ばされたことで、真面に受け身もとることが出来ずに錐揉み回転しながら、吹き飛ばされる。

空中で体制を整えた偽の聖王は、今度はこちらの番だと魔力を足元に込め、まるで跳躍するかのように膝を伸縮させると、一瞬で初代リインフォースに肉薄する。

空気を置き去りにする右ストレートが初代リインフォースに迫る。

だが初代リインフォースはその拳を半身入れることで躲すと、鼻先の位置にて拳を振り抜いている偽の聖王のうなじに向け、踵落としをした。

またしても、真面に防御すら出来ずに大地に吹き飛ばされた偽の聖王は、大地にクレーターを作る。

「ぐっ……ッ!!」

堪らずにオルランドは両手をクロスさせ眼前を守る。

吹きすさぶ砂埃、それは最早砂嵐の域に届く。

圧倒的なまでの力、破壊力、規格外、それを為したのは、一見十代後半にも見える少

女、ティーノ・ランスターの体を借り受け、その力を振るっている。理解した。

オルランド・グランデイスは今し方理解した。

今眼前で繰り広げられている戦い。

片手間の様に見えてしまう余裕を携えた、遠慮の無い無慈悲な力。

それは、その光景は、ティーノ・ランスターの到達点だと。

その技術を力を魔力を、無意識化に呼吸するかのようなその動作を、体得した時、ティーノ・ランスターは至ってしまう。

「私は……」

知らずにオルランドは呟いた。

私は、あそこに至るのだろうか——と

夜空の天幕が劇場を彩る。

そこで演じられた活劇は、神々すら魅了してしまうだろう。

それは、まさしく現代に語られし、神話の戦いだ。

光と闇が闘ぎ合う。

妖精が戯れるかのように、ダンスを踊るかのように、鮮血を散らし、欠片を散らし、懸

命に踊る。

だがしかし、偽の聖王は生まれたばかりの赤子に過ぎず、いくらレリックの魔力貯蔵量から無尽蔵に魔力を搾り取り暴れようが、扱えなければ意味が無い。

対して、リインフォースには記すことすら馬鹿馬鹿しいまでの戦の記憶がある。

それは技術として知識として、活かし続ける。

故に、そこにどれだけだけの壁が聳えていようが、時には砕き、時には飛び越え、時には存在すら抹消してみせよう。

数える度数度、吹き飛ばされた偽の聖王の体は既に存在を保つことすら難しいのか、まるで砂の宝石のようにサラサラと流され細かく砕けていく。

すでに首から上は無く。

腰の半ばまで砕かれ、片腕となろうとも、未だに生に執着するかのように魔力の渦を攻撃に転用させ続ける。

集まる光芒、星の始まりが光なら終わりも光である。

誕生と終焉を併せ持つ魔力の渦が、満身創痍の偽の聖王に集う。

一国どころか一世界を破壊しうる暴虐が集う。

それを彼我距離500メートル離れた空中で見えていたリインフォースは、告げた。

それは過去自身の呪縛を解いて見せた星の輝き、それを打ち破った小さな太陽。

ティーン・ランスタアの自慢の魔法、どれだけ弱体化された輝きであろうと、最強を打ち破ったことに変わりはない。

故に、誇った自慢の魔法。

「……頼めるか？」

「終わりを飾るに相応しく……」

リインフォースとエテルナシグマの会話、それが合図となって、リインフォースは右手を徐に突き出し、腰だめの体制となる。

反動で吹き飛ばされぬ様に、片翼を全開まで開く。

片翼に集うは、夜を終焉に導く太陽の光、戦闘空間に漂う魔力残滓を一面も残すことなく掻き集めていく。

その様は、まるで大きな炎の翼だった。

エテルナシグマが微かに呟く。

「ロードカートリッジ」

シリンドアが回転するのは6度、全ての弾丸を吐き出す。

呼応するかのように掲げられた右拳の前には、高密度の熱。

空間を歪め膨張をしていく太陽。

それを抑え込む様にベルカ式の魔法陣4つが太陽を囲み回転していく。

膨張していく力すら反転させ、小さくより小さく、内部に向け圧縮していく。生まれ出でたのは、太陽が化けた一本の槍。

それはもはや常人が押さえておくことすら叶わぬほどの暴力。

荒れ狂う力を神の手で握りしめるように細く閉じ込める。

偽の聖王の眼前の魔力の塊は、好き勝手に膨張し、もはやそれは一つの星程のサイズとなつている。

リインフォースはそれを見据え、瞳を強くした。

「慈悲を持たぬもの、裁きを逃れぬもの、導き渡す者、その名は無限、その名は世界の外側を流れる川、その名は無限に沸く蛆虫、無慈悲に無感情に尊び胸に抱き道を示せ、タルタルクス」

夜天に一つの道がその姿を顕現した。

それはまるで照準を定めたスコープのように、偽の聖王まで伸び固定し、決して逃さない。

リインフォースはさらに歌う。

「我は記す者、我は読み上げる者、炎道を通りし小さき者の怒り、面を上げよ前を向け、砕いて貫け」

歌い続けるリインフォースに向け、偽の聖王はお構いなしに自身が生み出した輝きの

星を殴りつけた。

それを合図として、衝撃波のような広がりを見せて、闇の世界を埋め尽くし蹂躪し飲み干すように、世界となって押し寄せる光の壁がリインフォースに迫る。

それは触れるモノを一辺も残すことなく吹き飛ばしていく。

まさしく星の如き威圧感と力を持っている。

だが、リインフォースは焦りはしない。

何故なら、この程度の光など、以前に一度受けている。

だから終わらせよう。

こんな茶番は、もう十分だ。

あの哀れな人形を、過去の自分と重ねてしまう姿をした哀れな人形に永久の眠りを与えよう。

だから、その胸に輝きが温もりが残るように、届くように、安らかに救って見せよう、私と同じように——

「ブレイズ・イレイザー!!」

極限まで圧縮された太陽の槍は、導きの天使に誘われ、愚直なまでに突き進む。

その道に残すものは無く。

例え世界が壁となろうとも、その世界諸共溶かし砕き貫いて。

そして、偽の聖王の胸に除くレリックを優しく癒して無に帰し、夜天の空に姿を消した。

それは余りにもあっけなくて、それでいて何だか寂しくて、そんな不思議な想いを抱きながら、守護騎士達とオルランドは佇む。

そんな者達の前に、ラインフォースはゆっくりと舞い降りる。

ラインフォースが優しく微笑む。

その笑みが懐かしくて、謝りたくて、喜びたくて、でもなんて声を掛けたらいいのか分からなくて、皆が皆黙っていた。

そんな中、ラインフォースは優しい笑みのまま空を見上げる。

そこには、この世界本来の夜空が広がっていた。

「ああ、夜空とはこんなにも澄んだ青色をしていたのだな……」

そう感傷に浸るラインフォースに誰も何も返せない。

だが、それすら理解しているラインフォースは自身の豊かな胸に手を当てると少し残念そうに眉をハの字にした。

「この子達を頼む。……少し無理をさせてしまった」

ラインフォースがそう言うのと、途端にラインフォースは光の粒子となって消えていく。

その光景に見覚えのあつたヴァイタ達は、たまらずに手を伸ばした。

そしてその手の中に、光の中から零れ落ちたティーノとリインが眠つたまま包まれた。

ごめんなさい

朝日が眼前で反射した。

流れる無機質な灰色、まだ眠たげな太陽の光がアスファルトを照らし出す。

足元からは、V型4気筒の野太い音が響き渡り、臀部を振動が叩く。

夕日の様な長髪を振り乱し、それすら景色の一部として線にしていたのはティアナ・ランスターであった。

ティアナが走っているのはミッドチルダの中心を縦に伸びる高速道路の上であった。迫りくるトラックの後部、速度は等に制限速度を超えている。

それは目の前に迫るトラックとて同じであった。

時刻は朝の5時を少し過ぎたあたり、道が混みだすのは後30分程してからだ。

それまでにティアナは目的地に到着しなくてはならなかった。

それは、トラックの運転手とて同じこと、故に勤続20年を超すプロのドライバーは、アクセルをベタ踏み、モンスターマシンと化したトラックを巧みに操る。

トラックのドライバーの視線の先には、緩やかな右カーブ、クラッチを瞬間的に踏み

抜きアクセルを数舜ふかし、ギアを下げコーナーに侵入、落ち始めた速度に合わせようと叫びをあげるエンジン、そのご機嫌をとるかのよう、コーナー終盤でアクセルを踏み抜きギアを一段階上げる。

理想的なグリップ走行、トラックのドライバーは予定よりも早めに目的地に辿り着けることを確信し、ほくそ笑む。

その時、トラックのドライバーは気づいた気づいてしまった。

野太いV型4気筒の音を、それは400メートル後方を走っていたスポーツタイプのバイクが醸し出す物だと知り、現実には引き返された。

何故ならその音は、すぐ隣から聞こえて来たのだから。

「馬鹿野郎死にたいのかー」

堪らずトラックのドライバーは叫んだ。

コーナーを抜けていく中で、トラックは物理の法則に従い外側に膨らんでいく。

最悪の事態は避けられない。

トラックのドライバーは最悪を予想し、衝撃に身を強張らせた。

だが、それは杞憂となる。

何故なら、次の瞬間には遂先ほどまで隣を走っていたバイクが一步先を走っていたのだから。

そしてほっとした瞬間には、バイクの姿は点となっていた。

蒼天に輝く太陽が一つ、ベルカ式の庭園が緑を包み光り輝かしていた。

木陰が伸びた先、レンガ造りの道を革靴でリズム刻む様に、ゆつくりとけれど速足で進むのは、八神はやてとシャマルの二人だった。

八神はやてとシャマル、それにティアナが知らせを受けたのはちょうど2時間前の事だった。

今までのことそしてこれからのこと、管理局に対しての牽制に聖王協会に対しての威嚇、何とか話が纏まったところに受けた朗報。

それを聞いた三人の感情は想像に難なく。

まるで自身の事以上にまるで今すぐにでも倒れてしまいそうな顔をしていたティアナに至っては、一人どこかへ駆け出してしまっていたほどであった。

はやてとシャマルが古風な外観に似つかわしくない自動ドアを抜ける。

その先には、天窓から光差し、薬品の臭いを最低限に抑えた白の世界が広がっていた。一歩進める度にアンビアンスの床がレンガとはまた違った音を出す。

そうやって進んだ先には、長く連なったカウンター、そこに座る受付嬢の頭上には面

会者の文字がくるくると回っていた。

さらにその隣では、30分待ちの文字が浮かぶ。

「すみません。面会に来たのですが」

「ご予約は受けておりますでしょうか？」

「いえ……」

「では、こちらにご登録して頂いてお待ちください」

そう言われた八神はやてはそれと無く管理局の制服につけている階級章を受付嬢に見えるようにした。

だが、受付嬢はそれを一瞥すると、長椅子に手を向けた。

「あちらで、お待ちになって下さい」

ここは病院、その受付、ある意味万人に平等なこの場において、いくら時空管理局海上警備部捜査司令であろうとも関係が無いようであった。

大人しく長椅子に腰を下ろした八神はやては、お調子者のように両掌を上げる。

「ここじゃ公務員の力は意味をなさんね？」

それに対してシャマルは、口元に手を当てて静かに笑った。

「フフ、そうですね」

シャマルは気が付いていた。

普段通り、嫌普段以上に冷静に見せている八神はやての指がピクピクしているのを、内心相当焦っているのだろう。

それは当然と言えば、当然だ。

今回の件に関して言えば、八神家も無関係ではないのだから。そうこうしていると、澄んだ声でアナウンスが響いた。

「80番でお待ちの八神はやてさん——」

その声を聞いた瞬間、はやてはバツと立ち上がる。

そうして、抑え気味で、でもどこか大きな声量でこう言った。

「ハイっ、私が八神はやてです！」

はやてとシヤマルが案内された場所、引き戸の扉に小さな縦長の窓が一つ、その隣を少し目で辿れば、目的とした人物達の名があった。

はやては、一度息を吐き出し服装を整えると、今まで煩かった指先を黙らせるように一度力強く握り拳を作った。

そうして、はやてはやつとの事扉を開くことが出来た。

扉を開いた先には、良く見知った者達の顔があった。

「主はやて……」

「うん、お疲れ様や。シグナム」

二人用の病室は思いのほか広く、大人数でも収容出来る作りとなっていた。シンプルな作りをした冷蔵庫に、テレビ、そして机が二つ置かれている。

そんな家具達に囲まれるようにしてベッドが二つ置かれており、そのベッドを囲む形でパイプイスが置かれており、シグナム以外の皆、ヴィータとザフィーラが寝ていた。

オルランドは一足先に、カリムに引き渡されたと聞いている。

はやてが静かに、ヴィータ達を起こさないようにして、ベッドに近づくと、二人は一つのベッドで抱き合うようにして眠っていた。

窓から差し込む太陽の光とそよ風が泳がす白いカーテン、そんな中で眠る二人の姿は、童話の中に出て来そうな程に愛らしくて、そして本当の姉弟のようであった。

はやては今までシグナムが使っていたパイプイスの一つに腰掛けると上半身を乗り出し、眠っている内の一人リインの頬を優しく撫でた。

「まったく、心配させんでや……」

その声は安堵によって涙声が変わっており、リインの温もりが後少しで失われていたかもしれないと言う恐怖心から、はやては確かめるように何度も撫でる。

その感触が心地よかったのか、リインの瞼がゆっくりと開く。

「あ……………う……………はやてちゃん……………」

そう言いながら、目元を擦り上体を起こしたリインにはやては笑いかける。

「おはよう、リイン♪」

「はいです！」

未だに眠たいだろうに、リインは元気に答えた。

そうして、段々と状況を理解していくと、はやてを前にして青い顔になっていく。

「え、えつと……はやてちゃん……その……」

しどろもどろに声を出すリインに対し、はやては笑顔のままリインの後頭部に手を回すと、そのまま抱きしめた。

そうして、さらさらとした髪を撫でながら、万感の想いを乗せながら言った。

「よおやったなりイン。さすが、私の家族や……」

もともとはやては説教をするつもりでいた。

当然の事だ。

いくら多少なりとも腕に自信があるからと言っても、まさかあんな事になるとは思っていなかったにしても、リイン達は余りにも世間を甘く見ていた。

はやてと一緒に数々の凶悪な犯罪を解決に導いてきたと言っても、その全てがスケールの大きすぎる。

それこそ、世界の存亡をかけたような戦いばかりだったのだ。

今回の事件はその観点からであれば、容易い小さな事件となるのだろう。

だが、その小さな事件で命を落とす者が後を絶たないのがこの世界なのだ。

その点を理解していたとしても、年長者として、リインの責任は大きい。

だが、結果としてリインは無事に帰ってくることに成功し、ティーノとオルランドの二人の子供も無事である。

その過程をはやては聞いている。

何も出来なかった時間があったことも知っている。

でも、無事だったのだ。

ちやんと、ケガの一つも無く手元に帰って来てくれたのだ。

それだけで、良かった。

十分だった。

だから、それ以上の言葉を紡ぎはしない。

その代わりに力の限り抱きしめてあげた。

胸の中から、リインの静かな泣き声が聞こえてくる。

その全てでも涙すら、包み込んで見せると、はやてはリインを抱きしめ続けた。

そうこうしている中で、皆が目を覚まし、その光景を温かい瞳で見つめる。

勿論その中にティーノも含まれていた。

それはもう、自分は部外者だからと「ええもん見せてもろた……」みたいな感じで二人を見ていた。

すると、はやてが顔を上げてティイーノを見やる。

「な・に・を・部外者みたいな顔しとんのや」

「ふがあゝ」

はやては、片手を伸ばすとティイーノの鼻を摘まむ。

それが少し痛かったのか、ティイーノの涙腺が少し緩んだ。

だが、それはすぐに終わりを見せた。

「イタイ……」

ティイーノが赤くなった鼻を小さな手で撫でる。

それを見ていたはやては、ティイーノに最後通告をした。

「うちからは、これくらいにしとくけど、ママの方はどうやらなあゝ?」

その言葉にティイーノの肩が一瞬跳ね上がる。

それと同時に、扉の先から、中に聞こえてくるほどの靴音が響き出す。

その靴音が近づいてくる音を合せてティイーノの顔がだんだんと青くなっていく。

そして、扉が勢いよく開かれた。

「ティイーノッ!!」

そこにいたのは、女ではなかった。鬼だった。

体から漏れ出す魔力が髪の毛を逆立たせ、走ってきたのだろう息を切らせ、顔は赤くなっている。

もうその姿を見ただけで、子供は泣き出してしまいそんな姿だった。

鬼と化したティアナは、肩で息をしながら、病室内を見渡す。

その中にはやての姿を見つけると、少しばかり冷静さを取り戻したのか、髪の毛は重みに従うこととなった。

「はやてさん、何故私よりはやく？」

「ティアナってば、一人で飛び出して、バイク乗っていつてまうんやもん。電車つこうた方が早いのに」

はやてにそう言われて、ティアナは自分が冷静でなかったと、片手を顔面にあてて天を仰いだ。

「私の馬鹿……、それよりもティーンノを知りませんか？」

ティアナはそう言いながら、病室内を見渡す。

扉から右側、冷蔵庫のある側にいたヴィータはティアナと視線が合うと、首が吹っ飛びそうな勢いで左右に振る。

続いて、ベッドを見ればはやては楽しそうに笑っており、手を小さく振って知らない

とジエスチャーする。

続いて、ベッドの奥に立っていたザフィーラに視線を向ければ、ザフィーラは咳払いを一つして視線を逸らした。

その視線を辿ると、丁度カーテンがはためく窓の傍に立つシグナムがいた。

シグナムは、ティアナからの視線から逃げることなく真つすぐに視線を合わせる。

ただ少し、油汗をかいていた。

その動作を不審に思ったティアアナが、シグナムの全身を見るために上から下へと視線を下げていくと、見つけてしまった。

仁王立ちするシグナムの後ろ側でシグナムの片足に隠れるようにして震えている仔

羊を――

「ティノオノツ!!」

ズンズンと足元が聞こえてきそうな勢いでティノの下に向かうティアアナの前に否応なくシグナムが壁となる。

「シグナムさん、そこをどいて下さい」

静かにだが明らかにドスノきいた声で、ティアアナが言う。

「……少し落ち着け、ティアナ・ランスター」

そのティアアナが余りにも怖いのか、ついついフルネームで呼んでしまう。

シグナムとて騎士である。

そして今回の一件に関して少なくとも責任がある。

だからこそ、足元で必死に足にしがみ付きながら震えている子供を少しばかり助けてやろうとした。

だが、それが甘かった。

「……………どいて下さい。シグナム副隊長」

「すまない……………」

怒髪天がつきかかり、また浮遊しだした髪の毛に呼応するようにして、シグナムは一歩左側に動いた。

唯一の盾がなくなった御かげで、恐怖から震えが止まらない仔羊の姿が露わになる。

その姿は、もうなんと言ったら良いのか……………。

全身を小刻みに震わし、叱られた犬の耳のように髪の毛から生気が抜けてペタンとしており、青い顔している。

今から拷問が執り行われる亡国の姫のように、震えていたのは、ティアナ・ランスターの息子、ティーノ・ランスターであった。

ティーノの姿を視界に収めたティアナは、口を一度大きく開くと、肺一杯に空気を取り込む。

その姿を見たはやてを含めた守護騎士達は耳を塞ぐ。

そして、病院内に死人も目を覚ますような大音量が響き渡った。

「ふうええええ……ぐすつ……、うえう……」

少し湿気た遊歩道を歩くのは一組の親子であった。

夕日のような長髪を風に靡かせ歩くティアナ・ランスターは、少し重たそうに抱っこしている子供がずれ落ちないように軽くジャンプするようにして抱き直す。

あの後、ティーナは八神家の皆が見ている目の前で大説教を受け、お尻ペンペンまでされた。

本来ティーナからしてみれば、お尻ペンペンくらいいたいでいいして痛くは無いです。

オルランドを含め、様々な強敵と戦う中で少なくとも痛い痛みに対する体制は出来上がっている。

それでも、ティアナにされるお尻ペンペンは、泣き叫びたくなる程に痛い。

その姿を見ていた八神家一同は知らず知らずの内に尻に力を入れていた。

未だに泣き続けるティーナに少しやり過ぎてしまったかなどと考えながら、ティアナは自宅の玄関の扉に鍵を差し込む。

「おかえり〜」

開いた玄関の先には、狼形態のアルフがいた。

靴を脱ぐために、ティアナがティーノを下すとティーノはそそくさと靴を脱ぎ捨て、一目散にアルフの横腹に向けダイブして抱きついた。

その姿を見たアルフは仕方が無いなど溜息を一つつきティアナに目配せすると、ティアナが申し訳なさそうにしていた。

アルフは再度溜息をつき、器用にティーノを背に乗せるとリビングに向け歩みを進めた。

リビングについたアルフは、ティーノをカーペットの上にゴロンと下す。

そうして伏せの体制になったアルフの腹にティーノは再度顔を押し付ける。

ティアナは、諸々の報告を各方面にするために電話をし始めていた。

片手に受話器を持って忙しそうに動き回るティアナを見て、アルフは母親と言う者がどれだけ大変なのかを改めて実感していた。

だからこそ、ずっとぐずり通しているティーノにその事を少しばかり理解してもらわなければと考えた。

それはある種当然の感情だった。

ティーノの初期の教育を行っていたのは、ティアナよりもアルフの方が長い。

だから、アルフには自信があった。

悪い事をしたら、きちんとごめんなさいと言える子に教育しているとの自信が。アルフは待つ。

ぐずりモードに入ったティーンが落ち着くそのタイミングを。

ティーンがぐりぐりと押し付けていた顔の力を緩める。

「ティーン?」

「……なに?」

「ティアナがどうしてあんなに怒っているか分かるかい?」

ティーンが一度頷く。

「一杯、いっっぱい、迷惑をかけて心配させたのも、ちゃんとわかっているかい?」

再度ティーンが頷く。

「なら、行つといで」

アルフはティーンを引つpegすと、鼻先でティーンの背を押した。

ティーンはアルフに押され、たたらを踏む。

そうして、歩み始めたティーンは一步一步静かに、半ばすり足で進む。

それに気が付いたティアナは、作業を一端止め膝を付き視線をティーンに合わせる。

「……あの、あのね」

ティーノはそう言うも、次の言葉が出てこない。・

ティアナは、そんなティーノに対して出来るだけ無表情を崩さないように必死に我慢する。

「勝手に、ティアナに何も言わずに一人で危ないこととして……その……心配させて、ごめんなさい！」

精一杯に頭を下げて声を出してごめんなさいを言ったティーノは、反応が無いのに不安になりながら、恐る恐る顔を上げる。

すると、ティーノの瞳に写ったティアナの表情は予想外であった。

ティアナは怒るでもなく笑うでもなく、泣いていた。

鼻先から耳元まで赤くして、瞳に大粒の涙を貯めて貯めて必死に、涙を零さないように目元に力を入れながら、それでも涙は止めどなく溢れてきて、それが遂には決壊して、まるで子供のように普段の気の強そうな眉をハの字にして、泣いていた。

ティーノはティアナの涙を見てパニックになる。

「ティアナ、ティアナ大丈夫？どこか痛いのか？誰かに虐められたの？」

とうとうティアナは両手を目元に持って行き泣き出した。

「ひつく……ぐすつ……ふうええええ」

オロオロしていたティーノだったが、次の瞬間にはティーノはティアナの頭を抱きし

めていた。

そして優しく頭を撫でる。

「ごめん、ごめんね。心配かけて、本当にごめんなさい。……大丈夫だよ。大丈夫だから泣き止んで、ティアナが泣くと、心が痛いよ。僕はここに居るから、だから泣き止んで」
えぐえぐ泣くティアナを精一杯に抱きしめて慰めるティーノの姿、その姿を見てアルフは呟いた。

「本当に似た物親子アンタ達は……」

毎日

聖王教会の訓練施設、芝生に埋め尽くされた大地を蹴り上げ狩り上げるように右拳を打ち上げる。

拳の先に微かな感触。

それは正確に相手の顎を捕えたからではなく、うまく受け流されたがための感触。ティーノが頭部を守るために腕をクロスさせる。

その中心点に冷たく削るような感触に続き、ハンマーを振り下ろされたかのような衝撃。

衝撃が全身を抜け、芝生を舞い上がらせた。

それを堪えること3秒。

力点をずらし、相手の獲物を振り払うと蹴りを放ち距離を取る。

「相変わらず硬いな」

ティーノが汗を拭い、息を深く吐き出しながら言葉を紡ぐ。

「そういうお前も、技のキレが増しているように思うが？」

対するオルランドも、汗を顎先から垂らし口元を歪めた。

「でも」

「だが」

「勝つのは僕（私）だ！」

オルランドとティーノは互いに飛び出した。

今までと違い、今この時を楽しんでいるかのように笑顔で。

そして、そんな二人を見守る可憐な乙女。

「二人とも、頑張つて」

ほんわかと、まるで向日葵のような声を出すのはアンジェリカ・ゼーゲブレヒト。

彼女は不治の病を完治させることに成功し、今となつては外に出ることも許可されている。

そう、全てがいい方向に進んでいた。

訓練を終えた二人は、アンジェリカと共に昼食のサンドイッチを食べる。

「そう言えば、明日であつたな？」

オルランドがそう会話を切り出した。

「そうだね。午前中にアインハルトとコロナが、午後にはヴィヴィオとミウラさん、その後にはリオとハリー選手の試合だ」

ティーノはそう言いながらも、どこも気にした風もなく、もくもくと卵サンドを頬張る。

そんなティーノを見て、オルランドとアンジェリカは顔を見合わせると、どこか困ったように笑い合った。

「それよりも、確か教会からも選手が出ていただろ？」

ティーノがそう言うのとアンジェリカが教会から支給されたデバイスを触りホログラムを空中に映し出す。

「シスター・シャントテですねー」

アンジェリカがどこか嬉しそうにその選手の事を説明する。

なんでも、シスター・シャツハに教えを請けている選手なんだとか。速さに関してはなかなかのモノらしい。

その説明を受けたティーノはオルランドに視線を移す。

「お前とどつちが強いんだ？」

ティーノのその問いかけにオルランドは肩を窄める。

「戦ったことが無いのでなんともし、ただ彼女の斬撃が私の鎧を抜くことが出来るとは思わないがな」

オルランドにそう言われたティーノは「ふくん」と返すと、また食べることに集中す

る。

「……お前は、興味がないのか？」

最後のひとかけらを口に放り込んだのを見計らって、オルランドはティーノに問いかけた。

その問いに対して、ティーノはゴロンと背を倒し青空を見上げる。

「……別に興味がないわけではない……かな」

「なら——」

「ただ、今の僕に出来ることは何も無いよ。むしろ僕がでしゃばれば、ヴィヴィオ達に対して良くない影響が出ることは確実だ」

そうして、ティーノは不貞腐れた様に言った。

「それに、ただでなくても心配をかけたんだ。僕は大人しくしていた方がいい」

ティーノの言葉を聞いたオルランドとアンジェリカはキョトンとすると、次の瞬間には吹き出す様にして笑った。

「そうだな、そうだろうとも。お前は静かにしていた方がいい」

「もうお兄様、さすがにそれはひどいですわ」

クスクス笑う二人をジト目で睨みつけると、ティーノは鼻を鳴らした。

その日の夜。

ティーノが自宅で晩御飯の片づけをしていた時の事。

一度きりの部屋の中全てに響き渡るようなチャイムの音がした。

「こんな時間に一体誰だろう?」

ティーノが洗い物を途中で切り上げようとしたところ、ティアナが代わりに玄関まで向かう。

そして聞こえて来たのはよく知る3つの声音。

「お邪魔します!おつ、偉いねティーノ!」

そう言つて無駄に元気な高町なのはは、ティーノの頭を撫で回すと、リビングに向かった。

「急にゴメンねティーノ」

フェイト・テスタロッサ・ハラウンは、なのはにより乱された髪の毛を優しく整えようと、土産だろう。ケーキの箱を見せた。

そして最後に――

「……お邪魔します」

どこか元気の無いヴィヴィオが入つて来た。

「ホント、あの時はどうなるかと思つたよ」

「皆さんに心配をかけた罰として、説教とききましたよなのはさん！」

大人組がテーブルをはさみティーノが起こした件で盛り上がっている。

お酒の力もあるのだろう。

どこか楽し気だ。

だが、ティーノは少し居心地が悪かった。

それは当然だ。

悪い事をしたし、迷惑をかけたのも理解している。

それでも怒られて反省して、大切な人の涙までみてしまったのだ。

だからこそ、この話を蒸し返して欲しくは無かった。

ぶすつとしたティーノの頭をフェイトが宥めるように優しく撫でる。

そんな中で、ティーノはヴィヴィオを見た。

イチゴショートケーキをフォークで突いては、小さく溜息を零す。

ティーノがどうしたのかと、いつもなら無駄に絡んでくるのにと、思いながら声をか

けようとした時、ヴィヴィオががばつと顔を起こす。

それにティーノはビクツとしてしまう。

「ねえ、ティーノ？」

ヴィヴィオは、片手でこいこいと手招きする。

ティーノは言われるがまま、フェイトの傍を離れヴィヴィオの隣に腰を下ろした。すると、突然ヴィヴィオがティーノに抱き着いてきた。

ヴィヴィオの突然の行動には慣れ始めて来たが、不意打ちは心臓に悪い。

ティーノが視線で大人達に助けを求めると、皆が笑顔でそしてどこか真剣な眼差しで二人を見ていた。

「どうしたの?」

ティーノが優しくヴィヴィオに語り掛ける。

だが、ヴィヴィオはティーノの肩に顔を押し付け黙ったままだった。

ティーノはそんなヴィヴィオに先を急かすでもなく優しく頭を撫でてやる。

すると、ヴィヴィオは苦し気に少し擦れた声を出した。

「ティーノ……」

「……」

その時、つけっぱなしだったテレビからアナウンサーの声が聞こえて来た。

「それでは、次の選手の話しに映りましょうか。明日の試合は目白押しと言ったところですが、私が今注目しているのは、この選手ミウラ・リナルディ選手です。彼女はなんと言つても、ルーキーでありながら、あのミカヤ・シエベル選手を打破した新星です。いやあ、一度天に昇った星はどこまで輝き続けるのでしょうか? 私は明日が待ちどうし

いですー。」

「ミウラ選手の次の対戦相手ですが、こちらも期待のルーキーですね。ヴィヴィオ選手ですが、私は彼女も十分に活躍出来ると思うのですがどうでしょうか？」

「私が思うに、確かに彼女も期待できますが、今回は相手が悪いと思いますね」

「と、言うとは？」

「ミウラ選手は典型的なインフアイター、対してヴィヴィオ選手はトリツキーな戦法を得意としています。この両者のポテンシャルと言った話をしますと、公開されている資料と今までの試合の結果から見ても、ヴィヴィオ選手は完成の域に達しているミウラ選手の打撃力に体がついていかないのではないかと——」

そんなある種の批評空間と化したワイドショーの音声にヴィヴィオは体を強張らせる。

ティーノはその様子を見て、笑った。

腹を抱えそうな勢いで笑った。

「くつくくく、はは、アツハハハハハハハハハ」

その様子に大人組は目を丸くし、ヴィヴィオは怒りを露わに涙目でティーノを見る。

「はあくはあく……、なんだ、死にそんな顔をしていたからどうしたのかと思っただけ、なんだそういうことか」

「なんだとはなに!? 私は、必死で……怖くてっ!」

笑いを堪えるティーノは、急に真剣な顔を取り戻す。

「じゃあさ。逃げれば良いよ」

「——え?」

「だれもヴィヴィオを止めはしない。止めることなんか出来ない。その道を選んだのは、ヴィヴィオ自身だ。たかが趣味。止めるも続けるもヴィヴィオの自由だ」

「……」

ヴィヴィオの瞳に集う涙が零れ落ちる。

ティーノにだって理解出来ていた。

今、ヴィヴィオが立ち向かっているモノ。

その正体。

それは周囲の曇り無き瞳。

様々な人間に期待されている。

様々な人間に嫉妬されている。

たかだか10歳の少女に、それらは猛毒となった。

子供であるが故にそこまで半ば流されるように、このストライクアーツの世界に入り様々な出会いを経てその流れにうまく乗れ出した。

そんな中で同じくルーキーであり、顔見知りでもあるミウラとの試合。

しかもミウラは最高戦績都市本戦3位の猛者を退けている。

ある種実力が拮抗した選手とうまくバッティングした運がよかったヴィヴィオとは違い、その進化は目を見張るものがあつた。

世間でもそれは変わらず、皆が皆ヴィヴィオの事をよく知らない者達は、負けることが確定しているかのような言葉遣いに氣遣い。

それらは、ヴィヴィオの練習の日々と自信に罅を入れるのに十分だった。

だから逃げてても良いとティーノは言つた。

それは優しさから来る言葉。

そして、ヴィヴィオが負けるから逃げろと言つているのでは無い事もヴィヴィオは理解している。

だが怖い。

意気揚々とリングに上がり瞬殺されてしまい、やつぱり……、なんて思われるのが怖い。

だが逃げたくない。

好きなのだ。ストライク・アーツが、だから辞めたくない。

その思いがヴィヴィオの内部をぐちゃぐちゃに掻き混ぜる。

頭の中が白一色に塗りつぶされていく。

その時、暖かな感触が広がりを見せた。

白一色だった世界に色が生まれていく。

ヴィヴィオの歪んだ視界が戻ると、鼻先がぶつかりそうな距離にティーノの顔があった。

「ハッ——ッ——!!」

ヴィヴィオは羞恥に顔を赤くし逃げようとした。

だが、それをティーノは許可しない。

抱きしめた腕にさらに力を籠める。

「……気にすんな」

ティーノのその言葉がすんなりと心に響いた。

「他人の声とか視線とか、全部が全部を雑音と受け流せ——。僕が視ていてあげるから、僕が応援するから、だから……ヴィヴィオも僕だけを視て、僕の声だけを聴けば良

い。僕は——僕だけは、この先ずっと、ヴィヴィオのファンでいるから」

その声はなんと甘美な事か。

潰れかけた女にとって甘い毒以外のなんでもない。

でも、そんな言葉を弟に言わせなければならぬ程に、姉の自分はダメになっていた

のだろう。

ヴィヴィオは思い出す。

これまでの努力の日々を、何故強くなりたいと思ったのかを、それは他者から認められるためではない。

断じて違う。

だから――。

「ありがとう。ティーノ……」

ヴィヴィオは静かにティーノから離れる。

その顔は先程までと違い、憑き物が落ちたかのように晴れ晴れとした。

普段のヴィヴィオだった。

そして勿論、普段のヴィヴィオに戻ったのなら、こうなる。

「ところで、お姉ちゃん以外にそんな事言っていないよね？」

笑顔でそう言ったヴィヴィオにティーノはキョトンとして答えた。

「いんや。そんなことないよ？」

途端にヴィヴィオから黒い何か吹き上がる。

これはまずい……。

ティーノは即座に立ち上がり逃げようとした。

だが、それは姉が許さない。

「そんな子に育てた覚えはありませんッ!!」

ヴィヴィオはティーノに飛び掛かり普段通り無茶苦茶にしていく。

「や、やん……やめてエ〜〜」

ティーノの夢げな声がりびんぐに響いた。

そんな様子を見ていた大人達。

彼女達は微かに頬を赤くしていた。

そして、なのははティアナに言った。

「ねえ、ティアナ?」

「……はい、なのはさん」

「私は、将来ティーノが凄い大人になると確信したの」

「……すみません」

インターミドル3回戦

響き渡る歓声、もはや怒号の域と化した音の暴力が光の先から漏れる。

一步、足を進めると汗が背中を伝って背部を撫でる。

また一步踏み出す。

蘇るのは、力が欲しくなった理由。

いつも、……いつも守られる側だった。

いつだって自分は泣いてばかりだった。

泣いていればだれかが助けに来てくれた。

手を差し伸べてくれた。

そんな毎日を過ごして、そんな自分が嫌いになりそうで、だから強くなりたかった。
強く。

大切な皆を守れる自分であるために、自分を自分が守れるように――。

だけど、いつしか私は格闘技が好きになっていった。

きっかけなんてなんだったかなんて覚えてない。

ただ、ノーヴェ達と強くなっていくのを実感していくうちにそう思う様になつて
た。

だから、だからこそ、今日は勝つ。

勝つて胸を張つて先に進む。

あの子の様に――。

「いくよ。クリス！」

セイクリッド・ハート。

セットアップ!!

ドーム状の試合会場。

その観客席。

リングを見下ろす形で作られた椅子の群れの中、人で込み合う中で一際そわそわした
人達がいた。

「ああ、どうしよう。私の方が緊張してきた」

「ええー!?!」

「今からそんなんじゃないよもたへんよ?」

フェイト、なのは、はやての三人がリングに上がるヴィヴィオとミウラを見て、そわ

そわしだす。

そして、その中でも一際拳動不審な行動をとるフェイトの膝の上にはティーンが座っていた。

心臓の早鐘を沈めるために、フェイトは体の良いティーンをきつく抱きしめる。

ティーンはそんなフェイトの腕をなんとかして振りほどこうと必死だ。

「ほら、おいで♪」

そんなフェイトとティーンの様子を見かねたはやてが腕を広げると、ティーンはするりとフェイトから逃れ、はやての膝の上に移動する。

そしてはやては、ティーンの首元から両手を伸ばし胸の前で交差させ抱えるように抱っこする。

ティーンもはやての抱っこの方が良かったのか、嫌な顔をせずに大人しくしていた。

「ああん……ティーン……」

フェイトが悲し気な声を上げるが、ティーンはプイッと顔を逸らした。

顔を逸らした先で、ティーンはリングを見つめる。

強打者として、収束系蹴打を得意とし、並み居る強敵を一撃の下に沈めて来たミウラ・

リナルディ。

反対側のリング上。

ノーヴェと軽く言葉を交わすヴィヴィオは、技巧派として名を売り、カウンタートヒッターとしてこの場にいる。

強打対技巧、格闘技戦においてこの二つは永遠のライバルと呼べる。

世界の頂点達の話しよう。

彼らは、人を変え歴史を変え、戦い続け、頂点を奪い合う。

強打には、研究しつくされた技巧で完封し、技巧には単純な力で小細工を捻じ伏せる。

ヴィヴィオとミウラこの二人に、これら世界の頂点に立つ者達と同じことをしろと言つても土台無理な話だ。

だが、だからこそ、今二人は同じ目線で同じ位置にいる。

故に、二人に壁は無く。

二人の勝敗を占うことは不可能。

そして、勝利の美酒を味わう権利は、運と意地、この二点に集約される。

ティーンはヴィヴィオを見つめ呟いた。

「……頑張れ、お姉ちゃん」

ヴィヴィオとミウラの戦いは、終盤を迎えようとしていた。

どちらも一歩も引かず、己のもてる力を全て出し合つて殴り合う。

それは、女の子がして良いようなことでは無いのかもしれない。

ただ彼女達は笑顔だった。

楽し気に、全力を出し合って向かい合うその時間が楽しくて仕方が無いと言った風であった。

だからこそ、どれだけ悲惨に見えようが、どれだけ派手であろうが、観客達に嫌悪感
は浮かんでこない。

皆が皆精一杯に頑張る人を見ることが好きなのだから。

「ここで決めさせていただきます!!」

ミウラが叫ぶと両手、両足の籠手並びに脛あてが光り輝く。

「せいッ!」

気合一閃、地面を踏み叩くと今まで貯めに貯めた魔力の波動が会場全体を揺らす。

その様が余りにも凄かったからか、実況者が即座に注意喚起を行う。

「リング内の基準魔力値オーバー、リング外周防護、フィールドの強度をエマージェン
シーレベルに強化します。セコンドおよびレフェリーは衝撃余波に注意してください」

実況者がそう言うのと、エテルナシグマが心配そうにティーノに念話を飛ばす。

『マイフレンド……』

『大丈夫だよ。ヴィヴィオを信じよう……』

ミウラが飛び出し、会場を揺らす程の衝撃を生み出した蹴りを拳を、ヴィヴィオに叩

きつける。

だが、ヴィヴィオもうまくその衝撃をいなし、地道にカウンターを決める。

一発入れれば終わり、一発入れなければ終わり。

両者の緊張が最高潮に達していく。

先に飛び出したのは、ミウラだった。

ミウラは瞬間的にヴィヴィオに肉薄すると、飛び蹴りをする。

しかし、ヴィヴィオには管理局のエース・オブ・エースと鍛え上げた眼がある。

ギリギリのところまでミウラの蹴りを躲す。

ミウラの脛がヴィヴィオの頭頂部の髪の毛数本を斬り飛ばす。

蹴りの衝撃が、空を割きリングを削る。

ミウラが驚愕に目を見開き、しかしそれも一瞬に次の手に届かすために、着地と同時

に全身の筋肉を無理矢理に重力に逆らわす。

体の中の腱が何本か千切れた音がした。

だが、終わりたくない。

その想いで顔を上げた時、影が差した。

「アクセルスマッシュッ!!」

飛び出していたヴィヴィオが右拳をミウラの頬に叩きつける。

押し付けられた拳が、小さな魔力爆発を起こし、肉が削げ落ちるかのような激痛が走り、手放しかけた意識が強制的に呼び起こされる。

ヴィヴィオもミウラに蹴られ殴られ続けた腹部がエミユレートの基準を超えているのを理解する。

内臓が脈打ち、全身が神経に包まれた心臓に化けたかのような感觸。

触れる風すら痛く、痛みに負けないように食いしばった歯が音を出す。

だが、突き出した腕を引きはしない。

否、さらに突き出す。

「はああああああ!!」

そして、突き出した拳がミウラの頬を捕えながら地に降ろさないと爆ぜ続ける。

だが、勝利の女神が告げた。

今、勝つのはアナタではないと――。

「ツ!!」

ヴィヴィオの体が一瞬ブレる。

それは踏み出した足元に存在したリングの窪みが原因。

遂先ほど、ミウラが生み出した障害。

それがヴィヴィオに牙を向く。

ヴィヴィオが態勢を崩した一瞬、瞬きするほどの一瞬で、ミウラはヴィヴィオの拳から逃れる。

そして、待ちに待った大地にしつかりと両足をつけると大地の力を奪うかのように足元から頭頂部に向け力を逆流させる。

「ハっ!!」

飛び上がったミウラが構えを作る。

ヴィヴィオは、その動作に防御しようとした。

だが、ヴィヴィオの体は限界に来ていた。

先程のアクセルスマツシュ、これが決まっていれば終わっていた。

終わらせることが出来た。

だが、現実は何も終わっていない。

故に、体は言うことを聞かず。

腕が上がらない。

その間にミウラが必墜の一撃を放った。

「天衝星煌刃!!」

ミウラの渾身の一撃がヴィヴィオの腹部を捕え、ヴィヴィオは吹き飛ばされる。

その姿は最早まともに受け身もとることが出来ないのか、ただ自然に流されるように

リング外の壁に向かう。

ヴィヴィオのその異変に気が付いた者達は、最悪を回避しようとヴィヴィオの下に向かおうとする。

だが、突然の事だったため、また準備しきれていなかったため、体が即座に動かない。後、数メートルでヴィヴィオが壁と無防備なままぶつかってしまふ。

だがその時、誰も予期していなかったことが起こる。

ヴィヴィオと壁の隙間に水の膜が張られ、衝撃を殺すと爆ぜる。

まるで豪雨のように降り注ぐ水、リングの外周防壁が破られたため降り注ぐガラスのよう反射した防壁の欠片達。

熱した体に水が降り注ぎ、全身の熱を奪い去っていく。

その包まれているような感覚が心地よくてヴィヴィオは目を覚ました。

「……ティーノ？」

ヴィヴィオの瞳に写ったのは、夜闇を思わせる紫色の髪に、月のような黄金の瞳だった。

奪われた熱を別種の熱で代替えるように、頬に添えられた掌から温かさが伝わる。

「頑張ったね……」

ヴィヴィオはその声に導かれるようにして、眠りについた。

アリシア

会場は静けさに支配されていた。

皆が皆、リング外の光景を目にしてその動きを止めてしまう。

大人の姿に変身したヴィヴィオは、一人の少年に抱かれていた。

本来なら不可能な筈のお姫様抱っこ。

少年は、光り輝く欠片の中、静かにヴィヴィオを抱きながら地面に足を下す。

そうして、今度はヴィヴィオを少しきつめに抱きしめると、ヴィヴィオの体を紅い光が覆っていく。

それは、魔力の補充と身体疲労の回復であった。

ヴィヴィオは、苦し気な表情を次第に和らげていく。

その黙々と行われていく光景が、余りにも絵になり過ぎていて、そして美しかった。

そんな中、初めに正気に戻ったのは実況者だった。

「はっ!! すみません、私正直見惚れておりました。ヴィヴィオ選手ですが、様態が心配されますが、突然の闇の王子様の出現により、心配は杞憂なものとなったようです。おや、

ドクターとセコンドがヴィヴィオさんの下に向かいます。ドクターの様子を見る限り大事にはなっていないようですが、ちよつと状況がわかりません。リングサイド音声入りますか？」

実況者の声が響く中、ヴィヴィオのセコンドとしてついていたノーヴェとウエンディがヴィヴィオの下に駆け付ける。

「ティーノ！ヴィヴィオの様子は!？」

ノーヴェがそう問うと、ティーノは人差し指を立てて口元に持ってきた。

その動作にノーヴェは口を噤む。

すると、ヴィヴィオの中からクリスが姿を現した。

クリスはしゅんとする。

ティーノはそんなクリスの頭を撫でると、微笑んだ。

担架が運ばれてくる。

念のためにと緊急医療室に運ぶと実況者が言っていた。

ティーノは最後の祈りの様に、ヴィヴィオの額に自分の額を押し付ける。

一際大きな魔力の光が二人を包みこみ、ヴィヴィオは大人の姿から子供の姿となつて

そこにいた。

子供の姿となつたヴィヴィオは手際よく担架に乗せられ運ばれていく。

ティーノもその後続いた。

医療室には、なのはをはじめとした大人達が集まっていた。

そんな中でイスに座りヴィヴィオの様子を見ていたシヤマルがヴィヴィオの様態は深刻な事態ではないことをなのは達に告げた。

ほっと、息を吐き出すなのは達、そんな様子を見ていたシヤマルは上品に笑いながら、ヴィヴィオの寝るベッドの傍にいたティーノの頭を撫でる。

「優秀な魔導士さんが適切な治療をした御かげね♪」

そして皆が笑顔でティーノを見た。

ティーノはそれが恥ずかしかったのか、顔を俯かせる。

すると、両脇に手を入れられ持ち上げられた。

「うわっ！」

「ありがとう〜!!」

抱き上げた人物はなのはであった。

なのはは、ティーノを全力で抱きしめる。

ティーノはとても苦しそうだ。

だが、なのははそんなことなどお構いなしにティーノを抱きしめた。

いつもなら嫌がるだけのティーノであったが、なのはの抱きしめが余りにも苦しかったのか、もがき脱出すると、トイレと叫び病室を後にした。

トイレに向かうティーノは、会場内の廊下を歩く。

「はあ、負けてしまったな……」

思い出すのはヴィヴィオの負け姿。

立派に戦った。

後少し、後少し何かがあればヴィヴィオは勝っていた。

それほどまでに、今回の試合は接戦だった。

だが、ティーノは知っている。

ここ一番と決めて、絶対に負けないと誓って、それでも届かなかった時、その時の苦しみを――。

ただティーノは自分とは違いヴィヴィオは弱くないと思っている。

この敗北すら糧としさらに飛翔すると、確信している。

だからこそ、ティーノはヴィヴィオの敗北をそこまで重く見ないことにした。

自分を変な慰めをする方が返ってヴィヴィオの傷を広げる結果になると結論付ける。

「よし」

ティーノが今後の方針を考え、廊下を歩いていると。それは突然起こった。「な……、く……」

それは突然の目眩、突然の不快感。

突如として現れたその症状に身に覚えがあつた。

そう、それはあの地獄——。

記憶の中の地獄を見た時と同じ——。

「ようやく、会えましたね……」

その声は、突如として聞こえた。

耳の中を通り鼓膜をくすぶつたその声は、どこか懐かしくて、そして——

酷く罪悪感を覚えた。

「き……きみ、は……？」

ティーノの目の前に現れたのは、なんの変哲もないただの少女だった。

くすんだ金髪と、少し切れ長の目、顔立ちは整っており、立ち姿も凛とし様になっている。

歳は、自分と同じくらいだろうか？

その少女は苦しむティーノの眼前までくると、くすくすと笑った。

「なんで苦しそうにしているのかしら？失礼だと思わない？」

少女はそう言うのと、ティーノの髪の毛を掴み上げる。

「ぐあ……」

「下ばかり見ていないでその顔を見せてよ」

ティーノと少女の瞳が重なる。

深い緑色をした瞳と金色の瞳が交わる。

視たくない――

見たくない――

「僕を見るなッ!!」

ティーノは怒りに身を任せる様に体内の魔力を爆発させる。

紅い風が廊下に吹き荒れた。

だがそれでも少女は動じずティーノを蹴り飛ばす。

「かはー!」

ティーノは背中から壁に叩きつけられ肺の中の空気が漏れ出す。

それと同時に魔力の風は収まる。

壁を背に座り込むティーノは歪む視界を無理矢理正常に戻す。

すると、先程までの少女の瞳は自身と同じ金色となっていると知った。

「君は……君はなんだ!」

半狂乱になったかのようにティーノが叫ぶと少女は不気味に口元を歪める。

「私？私の名前はドウエ、二番目の娘、あなたの家族よ。……お父様？」

その声で名前を聞いた瞬間に、ティーノの中である感情が駆け巡る。

それはよく知っているモノで、とても大切なモノだ。

そして、ドウエの名にどこか懐かしさがこみあげてくる。

聞いた事があった。

嫌、違う。

知っているのだ。

自分は、自分の中の私が知っているのだ。

その名を――。

だからこそ、認めたくなかった。

だって、今感じた感情は、他でもない。

ティアナにしか向けない、たった一つの愛なのだから。

「びつくりした？そりやそうよね。でもお生憎様、私は生き返ったの、お父様？」

「……呼ぶな」

渦巻く

感情がとぐろ巻く

胸が締め付けられ、感じたことの無い喪失感と怠惰感と怒りが全身を埋め尽くす。
だめだ——

コイツの声をこれ以上聞いていると——

ティーノの瞳の奥がチリチリと回り出す。

歯車が重なり合い、錆びを落とすかのようにぎこちなくゆつくりと、回り出す。

歯車の回転に合わせて、足元にテンプレートが生まれる。

歯車の形をしたそれは、瞳の歯車と違い、今のティーノの感情を表すように高速で回る。

「ふふっ……、素敵よ。お父様」

僕が僕でなくなる——

「呼ぶな……、僕を……、家族と呼ぶなああ!!」

ティーノはなりふり構わず。

相手が無防備で有るにも関わらず殴りかかる。

だが、ティーノが付き出した右拳は簡単に交わされ、逆に掴まれ床に叩きつけられた。

ティーノは床に叩きつけられるも立ち上がるうとするが、その動作はピタリととまる。
る。

ティーノの瞳数ミリの位置にドウエの右手に装着された爪型のデバイスが付きつ

けられていたからだ。

「——ッ」

動きを止めたドゥーエは、つまらなそうに溜息を零す。

「はあ……。この調子じゃ、ダメね」

ドゥーエはそう言うのと、片手でティーノを持ち上げる。

「今のお父様は弱すぎる。そんなんじや、そんな力じや、死んでしまう。だから——」
ドゥーエはそう言うのと、悲し気に瞳を揺らし、ティーノの懐から待機状態のエテルナシグマを取り出す。

そして、エテルナシグマを緑色の魔力光が包み込んでいく。

「やめ……っ」

ティーノが止める様になんとか空気を吐き出すが、ドゥーエはそんなことなど気にもしない。

そして、魔力光が収まるとティーノを解放した。

「……そこにアナタの助けを待ってる子がいるわ。助けなさい、そして……強くなって」

ドゥーエがそう言った瞬間、稲妻が駆け巡った。

「……あら、これはこれは、お久しぶり。——機動六課」

「ふうー……、あなたを傷害事件の容疑で現行犯逮捕します」

そこにいたのはバリアジャケットに身を包んだフェイトだった。

大鎌の形をしたデバイス、バルディツシュをドウエの首元に翳し、未だに体から微かに放電させながら見下ろす。

「やつぱり、オーバースランクの魔導士は、行動が早いわね」

ドウエが指先をピクリと動かす。

すると、ドウエの足元から外界と内界を隔絶するかのようになり、転移魔法陣が浮かび上がる。

それを見たフェイトは、即座にバルディツシュに命令し、転送先の特定をさせようとする。

「無駄よ。そんな旧型機で分析出来る程、私の性能は悪くないの。……それじゃあね」
「ツ待ちなさい!!」

フェイトが叫ぶがドウエの姿はそこに無かった。

「バルディツシュ?」

「ロストしました」

「そう……」

フェイトはそう言うと、蹲るティーノに手を伸ばす。

「大丈夫、ティーノ?」

ティーノはフェイトの手を取ると、咳き込みながら立ち上がる。

そして、フェイトが先程の少女のことをティーノに聞こうとした時、ティーノは慌ててエテルナシグマを取り出した。

「大丈夫……?」

その問いにエテルナシグマが応える。

「大丈夫です。それよりも、マイフレンド……」

エテルナシグマはそう言うと、ティーノの眼前にホログラムを映し出した。

そしてそこに映されていたモノを見たティーノは、訳が分からないと頭を掻く。

それを不思議に思ったフェイトがその映像を除き込む。

その瞬間、フェイトの瞳孔は、開かれた。

フェイトは震える唇と指先を押さえつける様に、強引にホログラムに両手を伸ばす。

だが当然、触れられる筈がない。

空を切る両手を何度も何度も、馬鹿の一つ覚えのように繰り返す。

そして、先程のティーノのように膝から崩れ落ちる。

その表情は、信じられない。

信じたくない、絶望をありありと乗せていた。

そして、震える唇が持ち上げられると、その名を呟いた。

忘れることが出来ない。

大切な、本当に大切な、もうひとりの自分——。

一度しか会うことが出来なかった、最愛の姉——。

「……アリシア」

ホログラムに映し出されていたのは、生体ポッドに浮かぶ一人の少女。

肌と髪は水面に揺れ、光が乱反射しているためか。

どこか血色がよくないように見える。

だが、その少女に見覚えがあった。

それは当然だ。

ティーノはその姿を無限書庫の映像データでよく見ていた。

その姿は、幼い頃のフェイトにそっくりだった。

ティーノは突然のフェイトの行動に驚く。

だが、その元凶である映像を見て眉を寄せた。

紡いでいたのだ。

そして、ドゥーエという少女の言った通りだった。

その少女は生体ポッドの中で薬液に包まれながら、小さな口を小さく懸命に動かしていた。

瞳は閉じている。

故に眠っているのだろう。

だが、少女は求めていた。

助けて、と――

だから安心させるためなのだろう。

届くはずがないのに、ティーノは呟いた。

「――アリシア」

ティーノがそう少女の名を呟いた瞬間、突然の衝撃がティーノを襲う。

「がはっ――」

またか、とティーノは思考する。

背中には冷たい壁。

胸倉をつかむ手は、下方から。

なら、誰がしているのかは容易に想像できる。

「フェイト……フェイト……さん」

ティーノを壁に押し付けていたのはフェイトだった。

床に落とされたバルディッシュは懸命にフェイトの名を呼び正気に戻そうとしている。

だが、フェイトは元に戻らない。

フェイトはティーンを睨みつける。

「お前は何を知っているツ!? 何故アリシアがここにいる! 何故、お前がアリシアの名をツ——、これはなんだ、なんなんだツ!! 答えるジエイル・スカリエツティツ!!」

ティーンは見つめる。

フェイトを、その顔を。

フェイトの瞳が物語っていた。

お前は敵だと——

絶対悪だと——

その瞳をティーンは知っていた。

始めてフェイトと出会った時、その時の瞳の色だった。

だが、今は違う。

その時とは、状況が違い過ぎている。

フェイトは泣いていたのだ。

普段の優しい、太陽のような微笑みは消え、暗雲のような憎しみで睨みつけて来た。たととしても。

その瞳が、お前は悪だと告げて来ていたとしても——

フェイトは――

泣いていたのだ。

だから、ティーノは弱々しく両手を上げて、酸素が枯渇し始めた脳を無理矢理働かせ、霞む視界を正常に正し、痛みに閉じかけた瞼をこじ開け。

真つすぐに、ただ真つすぐにフェイトの瞳を見る。

「――ッ!？」

その瞬間、フェイトは自分が何をしているのかと冷静になる。

脳が一気に冷静になったために、心が底なし沼に嵌まるように、ゆっくりと冷たく沈んでいく。

そして、茫然としたフェイトが胸倉を掴む手の力を弱めた瞬間、フェイトの視界は額への微かな痛みと共に真暗になった。

沈み込む心に、暖かな音が響く。

トクン――

トクン――

と、力強くも温かい音が、優しい音色がフェイトの心を満たしていく。

そしてフェイトは気が付いた。

自分はティーノに抱きしめられていると。

「大丈夫だよ」

暗闇に優しい声が聞こえた。

「大丈夫……、フェイトとアリシアって子に何かあるのかとか、なんで今になってとか、なにも分からないけど……それでも、大丈夫」

フェイトの後頭部を小さな温もりが動く。

それはティーノが撫でているからだ。

まるで、父が幼子にするように優しく、けれどどこか力強く、想いを伝えるために撫でる。

フェイトは、まるで少女のように小さく震えながら、顔を上げる。

そこには、見たことも無い父の顔があったような気がした。

ティーノは、精一杯の笑顔で、安心させてあげるために、痛みに脂汗を出しながらも、それでも言い切った。

「絶対に僕が助け出して見せる——。正義だとか悪党だとか関係なく、フェイトもアリシアも、絶対に僕が笑顔にして見せる。——だから大丈夫だよ」

そう言って笑うティーノを見上げ、フェイトは何も考えることが出来なくなつた。

だから、いつ以来だろう。

本気で、顔をくしゃくしゃにして、ティーノの胸に顔を押し付けて泣き叫んだ。

かつこいい僕

きつと君も僕もこの先は虚無だと知っている。

それでも、僕はここにいて、ここから一步を踏み出して次のステップを踏むと君は知っている。

そう出来上がっているのだから

僕達は――

あれ以降、僕の動きは速く、そして皆が迅速で協力的だった。

生体ポッドに眠る小さな女の子、その子の名をアリシアと言ひ。

フェイト・テスタロツサ・ハラオウンの掛け替えのない家族、まだフェイト・テスタロツサだった頃の忘れ形見は、生体ポッド事運び出され今は、時空管理局元機動六課隊舎で目覚めの時を待っていた。

ドゥーエと名乗った少女、そして逃げ出したナンバーズ達、それと僕自身の事……。
なにも解決などしていない。

それでも、前に進む。

それしか、道を知らない。

元機動六課の隊舎内のエントランスホール。

海の潮の香を背に、自動ドアを潜り姿を見せたのは、ティアナとティーノであった。

ティアナの顔は固い。

すべて、ティーノから聞いていた。

アリシアと言う少女の事、その子を救う術が提示され、それが罫であるかもしれない事。

今回、時空管理局で調べ上げた結果、そしてエテルナシグマに残されていたデータから検証して、アリシアを救いだすためには、彼女の内部、彼女の夢の世界に赴き、彼女自身に問いかけ自力で目覚めさせなければならぬと言ったことが分かった。

ならば後はどうやってアリシアの中に入るかと言うところだが、その問題を解決させたのが、機動六課に所属したこともある技師でえあつた。

「お久しぶりです。アテンザさん……」

ティアナが目の前に現れた人物に向け、頭を下げた。

「いいよいいよ、気にしないで」

手を目の前で数度振った人物。

本局第4部技術主任のマリエル・アテンザは、チラリと視線を移動させる。その視線に気づいたティーンが一步前に踏み出した。

「よろしくお願ひします！」

元氣よく、どこか覚悟を決めた顔をした少年。

ティーン・ランスターを前にしてマリエルは固まってしまう。

だが、それも数舜でマリエルはすぐに持ち直した。

そして三人は機動六課隊舎の中を歩く。

三人が通された先は、食堂だった。

急遽用意されたのだろう。

磨かれたばかりのイスとテーブルが並べられていた。

ティアナとティーン以外の人物はすでに揃っていた。

高町親子、フェイト一家、八神一家、ナカジマ一家、ユーノ、空中にはホログラムが

浮かび上がりリンディとクロノの姿もあった。

ティーンはその顔触れに、一人「おおく……」と声を上げる。

ティーンが皆の輪の中に入ると、リンとヴィヴィオが近づいてきた。

「ティーンは本当に話題に事欠かないですね……」

「応援に来てくれたのに負けちゃってごめんね……。はあ、感傷に浸りたかったのに、なのはママに話を聞いてびっくりしちゃったよ」

「まあ、こればかりは体質なのかな？」

ティーンとリインとヴィヴィオ、気心知れた三人は、いつものように会話を楽しむ。「ちよつと良いか？」

ティーン達が会話をしていると、頭上から声がした。

ティーンがそちらに振り返ると、そこにはゲンヤ・ナカジマを始め、スバルにギンガ、そして、クイントがいた。

クイントの姿を見たティーンが、慈しむように微笑むと、ゲンヤは地面に頭を付きそ
うな勢いで頭を下げた。

それにつられるようにして、ナカジマ一家の面々も頭を下げる。

「ありがとう……。こんなありふれた感謝しか出来ねえが、言わせてくれ……。お前の、お前達のおかげで、クイントともう一度会うことが出来た。……本当にありがとう」

頭を下げたまま動かないゲンヤ達、皆がその姿を見たまま声を出すことが出来ない。

だが、そんな静寂が支配した世界であつてもティーンは動いた。

ティーンはゲンヤの前に移動すると、ちよんちよんとゲンヤの頭を指でつついた。

「……？」

ゲンヤが不思議そうな顔をして、顔を上げると、ティーノは内緒話をするために、片手で口元を隠し、ゲンヤの耳元に顔を寄せる。

「今度、お酒を飲まして下さい」

その言葉を聞いたゲンヤは、一瞬思考が固まってしまいが、すぐに回復するとティーノを抱き上げた。

「そうかそうか、分かった。俺に任せとけ！俺の秘蔵をくれてやるよ!!」

ゲンヤはそう言うのと、肩を震わせて笑い出した。

ティーノもつられて笑顔になり、キャツキャと笑う。

父を知らぬティーノは、ゲンヤに父親を少しばかり幻視し、うれしそうに甘えた。

そうして、二人で遊んでいると、クイントがティーノの頭に手を乗せる。

その感触に気が付いたティーノがクイントを見つめ、クイントもティーノを見つめた。

それは数舜のことだったのかも知れない。

だが、クイントにはそれで充分だった。

クイントは一度頷くと、ゲンヤからティーノを取り上げる。

「こら、だめじゃない。子供の教育に悪いわよ！今度私が、そんなのよりもっとおいしいジュースをご馳走するから、ね♪」

クイントがウイंकすると、ティーノは瞳を輝かせる。

「本当!?!」

「ええ♪」

「ありがとう!」

ティーノはクイントの首元に抱き着いた。

本当に嬉しそうに笑う三人を皆が、幸せな表情で見ている。

八神家の皆は、ハンカチ片手に涙を拭い、フェイト家は微笑み、リンディとクロノと

ユーノは満足気に頷き、そして高町一家は――

「ティーノ、こっちに視線ちょうだい♡」

「クリス、ゴー!!至近距離で録画して!」

ブレることなく、幸せを永久保存していた。

幸せな時間が過ぎ、なにかを誤魔化し先延ばしするかのようには世間話に花を添えていく。

だが、そんな時間は長くは続かない。

一人沈んだ表情でイスに座るティアナの下に来たティーノは、力なく組まれたティアナの手を包み込むようにして握りしめる。

ティアナが力なく顔を上げると、そこには笑顔のティーノがいた。

「大丈夫だよ。——僕を信じて」

ティアナは力無く右手を持ち上げると、ティーノの頬に添える。

ティーノはその温もりを逃がさないように、自身の頬を擦り寄せた。

「なにも、ティーノじゃなくたって……」

ティアナの言いたいことは分かる。

なにもティーノが向かう必要は無い。

今回の件に関しては不確定要素が強すぎる。

もしもを考えると、我が子をかかわせられる訳がなかった。

だが、ティーノはそれを否定する。

「僕じゃないと、ダメみたいなんだ……。僕にしか出来なくて、僕の助けを待っている子
がいるんだ」

「つでもー」

ティアナだつて理解していた。

フェイトの姉にあたる人が、すでに死んだと思われていた人が、実は生きていて助け
を求めている。

フェイトにその話を聞かされ、泣きながら頭を下げられた。

子供を失うかもしれない恐怖をフェイトは知っている。

ティアナもその時は第三者として、当事者の気持ちを理解したつもりになっていた。だが、いざ自分が当事者になると、これほどつらいことはないと言出来た。

フェイトは希望が目の前に提示された。

ティアナは目の前から希望が逃げようとして見えた。

怒鳴り散らして、今までの関係をすべて切ったとしてもティーノの安全を第一に考えなかった。

だが、ティーノは決めていた。

決心していた。

そうなったティーノがどういった行動をとるかなど、痛いほど知っている。

だから、少しでもティーノが無事でいられるように出来る限りの準備と手助けを頼んだ。

それでも、心配なのだ。

母親なのだから……。

ティアナはそこまで理解していても、それでもなんとかしようと、ティーノの安全を100%にしようと、足掻く。

だが、ティーノは違った。

「それに……」

ティーンはそう言うと、ティアナの下を走りさりある人物を連れて来た。その人物こそ当事者のフェイトだった。

その後ろには、エリオとキャラが続いている。

「ティア……」

気が付けば、スバルが心配そうな顔をしてティアナの後ろに立っていた。

ティーンはフェイトをティアナの前に立たせる。

フェイトは、息が詰まったような顔をしながらもティアナから逃げないように、無理を承知だとわかっていながらも、それでも頭を下げる。

だが、ティーンはフェイトの頭を上げさせると、こう宣言した。

「ティアナは僕にとって一番大切な人で大切な家族だ。でも、フェイトさんも僕の家族だ」

ティーンは一人満足気に頷く。

「フェイトさんは、僕の後見人になってくれた人で、ヴィヴィオの後見人でママだ」

ティーンはヴィヴィオに視線を移すと、ヴィヴィオは驚きながらも当然だと頷いた。

「そして、ヴィヴィオは僕のお姉ちゃんだ。……つまり、フェイトさんは僕のママだったんだよ！」

「な、なんだってーっ！」

ドヤ顔で言ったティーンにリインが愛の手を入れる。

「そして、そんなフェイトさ……、フェイトママの家族なら、それは僕の家族でもあるんだ。家族が助けを求めているのなら、それを助けに行くのは家族の務めだ。そうでしょう？」

ティーンという言葉にフェイトは感動からか、口元を手で覆う。

そして、それでも尚、心配そうに泣きそうになりながら見ているティアナに対し、ティーンは言った。

「それに、可愛い女の子が泣いているなら、なんとかしなければならぬのが男だからね！」

最後のその言葉にすべて集約されているんじゃないかと、ティアナは思った。

つまりティーンは、かわいい女の子のために一肌脱ぐと言っているのだ。

その思考は、まさにヒーローに憧れる男の子特有のものだ。

実に幼稚で杜撰な願いだ。

でも、それこそが、その優しさこそが、ティーンの長所でもあり、無くして欲しくないと、願いつけていることでもある。

ああくもう！

ティアナは、頭をガシガシと掻きむしると、頬を力一杯叩いた。

そして、いつもの力強い瞳になったティアナは、ティーノを見つめる。

「ティーノ？」

「うん♪」

「男の子がそこまで言ったのなら、ハッピーエンドを目指しなさい。……いいわね？」

「はいっ！」

ティーノはそう言うのと、慣れない手つきで敬礼をした。

ここが機動六課だからだろうか。

真面目な顔で、そんな事をされれば愛おしさが込み上げてしまう。

でも、そこは我慢しなければならぬだろう。

私は母親なのだから——

「よし！頑張りなさい!!」

その言葉を聞いたティーノは満面の笑みになると、ヴィヴィオ達のところに走り去る。

どうやら、認めて貰えたことの嬉しさを共有したようだった。

そして、そんなティーノを囲むように人だかりが出来上がり、皆が自分のことをママと呼ばせようとしたり、姉とよばせようとしたりしていた。

それは、紛れもなく幸せな光景で、掛け替えのない映像だ。

「ティアアナ……」

ふとティアアナが隣を見れば、そこにはフェイトがいた。

フェイトは、どこまでも申し訳なきような顔をしている。

そんなフェイトの顔を見たティアアナは、そんな心配は杞憂だと、鼻で笑って不幸のすべてを吹き飛ばす。

「あそこまで言わせてしまったのなら、見送るのが良い女だと思いませんか？」

そう歯が見えそうな勢いで笑って言ったティアアナに、フェイトも微かに安堵する。

「うん……ありがとう……」

そして、フェイトはこうも思った。

ティアアナは自分なんかよりも、とても素敵な女性になったのだと。

ティアアナとフェイトが微笑みあっていると、人ごみの中からティーノが飛び出してきた。

そして、ティアアナとフェイトの前に立つと胸を張りこう言った。

「ティアアナ、一つ訂正して！」

「え、なにを？」

「僕は男の子じゃなくて、もう立派な男だよ！」

「ふふ、ええそうね」

「ああ、その顔は信じてないな。良いよ見てて!!」

ティーノはそう言うのと、エテルナシグマを取り出した。

なにが始まるのだろうか、ティアナが頭に？を浮かべていると、リインとヴィヴィオが慌てて、走り寄って来る。

とめて、と叫びながら。

ティーノがエテルナシグマと数度会話し、エテルナシグマを空高く投げると、ティーノはポーズを決めて叫んだ。

「変身ツ!!」

ティーノを中心に、紅い魔力光が瞬く。

その光が終息すると、ティアナだけでない。

大人組皆が、顎が外れるのではないかと言う程に、口を開けていた。

皆の視線の先、そこにいたのは――

「この姿を披露するのは、初めてだよね」

少しばかり大人びたティーノの姿であった。

「……はあ？」

間の抜けた声が口から漏れ出す。

それほどまでに、ティアナはどのようにしていた。

見た目は十代後半、髪のは肩回りまで伸ばしたウルフカット、上半身は少し筋肉質でエリオよりガタイがしつかりしていて背が高い、足は長くすらつとした印象を与えている。

そしてなにより、ジェイル・スカリエツィをしっているからだろう。

あの、人を見下した。

この世すべてを馬鹿にしたような表情は為りを擧め、というよりもお前本当に元ジェイル・スカリエツィかと言いたくなるような顔、目は大きく少し吊り上がり、けれども優しそうな顔、クールに見えて子供っぽさが残る顔、要するに――

「ええええええええー……ッ!!」

万人受けするようなイケメンだった。

皆が叫ぶ中、放心状態となったティアナにティーノは近づく。

もうそれだけで、色香を振りまいているのではないかと言いたくなるレベルで様になっっている。

そんなティーノがティアナの前に近づくと、ティーノはティアナの頭を優しく撫でた。

「後、10年くらいすればこの姿になれると思う。どう、僕……いや、俺はかつこいい?」
ティアナよりも頭一つ分大きくなったティーノはどこか余裕をもってティアナに問

いかけた。

頭を撫でられているティアナは、男の声になったティアーノの顔を直視することが出来ずに真つ赤になりながら俯くことしか出来ない。

ティアーノは隣にいたフェイトに視線を向けるも、フェイトも真つ赤になって視線を合わせてはくれない。

振り返るも皆同じで、目を背ける。

そんな光景を見たティアーノは、どこか泣きそうな顔になってしまう。

「……そうか、僕は大人になってもかっこよくないのか」

そう呟くと、また魔力光が瞬いた。

ほっと皆が息を吐き、視線を元に戻すと、そこにはシュンとした元のティアーノがいた。その顔は、先程までの男らしきなどどこかに投げ捨て、今にも泣き出しそうであった。

もろい涙腺が、限界を迎える一歩手前、ティアーノの頭を優しく撫でる温もり。

ティアーノが見上げると、そこには少し頬を赤くしたティアナがいた。

ティアナは、罰が悪そうに頬をポリポリ搔くと、言った。

「かっこよかつたわよ」

その言葉を聞いたティアーノは、波を一瞬で引つ込め、ティアナに抱き着く。

「ティアナ……!!」

そんな二人を皆が温かい眼差しで見つめていると、本当に罰が悪そうな顔をした今ままで蚊帳の外だったマリエルが、オズオズと手を上げた。

「あの……そろそろ、時間です……」

その声を聞いたティアーノは、ギョツとティアナを抱きしめる、

「それじゃ、行つてきます！」

「うん、いつてらっしゃい。気を付けてね」

ティアナとティアーノには、これくらいの見送りがちようどいい。

行きが幸せなら、帰りも幸せな筈なのだから——

アリシア2

鳥の囀りとはなんとも傍迷惑な存在である。

規則正しくないその音は、眠気を誘う歌のようで、実質は理性を呼び起こす目覚まし時計であった。

窓から朝日が伸び、カーテンを夜の残り香のように冷たい風が撫でていく。

「ふわあ……」

ベッドのシーツを乱し、布団を跳ね除けて、冷たいフローリングの床に足裏を乗せた。

「う——」

少しばかりの熱伝導、体中の血管が収縮し体内の熱を床全体に奪われる感覚。

「もう、朝か……」

開けられた窓からカーテンを押しつけベランダに出る。

朝日が包む街並みを見て、やっとの事伸びをした。

少し背が高いベランダの柵に肘を乗せ全体重をかける。

そのまま階下を見下ろせば、そこそこの高さが伺い知れた。

今度は顔を上げる。

すると、今いる場所は丁度高層マンションの中腹辺りなのだど理解する。

何故そんなことをしたのか特段気にする風もなく。

丘の上に立つ高層マンションの中腹から、街を見た。

そこそこのビル群、そこそこの住宅。

大きな川を跨ぐようにして架けられた少し大きな橋。

そこが境界線のようにして住宅街とビル群とを隔てていた。

橋を挟んでこちら側、つまりは今いる場所の方は住宅街側、程よく緑が溢れ、程よく人がいる。

橋を挟んであちら側、つまりはビル群の側は、コンクリートジャングル生い茂る出来上がったばかりの新たな街。

旧社会と新社会。

少し大きなあの橋は、その二つを明確に区分していた。

そんなどうでも良い事を、意味も無く思い返し、ゆつたりと向きを変え、室内に入った。

室内に入ると、その部屋の異様さに首元を搔いてしまう。

ワンルームの室内にはベッドとテーブルのみ、白の壁紙がまったく黄ばんでいないこ

とから、生活習慣を感じることは出来ない。

すつと、壁紙をなぞる様に視線を向かわせると、ハンガーが一つかけられていた。

そこには、妙に見慣れた制服が掛けられており、真新しい室内には似合わない程にぐたびれている。

それを目にして、はつと気が付いた。

もうそろそろ、学校に行く時間だと言うことに。

慌てて今着ているパジャマを脱ぎ捨て、ハンガーから制服をひつたくると、それを慣れた手つきで着込んでいく。

そこでふと気が付いた。

制服に隠されて見えなかったが、制服を取り外したことで露わになった存在。

そこには、壁に貼り付けられた日捲り式のカレンダーが一つ存在していた。

それを一瞥すると、テーブルに置かれていた鞆を手に取り部屋を駆けだす。

どうにもむしゃくしゃしたことだったが、何かを忘れている気がした。

カレンダーの日付は以下の通り。

新暦29年10月29日

エレベーターを使い一階まで下り、そこから直近にある駐輪場に向かう。

駐輪場にある自転車の群れの中から目当ての自転車を見つける。

黒いフレームの軽快車、所割ママチャリだ。

それに跨ると、勢いよくペダルを踏みしめ坂を下り学校に向かった。

学校はベランダから見た少し大きな橋の先、その先のビル群の中にあつた。

校門を超え、駐輪場に自転車を止めるとカゴから鞆を取り出し、教室に向かう。

その道中と同じ制服を着た人達からおはようと挨拶され、それにおはようと返す。

そうしながら、目当ての教室を見つけると扉を開いた。

「おはよう」

自分の机に乱雑に鞆を乗せ、椅子にどかりと座ると、目の前に座っていた人物から挨拶された。

「ああ、おはよう……」

挨拶を返すと、相手は面白くなさそうに数度唸る。

その声之余りにも気持ち悪く。

そちらに顔を向けた。

「おつ、やつとこつちを向いたな！」

そこにいたのは、春の陽気のような爽やかな顔をした男だった。

少し短めの黒髪をふわふわさせながら、人付き合いのよさそうな笑顔を浮かべてい

る。

「おいおい、まだ寝ぼけているのか？」

そんな風に言われてしまえば、そんな気がしてしまう。

そう思いながらもその男の事を思い出そうとするも、記憶が定かでない。

「お前、ああ……誰だっけ？」

そう問うと、目の前の男はすつころんだ。

中々に面白い男である。

「……お前、本当に大丈夫か？」

目の前の男が真剣な顔をして問いかけて来た。

その時、眼前をノイズが走ったような気がした。

よく知る人物、会ったことも無い人物と重なっていく気がした。

「大丈夫だよクライド……そう、お前はクライド・ハラオウンだ」

そう言つてやれば、クライドは恥ずかしそうに笑う。

「嘯み締めるように、名前を呼ぶんじやねえよ！」

クライドはそう叫ぶと、首元に腕をかけてきた。

「お、おい……ちよ、やめろよ！」

「テメェ、この野郎……!!」

「じゃれ合っていると、チャイムが鳴りそれと同時に先生が教室に入ってきて来た。
「全員席につけえ、出席とるぞ」

先生がそう気だるげに言うのと、教室内の喧騒は無くなり、皆各々の席についた。
そして、名前が呼ばれて行きクライドが返事をする。

「ああ、ティーノ・ランスターはいるかあ？」

先生が何かを言ったような気がした。

「ティーノ・ランスター、いないのか？」

「おい呼ばれているぞ」

クライドが小声でそう言った。

そして、初めて俺は俺を呼ばれているのだと理解した。

「はい！」

元気に挨拶を返す。

すると、先生は出席簿で頭を掻きながら、溜息をついた。

「寝ぼけているのか？」

「いえ、大丈夫です！」

俺がそう返事を返すと、教室内にくすくすと笑い声が響く。

「……チツ」

俺は舌打ちを一つつき、机に頬杖をつけて窓の外を見た。

その時には、寝ぼけていたらしい頭の中はクリーンになっていた。

ここはアルセイム地方に存在する高校。

その名を、アルセイム高校と言い数年前に来た大企業の研究室なんてのを設置したために、急速に発展した地方都市の僅かな学校の一つだ。

そんな事を思い直すのも、俺がこの地の発展ぶりに辟易としているからなのだろう。

急に決まった大企業の招致に合わせて、この町は変わってしまった。

ゆるやかだった時間が、そうまるで時計の長針を基準に動いていた時間が急に秒針を基準にしたかのような忙しなさだ。

そんな空気が出来上がっている。

そこで俺こと、ティーノ・ランスターは気づいた。

「俺がここに来たのは、いつからだっただろうか……う？」

ふとした疑問、それは単なる物忘れの類なのか、それとも別の何かなのか。

気になるも、その先に思考が進まない。

「おっ、ティーノ〜！」

俺が思考に耽っていると、クライドが手をブンブン振りながら走り寄って来た。

「なあ、明日さ新都のデパートに行こうぜ！」

そう言えば、そんなものがここ最近出来たのだと思い出す。
さて……どうするか……。

俺がどうするか考えていると、又首元に手を回される。

「なあ、行くこうぜ！あそこのデパートにはよ良い店があんだよ！」

「なんだ、その良い店って？」

「良い店は良い店なんだって！お前もきつと気に入るからさ！」

クライドがそこまで言うんだ。

きつといい店なのだろう。

俺はクライドに対し頷き、了承した。

「じゃな、明日だぞー！忘れんなよ!!」

クライドはそう言いながら、走り去っていく。

本当に忙しい奴である。

俺はそんなことを考えながら、帰路についた。

時刻はすでに夜の八時過ぎ、すでに日は落ち夜の静けさが染み渡る。

俺は、ベランダに出ると少しぬるい風に体を晒す。

「ふうー……」

今日は、一段と不可思議な一日だった。

いつも身近にあつた当たり前のことや名を忘れてしまつていたのだ。
こんなことは早々起こることでは無い。

脳に何か患つてしまつたのかと心配になつたが、昼過ぎにはすべて思い出すことができたのだから問題は無いのだろう。

——そう、思うことにした。

ベランダから街を見下ろす。

マンシヨンから続く坂道、そこには道路を挟んで街灯が並び、それは真つすぐにあの少し大きな橋、シルク橋まで伸び、そこから煌々と照らされている新都に続いている。

そしてその明かりがある一点で忽然と途切れる。

そこから先にあるのは、大企業様の庭だ。

「確か、株式会社アンセムだつたっけ……」

なんでも新エネルギーの開発に力を注いでいるとか。

さらに言えば、時空管理局とも繋がつていて、よくわからない実験を繰り返しており、さらに言えば、非合法の実験すらしているとの噂まで出ている。

ある意味で話題に事欠かない場所であつた。

「ううゝ寒い……。もう寝よう……」

俺はベッドに行こうと歩みを進める。

「あつと、忘れていた」

俺は、窓を閉めていなかったことを思い出す。

そして窓を閉めながら、空を見上げた。

「月はこんなにも綺麗なのに……」

空には二つの大きな月。

その輪郭がうつすらとぼやけ、青い陽炎が瞬いた。

新暦29年10月30日

クライド・ハラオウンと約束した通りに、俺は新都のデパートに来ていた。

「嫌あく、すつごい人だな」

「ああ、確かにこれは凄いな」

デパートの中はどこもかしこも人ばかり、余りに人が多すぎるがために建物その物が微かに振動するほどのレベルである。

「んでクライド、お目当ての良い店ってのはどこにあるんだ？」

俺がそう聞くと、クライドは嫌らしい笑みを作った。

「むふふ、こつちだよ」

そう言うクライドの背を人ごみの中を縫う様にして追いかける。

すると、その店の前に辿り着いた。

そこは喫茶店だった。

おしやれで モダンな雰囲気、人の波の中に現れた憩いの場。

客足も多く繁盛しているのが伺い知れた。

クライドと共にその店の中に入ると、レトロな音楽とコーヒーの微かな香りが疲れを癒す。

「あつれー、クライドじゃん。どうしたの？」

店員を待っていると、そんな元気な声が聞こえて来た。

「よっすロツテ、来たぞー！」

店の奥から姿を現したのは、リーゼロツテ、同じ高校の同級生で双子の妹、クライドとは家が近所らしい。

ロツテは、メイド服を着ておりそれをひらひらさせてクライドと遊んでいる。

すると、さらに店のおくから一人姿を現した。

「こらっ、ロツテ仕事中心！」

そう言いながら、ロツテと瓜二つの少女が姿を現す。

彼女の名はリーゼアリア、同じく同級生で双子の姉だ。

学校ではもっぱら活発なロツテのブレーキ役をしている。

「ごめんねティーノ君、クライドが無理に引張って来たんでしょ？」

「別にそんな事は無いよ。それよりも、その服似合ってるね？」

「ふふ、ありがとう。ほら、席が空いてるから座って」

俺達は、アリアとロツテに連れられて窓際の席につく。

席につくと同時に、クライドは身を乗り出してきた。

「どうよ、良い店だろ？」

クライドはそう言いながら、店の中で忙しそうに走り回るメイドさん達を見ていた。

俺もそれにつられてメイドさん達を見る。

確かに、短いスカートに胸を強調するかのような作りの服は眼福だ。

下着が見えるか見えないかの、あの危うさが実に良い。

俺はクライドに拳を向ける。

「良い店だ。来てよかったよ、ありがとう」

「良いってことよー！」

クライドも笑顔で返して拳をぶつけた。

二人してニヤニヤしていると、どこか乱暴にけれど優しくマグカップが置かれた。

「……どこみているのかしら」

マグカップを置いたのはリーゼアだ。

頬をひくつかせ、蛸谷辺りに青筋を浮かばせている。

これはマズイ——

「別に俺達はどこも見ていない。強いて上げるなら、店の作りを見ていた。非常に良く出来た作りだからな」

俺がそう言うのと、クライドも合わせる。

「そうだともし……ここ最近の流行を取り入れたって聞いたからな。どんな作りなのか気になつていたのさ！」

俺達が必死に弁明すると、アリアは「ふくん……」と意味ありげに鼻を鳴らした。

「今は見逃しましょう。でも、気をつけなさいよ！」

「は……い」

人差し指をピンと立てて注意してくるアリアに、気の無い返事を返す。

「もう、本当にわかつているのかしら……」

アリアはそう言いながら、くるりと向きを変えた。

その時だ。

ただせさえ短いスカートが、ふわりと浮かぶ。

それは一瞬の出来事で自然の摂理で、事故だ。

だが、確かにその一瞬の舞が見えるか見えないかの絶対領域を可視可能領域にまで広がりを見せようとして——。

「——ッ!!」

顔を真つ赤にしたアリシアに阻止された。

ここからの流れは毎度の事だ。

慌てることじゃない。

でも、出来れば少し優しくして欲しいかな……。

「現行犯!!」

その言葉を最後に俺とクライドは、光に包まれた。

「痛ってーっ」

「アリシアの砲撃は、いつ見ても立派だな」

あの後、俺達は店から叩き出され、宛もなく新都をふらつくのにも飽きたと言うことでシルク橋を渡り帰路につこうとしていた。

時刻は既に夕方になろうとしている。

光と闇の境界線の時間帯だ。

橋の半ば、俺とクライドが馬鹿話をしながら盛り上がっていたところ、クライドが突

如その動きを止めた。

「どうしたんだ？」

数歩先を進む俺は、クライドに振り返りそう問うた。

クライドは、橋の柵に手をかけ夕日を眺めていた。

その横顔は影となり、伺い知ることは出来ない。

「ティーンはさ、明日はどうするんだ？」

「明日？ なにか、あつたかな……」

「……予定がないなら、それでいいんだけどよ」

「なんだお前、ちよつとおかしいぞ……。あ、そう言えば明日の夜か。オーバーラップがあるのは！」

オーバーラップとは、このミッドチルダ特有の気象を指す。

それは数十年に一度有るか無いかの自然の奇跡であり、空に浮かぶ二つの月が重なりしかも魔力の波長がピッタリと合うことで起こる現象である。

その様は、古くから凶兆であると言われ、現代では神秘的と言われる現象の一つに成り果てた物である。

「二つの月が重なり魔力の波長すら狂い無く合わさることによって、太陽の光の輪、ハロのようなリングが月の周囲に浮かび上がる。学校で先生がそんなことを言っていたな。」

今、思い出したよ」

俺がそう言うのと、クライドの影がより濃くなった気がした。

「でもお前、一緒に見に行く人いないじゃん？」

「ぐぬっ」

でも、あくまでそれは気がただけだったらしい。

顔をこちらに向けたクライドはいつもと変わらない表情をしていた。

「じゃあ、お前は誰と行くんだよ」

「俺は、彼女がいるからいいんだよ〜！」

「んだと〜！」

「ハハハハっ、じゃあな〜〜！」

クライドは勢いよく走り出し、すでに姿は見えない。

「あの野郎……」

俺は知らずの内に悪態をつく。

アイツに彼女がいて、どうして俺にいない。

そんな思いが胸中を満たす。

その時だ。

天啓が下りた。

いないのならば、オーバーラップまでに作れば良いのだと。

「……なんて、そんな都合よくいる訳ないだろ」

俺はそう呟きながら、一人ゆっくりと帰路についた。

その道中だ。

公園のブランコの音が聞こえ、そちらを見ると、一人の少女がいた。

そいつは、特徴的な長い金髪を揺らしながら、一人でブランコに座っていた。

服装は、俺と同じ、つまりは学校も同じだ。

あんな奴はいたろうかと考える。

だが、別に校内の全ての人間の顔を覚えている訳でもなく、そんなことを考えても無

意味だと悟った。

なにか、あつたのだろうか……？

その少女は、ずっと地面を見つめたままだ。

その時俺はふと思った。

あの子を、明日のオーバーラップに誘うのはどうだろうか。

だが、即座にその考えを振り払う。

さすがに、あの女は訳ありっぽい、関わるのは得策ではない。

俺は瞬時にそう考え、その女を無視して帰ろうとして顔を上げると――

「あ……」

目が合ってしまった。

そして俺は、その女に見惚れてしまう。

街灯の光が淡く照らしていたせいだろうか。

整った顔立ちに健康的な白い肌、大きめの瞳からは光る何か垂れ落ちて。

泣いていた。

それを見て、ドクンと何故だか心臓が跳ねた気がした。

この出会いは偶然ではないと、必然だと決定付けられている気さえした。

だから俺は、この女を無視することが出来ずに、自ら足を進めた。

「つまりはアレか。あんたは、母親とオーバーラップを楽しみにしていたのに、その母親が仕事で、ドタキャンになったから泣いていたのか？」

「うん……」

「はあ……」

「な、なによ！溜息なんかついて！」

俺は女とぼそぼそと会話し、そこそこ打ち解け合うことが出来た。

にしてもアレだ。

この女は、子供か何かなのだろうか。

いい歳して、母親にドタキャンされたからと泣くかね普通。

「いや、今にも死にそうな顔してたから、もっと深刻なことなのかと思ってさ」

「わ、私にとつては深刻なの！」

「はいはい、そうですね」

「対応が適当になつてる！」

目の前にいる女は、ブランコをガチャガチャ鳴らしながら、不機嫌をアピールするが、それがすごく幼く見せる。

俺はこの女の相手をするのもメンドクサクなつてしまったので、家に帰ることにした。

「じゃ、俺は帰るよ」

「ちよ、ちよつと待つてよ！」

「待たない」

俺はすたすたと歩き、公園を抜け、住宅街の中を進んで行く。

「待つてつてば！」

「なんだよ」

途中腕が掴まれ、振り返ると、ゼエーゼエー息を切らせた女がいた。

「き、君……歩くの……速すぎ……」

そうして、女は息を整えると、勢いよくこう言った。

「さっきは、話を聞いてくれてありがとう。おかげでスツとしたわ!」

先程までの暗い顔では無く、元気な顔でそう言われてしまえば、こちらも少しばかりは良い想いが出る。

それに、アレだけの事でここまで必死にお礼を言える人間と言うのも珍しいのではないだろうか。

俺は、それが可笑しくて少しだけ嘖き出した。

すると、女は頬を膨らませて怒りを見せて、それがまた可笑しくて、二人して笑った。

「それじゃ、気を付けて帰れよ」

「ええ、君もね!」

そう言って、「じゃ!」と互いに手を上げて帰路につくが、女は俺についてきていた。俺はそれを不思議に思いながらも、まあいつか、と黙っていることにする。

そうして、互いに夕焼けが沈みかけるくらいの時間帯にはマンシヨンの前に立っていた。

「なあ……」

「なに……」

「お前の家って……」

「そう、あなたもなのね……」

俺はなんかどつと疲れてしまった。

それは女も同じ様で、またまた互いに無言でエレベーターに乗り込む。

俺は自分の家のある階のボタンを押すと、女に聞いた。

「何階?」

「一番上」

「はいはい」

そこから少しばかりまた無言。

すると、エレベーターの扉が開いた。

その時だ。

女が機を見つけたかのように言ってきた。

「き、君の名前は!?!」

「ティーン・ランスターだ!お前は?」

「私は、アリシア・テストアロッサ!これからよろしくね!!」

アリシアは特大の笑顔を浮かべると、扉の奥に消えていった。

その笑顔をぼうつと見ていた俺は、正直少し見惚れていたのかもしれない。

俺は、部屋のベランダから又街を見下ろす。
特に変わったところも無い。

ただの、毎日が過ぎ去るだけだ。

だから、今日も寝よう。

明日になれば、オーバースラップだ。

俺は窓を閉めて眠りについた。

新暦29年10月31日

朝目が覚めた俺は、日捲りカレンダーを切り取る。

「今日か……」

さて、オーバースラップの時間は夜の10時から0時までの時間帯が、一番良い時間だ。
誰を誘うか……。

俺は考える。

だが、そんなロマンチックな催しに誘う人なんている訳が無く。

俺は盛大に溜息をついた。

アルセイム高校に辿り着くと、すでに着席していたクライドが話しかけてくる。

「結局、今日どうすんだ？」

「別にどうもしないよ。いつも通り、帰って寝て終わりだ」

俺がそう言うと、クライドはどこか満足気に頷く。

「そっかそっか。ま、お前はそうだろうな！」

「んだとー！」

俺が怒り、クライドとじゃれ合おうと俺とクライドの襟が強引に引かれる。

「はいはい、そこまでね！」

俺達を強制的に着席させたのは、アリアとロツテであった。

「もう、あんた達は仲が宜しいことで」

「もしかして、クライドとティーノはホモなの？」

「ちげえよ!!」

俺とクライドが同時に吼えると、アリアとロツテは笑いながら手を襟から離れた。

そして二人が俺とクライドの横に立つと、俺は二人を見た。

「な、なによ……」

アリアがそう言いながら、胸元に手を持って行き少し縮こまる。

「いや……、メイド服の印象が強かったからな。制服も似合ってたんじゃない」

「なっ——！！」

俺がそう言うと、アリアは顔を赤くした。

恥ずかしがるアリアの隣にいたロツテは、アリアの肩を抱くと見せつける様にポーズをとる。

「どうよ、そそるでしょ?」

「ちよ! ロツテ!!」

そんな二人を俺とクライドがニヤニヤして見ていると、等々アリアは羞恥に涙目になった。

「もういい加減にしなさい!」

その時だ。

教室の扉が開かれた音がして、教室内から音が消えた。

「あん……?」

それを不思議に思った俺は、音の発信源に視線を向ける。

するとそこには、昨日の女。

アリシアがいた。

アリシアは、どこか堂々とした足取りで教室内を歩く。

教室内にいたクラスメイト達はそんなアリシアの姿を見て、何やら小声で会話を始めた。

それはどこか陰口の様で、大変、気に入らなかった。

アリシアは黙って教室内を進み着席した。

そこは、俺の真横の席であった。

静かに座ったアリシアに、アリアとロツテも少し戸惑い立ち位置を移動し、クライドの側にいった。

そのために、俺とアリシアの間を遮る物はなくなる。

「よっー！」

黙々と教材を鞆の中から取り出すアリシアに俺は声をかけた。

「……」

だが、無視されてしまう。

「よっ!!」

今度は少し声量を上げて呼んだ。

「……」

だが無視された。

イライラする。

すっげえ、イライラする。

昨日はあん

なにもしつこかったクセに……。

俺は席から立ち上がる。

「お、おい……」

クライドが何か言おうとしたが、関係が無い。

俺はアリシアの前に立つ。

クラスの前中も俺とアリシアを黙って見守る。

だがそれでもアリシアは、黙って机を見つめるのみだ。

俺はその態度にも腹を立て、アリシアの両頬を両手で挟み込み、無理矢理に持ち上げ視線を合わせる。

「……」

顔を上げたアリシアは、瞳を無理矢理に閉じている。

力一杯に瞼を閉じて、視界に俺を入れないようにと必死であった。

おい、俺はそんなにも醜いのか——

俺は両手を離すと今度はアリシアの両瞼を指でこじ開ける。

「ぐぎぎぎぎぎ……」

アリシアが必死に力むが関係が無い。

瞼を無理矢理持ち上げた俺は、最高の笑顔でアリシアの瞳に写り込んでやった。

「おはよう！」

そうして、特大の挨拶をしてやると、アリシアも観念したのか小さな声で言った。

「……おはよう」

「えっ、なんだって!？」

「くっ……おはよう……」

「聞こえないよ!？」

「おはようございませすッ!!」

アリシアは怒りに震えながら、叫ぶように言った。

「おう、おはよう！元気がないから、びっくりしたぞ」

「うるさい！私はティーノみたいに馬鹿じゃないの!」

「なんだと!!」

「なによ!」

そして俺達は互いの頬を摘み上げる。

「グヌギギギギ……」

「はいはい、そこまでそこまで……」

俺達が互いに涙目になりながら、頬をひっぱりあっていると、アリアとロッテに仲裁される。

「私は、リーゼ・アリア、こっちが妹のロツテ、よろしくね」

俺達のグループは、アリシアを交えて会話をしていた。

その中で、アリシアはあの大企業、アンセムに母親が勤めており、しかも設計主任とから言うこの土地での一番偉い立場にあるとか。

そのため、母親の名を汚さないために、品性良く暮らしていたとのこと。

それも、今日の俺のせいでの今までの努力が水の泡となってしまうらしい。

まあ、しつたこっちやないが――

アリシア自身は、そこらにいる普通の女子高生だ。

そのため、俺達の会話を聞いてもともとアリシアと話したいと思っていた連中も会話に入ってきて、知らない間に大所帯となっていた。

でもまあ……。

「楽しそうだなにより……ってか？」

クライドがそう言いながら、ウインクを飛ばしてくる。

俺はそれを叩き落とした。

「別にそんなんじやねえよ」

ただ、今の状況が、アリシアが友人達に囲まれて楽しそうにしている姿を見ているのは、何故だか、嬉しく感じた。

放課後となり、皆がオーバーラップの事に会話を弾ませ、帰路について行く中、俺は駐輪場にいた。

「よつと……」

自転車を取り出し、鞆を前かごに放り込む。

「ちよつと……」

「うん？」

声が出た方に振り向けば、そこにはアリシアがいた。

「どうしたよ？」

俺がそう聞くと、アリシアは恥ずかしそうにしながら言った。

「きよ、今日はありがとう……、きっかけを作ってくれて……」

「べつに、俺が勝手にしたことだからな」

俺はそう言うのと、自転車を跨る。

「ね、ねえ？」

俺が自転車を跨ると同時にアリシアが俺の隣に来た。

「一緒に帰らない？」

それは、同じマンションに住んでいるからだろう。

可愛いと言うか、綺麗な女子と帰れるというのは非常にありがたい、だがしかした。

「俺自転車だから、じゃな！」

俺がそう言いながら、自転車のペダルに足を乗せるとアリシアは俺の肩を掴んだ。

「な、い、良いじゃないの！押しつけて帰ろうよ!!」

「い・や・だ！なんで、そんな疲れることをしないとイケないんだよ」

そう言つて無理矢理自転車をこごうとするが、アリシアの野郎はカゴを強引に掴んで先に進ませようとしな。

俺達二人はまた、互いに譲ることが出来ずに力の限り張り合つた。

だが、やはりそこは男と女である。

アリシアは力負けし、カゴを手放してしまつた。

「ちよ、急に手放したら!!」

勿論、急にそんなことをすれば自転車はバランスを崩してしまい倒れてしまう。

「危ない！」

アリシアは叫び俺を抱き寄せようとするが、そうすると自転車は跨る俺ごとアリシアに倒れてしまう。

俺は咄嗟に自転車を蹴飛ばし、アリシアに全体重を乗せないように、腕に力を入れ、支

えにした。

「きやー！」

「のわっ！」

倒れた先で、俺は何故だか柔らかい何かに包まれていた。

どこか良い香りもする。

そして息苦しい。

俺はそれから逃れるために、顔をモゾモゾと動かす。

すると、耳元からあん……」やら、「ん……」と言った淫らな声が聞こえて来た。

俺は嫌な予感がしながら、恐る恐る顔を上げる。

するとそこには、涙目になり、顔を真っ赤にしたアリシアの顔があった。

どうやら俺は、アリシアの胸元に抱きしめられていたらしい。

これはあれだ。

ラッキースケベと呼ばれるものであろう。

俺に罪は無い。

これは事故だと、声高に叫びたい。

それでも、腕を振り上げるアリシアの次の行動を受け止めなくてはならない。

俺は、男なのだから——

「この、エッチいーっす!!」

「ふばああああッ!」

結局、俺はアリシアを後ろに乗せて帰ることになった。

アリシア曰く、良い想いしたのだからこれくらい当然らしい。

これからは、毎日このスタイルで登下校をするのだそうだ。

俺的には断固として拒否しなかったのだが、仕方が無い。

腰に捕まるアリシアの体温と、背中に伝わる胸の感触と等価交換と言うことにしておこう。

帰り道の道中、俺の部屋にテレビや家具が一切ない話をする、アリシアは信じられないと言い、アリシアの家のお古を譲ってくれる形となった。

最初遠慮したが、ゴミとして処分するよりも使ってもらった方が嬉しいのだそう。体よく使われている感も否めないが、貰えるのならありがたく貰っておこう。

アリシアの家から、俺の家に家具を運び込み、アリシアの好きに模様替えを行う。

それらが、終わる頃には、時刻は夜の9時になっていた。

俺とアリシアは並んでベッドに座りテレビを見る。

テレビの先のアナウンサーは、原稿用紙に書かれた文字を読みながら、ニュースを説

明していく。

「アルセイム地方都市で発生している謎の連続殺人ですが、未だに犯人の素性すらつかめていないと、時空管理局は説明しており……」

こんな辺鄙な街でも、物騒な話は起こるものだ。

俺はそんなことを人ごとのように考える。

「次のニュースに移ります。今夜10時から始まるオーバーラップですが——」

そう言えば、もう直ぐだな。

そうぼんやりと考えていると、アリシアの指先が俺の手に触れた。

「どうした？」

「え!? えつと……ティーンはさ……。この後、どうする?」

それは、オーバーラップのことだろう。

さて……どうするか……。

別にどこで見ても良いのだろうか、先程のニュースの件もある。

へたに、外に出てしまうのは危険なのではないだろうか。

そう考えた俺は、今日はもう寝ることにした。

それを伝えると、アリシアは少し悲しそうな顔をしてから、わかったと言い玄関に向

かう。

「おやすみなさい。ティーノ、良い夢を……」

「ああ、おやすみ」

アリシアを送り出した俺は、テレビを消しベランダに向かう。

「オーバーラップの影響だな。月が一つだ」

夜空に浮かぶ月は一つしかない。

月明りが町全体を包む。

今日はこの星全体のお祭りみたいなものだ。

街灯はすべて消えて、月明りのみに集中できるようになっていた。

そのためだろう。

まるで、輝く空と対比になるように街並みが不気味なほどに暗闇に包まれているのは。

俺はそれを少しでも眺めて、もう寝ようと、ベランダを後にした。

「ツ！」

寝苦しい。

「ツ！」

寝苦しい。

「ツ！」

なにか聞こえる。

黒板を爪でひつかくような、ガラスを刻むような、小鳥の首を絞めたような。

——命を閉じる音が聞こえる。

「——ッ!!」

俺は布団を跳ね除けた。

すると、その音が良く聞こえた。

「——ッ!!」

それは、人の声だった。

女性が、泣き叫ぶ音だった。

助けを乞う音だった。

俺はその音を頼りに、ベランダに向かい窓を開ける。

「いやっ、嫌だ! 終わりがたくないッ!! 終わりがたくない!」

その声は、あり得ない程に透き通って聞こえた。

眼下にも、付近にも、その声の発信源は存在しない。

それでも、鼓膜に叩きつけるような音が聞こえた。

そして気が付く。

それは、その声は——

アリシアの声だと——

「くそつ、どこだ!? アリシアア————ッ!」

叫ぶ。

だが、喉から発せられた振動は、月夜の闇に飲み込まれ沈んで消えた。

その沈み込む様を見せつけられるように、闇を睨みつけると、気が付いた。

何故だか分からないが、そこにいると、闇の先にアリシアがいて、理解出来た。

それが分かれば後は速い、すぐにでも助けに向かわなければ。

俺は、慌てて靴を履き、玄関を開け放ち外に向かう。

そしてエレベーターを待つが、その時間が長い。

遅く感じる。

本当に動いているのか疑問に思う程に。

俺はそれに我慢できなくなり、エレベーターを諦め、マンションの外廊下から眼下を見下ろした。

吸い込まれそうな闇だ。

それでなくても、ここは高層マンションの中腹、飛び降りて助かる筈がない。

そう——

それこそ——

魔法でもない限り――

その瞬間、俺は一瞬前の俺を殴り飛ばしてやりたくなかった。

この世界はミッドチルダ。

魔法の文化が進む最先端の世界。

ならば、俺が魔法を使えないなんて道理はない。

俺は思い出したように、ポケットに手をつ突っ込む。

そこにあつたのは、右手のみの黒いグローブだった。

俺は迷うことなくそれを右手にはめると、体内のリンカーコアから魔力を送り込む。

呼応するようにして、グローブ型のデバイス、エルピスも起動し、紅い線が脈動し、俺

の右手と一体化した。

そして近場にあつたダンボール箱を平らにならすと、それを手に持ち闇夜に飛び落ちる。

ダンボールを足元に移動させ、俺の魔法を叫ぶ。

「インヒューレントスキル、発動！ エリアルレイヴ!!」

エルピスから魔力が行き渡り、ダンボールを硬化させる。

足元から魔力の渦が風となって巻き起こり、導かれるようにして方角をしめす。

俺はそれをまるでサーフィンでもしているかのようにして乗りこなす。

地面に足をつけると、魔力をカット。

ダンボール箱を投げ捨て、走る。

住宅街を走る。

異様なまでの静けさだった。

まるで町全体が死んでしまったかのような、異様な雰囲気だった。だが走る。

それらを敢えて無視して、未だに聞こえる声を頼りに走る。

走って、走って、俺はシルク橋まで来た。

「はあー、はあー、はあー……」

声は、さらに橋の奥、新都のもっと奥から聞こえてくる。

速く助けに行かなくては、アイツは泣き虫で、恥ずかしがり屋で、いじっぱりなだけの、女の子だ。

脳裏に、ニュースの声が繰り返し流れ、嫌な予感が背筋を撫でる。

「アリシア、今助けに！」

橋に足を踏み入れた瞬間、それは起きた。

「……あ、……れ」

足元がぐらつく、体に力が入らない。

それどころか、体内から大切な何かが、止めどなく溢れて——
「な、に——が——？」

俺の腹部は、半分程、穴が開いていた。

「ぐふ……」

喉からせり上がってくるのは、鉄分を過分に含んだ赤い水。

我慢しようにも、それは湯水のように溢れ出し、出口をこじ開ける。

「ビチャツ、と俺の口から吐き出された大量の血液が橋を染める。」

未だに声が聞こえる。

アリシアの声が、泣き叫ぶ声が聞こえる。

アリシア、今助けに——

そう言おうとした時、眼前、シルク橋の先が光った。

その光は、青い。

純粹な青——。

青が魔法陣を描き、光り輝く。

その光に照らされるようにして、輪郭がぼんやりと見えた。

見える筈がない距離なのに、最後の悪あがきで眼球に通した魔力がそいつを見せた。

「クソが……あの、野郎——」

そこには、クライドがいた。

黒翼のような黒のバリアジャケットと羽織、杖型のデバイスの先端をこちらに向けている。

クライドから、放たれた魔法弾が下半身を吹き飛ばす。

支えを失った上半身が、崩れ落ちる様に無様に転がる。

俺は霞む視界の中で見上げた。

オーバークラップを、それは幻想的と神秘的と呼ばれる奇跡、月の蒼い光の輪が大地を包む。

俺にはそれが、その光が、嘲笑っているように、見えた。